

CIAS Discussion Paper No.42

宗教実践を可視化する

—大陸部東南アジア上座仏教徒の寺院と移動—

林 行夫・柴山 守・Julien Bourdon-Miyamoto・長谷川清・小島敬裕・
小林 知・高橋美和・笹川秀夫・土佐桂子・須羽新二 著



京都大学地域研究統合情報センター

CIAS Discussion Paper No.42

宗教実践を可視化する

——大陸部東南アジア上座仏教徒の寺院と移動——

林 行夫・柴山 守・Julien Bourdon-Miyamoto・長谷川清・
小島敬裕・小林 知・高橋美和・笹川秀夫・土佐桂子・須羽新二著

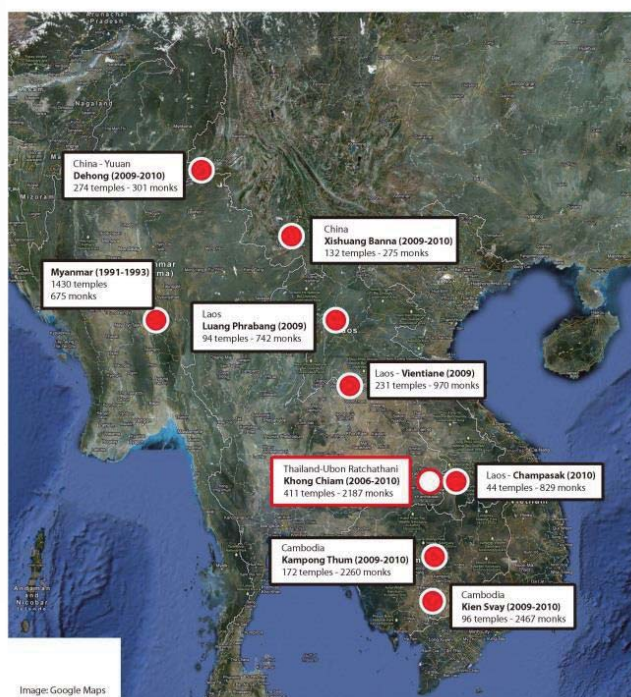


京都大学地域研究統合情報センター

大陸部東南アジア仏教徒社会の時空間マッピング —寺院類型・社会移動・ネットワーク— (略称：寺院マッピング) プロジェクト



Mapping Practices of Theravadians:
9 locations, 2884 temples, 10706 monks, 10 tracking years



Note: The numbers shown above represent accumulated over the years of study and might contain duplicates, including monks interviewed multiple times.

本書でもちいられる調査地の略称

KC: Thailand-Ubon Ratchathani-Khong Chiam

KT: Cambodia-Kampong Thum

KS: Cambodia-Kandal-Kien Svay

VT: Laos-Vientiane

LP: Laos-Luang Phrabang

CP: Laos-Champasak

XB: China-Yunnan-Xishuang Banna

DH: China-Yunnan-Dehong

MY: Myanmar

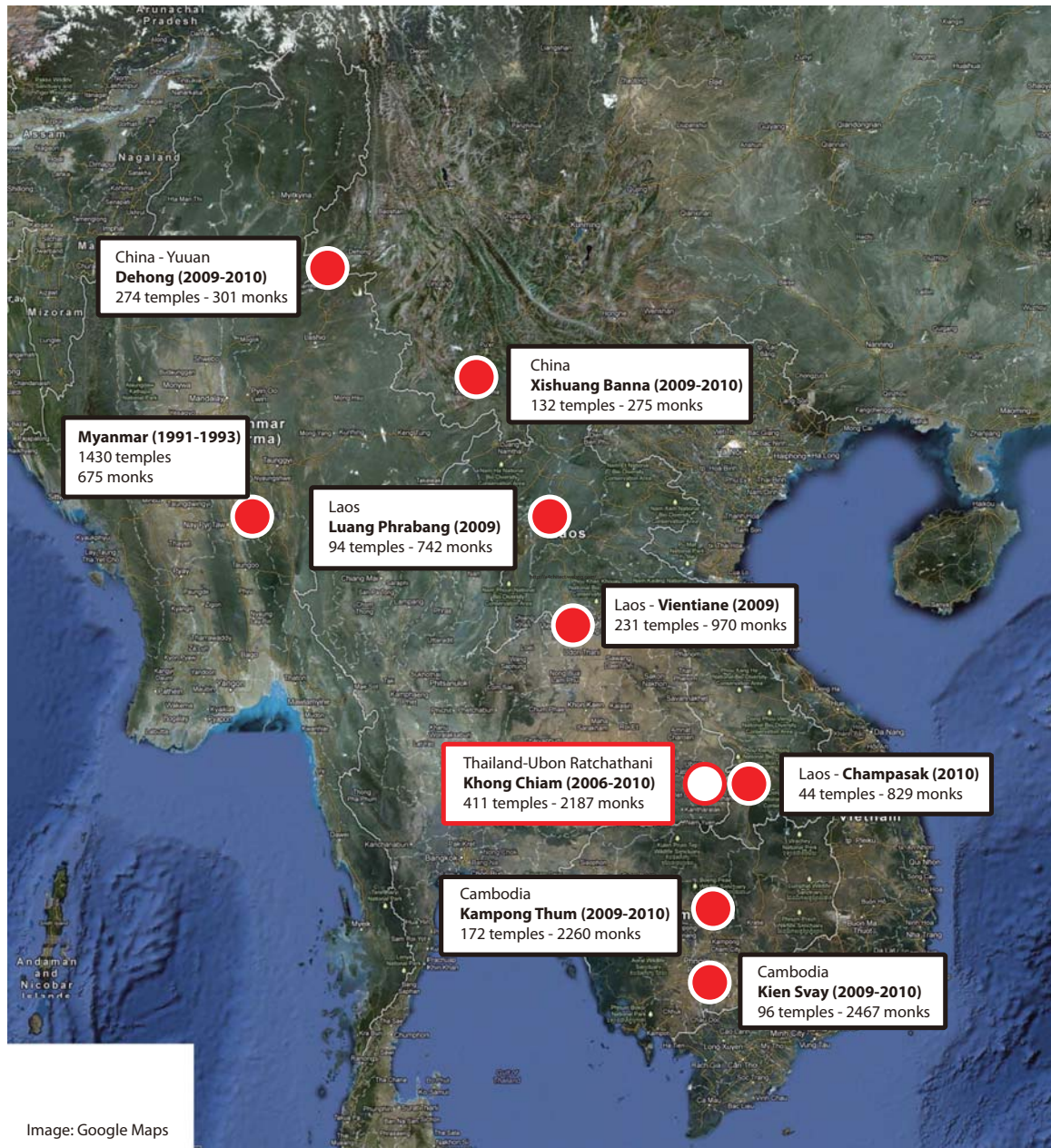
目次

1. 序論－「寺院マッピング」プロジェクトの目的と経過……………	1
林 行夫（京都大学地域研究統合情報センター）	
2. 「生きている仏教」の可視化 －東南アジア上座仏教徒が紡ぐ「地域」－ ……………	5
林 行夫（京都大学地域研究統合情報センター）	
3. 地域情報学と仏教実践の時空間マッピング……………	29
柴山 守（京都大学地域研究統合情報センター）	
4. Theravadins in Khong Chiam: Visualizations for Movement Tracking ……………	41
Julien Bourdon-Miyamoto（京都大学地域研究統合情報センター）	
5. 上座仏教の断絶と復興 －中国雲南省・西双版纳における寺院と僧侶の時空間マッピング－ ……………	51
長谷川 清（文教大学文学部）	
6. 中国雲南省徳宏州における仏教徒社会のマッピング……………	59
小島敬裕（京都大学地域研究統合情報センター）	
7. カンボジア仏教の時空間分析(2)－出家者の経歴の検討－ ……………	69
小林 知（京都大学東南アジア研究所）	
高橋美和（愛国学園大学人間文化学部）	
8. カンボジア寺院質問紙調査から見える俗人寺院止住者の実態……………	79
－コンダール州とコンポントム州との比較－ 高橋美和（愛国学園大学人間文化学部）	
小林 知（京都大学東南アジア研究所）	
9. カンボジア上座仏教寺院に関する歴史データ……………	83
笹川秀夫（立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部）	

10. 時空間マッピングの成果と今後の課題	
—ミャンマー称号授与僧の分析から—	93
土佐桂子（東京外国語大学大学院総合国際学研究院）	
11. フィールド調査からデジタルデータへ	97
須羽新二（京都大学地域研究統合情報センター）	
関連資料（中扉）	
12. 得度チャート	107
13. ワークショップ・ポスター	123
14. 僧侶移動の Google Earth による可視化	135
15. 寺院ネットワーク	137
16. あとがき—今後の課題にむけて—	143
林 行夫（京都大学地域研究統合情報センター）	
17. 附録 CD-ROM	



Mapping Practices of Theravadsins: 9 locations, 2884 temples, 10706 monks, 10 tracking years



Note: The numbers shown above represent accumulated over the years of study and might contain duplicates, including monks interviewed multiple times.

本書でもちいられる調査地の略称

- | | |
|---|---------------------------|
| KC: Thailand-Ubon Ratchathani-Khong Chiam | KT: Cambodia-Kampong Thum |
| KS: Cambodia-Kandal-Kien Svay | VT: Laos-Vientiane |
| LP: Laos-Luang Phrabang | CP: Laos-Champasak |
| XB: China-Yunnan-Xishuang Banna | DH: China-Yunnan-Dehong |
| MY: Myanmar | |

「寺院マッピング」プロジェクトの目的と経過

京都大学地域研究統合情報センター
林 行夫

本書に収めた10の報告論考と資料は、平成20(2008)年度から平成22(2010)年度にかけてタイ、ラオス、カンボジア、中国雲南省(西双版纳と徳宏)、ミャンマーでの臨地調査で得た一次資料に基づき、平成23(2011)年度より参画した京都大学地域研究統合情報センターの「地域情報学プロジェクト」(代表:柳澤雅之)のひとつ「大陸部東南アジア仏教徒社会の時空間マッピング・データベース」において分析と議論を重ねてきた成果の一部である。

中国雲南省(西双版纳と徳宏)をふくむ大陸部東南アジアの地域には、スリランカ大寺派系のパーリ経典を伝持する上座仏教文化圏が広がる。11世紀から14世紀にかけて各地域に興った歴史的王権が受容した上座仏教は、統治する者を正統化するとともに、一般の人びとにとって寺院・仏塔の造営や男子の出家(19歳以下の見習僧、20歳以上の僧侶)を社会慣行とする「生きた仏教」であり続けてきた。

その人文社会科学的な実証研究は、1970年代にM・Spiro(ミャンマー)、S・Tambiahや石井米雄(タイ)で画期をなした。しかしながら、冷戦体制が終息した1990年代以降も、国別の調査研究と関連学界で完結する傾向がみられた。上座仏教文化圏全体を視野におさめる調査研究が実現すれば、国や地域ごとに行なわれてきた従来の研究を相対化するとともに、全域の動態に新たな光をあてることができる。そのような観点から、本研究は大陸部東南アジアの仏教徒が自ら率先して行なう寺院施設の造営や出家行動(得度と移動)を仏教徒社会の根幹をなす実践としてとらえ、それを空間や時間軸上で可視化することによって仏教徒社会を地域横断的に比較する基礎的な研究をめざした。

調査項目は、特定区画内の植生を調べるコドロード法のように、対象地域の全寺院施設のデータ(GPS計測値、名称、法的分類、結界をふくむ建立の履歴、施設内の建造物)、止住する出家者の出身地、得度年、所属「教派」、そこを起点とする過去5年の移動歴(雨

安居中に滞在した寺院の所在地)などである。

本研究の特色と独創的な点は以下の2点に集約される。

- ① 複数の地域の同じ宗教の多様な実践を、同じ時期に施設(モノ)と場所、そこを拠点とする人の動きから計量分析する比較研究であること。
- ② 調査で得た資料を情報学的に統合して地域社会と宗教実践の動態を可視化すること。

以上の2点は、集積したデータを共有化し、文献資料も併せて多面的に分析する学際的な共同研究のあり方と直結しており、宗教と社会について地域を限定した従来の人類学的な研究や地域研究がなしえなかった成果と新たな知見をうむという展望にたつ。また、その成果は、学会をはじめとする学術界のみならず、現地社会への成果還元もふくめ、宗教実践と地域の動態についての総合的な地域間比較研究を導く。

素材となる一次資料は、主に平成20-22年度科研基盤研究(A)[1]「大陸部東南アジア仏教徒社会の時空間マッピング—寺院類型・社会移動・ネットワーク」(課題20251003/研究代表者:林行夫)で実施された上記5か国9地域での調査で得た。内訳は、寺院施設2,884、出家者10,706人とその過去5年から10年間の移動遍歴などに関する資料であり、さらにそれらを情報学的に処理したデータベースである[1]。

資料の基本的なデータベース化は平成22年度中に完了した。平成23年度以降、地域情報学プロジェクトによる年3回(計9回)の研究会を通じて、寺院施設、出家者の来歴と移動経路を可視化する作業を進めた。その成果は、地域研究統合情報センターでの公募による共同研究、その成果報告会等で逐次報告するとともに[2]、ニューズレターを創刊してプロジェクトメンバー間でのデータ共有と異分野・他地域を専門とする研究者との意見交換を促進してきた[3]。

こうした活動を重ねて、国内外の寺院施設の間を

移動する出家者の遍歴を可視化し、寺院造営の様態と移動パターンの地域間比較が可能となった。全域のデータが一望できることで、高齢者の出家行動の地域差や寺院施設の増え方と地域社会との関わりもみえてきた。同時に全域で国民国家の仕組みが整う過去1世紀ほどの地域社会の変容と関わる法制度、統計や史資料を統合し、出家者を生み出す地域社会と生活経験の変化を可視化したうえでデータを相関分析することの有効性も判明した。

平成25(2013)年2月26～28日にタイ・バンコクでチュラーロンコーン大学社会調査研究所ほかとの共催による研究集会 "Mapping Practices among Theravadin of Mainland Southeast Asia in Time and Space" でタイ人研究者をふくむ12人が発表報告した[4, 5]。この集会には地域研究や情報学を専門とする研究者のほか、僧侶、国家仏教庁の役職者も参加した。僧侶には、博士号をもつ学僧をはじめ、調査地(ウボン県コーンチャム郡)の地元僧も招かれた。役人も中央本庁と地方の支所から参加した。

この集会で印象づけられたのは、調査地の僧侶や地方支所の役人の発言だった。国境を越える僧侶の移動や未登録の寺院施設が増加する事実について、中央官庁の役人は常に行動規範の規律や法的「規制」を前提にしてコメントした。逆に地元の僧侶や役人は、そうした行ない(実践)は住民間で継承される信仰の発現とし、中央官庁にすれば「逸脱」となる地方の実践を、住民の法的無知によるものと釈明しなかった。会議言語はタイ語であった。英語ならこうしたやりとりはなかったであろう。

さらに、最終日に国家仏教庁本庁の情報技術系の専門家から、各国別の状況は示されたが、プロジェクトはまだ全域の比較研究とはなっていないのではないか、というコメントを得た。それは研究者の頭の中では進んでいても、一般聴衆にとっては目にみえるかたちで示されていないことを改めて教えられることとなった。

この集会を契機として、成果の概要をタイ国家仏教庁でも紹介した。また、同年5月に実施されたマハーチュラーロンコーン仏教大学仏教研究所主催の国際仏教徒研究会議へも招請されることとなった[6]。

本書の報告の多くは、調査地ごとのデータの可視化とその分析が主となり、地域を横断する比較はまだ部分的な言及にとどまる。宗教実践の何を可視化しえるか、を問うことは、可視化しえないものがないか、それはなぜかという問いに通じた。データの可視化は、研究者自らが実見した現場の事実の追認に始まり、次いで新たな発見の過程をもたらす。現在はこの段階での分析と比較を試みている。同時に、

その成果を踏まえて、第三者に見せるための可視化とそのデザインが必要となる。こちらは、首都大学東京の渡邊准教授(京都大学地域研究統合情報センター国内客員准教授)の協力を得て進められることとなった。

以上がこれまでの活動の概要である。本研究は、空間情報学(geoinformatics)の概念を地域研究に導入して「地域情報学」を構想した平成17-21年度基盤研究(S)「地域情報学の創出—東南アジア地域を中心に—」(課題17101008/研究代表者:柴山守)に筆者が研究協力者として参加したことを嚆矢とする。平成18(2006)年度にタイ=ラオス国境のウボン県コーンチャム郡で寺院施設と出家行動についての調査を開始した[7, 8]。平成20年度からの科研では、ここでの調査を継続しつつモデルとして大陸部全域に拡大させたものである。各地域を専門とする8名(地域研究、文化人類学、地域史)と情報学者1名による長い「航海」は、なお続く。

なお、本研究での寺院施設と出家者の個人史のデータは、悉皆調査ができず文献(「高僧名鑑」)を利用したミャンマーをのぞいて、各地での悉皆調査で得られた。悉皆調査はいずれも各国関係省庁(タイ国家仏教庁、ラオス仏教協会、カンボジア宗務省、中国雲南省仏教協会)および海外研究協力者が所属する大学・研究関連機関より学術を目的とする聴取調査としての認可を受けたうえで実施された。調査地では、逐次個々の被調査者の意向を事前に確認し、許諾を得た場合に限り実施している。

- [1] 林行夫(編)2011.『マッピング・データ集成I—大陸部東南アジア仏教徒社会の時空間マッピング』京都大学地域研究統合情報センター
- [2] 林行夫2013.「寺院マッピング—見えないものを写像する」柳澤雅之(編)『情報をつむぐ、世界をつかむ—地域情報学で変わる地域研究』京都大学地域研究統合情報センター・ディスカッションペーパー30、35-43頁
- [3] NL2012-2013.『宗教と地域の時空間マッピング・ニューズレター』No.1(2012年5月27日)～No.7(2013年12月12日)京都大学地域研究統合情報センター・地域情報学プロジェクト「大陸部東南アジア仏教徒社会の時空間マッピング・データベース」
http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/project/files/2011/06/Mapping_Practices_NL
- [4] Hayashi, Y. 2013. "What the Mapping Tells Us and Contributes to Southeast Asian Studies." Paper presented at the International Workshop on *Mapping Practices among Theravadin of Southeast Asia in Time and Space*, held at Chulalongkorn University Social Research Institute, Bangkok, Thailand, 26-28 February, 2013
- [5] CIAS and CUSRI eds. 2014. (Center for Integrated Area Studies, Kyoto University and Chulalongkorn University Social Research Institute) *Kanprachum sing patibat kan*

radap nanachat "Mapping Practices among Theravadians of Southeast Asia in Time and Space." Kungthep: Sathaban Wichai Sangkhom Chulalongkorn Mahawitthayalai.

- [6] Hayashi, Y. and Shibayama M. 2013. "Why Theravada Buddhism is a Living Religion: Some Observations from Mapping the Practices of Theravadians of Southeast Asia." Paper submitted to the 5th International Buddhist Research Seminar held at The Buddhist Research Institute, Mahachulalongkornrajavidyalaya University, May 21-23, 2013 [Proceedings is forthcoming]
- [7] 林 行夫 2007. 「東北タイ仏教寺院と社会移動の時空間マッピング—寺院類型・出家行動・ネットワーク (中間報告)」『シンポジウム地域研究と情報学—新たな地平を拓く』講演論文集』CIAS、CSEAS、ASAFAS (京都大学)、25-36 頁
- [8] 林 行夫 2008. 「東北タイ仏教徒社会の時空間マッピング—寺院をめぐる〈情報〉とフィールドワーク」『アジア遊学 (特集：地域情報学の創出)』 113: 84-91.

「生きている仏教」の可視化

——東南アジア上座仏教徒が紡ぐ「地域」——

京都大学地域研究統合情報センター

林 行夫

生きている仏教

他の世界宗教と同様、仏教は世界の各地で多様な姿をみせる。故地のインドからアジア最東端に到達した仏教は、日本の主要な宗教として今日まで存続している。その日本人は東南アジア仏教の「生きている」姿 (Fig. 1-1~3) に印象づけられる。人々は自ら寺院を造営して出家し、在家者は托鉢に応じる。寺院や仏塔で布施をする。寺院は福祉施設の役割も果たす。日本では教学思想や哲学としての仏教の研究は発展した。しかし、生活のなかにこうした姿をみることはない。明治期 (1889-91) にタイで出家した日本人が、日本仏教には「活論あれど活体なし」[1]と記した状況は、今も変わらず続いている。なぜだろうか。

東南アジアの上座仏教で出家者の集まりを意味する「サンガ (僧伽)」は、師弟関係を介して戒や教説を「属人」主義的に継承する共同体である。サンガは、国家や市民社会が定める法と異なる律 (Pali: *vinaya*) を生活規範とする点で世俗社会から自律する。同時に、労働しない出家者を支える (供養する) 点で、またその成員となる出家者を供給する点でサンガは世俗社会に依存する。すなわち、サンガは、組織を動かす血液のように世俗社会を内部にはらんでいる。出家者とその場所は世俗社会そのものを映すのである。

生きている仏教の現実には、限られたコミュニティでの調査研究で明らかにされてきた。他方で、上座仏教徒の活動は一地域や村を越える。地域を限る調査では外の社会との繋がりを生む寺院施設や出家者の活動、寺院のネットワークや師弟関係、移動の特徴は「圏外」事項となりやすい。しかし、そのような事実を背景におかなければ、地域ごとの出家慣行や世代差の違いを適切に理解することにならない。東南アジアの仏教徒社会を俯瞰すれば、そうした実践の位置づけ、ひいては個々の地域の特徴も別の角度

から明らかになる。ただし、そのような射程をもつ研究は一人の研究者でなしえることではなく、それぞれの地域の専門家が集っての共同研究となる。

本プロジェクトは、従来、集約的な調査研究で完結してきた「生きている仏教」の現実を、各地の調査で得た資料を統合して地域横断的な視点から解明することをめざしている。情報学的手法で資料をデータ化することによって寺院施設の位置、出家行動が一望できるようになった。次いで、データの可視化へと歩みを進めている。その過程で「多様な実践」といった一言では納まらない人々の営みもみえてきた。以下では、タイの調査地での事例を中心としつつ、他地域との比較の視点を求めた可視化の成果と考察の一部を紹介する。

寺院施設と出家行動

本書に収めた各章が紹介している5カ国9調査地に共通する指標は、寺院施設と出家者である。寺院施設には、荘厳な伽藍をもつ僧院から草庵もふくまれる。出家者は男子に限られる。19歳以下で10戒を授けられる見習僧 (沙彌) と20歳以上で227戒を受ける僧侶 (比丘) である。檀家制度とは無縁の上座仏教の出家者は、複数の施設に止住できるが、雨季入りして乾季を迎えるまでの間 (雨安居 *vassa*) は同じ施設に止まる。どの国のどの地域でも、寺院施設の造営と出家は功德を生む行いとされている。本プロジェクトは、この両者が地域を越えて仏教を存続させている基本要素とした。計測されたGPS値から寺院施設を地図上におとし、施設と出家者の移動履歴を時間の推移でみる。寺院施設は、布薩堂 (戒を授受し検める結界をもつ聖所)、講堂、鐘楼や火葬場や遺骨収納など、主に境内に備わる施設を調べ、出家者には得度した寺院や個人歴、過去5年間の雨安居期に滞在した寺院について尋ねた。悉皆調査が実施できなかったミャンマーを除いて、調査地ごとの

事情にあわせた項目も加えつつ、ほぼ同じ質問を各調査地で行った。収集された資料は以下のような手順で分析を進めた (Fig. 2-64~67)。

- 1) 寺院施設の種類や立地環境から各調査地における仏教徒社会の特性を探る
- 2) 出家者各人の移動履歴をクロノジカルにマッピングし、調査地の全出家者の実態を可視化して俯瞰する。
- 3) 「得度チャート」を作成して出家傾向の地域間の差異を探る。
- 4) 移動パターンを可視化して地域間比較を試みる。

寺院施設はどの調査地でも増えている。施設の種類の法制度上で区別するのはタイのみである (Fig. 1-4)。タイの調査地 (ウボンラーチャターニー県コーンチャム郡。以下 KC) での立地条件は、集落、河川や道路などを指標にみるができる。集落ごとに寺院がある。逆に、人里離れた山野や洞窟に立地する施設は瞑想修行のための「草庵」が多い (Fig. 1-5)。「草庵」とは法制度上登録義務がない止住域 (*thi phaksong*)、通称「森の寺」(*wat pa*) である。KC でもっとも古い寺院の建立年から 10 年刻みでみると (1950 年代のみ増加ゼロ)、1990 年代から 2010 年にかけて 60 が増え、2010 年時で 90 の半数以上を擁している。2006 年からの 5 年間でも寺院 1、小寺 3 にたいして止住域は 12 も増えている (Fig. 2-41~59)。

これはタイの KC に限られる特徴である。この種の施設を法制度的に識別しない他国の調査地では、寺院施設数は微増である。全域をみると、各国での人口増加に比して出家者数が減少傾向にある一方で、寺院施設数は、増えはしても減らないという事実が判明する。これは全域における積徳行のあり方をふくむ実践に関わるデータとなる。

次に出家行動である。「得度チャート」は出家のパターンと世代別傾向を示す (Fig. 1-6)。

カンボジアと中国雲南省西双版纳と徳宏の得度チャートでの空白部分は、歴史上の大変動期を映している。タイの KC、ラオスのビエンチャンをのぞくと見習僧が多い。僧侶が多い KC の傾向はタイ国全体の宗教統計でも追認できる。19 世紀から戦前にかけても、KC の特徴はタイ国全体の趨勢と合致する [2,3]。中国雲南省やカンボジア、ラオス北部ルアンパバーンでは見習僧が圧倒的に多い。とはいえ、この違いは国単位や法制度を理由とするものではない。僧侶が多い KC は中部タイでの出家の傾向と同じであるが、同じタイ国にあっても北タイでは見習僧出家が卓越する。逆に、同じラオスでもビエンチャンでは僧侶が多い。これは僧侶、見習僧のいずれを人生儀

礼とするかという地域ごとの慣行の違いを映している。また、見習僧が卓越するところでは僧侶になる場合、還俗せずそのまま続いて得度する傾向がある。他方で、成人後の僧侶の得度を慣行とする KC ではいったん還俗して家庭を築いたのち、再得度する傾向が認められる。

本研究プロジェクトは過去の雨安居で滞在した寺院を移動の指標 (拠点) としているが、見習僧が多いところでは、教育施設 (世俗教育課程) を併置する寺院への移動がめだち、学習目的とする出家であることがわかる。一方で、KC の出家者の出生地と得度地の分布を見ると、東北地方を中心にしながらもタイ全土に広がっている (Fig. 1-7)。総合的に移動経路の分析 (ミャンマーは文献資料を使用) から、出家者は出生地ないしその近くの結界をもつ寺院で得度している。そして僧侶として得度してからの移動の理由には、地元の寺院に僧侶を必要とする近親の要請、学習目的、師弟関係による随行、修行として各地を遊行する頭陀行 (*dhutanga*) のほか、異郷を経験したいからといったものがある。さらに、出家者の出生地から得度地を経て止住を繰り返す様子について移動距離からみる分析も試みた。KC では僧侶一人あたり約 379 キロメートルの移動が見られる (Fig. 1-8)。さらに、タイの KC には海外からの移入者もみられる。

移動 (トラッキングルート) の可視化

本書所収のジュリアンや柴山による作図にみるように、寺院施設間を結ぶ出家者の移動データの可視化について、さまざまな試みがなされている (Fig. 3-35~44, Fig. 4-4~21 等)。タイの KC やミャンマー全土のように、出家者の出生地と得度の場所、その間の移動経路は、ある地域の寺院施設が、いかに多くの地域外出身者と多様な動機で関わっているのかを示す。KC は出家者の移動範囲が圧倒的に広い。そして、遠来からの出家者の多くが、いわゆる「村づき」の寺院施設でない「森の寺」(止住域) に吸収されている。それは、当該地域の住民は「寺」とよびながら国家が把握していない施設である。新たな施設に止住するのは、地元出身者より他地方の出身者が多い (Fig. 2-60)。登録義務のない施設に、多くの「よそのもの」が止住するのである。

また、ある調査地のトラッキングルートを他の調査地のものと比べることからも発見がある。同じ中国雲南省の徳宏と西双版纳で、それぞれの出家者の移動の「痕跡図」を並べてみる (Fig. 4-43)。まずは、移動範囲の違いがみてとれる。徳宏の出家者は、ミヤ

ンマーに傾斜する「ビルマ軸」をもちながら移動距離が長い。逆に西双版纳では、北タイと繋がる「タイ軸」がみえるが、その動き幅が小さい。図柄としては、前者の移動は放散のかつ開放系をなし、後者は同じ場所との往来が集まる閉鎖系にみえる。移動距離は、出家をめぐる社会的距離を浮かび上がらせる。

地域ごとにみると、移動の動きとその範囲は量的に把握される。ところが両者を並べてみると別の世界が透視される。まずでてくるのは、近接する空間にあってこれほど違う、という驚きである。それは両者を差異化する要素とその意味を探る動機へと誘う。可視化による発見と新たな想像力は、複数の事例を並べることで増幅される。

当然のことながら、実践をめぐる現在の国家間や地域の境界を超える動きや移動距離には、個々の地域の社会環境と住民の歴史的経験の違いが反映されている。「量的」な図柄は、出家者の出身地などを変数として捉えなおすこともできるだろう。加えて、出家者の移動理由とともに、求められている仏教実践の質の違いが浮き彫りにされるかもしれない。ことばでは同じ学習目的の移動といっても、世俗教育課程で供給されるもの、特定の師や施設で直伝されるものなど、異なるタイプの知識を求める移動かもしれない。このような推察が、調査者が関わる地域へとフィードバックされてさらに新たな分析へとむかう。

なお、このレベルの可視化は、データを印象的に見せる可視化ではない。地図上におかれた事実を絵として横滑りさせるだけなのだが、それまで意識化されない分析の指標とその組み合わせを生んで解釈の視点を更新する可視化である。研究者には馴染み深い地域での経験的事実や事象が特定の観点からのみ了解されていたことを想起させ、地域間比較という次の段階に導く重要な手続きとしての可視化である。

異種データの相互参照が映す「地域」

寺院施設については、立地データに加えて、遺骨を収納する「墓」の機能を果たす施設の有無から空間分布をみている。遺骨収納の施設は、仏塔型のものから寺院の外堀に空洞をつくって骨壺を埋め込むものなど多様であるが、止住域（「森の寺」）をのぞくタイのKC、ラオス中南部、カンボジアの調査地ではほとんどの寺院施設に備わっている。逆に、北ラオス、北タイから中国雲南省へと北上するにつれて遺骨を収納する寺院施設は減る（Fig. 1-9, Fig. 2-23~31）。東南アジア上座仏教徒のあいだでは、王族

を除いて収骨の慣習は一般的ではなく、東北タイの農村部の寺院でも1930年代に普及している事例[4]を考慮すると、この分布は興味深い。徳宏では、往生（通常死）の遺体は土葬し、自殺や交通事故死では火葬する点で、他地域とは真逆の慣行が一般化している。

そしてこの分布は、まったく別種のデータである出家慣行の違い（見習僧の出家が卓越するゾーンと僧侶卓越ゾーン）と重なるようにみえる。収骨と出家慣行に直接の因果関係を認めるわけではない。むしろ、複数の地域を繋ぐように、ある慣習がその地域の慣習となっていく（させていく）文化の流通回路のようなものが想定しようということである。

このような異種データの相互参照から全調査地を俯瞰すると、大きく二つゾーニングが浮かびあがる。繰り返しになるが、出家慣行では見習僧出家が卓越するA域<ミャンマー・北タイ・北ラオス・中国雲南省>と、僧侶の得度を人生儀礼とするB域<中部・東北タイ、カンボジア、中・南部ラオス>である。出家年数（法臘）もAでは見習僧から、Bでは僧侶となって以後の年数を数える。また、Aでは見習僧で20歳を迎える場合、還俗せずに続けて僧侶となり、いったん僧侶となると還俗しない傾向が強い。Bの中部・東北タイでは得度と還俗を繰り返すことが普通である。Bでは瞑想施設をのぞくほとんどの寺院が遺骨を収容するが、Aの北ラオス、北タイから中国にかけての寺院にはその施設がない。

寺院施設に関わる積徳行の慣行からみても、この二つのゾーンは対照的である。Aでは仏塔の建立が重要な積徳行とされているが、Bでは寺院施設全般とりわけ布薩堂の建立が大きな功德をもたらす行いとされている。また、Bではジャータカ（本生経）を詠みあかす祭事が重要な年中行事となっているが、Aのミャンマーにはない。

他方で、すべての調査地の寺院施設内外に共通するアイコンがある。ヒンドゥ起源とされる「地母神」（*nang thorani*, *mae thorani* [Thai; Lao], *niin ganhfñ* [Khmer], *vasundhara* [Burmese]）である。地母神は人がこの世で積む功德を故人の霊や身寄りのない餓鬼に届ける役割を果たす。特筆すべきは、地母神の記載はパーリ経典にないことである。

「中心」と「周縁」

データが可視化される過程で得た確信めいたものがある。それは、首都をはじめ行政や文化の中心地よりも、その周辺の地域と出身者がそうしたそれぞれの中心を代表する仏教を支えているという構図で

ある。

タイ国は上座仏教徒社会にあって「中心」的な位置を占める。東南アジア仏教は、スリランカ上座仏教の「大寺派」(Maha Vihara)の戒統を標榜するが、16世紀以来ポルトガルやオランダの統治下におかれて得度に必要な戒統が途絶えたスリランカは、1753年にタイ(当時アユタヤ)からのミッションを招請して授戒に必要な戒壇を「逆輸入」して今日の主流派シム・ニカーヤ(Siam Nikaya)を創始した。東南アジアで唯一植民地支配を免れたタイは1902年に「サンガ統制法」を制定し、王族の革新派(タマユット)とともにラオスとカンボジアへ伝えた。1932年に立憲王制となってからも王権が擁護する仏教は今日まで続いている。その間、中国雲南省では「大躍進」(1958)と「文化大革命」(1966-1986)により仏教実践が断絶した。1978年の民族開放政策で宗教信仰は恢復されるが、西双版纳の仏教復興ではタイが留学僧を受け入れるなどして積極的な支援をした。

そのタイ国で、最貧の周縁地方とされる東北地方に全国登録寺院の半数近くが集中し、首都バンコクの名刹に東北出身の出家者が多く集まる。「周縁」が中心を活性化しているような仏教実践のあり方はミャンマーにも通じる。東南アジア上座仏教の活力は、出家者があらゆる階層の俗人から生まれては入れ替わり、社会の広い裾野から中心を支えるような人と移動を軸とする実践の回路が絶えず築かれていることに起因するといえるだろう。

国や地域を越える出家者の移動は、本プロジェクトのデータでも確認できる。出家主義の東南アジア仏教は、まさしくこのような人の流れを得て命脈を保ち、今日まで継承されてきたことがうかがわれる。同時に、その信仰の中身は、それぞれの地域が独自の慣行として築かれている。

展望

全体を俯瞰するマッピングと、そのために必要とされる尺度の統一作業やデータの可視化は、これまで学術の作法として前提とされたことがらを相対化する。同時にフィールドで得たデータをより適正かつ複眼的に読み込むために、あるいは新たな視点からの解釈をもたらすために、国家の制度や地域の統計や史資料をデータ統合する仕掛けが欲しくなる。

本プロジェクトでは、寺院施設と出家者個人の移動を指標としたことで、生態環境や歴史的な法制度、社会文化変容の様相を重ねて可視化する展望が開けている。この方法を敷衍すれば、一調査区画の事例は一国全体、さらに国民国家を超えて展開されてき

た仏教徒住民が生きる「地域」へ繋ぐことができる。その過程で、調査区画ごとの慣習や歴史の位相も新たに浮き彫りにされる。その全体を統合すれば、上座仏教徒社会の実践の断絶と復興と発展というサイクルの下に、地域の作られ方のメカニズムがみえてくるだろう。時空間マッピングは、現在の仏教の生きている姿の実像を映すのみならず、現在流通する国家単位の地図に埋め込まれている「地域」を掘り起こしつつ、実践の歴史的展開をトレースできる有力なツールになる。

- [1] 生田得能 1891.『暹羅仏教事情』真宗法話会
- [2] Wachirayanawarorot (Somdet Phramahasamanachao) 2514 [1971] *Kan Sueksa*. Krungthep: Wat Bowoniwetwihan lae Munithi Mahamakutwitthiyalai. p. 34 (1899年時点で寺院 wat 6,830、僧侶 59,087、見習僧 18,697)
- [3] 中島莞爾 1943.「タイの佛教」『海外佛教事情』第9巻第3号(5・6月號)、國際佛教協會, pp.1-10.
- [4] 林 行夫 2000.『ラオ人社会の宗教と文化変容』京都大学学術出版会



Fig. 1-1: Theravadin in Mainland Southeast Asia



Fig. 1-2: Research Sites



(1) Daily alms-giving (Chompasak, Laos)



(2) Prepare the Feast (Khon Kaen, Thailand)

Fig. 1-3: Practices as "living religion"

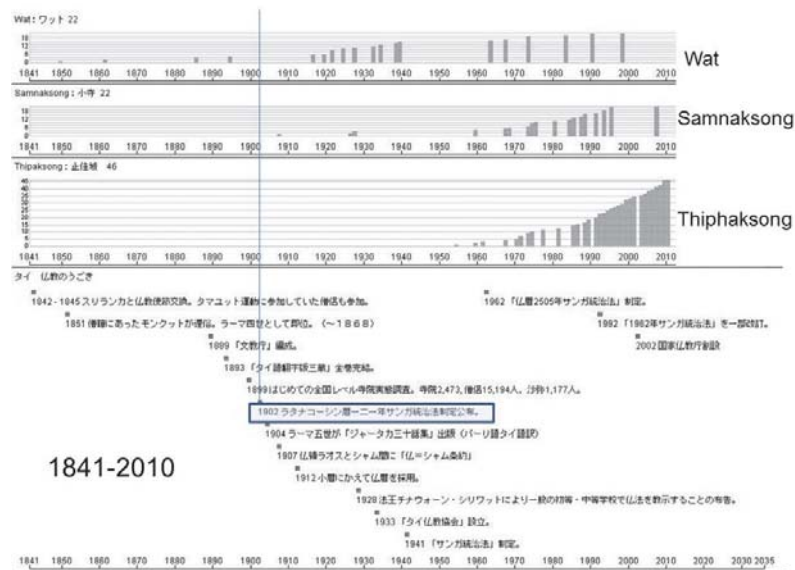
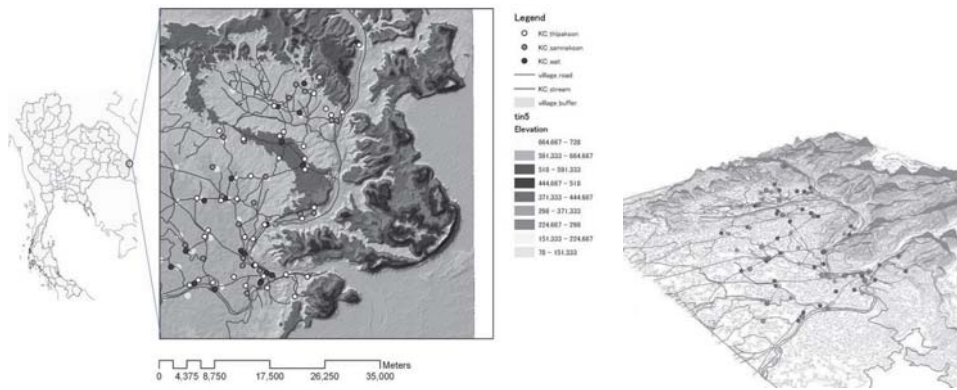


Fig.1-4: Chronological visualization by the type of temple in Khong Chiam district, Ubon Ratchathani, Thailand



(1) Location analysis by the DEM (Digital Elevation Model) (2) Visualization by 3D model
 Fig. 1-5: Location of temples analyzed in Khong Chiam, Thailand

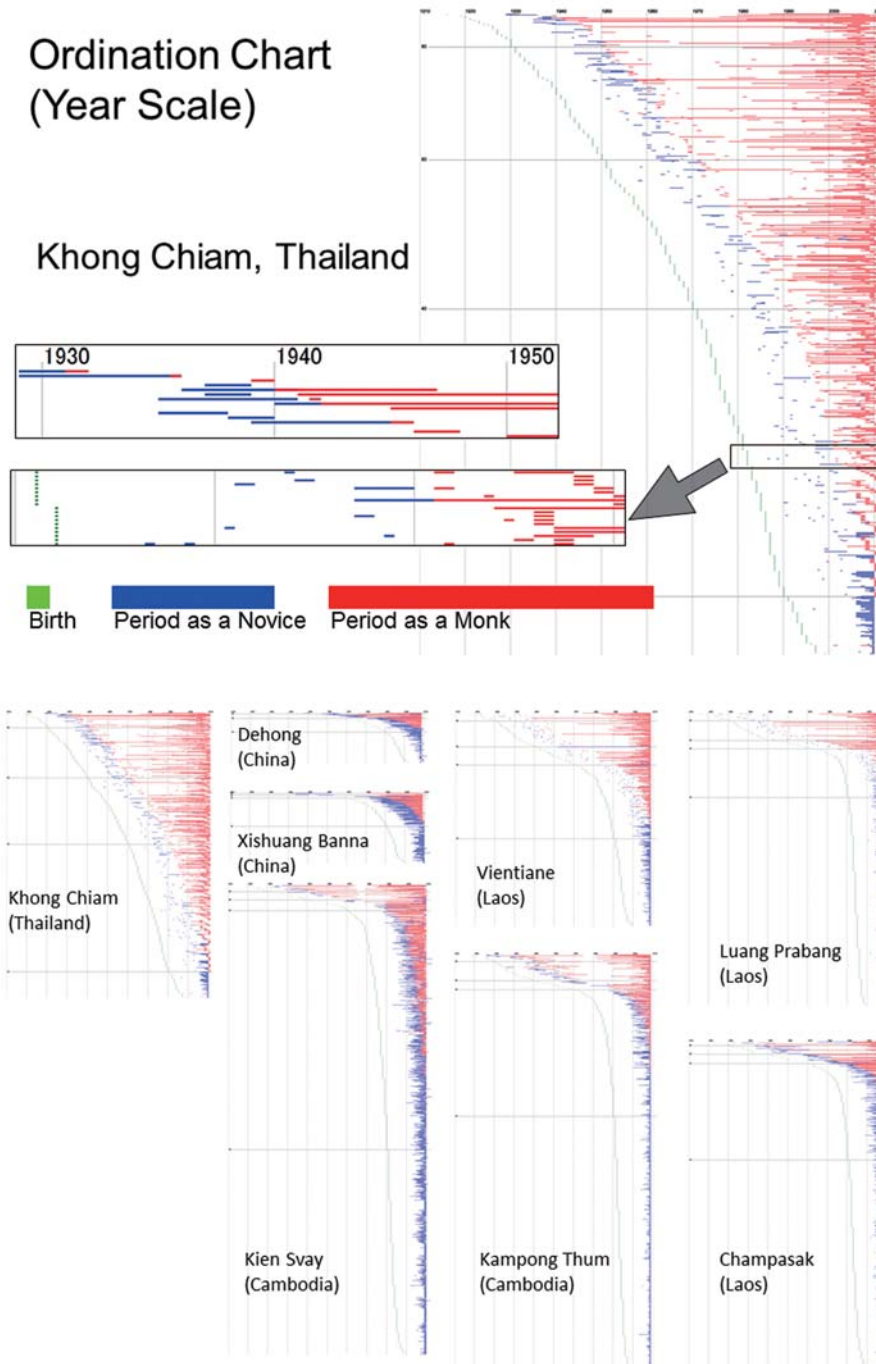
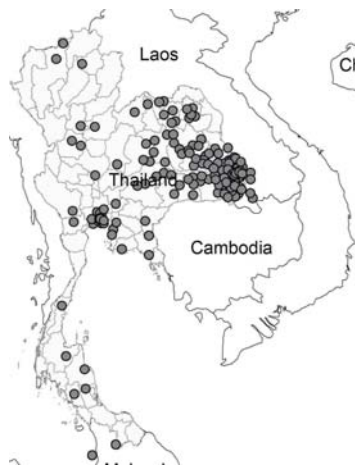
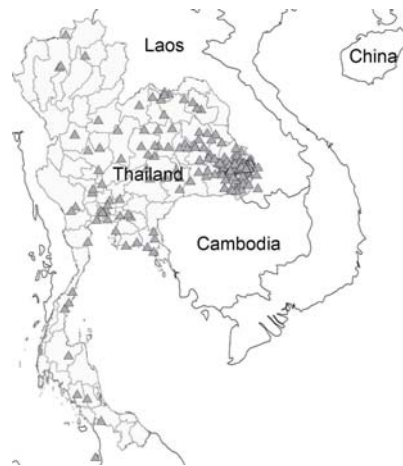


Fig. 1-6: The ordination pattern charts at research sites

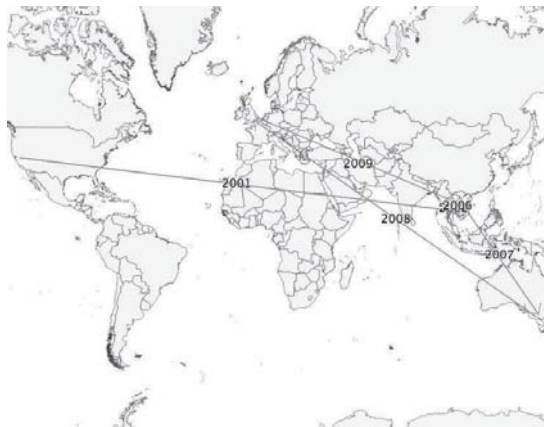


(1) Birth place



(2) Ordination place

Fig. 1-7: Spatial distribution of places of birth and ordination locations of monks in the case of Khong Chiam, Ubon Ratchathani, Thailand



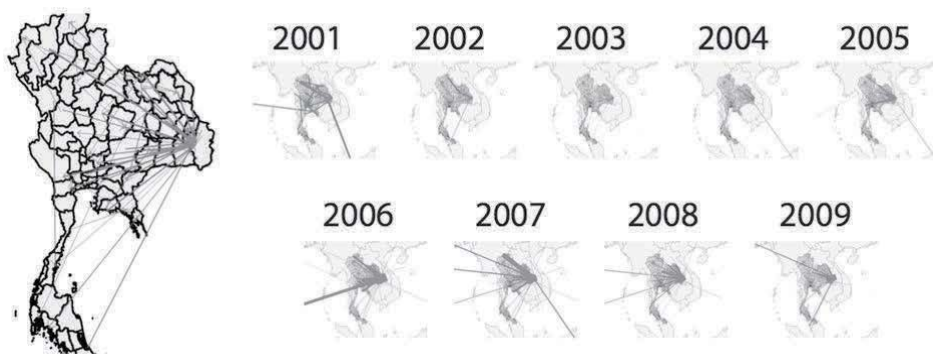
Monk ID:5010206
 [1942 Birth]:North...N(18-21)...M(-)...L<[Loei]=
 [Maehongson]=[Chaiyaphum]=[Nakhon Si Thammarat]=
 [Tak]=[Surin]=[Khong Chiam] >
 D: 3315.465 Km

Monk ID: 5031404 [1975]:Isan...N(13-)...M(20-
)...L<[Chachoengsao]=[Prathet Phama (Burma)]=[Prathet
 Phama (Burma)]=[Ubon Ratchathani]=[Chachoengsao]=
 [Nakhon Ratchasima]=[Naphoklang] >
 D: 2505.168 Km

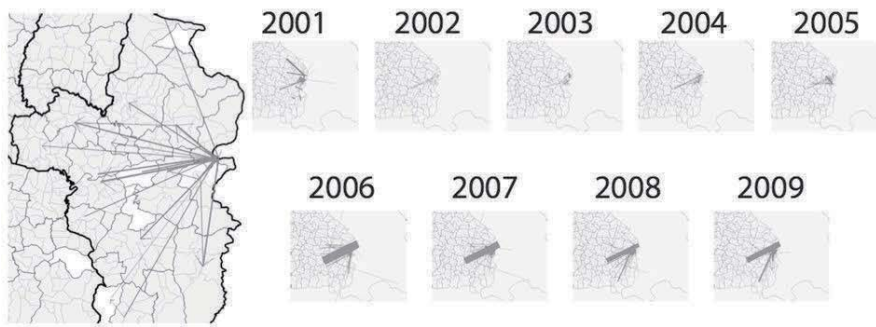
Monk ID:5021301
 [1958 Birth]:Isan...N(13-14)...M(24-)...L<[Khon Kaen]
 =[Ubon Ratchathani]=[Chiang Rai]=[Khong Chiam]
 =[Mahasarakham]=[Khon Kaen]=[Huaiphat] >
 D: 2206.786 Km

Typical Moving Cases
 N:Novice, M:Ordination as Monk, ():Age, .
 []:Place Name, -: Moving, D:Total Moving Distance

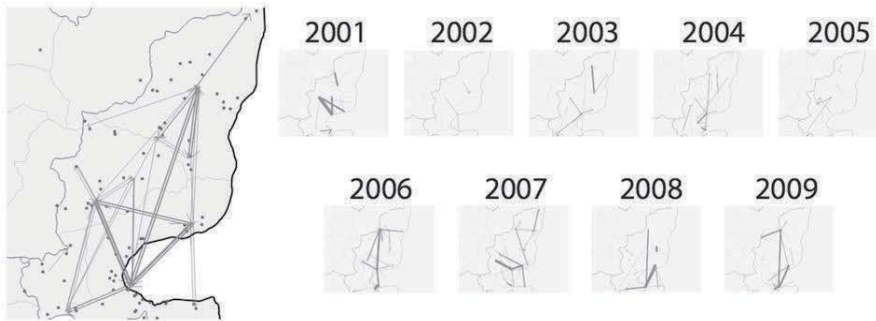
(1) Mobility of monks are shown by GIS analysis



(2) Mobility of monks between Khong Chiam and inside of Thailand

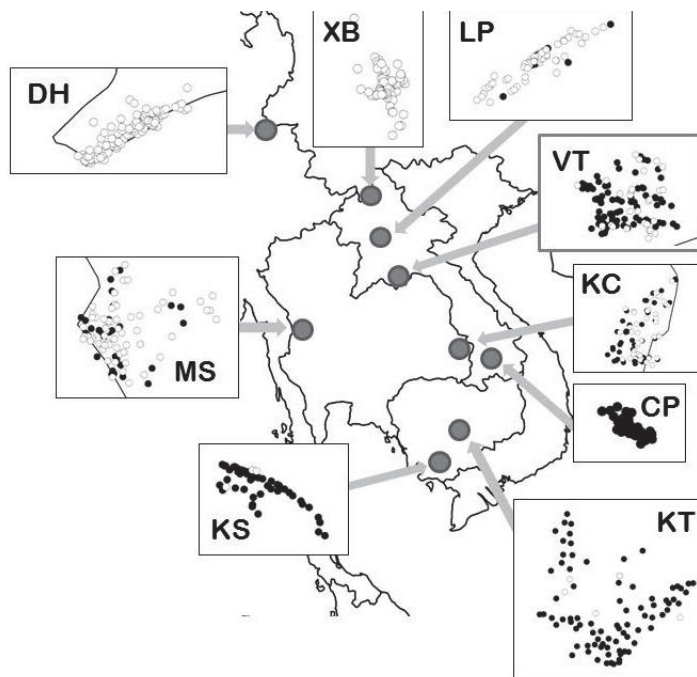


(3) Mobility of monks between Khong Chiam and inside of Ubon Ratchathani



(4) Mobility of monks between villages inside of Khong Chiam

Fig. 1-8: Mobility of monks in Khong Chiam by years and locations



Black Circle: temples equipped with ash/bone repositories
 White Circle: temples without ash/bone repositories
 DH: Dehong and XB: Xishuang Banna (Yunnan Province, China)
 LP: Luang Phabang, VT: Vientiane, and CP: Champasak (Laos)
 KC: Khong Chiam and MS: Mae Sot (Thailand)
 KT: Kampong Thum and KS: KienSvay (Cambodia)

Fig. 1-9: The regional distribution of temples with ash/bone repositories

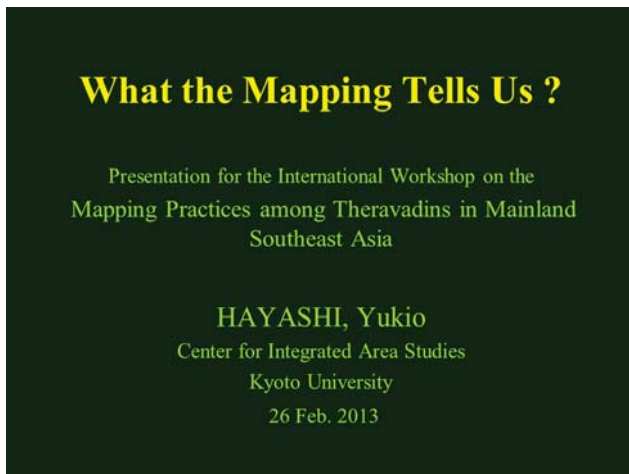


Fig. 2-1

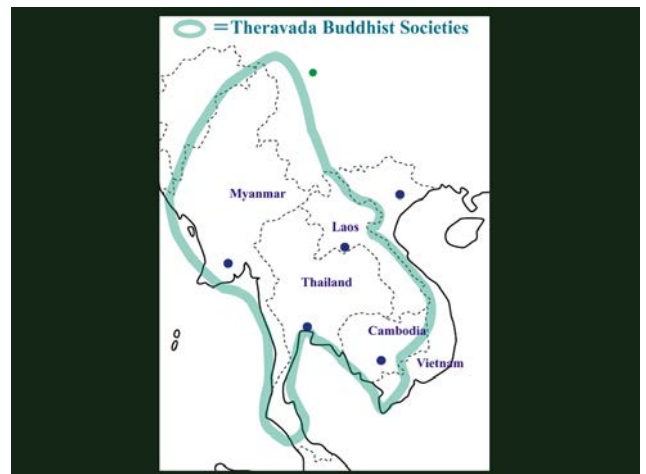


Fig. 2-2



Fig. 2-3

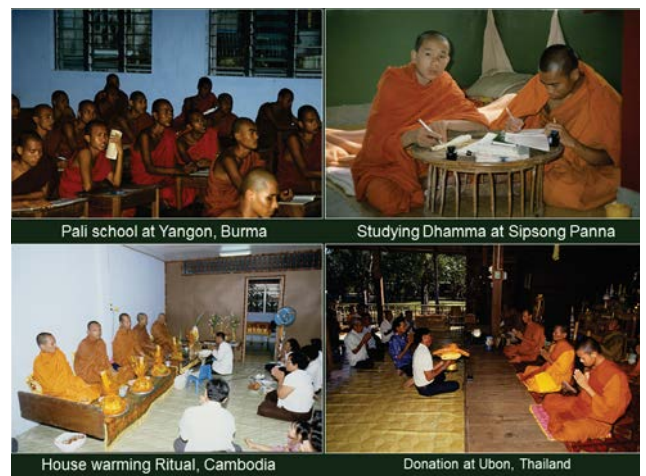


Fig. 2-4

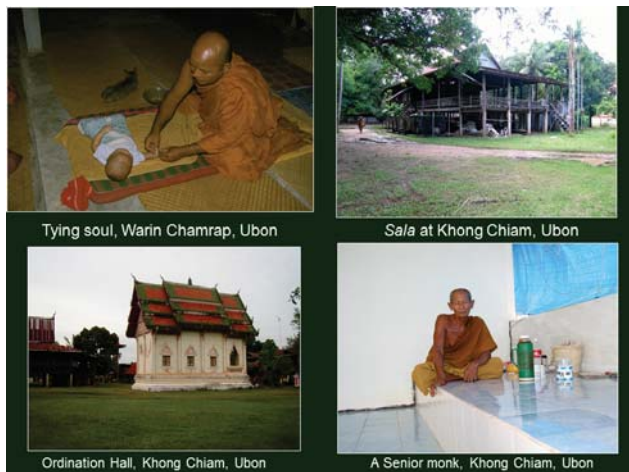


Fig. 2-5



Fig. 2-6

Theravadins in Socio-Historical Change

1. Colonized: Sri Lanka, Myanmar, Laos and Cambodia
 2. Adopted Socialism: Myanmar, Cambodia, Laos and China (Yunnan)
 3. Constitutional monarchy: Thailand (BE.2475) and Cambodia (2534)
- * Only Thai Buddhism had never been under the ban or reduction, keeping a traditional institutional structure of Buddhism and King

Fig. 2-7

Thai Buddhism as a Center of Theravadins

- BE.2296 sending Mission to Sri Lanka to establish Siam Nikaya, present major group
- 2394 established Thammayut Nikai by Rama IV
- * 2397-2407 sending Thammayut Mission to Cambodia
 - * 2431 building Thammayut Temple in Laos
- 2445 Sangha Act [1]
- 2484 Sangha Act [2] (2505 and 2535 revised)
- * 2486 Sangha Act in Cambodia
 - * 2494 Sangha Act in Laos
- 2511-2513 sending Thammayut to Indonesia
- 2533~ accept novices from Yunnan, China

Fig. 2-8

Purposes of the Study

- 1) Understanding Theravada Buddhist Cultures and Societies
 - How most of people in Mainland SEA are becoming Theravadins? What makes them in what mode?
 - Dynamics of Religion and Society
- 2) Integration of both microscopic and macroscopic study of religions practice
 - local practices and national institutions
 - inter-subjective reality and objective reality
 - inductive method and deductive method
- 3) Comparative study of Buddhist Societies and Cultures

Fig. 2-9

FOCUS

- 1) Sanctuary (temple, monastery and hermitage):
 - > intersection of clergy and layman
 - > a space to inscribe time & relations in a region
- 2) Practices of Buddhist clergy (monks & novices):
 - > regional variety of ordination
 - > personal history about the origin, place of ordination, tracking routes after ordination etc.

Fig. 2-10

What is Temple/Hermitage for Thai Buddhists ?

Temple (Monastery)

- 1) a center of community for laymen (because a focal point for merit-making)
- 2) a place to learn teachings of Buddha and to practice meditation for monk/novice

Hermitage

- 1) "a temple in the making" for laymen (distant from secular world)
 - 2) a place to practice meditation for monk/novice (sanctuary like asylum [Asyl] shelter)
- * Temple/hermitage construction is a communal project because it goes with the socio-, cultural-, economic-, and ecological condition of lay society and its surroundings

Fig. 2-11

What temple and monk's acts tell?

1. Location of temple/hermitage reflects type of environmental condition; historical process of making communities in regional context
2. Becoming a Monk/Novice & Wandering shows: regional difference and pattern of the custom
Networking of monks and temples based on the master-disciple relations
3. The both could show Social, political, and economical aspect of community related to religious practice

Fig. 2-12



Fig. 2-13



Fig. 2-14

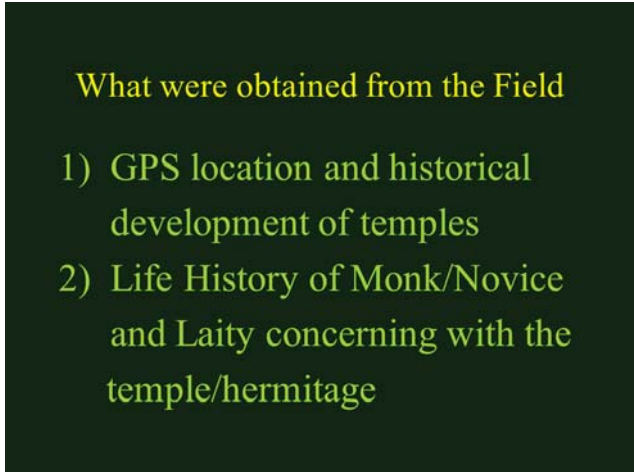


Fig. 2-15

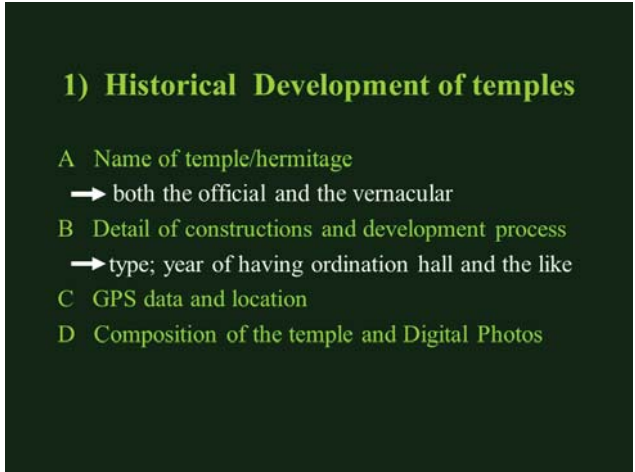


Fig. 2-16

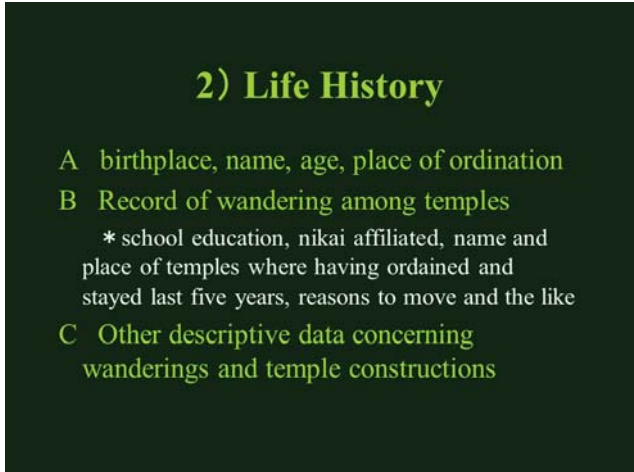


Fig. 2-17

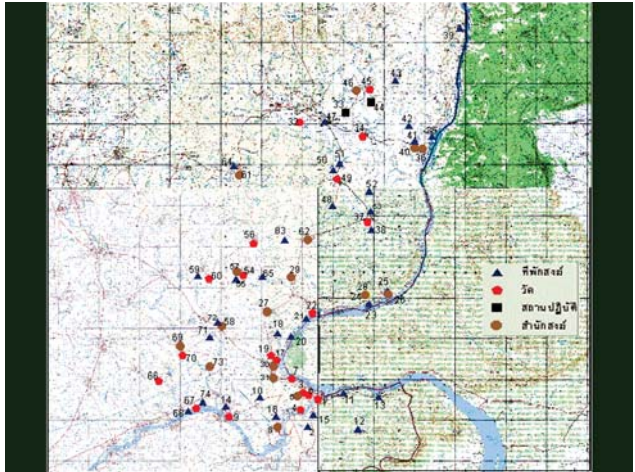


Fig. 2-18

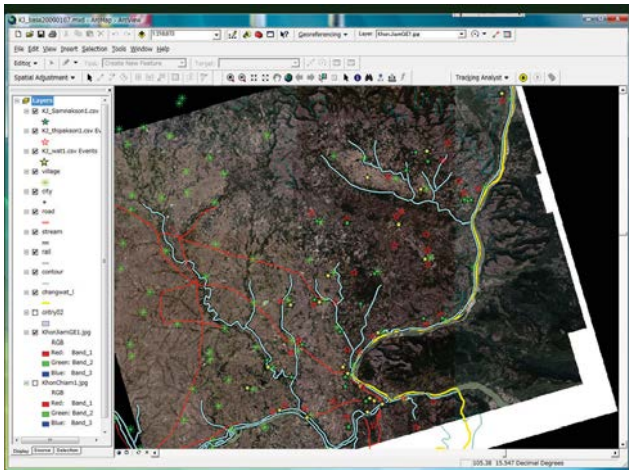


Fig. 2-19

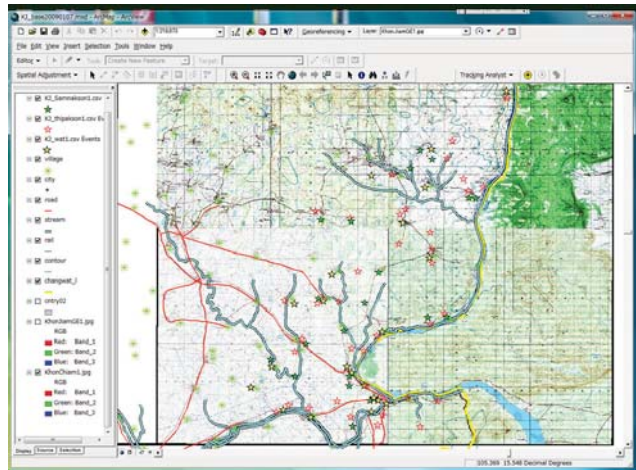


Fig. 2-20

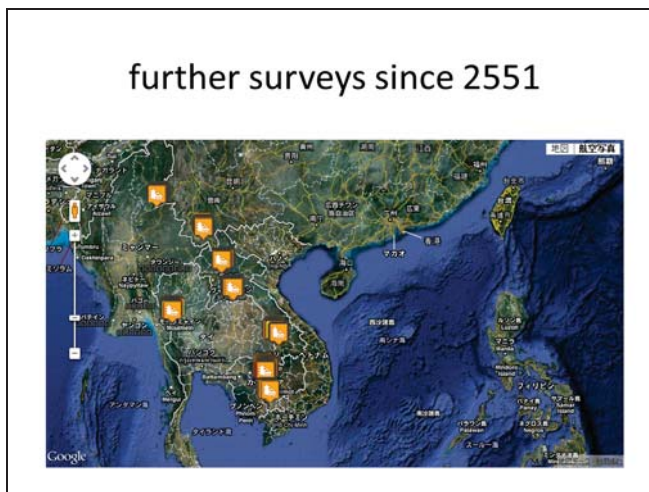


Fig. 2-21

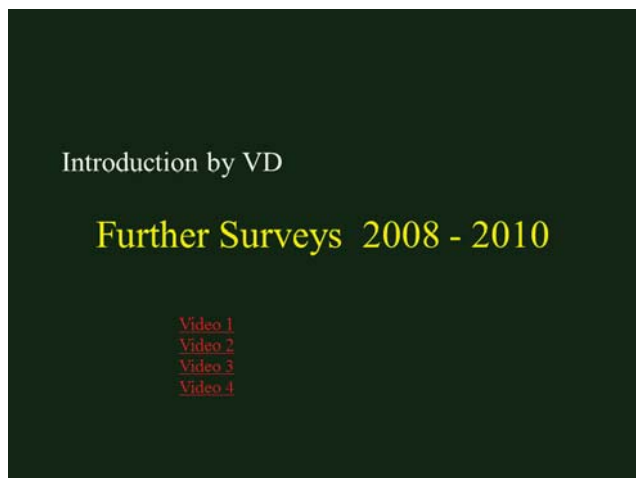


Fig. 2-22

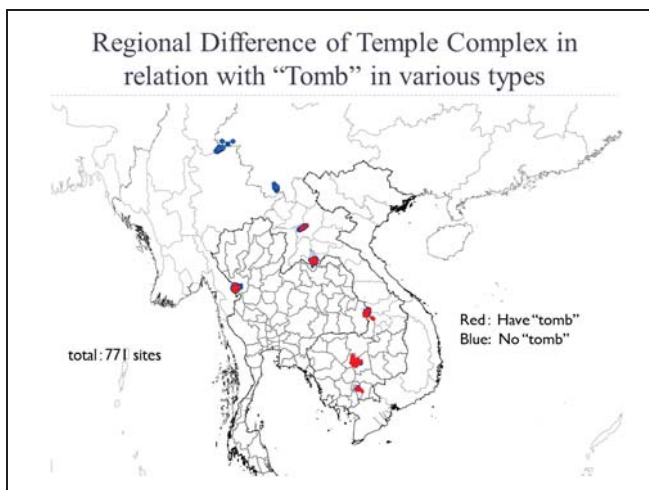


Fig. 2-23

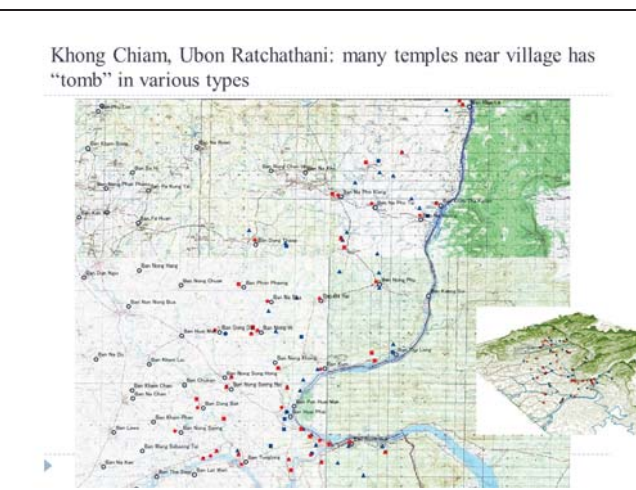


Fig. 2-24

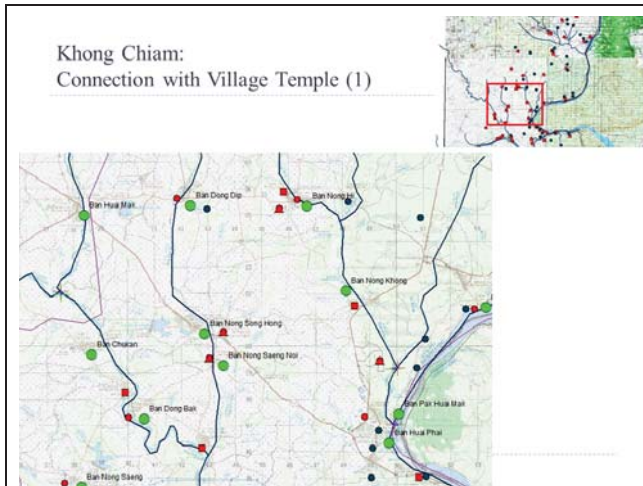


Fig. 2-25

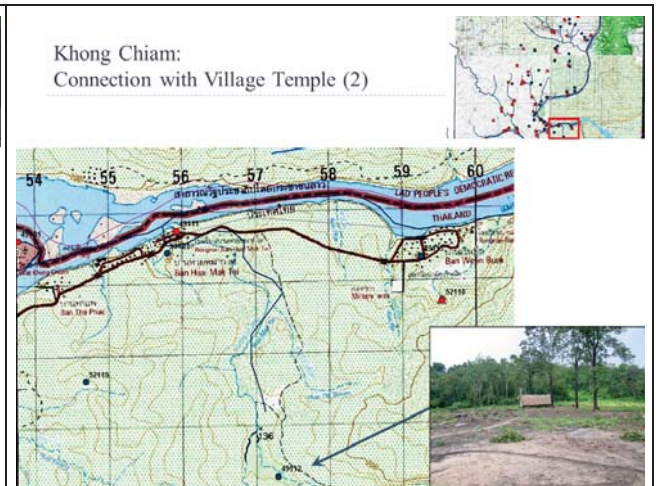


Fig. 2-26

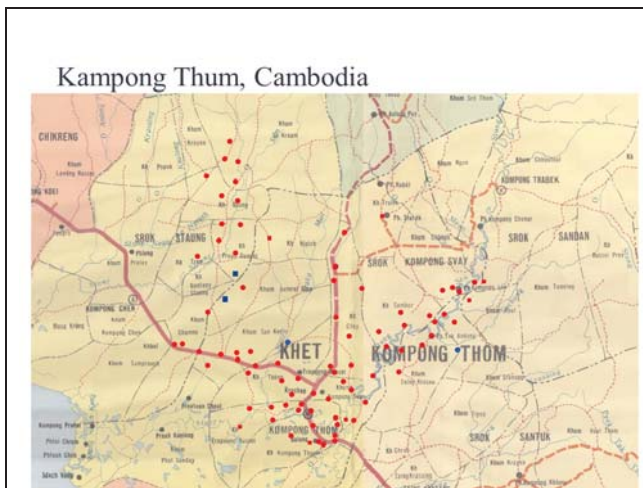


Fig. 2-27

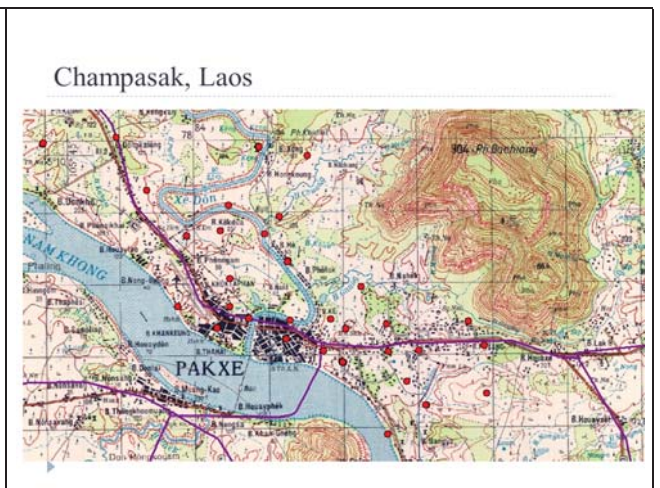


Fig. 2-28

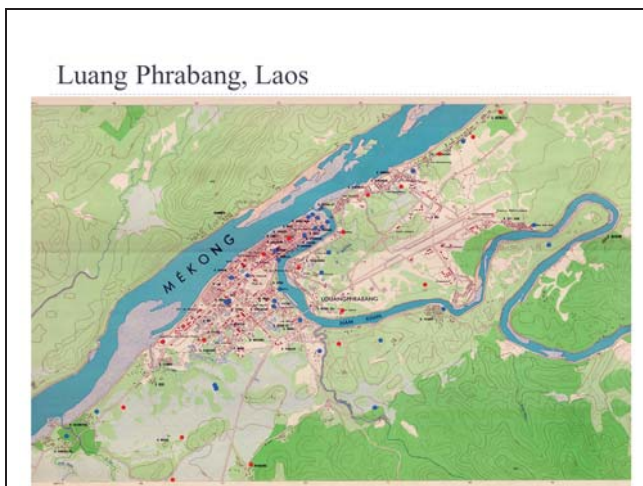


Fig. 2-29

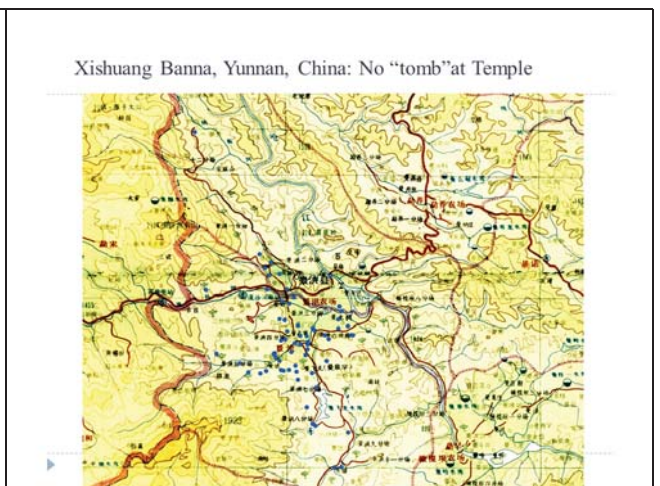


Fig. 2-30

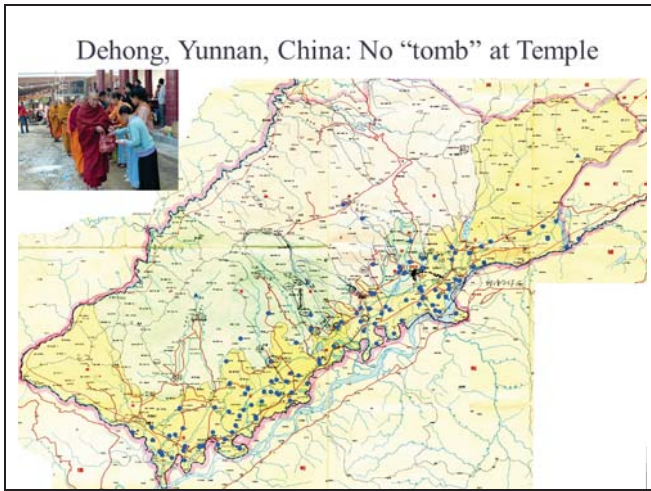


Fig. 2-31

Some Observations from Khong Chiam, Ubon

Presentation for the International Workshop on the
Mapping Practices among Theravadin in Mainland
Southeast Asia

HAYASHI, Yukio
Center for Integrated Area Studies
Kyoto University
26 Feb. 2013

Fig. 2-32

Research Site: Khong Chiam

- The extreme East area having 600 sq.km
- Facing to national border with Lao P.D.R.
- The ratio of the registered to the unregistered (28:30)
- The 72% of the district is conservation area including national parks
- Only 20 % of the land is used for agriculture because of laterite but rich in forest products (mushrooms, bamboo shoot, turmeric, natural resin, honey, and the like)
- Native place of historical meditation master (Man 1871-1949)
- Non-Tai group Buddhicized with the dominant Thai-Lao
- Tourist industry has come
- Most suitable size for the short period of the survey

Fig. 2-33



Fig. 2-34

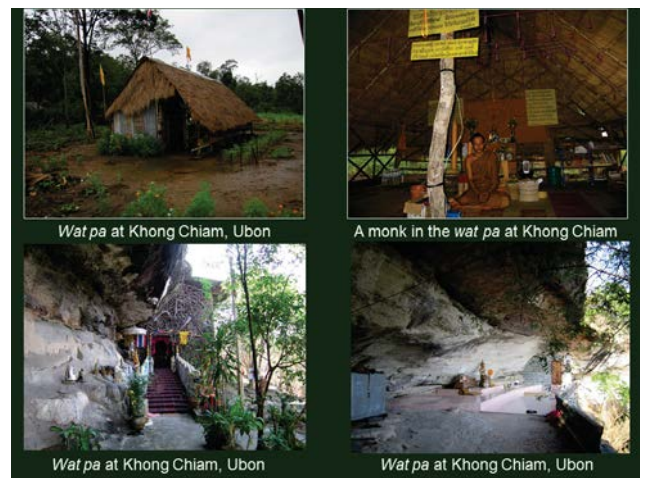


Fig. 2-35



Fig. 2-36

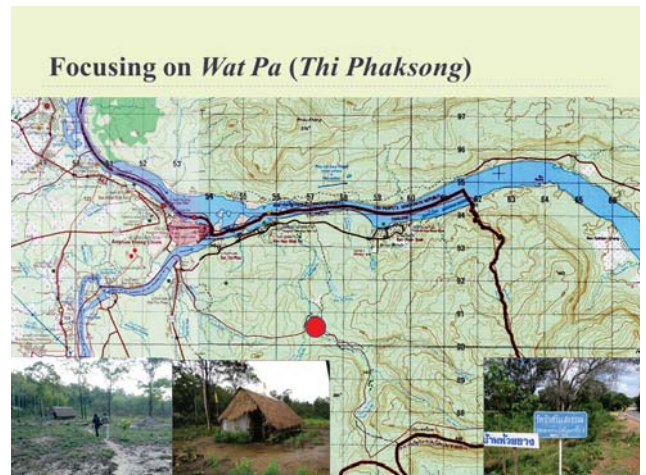


Fig. 2-37

ウボンラーチャターニー県全部と寺院施設			
name of amphoe	nos. of Wat Sarnmaksong	nos. of thi phaksong	total
01. Kurkhaopun	44 [M=44, T=0]	3 [M=0, T=3]	47
02. Khamarat	71 [M=70, T=1]	65 [M=61, T=4]	136
03. Khuamai	121 [M=113, T=8]	18 [M=9, T=9]	139
04. Khongiam	28 [M=26, T=2]	30 [M=30, T=0]	58
05. Donnodaeng	28 [M=28, T=0]	10 [M=9, T=1]	38
06. Detudom	117 [M=108, T=9]	45 [M=41, T=2]	162
07. Trakanphutphon	139 [M=139, T=0]	41 [M=18, T=3]	170
08. Tanum	32 [M=32, T=0]	15 [M=15, T=0]	47
09. Thungsiudom	19 [M=18, T=1]	26 [M=26, T=0]	45
10. Namyun	36 [M=35, T=1]	45 [M=45, T=0]	81
11. Najafnai	42 [M=41, T=1]	21 [M=21, T=0]	63
12. Buntaruk	54 [M=52, T=2]	7 [M=4, T=3]	61
13. Phibunmansahan	125 [M=118, T=7]	28 [M=19, T=9]	153
14. Photsai	24 [M=23, T=1]	56 [M=54, T=2]	80
15. Muwongsamsip	109 [M=101, T=8]	20 [M=16, T=4]	129
16. Muang Ubon	108 [M=96, T=12]	36 [M=16, T=0]	144
17. Wannachamrap	102 [M=94, T=8]	28 [M=21, T=7]	130
18. Somsangmas	60 [M=58, T=2]	D.K. [M=0, T=0]	60
19. Sirinthon	56 [M=53, T=3]	18 [M=0, T=18]	74
20. Samreng	58 [M=56, T=2]	6 [M=6, T=0]	64
21. K.A. Natan	20 [M=20, T=0]	21 [M=21, T=0]	41
22. K.A. Nayia	14 [M=13, T=1]	11 [M=10, T=1]	25
23. K.A. Namkhun	14 [M=14, T=0]	26 [M=26, T=0]	40
24. K.A. Sawangwrawong	25 [M=24, T=1]	26 [M=23, T=3]	51
25. K.A. Laomakiek	30 [M=28, T=2]	19 [M=15, T=4]	49
total	1,466 [M=1,394, T=72]	621 [M=548, T=73]	

Fig. 2-38

Statistics of Local Office (2005)

All kinds of Sanctuaries in Ubon Ratchathani Province (2005)

1. Districts having over 100 registered temples: 7

name of district	(registered : unregistered)
Trakan Phutphon	(129 : 41)
Phibun Mansahan	(125 : 28)
Khuan Nai	(121 : 18)
Detudom	(117 : 45)
Muwongsamsip	(109 : 20)
Muang Ubon	(108 : 36)
Warinchamrap	(102 : 28)

Fig. 2-39

Statistics of Local Office (2005)

2. Seven Districts: the unregistered hermitage have more than the registered

name of district	(registered : unregistered)
K.A. Sawangwrawong	(25 : 26)
K.A. Natan	(20 : 21)
Khong Ciam	(28 : 30)
Namyun	(36 : 45)
Thungsiudom	(19 : 26)
K.A. Namkhun	(14 : 26)
Photsai	(24 : 56)

Fig. 2-40



Fig. 2-41



Fig. 2-42

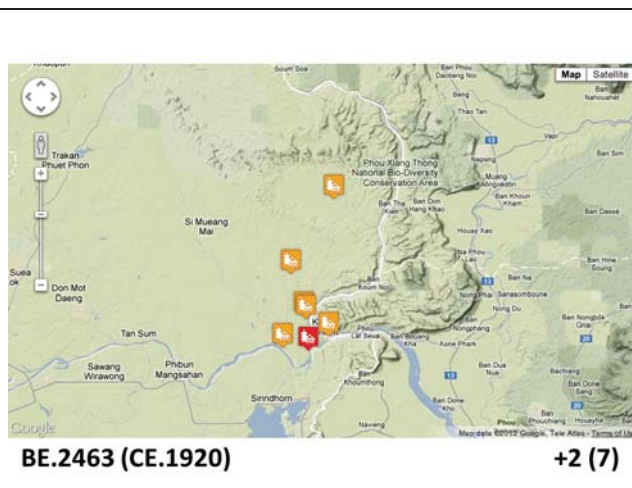


Fig. 2-43

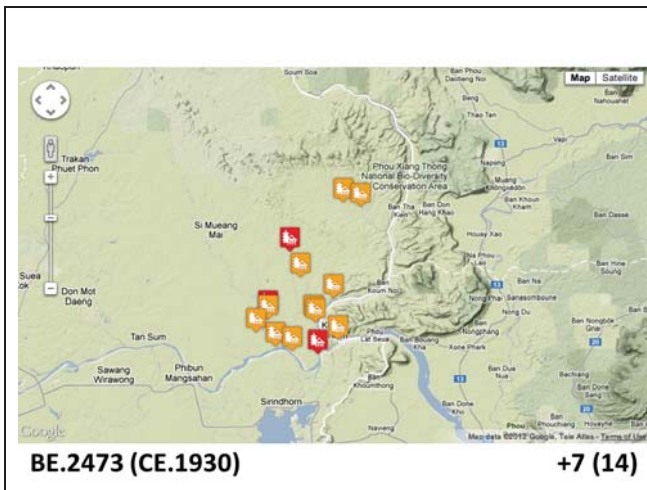


Fig. 2-44

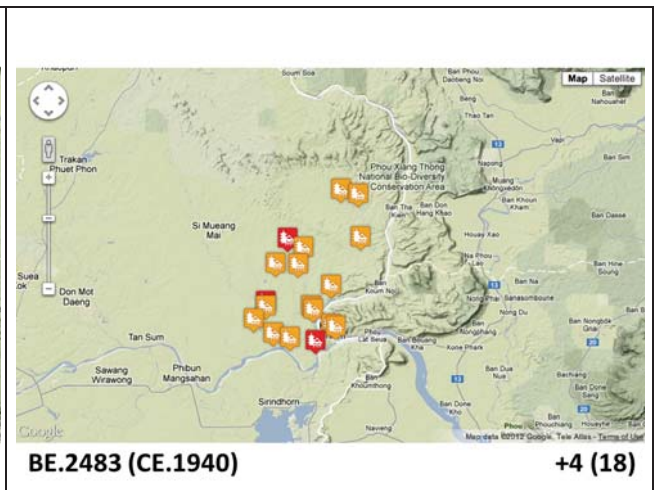


Fig. 2-45

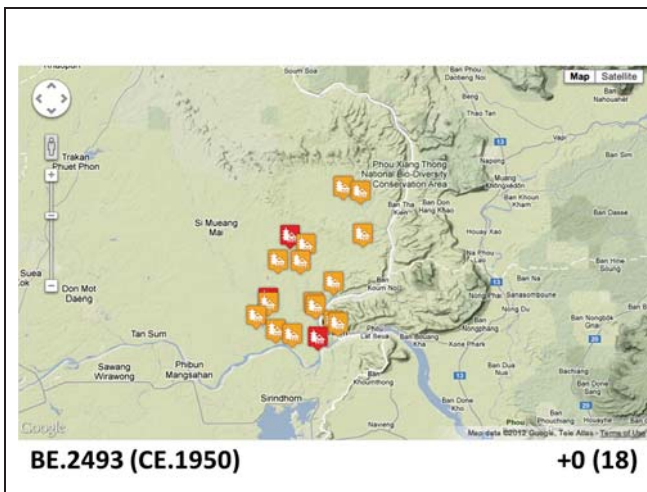


Fig. 2-46

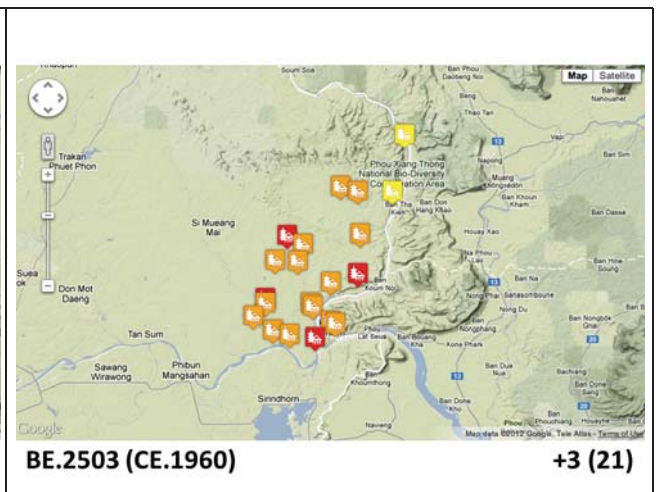


Fig. 2-47

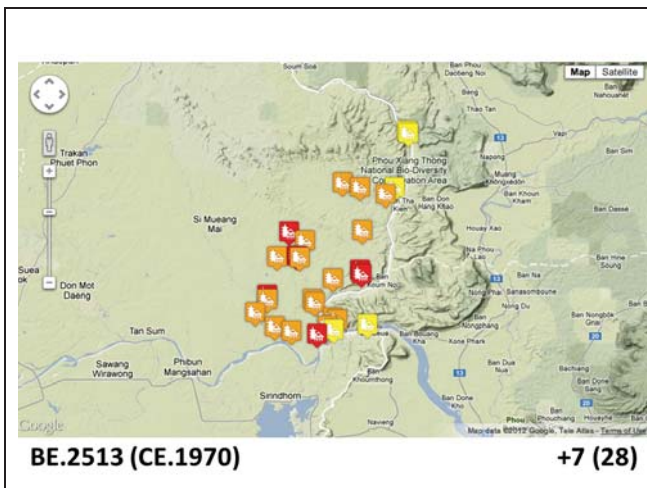


Fig. 2-48

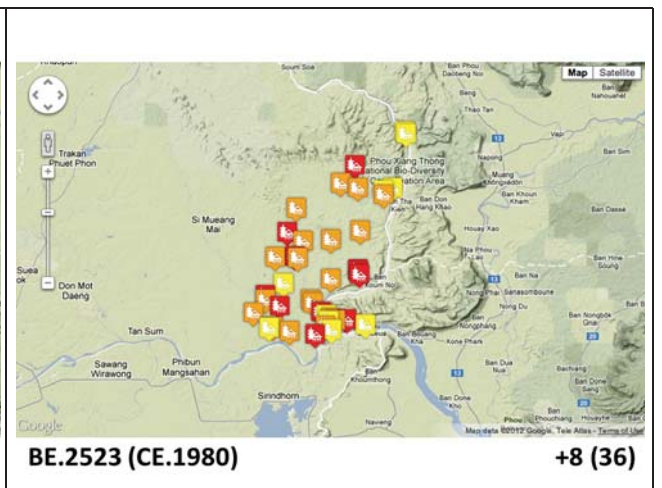


Fig. 2-49

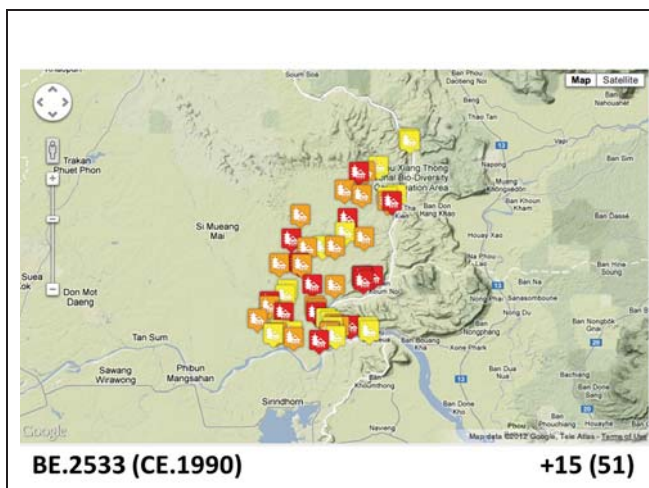


Fig. 2-50

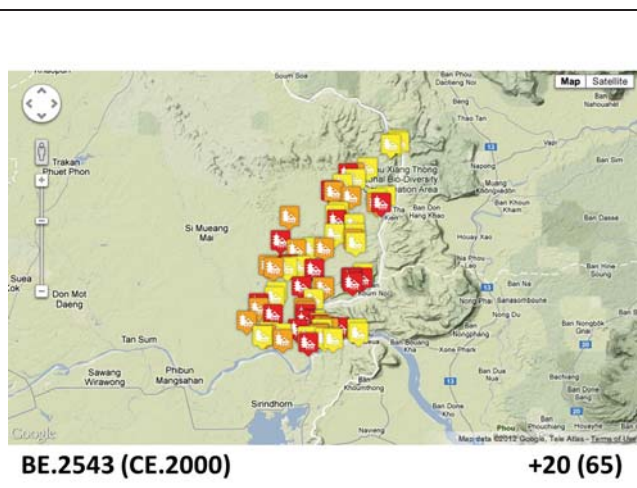


Fig. 2-51

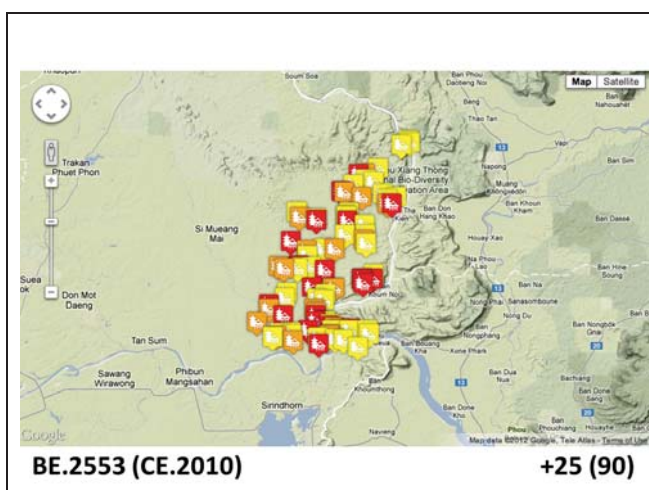


Fig. 2-52

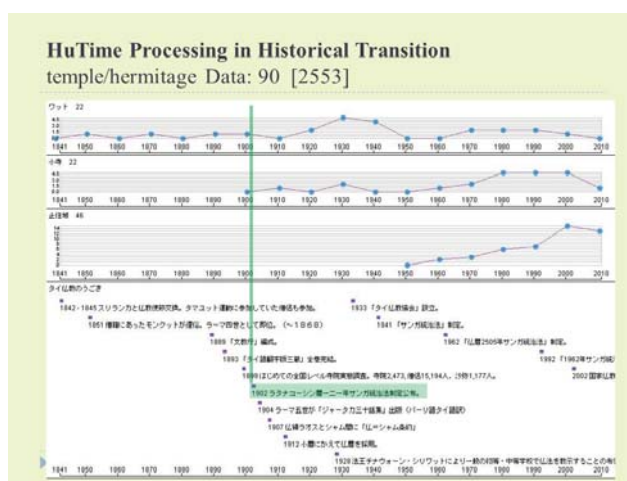


Fig. 2-53

Temple/Hermitage in KC 2549

1. Temple/Hermitage visited: **74**
 wat 20
 samnaksong 18 * the registered 38
 thiphaksong 34
 training hall 2 * the non-registered 36
 (cf. 58 in official data 2548 [28:30])
2. The newest: *thiphaksong* built in 2548
3. The oldest *wat* (2392)
4. The oldest *samnaksong* (2469)
 The oldest *thi phaksong* (2483)

Fig. 2-54

Temples/Hermitages in KC 2549

5. *Thammayut*: 7
 (*wat* 1; *samnaksong* 3; *thiphaksong* 3)

- The oldest is *samnaksong* built in 2531
- The *wat* was built in 2533
- The four were built in the 2530s

Fig. 2-55

Buddhists in Khong Chiam 2549

- Informants: 231
 - * 193 monks; 29 novices; 9 lay women ascetics
- Where do they come from ?
 - * Khong Chiam 115
 - * Other districts in the same Province
 - * Outside Provinces: Amnatcharoen, Sisaket, Yasothon, Roi Et, Nakhon Ratchasima, Surin, Buriram
 - * North: Chiang Mai, Phisanulok, Sukhothai
 - Central: Bangkok; Chonburi, Nakhon Nayok, Nonthaburi
 - West: Chanthaburi

Fig. 2-56

From the Data (1)

- Dominancy of the Hermitage
 - * temple (*wat*) with ordination hall: 20 (27.0%)
 - * hermitage (*thi phaksong*): 34 (45.9%)
- Those 74 were constructed from 2392 till 2549
 - * Before 2501: 21 (28.4%: 70% is *wat*)
 - * 2531-2540: 17 (23.0%: *thi phaksong*)
(One place was made every 2 years in average since the mid. 19th century)
- Basic Facilities that more than half of the temples have
 - * cottage, public hall, stupa-figured tomb to keep ashes of the deceased

Fig. 2-57

From the Data (2)

How many monks staying in a temple ?

- * one (27%) ; three (21.6%) cf. nine at most

How many novices staying in a temple ?

- * none (79.7%); one (12.2%) cf. six at most

Where do they come from?

- * most of monks come from outside villages
- none from within village: 43 temples (58.1%)
- includes outsiders: 62 temples (83.8%)

Fig. 2-58

Transition from 2549 to 2553

- Increasing the nos. of *Thi Phaksong* (TPS)
 - 2549 74 (*wat* 20; SS 18; TPS 34)
 - 2550 79 (*wat* 20; SS 19; TPS 38)
 - 2551 82 (*wat* 21; SS 20; TPS 39)
 - 2552 86 (*wat* 21; SS 21; TPS 42)
 - 2553 90 (*wat* 21; SS 21; TPS 46)

Fig. 2-59

Dominancy of Non-local residents for 5 Years

- outside village, district, amphoe, changwat
- local 312 (+52) vs non-local 810 (+60)

Newly built *thiphaksong* have non-local residents

- Temples have non-local residents: 34
- Temples only have local residents: 3
- Temples local residents dominancy: 15
(*wat* 8; SS 2; TPS 5)
- Temples non-local residents dominancy: 72
(*wat* 15; SS 18; TPS 37; others 2)

Fig. 2-60

Transition from 2549 to 2553

- The older the *sima*, the more local residents stay at that temple.....!!!

Other findings will be given by Dr Pinit et al.

Fig. 2-61

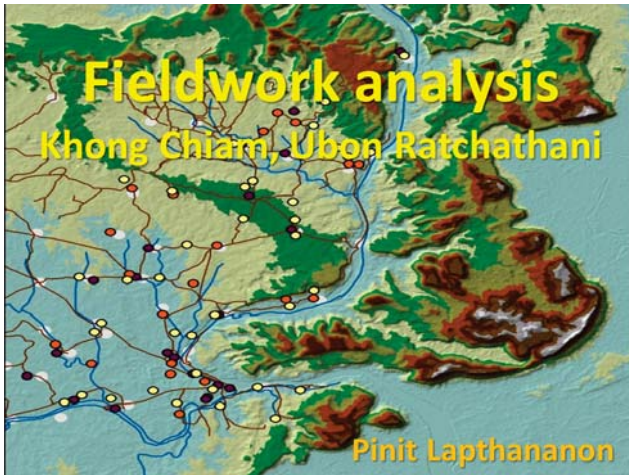


Fig. 2-62



Fig. 2-63

รหัส 101

แบบบันทึกข้อมูลการศึกษาทำนเขียบวัดและพระสงฆ์

ตัวที่ 1 ชื่อวัด ๐๑๖๖ พิกัด UTM-X ๕๑๑๕๖2 UTM-Y 11๑34๑5
 ชื่อวัดสำนักสงฆ์ (ทางการ) วัดโพธิ์ชุม
 ชื่อวัดสำนักสงฆ์ (พื้นบ้าน) วัดบ้านไร่ หรือ วัดบ้านอานเก่า
 หมู่บ้าน บ้านเก่า หมู่ที่ 1 ตำบล โพธิ์ชุม
 อำเภอ โพธิ์ชุม จังหวัด อุบลราชธานี นิกาย มหานิกาย
 ปีที่ก่อตั้ง ๒๓๑๒ ปีที่ขอตั้งวัด ปีที่ได้รับพระราชทานวิสุงคามสีมา ๒๕1๗
 อุตสาหกรรมที่สร้างขึ้นในวัดสำนักสงฆ์
 โบสถ์ (๒๕1๐) ศาลาการเปรียญ (๒๕๐๐) วิหาร (๒๕๓4)
 หอฉัน พระระฆัง (๒๕1๒) กุฏิ จำนวน 4 หลัง
 ฌายะ (๒๕๓๖) ที่เก็บกระดูกแบบสมัย (๒๕๓๖) ที่เก็บกระดูกแบบเก่า
 สถานทีกลองมโหรี แท่นบูชาพระพุทธรูปในถ้ำ หอระฆังคู่ตามบรรพต
 อื่นๆ (ระบุ) มังกรคู่ ออกรบเชิงพระวิหาร (๒๕๓๖) (แต่จะเอารวมกับพระวิหารวัดบ้าน)

Fig. 2-64

จำนวนพระสงฆ์ สามเณร จี ๒๒๖๖ จำนวนคนภูมิลำเนา (ตามทะเบียนราษฎร ๒๕๓๖)

ประเภท	คนในหมู่บ้าน/ท้องถิ่น					คนนอกหมู่บ้าน/ท้องถิ่น				
	2549	2550	2551	2552	2553	2549	2550	2551	2552	2553
พระสงฆ์					1	2	3	5	6	4
สามเณร					1					
จี										
เด็กวัด										
พรหมณ์ (ผู้บวชแล้ว)										

การเคลื่อนย้ายของพระสงฆ์และสามเณรในแต่ละปี

ประเภท	พระสงฆ์					สามเณร				
	2549	2550	2551	2552	2553	2549	2550	2551	2552	2553
ไปอีก	๑	1	3	1	1					
บวชใหม่	-	-	1	3	3					1
ย้ายเข้า	-	๑	1	๑	1					
ย้ายออก	-	1	-	3	๒					
ลาสิกขา	-	-	-	1	3					
บรรพชา	-	-	-	-	-					
จำนวนที่อยู่ในแต่ละปี	๑	3	5	6	5					

Fig. 2-65

ตัวที่ 2 ชื่อพระสงฆ์และสามเณร รหัส 491๐101

ชื่อ พระสมณะ (ปรมาจารย์) ฉายา ภาตุนี
 วัดสำนักสงฆ์ วัดโพธิ์ชุม หมู่บ้าน บ้านเก่า หมู่ที่ 1
 ตำบล โพธิ์ชุม อำเภอ โพธิ์ชุม จังหวัด อุบลราชธานี
 ภูมิลำเนาเดิม บ้านวังน้ำ ม.๕ ต.โพธิ์ชุม อ.โพธิ์ชุม จ.อุบลราชธานี
 ปีที่เกิด ๒1๘3 ปีที่เข้ามาจำพรรษาในวัด ๒๕๑3 (๒๕๑๐)
 ระดับการศึกษาทางโลกสูงสุด มัธยมศึกษาปีที่ 3 (ปี ๒๑๙7)
 การศึกษาทางธรรม นิกกรรม ๑๐๓ ปรีชญธรรม -
 ตำแหน่งทางการบริหารคณะสงฆ์ เจ้าอาวาส (ปี ๒๕๑3)
 อยู่ในเครือข่ายสำนักสงฆ์ (อื่น) -
 บวชเมื่อปี ๒๕1๔ บวชที่พระอาราม (บ.บ.บ.บ.บ.)
 บวชพระครั้งแรกเมื่อปี ๒๕1๔ บวชที่พระอาราม
 ที่ไหน ต.โพธิ์ชุม ม.บ้านเก่า ม.1 ต.โพธิ์ชุม อ.โพธิ์ชุม จ.อุบลราชธานี
 จำพรรษาที่ไหน -
 เคยบวชพระมาแล้วกี่ครั้ง 1 ครั้ง บวชพระครั้งหลังสุดเมื่อปี -
 ที่ไหน -
 จำพรรษาที่ไหน -

Fig. 2-66

ปี 2544 ที่แล้วจำพรรษาที่ไหน ต.โพธิ์ชุม ม.บ้านเก่า ม.1 ต.โพธิ์ชุม อ.โพธิ์ชุม จ.อุบลราชธานี

ปี 2545 ที่แล้วจำพรรษาที่ไหน " "

ปี 2546 ที่แล้วจำพรรษาที่ไหน " "

ปี 2547 ที่แล้วจำพรรษาที่ไหน " "

ปี 2548 ที่แล้วจำพรรษาที่ไหน " "

ปี 2549 ที่แล้วจำพรรษาที่ไหน " "

ปี 2550 ที่แล้วจำพรรษาที่ไหน " "

ปี 2551 ที่แล้วจำพรรษาที่ไหน " "

ปี 2552 ที่แล้วจำพรรษาที่ไหน " "

ปี 2553 ที่แล้วจำพรรษาที่ไหน " "

(เหตุผลการย้ายในแต่ละครั้ง)
 ปี ๒๕๓๗ ไปอีกพระอารามบ้านวังน้ำ ต.โพธิ์ชุม
 ปี ๒๕๓๗-๒๕๓๘ ไปอีกพระอารามบ้านวังน้ำ ต.โพธิ์ชุม
 วันที่บันทึกข้อมูล ๑3 สิงหาคม ๒๕4๙
 บันทึกโดย นพ. วิชาญวงษ์

Fig. 2-67

Number of Monasteries by Type



Fig. 2-68

Number of Monasteries by TAMBON

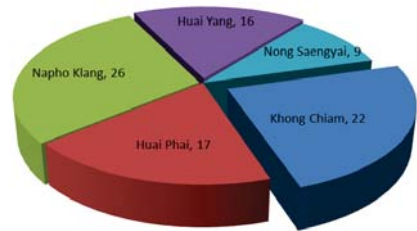


Fig. 2-69

Average Ages of Monasteries by Type

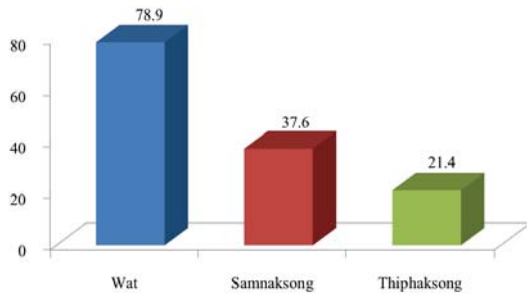


Fig. 2-70

Number of Monks by TAMBON



Fig. 2-71

Monks by Birth Place

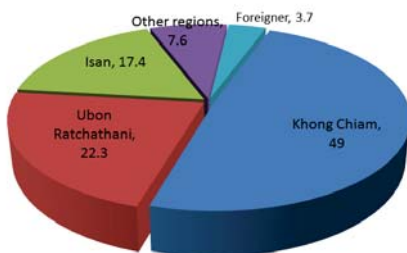


Fig. 2-72

Age Distribution of Interviewed Monks

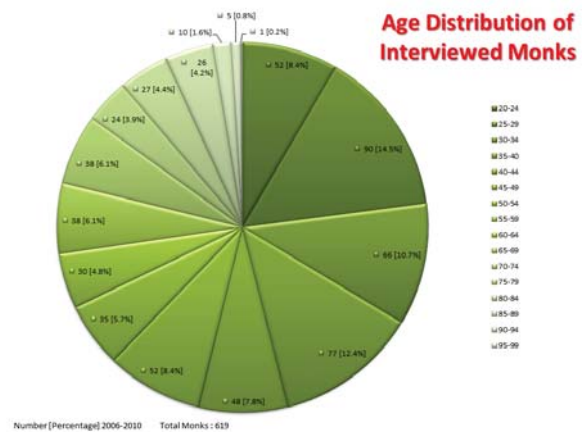


Fig. 2-73

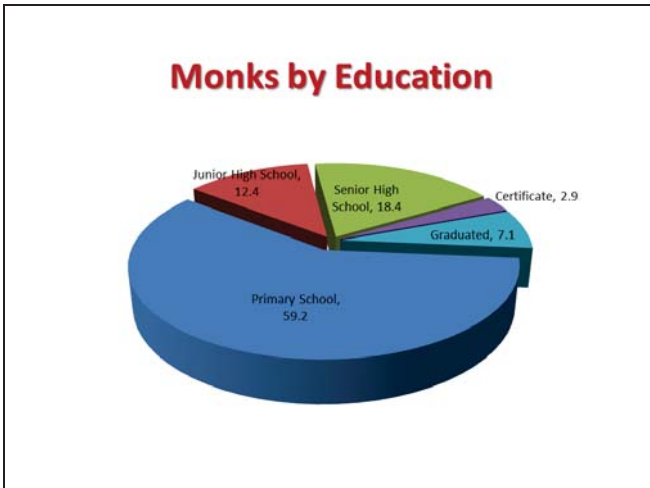


Fig. 2-74

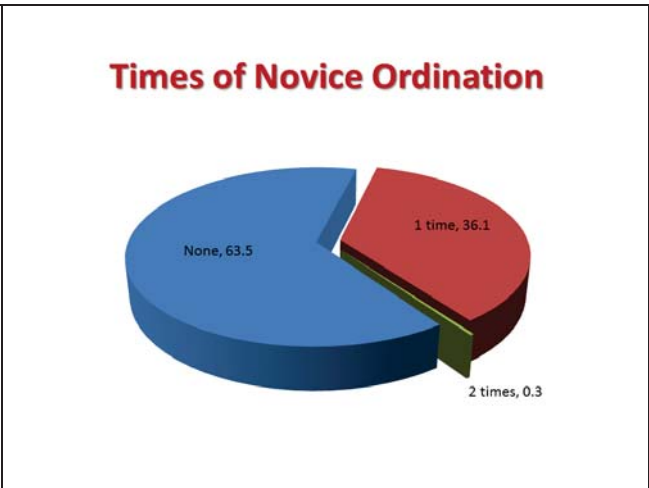


Fig. 2-75

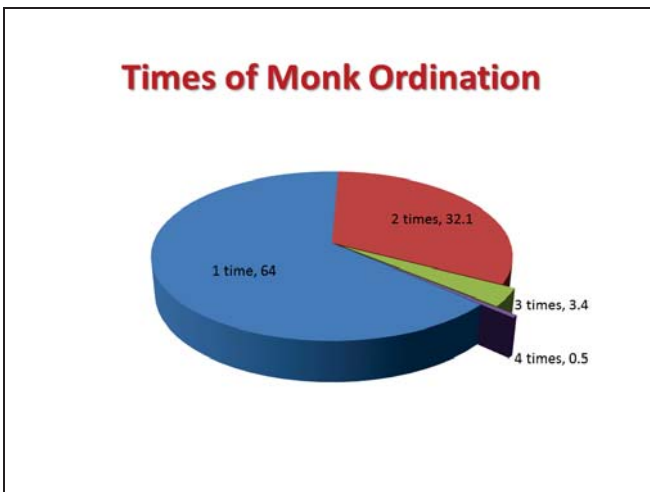


Fig. 2-76

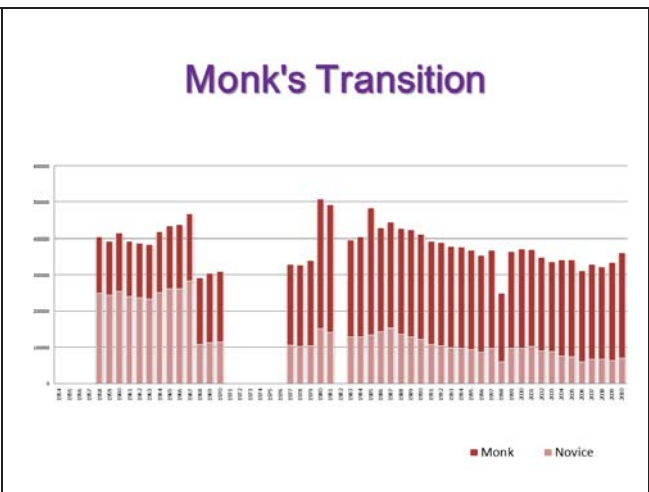


Fig. 2-77

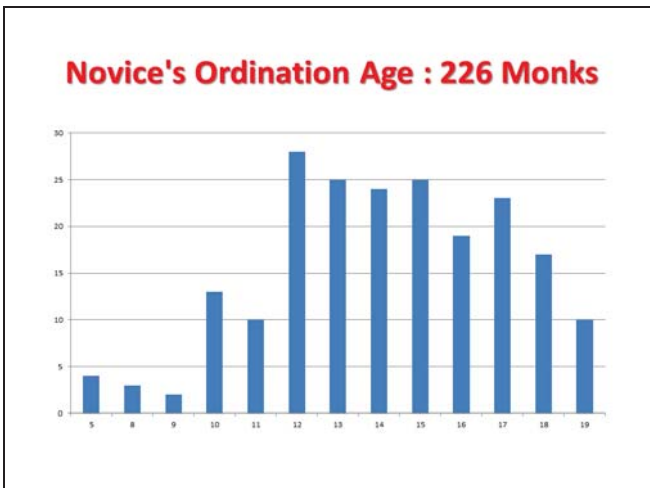


Fig. 2-78

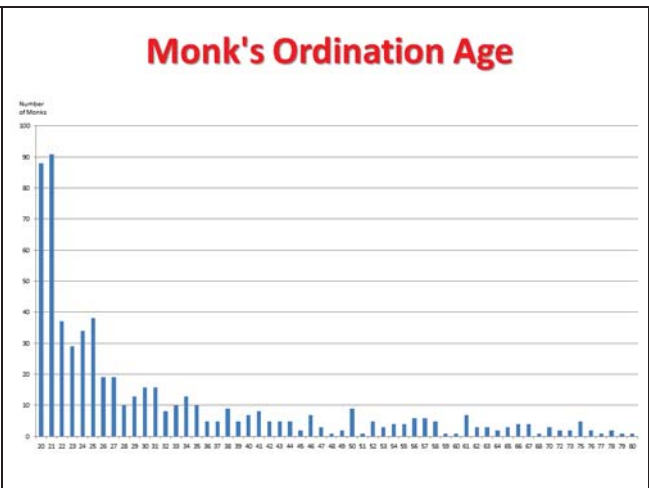


Fig. 2-79

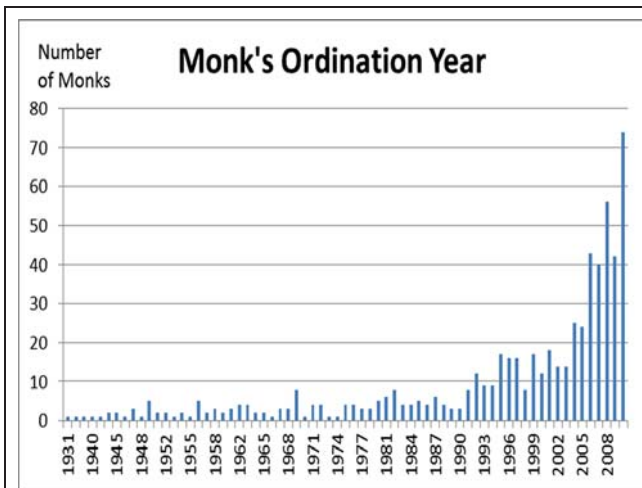


Fig. 2-80

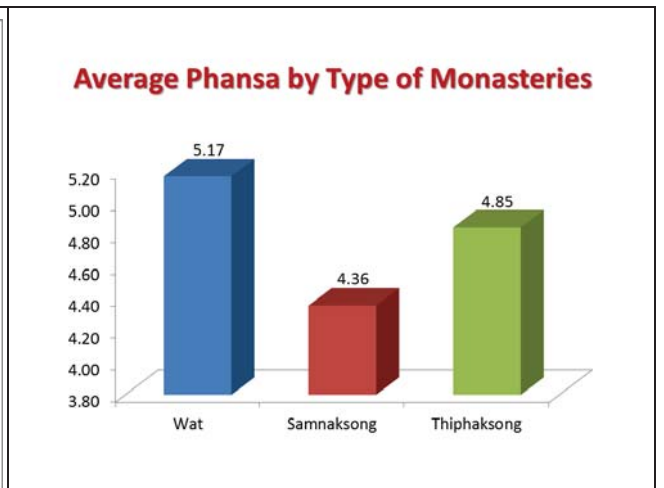


Fig. 2-81

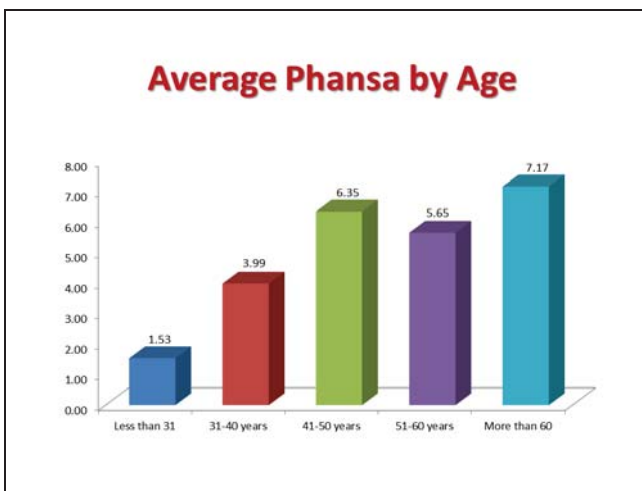


Fig. 2-82

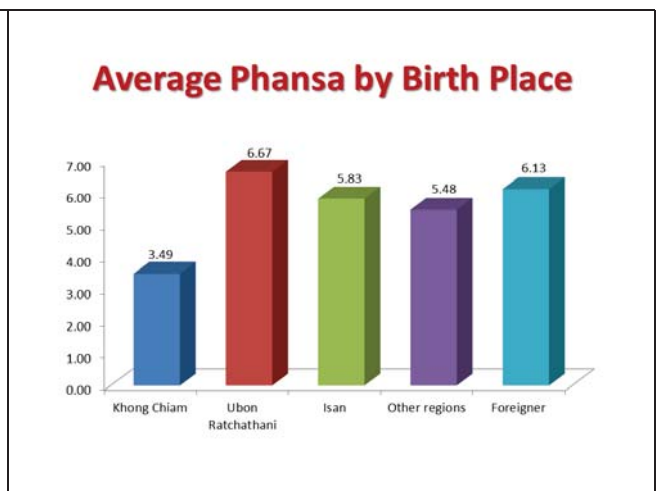


Fig. 2-83

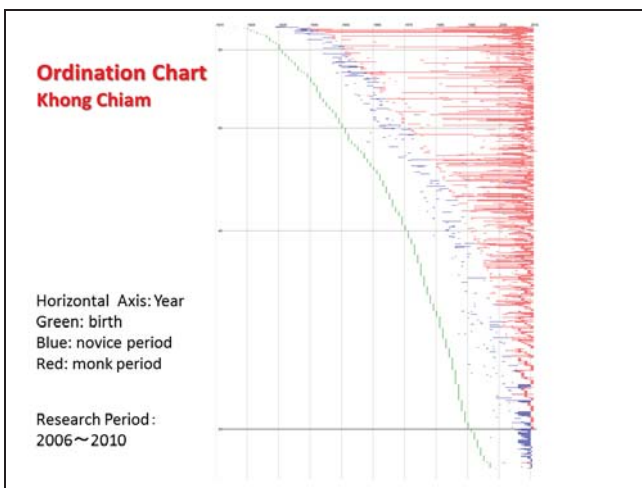


Fig. 2-84

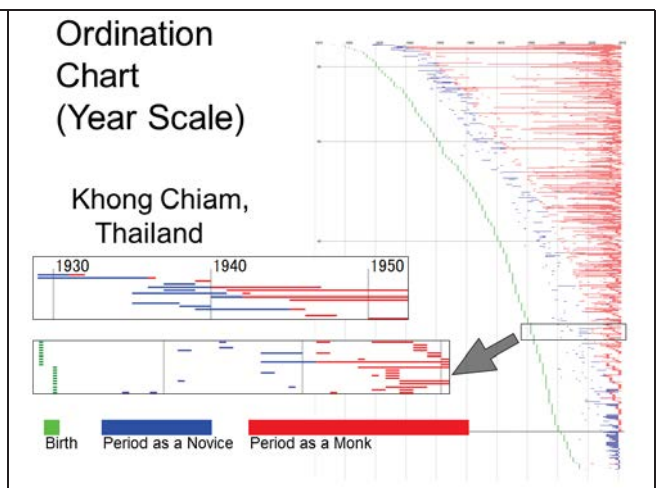


Fig. 2-85

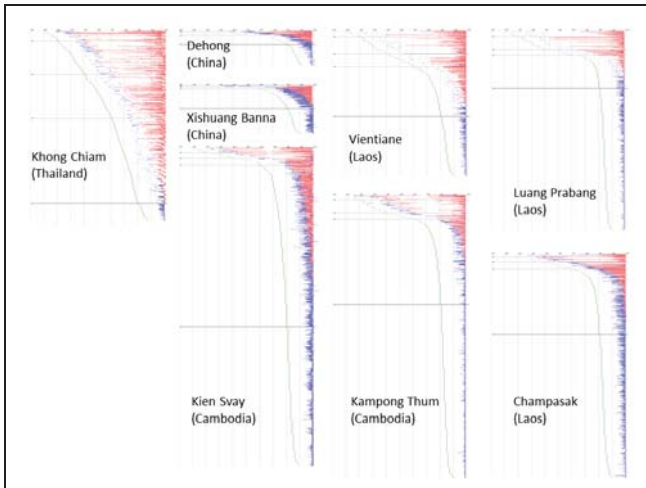


Fig. 2-86

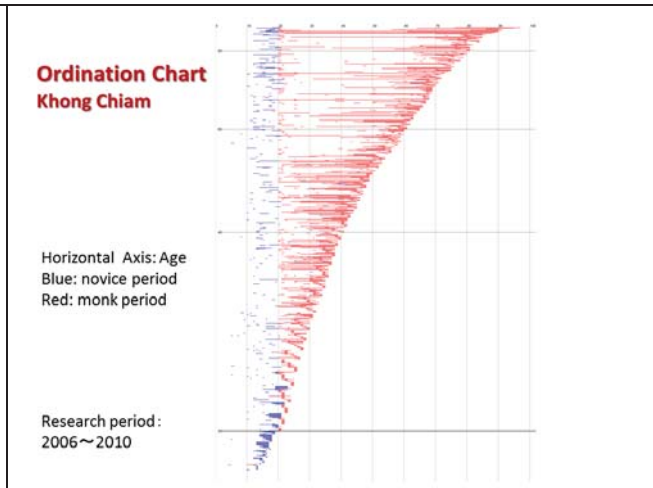


Fig. 2-87

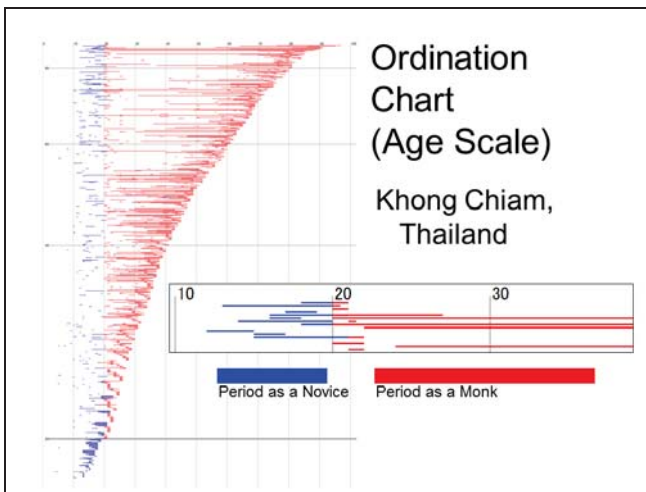


Fig. 2-88

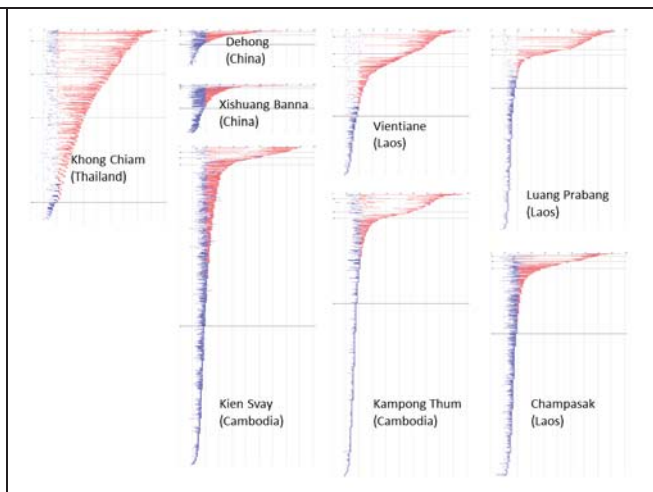


Fig. 2-89

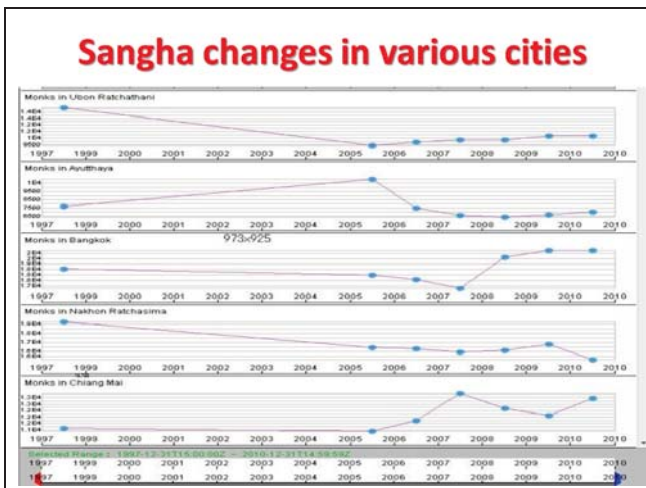


Fig. 2-90



Fig. 2-91

地域情報学と仏教実践の時空間マッピング

京都大学地域研究統合情報センター

柴山 守

1. なぜ地域情報学か

「大陸部東南アジア仏教徒社会の時空間マッピング—寺院類型・社会移動・ネットワーク」(略称：寺院マッピング)プロジェクトの目的は、国境を越えて広がった上座仏教徒社会の人の移動や寺院施設、宗派・儀礼行為等を時間と空間という視点でマッピングを行うことで、人びとの暮らしのなかに生き続ける宗教実践の態様を俯瞰し、上座仏教徒社会の地域間における相関比較や歴史的な動態を明らかにすることにある[林 2011b]。そのマッピング過程では、調査地毎のデータの時空間的プロットから可視化、分析まで情報技術や情報学的手法の適用が必要になる。言い換えれば、その情報学的手法を上座仏教徒社会の動態を明らかにする研究の中に位置づけることで、従来の人類学的、社会学的あるいは宗教学的な研究方法では得られなかった研究過程における新たな知見・発見が得られるのではないか、という命題にもなりうる(Fig. 3-2 参照)。これが“分析”を主目的とする地域情報学の課題である。一方、地域情報学では、地域研究における“資源共有化”を主目的とする、どちらかと言えば個別課題に横断的であり、データベース構築や情報基盤の構築を課題とする研究開発の分野がある。本プロジェクトでは、前者の分析に力点を置きながらも調査データや分析結果の共有化を目指すことになる(Fig. 3-3 参照)。その共有化は、プロジェクト内のみならず、調査地や関連する地域・社会への還元を目指すものである。

一般的に分析を中心にした地域情報学では、4つの目的が考えられる。(1) 地域の総合的理解の深化・新たな知見の獲得や発見、(2) 地域の個別性から普遍性追求への転換とモデル化、(3) 地域像の描写、(4) 地域間相関比較と検証である。それらの目的を実現するためには、聞き取り調査等で得られた記述的表現のデータは、調査地点や調査日時を基本にして、被

調査者の態様が時間や空間情報(緯度経度)、そして態様の表現をも含んで“計量可能な表現”に変換されねばならない。つまり、ヒトやモノの態様を「測る・量る」ことを目指すことになる。これが、情報学的な分析の前提であり、前述の4つの目的に至る最初のプロセスで(Fig. 3-4 参照)、マッピングと呼んでいる。また、効果的な可視化は、表示された態様を理解する上でマッピングとともに重要なプロセスである。これまでに分析を中心にした地域情報学においていくつかの成果が挙げられてきたが、現在までのところ大陸部東南アジア地域をカバーし、且つ人類学や宗教学、地域研究をリンクさせた分野における地域情報学の研究事例はない。そういった意味で、本プロジェクトの意義は極めて大きい。つぎに、具体的な寺院マッピングの結果について示す。

2. 大陸部東南アジア上座仏教徒社会をよむ

本節では、東北タイ・ウボンラーチャターニー県(以下、ウボン県)における寺院施設と寺院に止住していた僧侶の移動遍歴に関する分析結果を示すことにする。その背景を理解する上で、東南アジア全体の宗教分布と上座仏教の関係、あるいは上座仏教の寺院と僧侶の実践についての概観が必要になるが、詳細については[林 2011a]などを参照されたい。

2-1 東北タイ・ウボンラーチャターニー県コーンチアム郡(KC)の事例

東北タイ・ウボン県コーンチアム郡は、面積約600km²(県庁所在地から約90km)のタイの最東端のメコン河に接する位置にある。そのウボン県コーンチアム郡におけるフィールド調査から僧侶の移動と遍歴をみる[柴山 2012]。

2007年の林やピニットの調査における僧侶の平均年齢は48.1歳、最年少は1987年生の20歳、最高齢は1911年生の96歳であった。僧侶の出身地をみる

とウボン県出身の僧侶が約75%を占める。つまり、約25%が他県の出身者、全体の約1割が東北タイ以外の出身者である。

2-2 KCの僧侶と実践

僧侶の移動パターンを調べる。僧侶全体の移動パターンをどのように表現すれば理解しやすいか、僧侶の移動軌跡をすべて累計して、実践・行為の総体としての“移動の表現方法”を考えてみる。移動とは、ある僧侶がA点からB点まで場所を“うごく”ことであるとすると、僧侶がA点に位置する状態が、B点に位置する状態に、「状態」が遷移することで表現が可能になる。一方、移動がない場合には、必ずある状態に位置して、その状態を繰り返すことになる。ここで、情報理論のひとつである状態遷移論を応用して、僧侶の移動パターンを求める¹と、概ね約3割の僧侶が同一場所に留まり、3割が移動する。ここで還俗も移動とみなしている (Fig. 3-5 左側参照)。また、ひとりの僧侶あたり、約2.6回の得度・還俗を繰り返しているという興味深い結果がみえる。こうした計量的な結果のみからは、ユニークなパターンの特徴などは見えてこない。そこで、可視化が必要になる。須羽が開発した“得度チャート”による可視化は、個々の僧侶の遍歴を把握するのに都合がよい。これは後述する。

つぎに僧侶はどの程度の距離を移動するのか。その移動量を実際の輸送路や輸送手段を考慮した移動距離で測ることは不可能である。そこで、2つの測定方法を考える。最も簡単な手法は、止住した位置、つまり緯度経度にもとづいて移動の差分で得られる距離を累積し、推計する手法である。これを“物理距離”と呼ぶ。もうひとつは、前述の状態遷移でもちいた東北タイ、北タイ、中部タイ、南タイの括りで、状態が別の状態に遷移する。すなわち東北タイから北タイに移動すれば1、東北タイ内での移動は0として、移動量を推計する手法である。これを“論理距離”と呼ぶ。まず、論理距離による分析をみる² (Fig. 3-5 右側参照)。平均的な移動距離は値2であり、東北タイから出発して、北タイに行き、その後、東北タイに戻っ

た、というような移動を示す。つぎにウボン県で出生した僧侶の移動を物理距離でみる。

僧侶 A : [1973 年生] 出生地:ウボン県 ... 見習僧 (-)... 僧侶 (27-)... 止住地< [ウボン県]=[ラーチャブリー県]=[ウボン県]=[同県]=[ラーチャブリー県]=[ウボン県]=[同県]> 総移動距離 :2150.4 km.

この僧侶 A は、論理距離の指標によるタイ人僧侶として最大の移動距離を示した事例である。その僧侶 A の物理距離は、直線距離で約2,150キロメートルを移動したことを示している。

物理距離で求めた移動量はどうか。一僧侶あたり約380Kmの移動距離となる³ (Fig. 3-8 参照)。僧侶の移動の軌跡をGIS (地理情報システム) で可視化すると、時間と共に移動する位置が容易に理解できる (Fig. 3-7 参照)。

僧侶の移動パターンをネットワークでみる。在家信者が得度した後、どの種類の寺院に止住し、修行の実践活動を行うか、得度後のネットワーク分析により、その実態を探る。2009年から2010年の1年間での移動をみる⁴。分析の結果、ワット (得度に必要な結界をもつ登録寺院) での得度後に僧侶は、ワット:小寺 (結界がない登録寺院):止住域 (結界をもたない登録不要の施設) の比率が2:1:1の割合で移動する。また、ワットから止住域への移動はあるものの、小寺、止住域からワットへの移動はごく僅かである (状態遷移図 Fig. 3-6 左図, ネットワーク図 Fig. 3-6 右図)。この移動は、なにを意味するか。コーンチアム郡での小寺や止住域における実践に、その背景があると考えられる。

僧侶の移動量や移動距離およびその軌跡についてみた。それは、男性が出生してから、見習僧となり、得度して僧侶となる時間的な遍歴を見ることでもある。僧侶の世代や年齢分布から出家・還俗を繰り返す状態や調査地毎の差異については、得度チャートから理解できる。得度チャートは、一個人の遍歴をひとつの直線として表現する。調査年を基準にして僧侶と見習僧の期間、出生まで遡り、その連なり程

1 僧侶総数313名の移動の状態遷移から、2001年から2007年にわたる総状態遷移数は2,208回になる。移動量は各状態間の円弧に示される値で表現される。コーンチアム郡以内に留まったケース (In KC) が682回 (31.1%) である。総移動回数のうち、俗人の期間829回 (37.5%) およびコーンチアム郡に止住し続けた682回を除くと残りの697回 (31.3%) が移動したことになる。

2 調査総数313名の僧侶の2001年から2007年に至る総移動距離は、 $d=670.3815$ であった。このうち、最大移動距離は $d=10.7703$ 、最小移動距離は $d=0.0000$ (まったく移動なし)、平均移動距離は $d=2.1418$ である。

3 緯度・経度のデータをもとに回答のあった312名について物理距離による総移動距離を求めてみると、総移動距離は118,418.9キロメートルとなり、一僧侶あたり平均379.5キロメートルを移動した。

4 初期状態の出家・得度は、ワットで得度した僧侶 (95名) は、得度後に45名 (47.4%) がワット、26名 (27.4%) が小寺、24名 (25.2%) が止住域へ出向いて止住した。ところが、修行生活が始まると、ワットから止住域へ移動した20名、ワットから小寺へ移動した6名が見られる。その値は、逆のワットへ移動するケースからみても相対的に大きい値である。また、小寺と止住域の間における往来も少ない。

度を表現する手法で可視化する。得度チャートでは、出生年を基準に、見習僧、僧侶、調査年を X 軸で表現することができ、いずれのチャートも高齢の僧侶から順に Y 軸に配列される。本チャートから、調査地間の相関比較が容易になる。例えば、雲南省の西双版納や徳宏では、文化大革命の際に宗教実践がなかった時代の断絶を見事に浮き彫りにした。カンボジアにおいても、1976 年から 1980 年にかけて断絶期間が明らかになっている (Fig. 3-9 参照)。

2-3 KC における寺院立地

寺院の立地環境を調べるためには、空間マッピングが必要になる。GPS で測定された寺院位置を GIS データに変換し、その後 GIS ソフトをもちいて地形図上に KC の 3 種類の寺院をマッピングした (Fig. 3-13 参照)。先の図の右図は、スペースシャトルで計測された標高データ (SRTM) から生成した標高値 (DEM) もとづく地形図上に、河川および道路を重ね合わせて表示したものである。ワット、小寺、止住域の立地環境が集落からの道路や河川の位置と共に容易に判る⁵。図では、河川は青色で、道路は茶色で表されている。その可視化から、ほぼ 5 割の寺院が標高 150m 以上の位置に立地している。また、2000 年当時の各村落が、図中の円形白色でプロットされていることから、村落の位置との関係も測ることができる。このマッピングを 3 次元で可視化することもできる (ワークショップ・ポスター参照)。

2010 年度の調査では、寺院施設は総数 90⁶ であり、約 5 割が止住域なのである。KC で最も早く建立されたワットは、1848 年 (仏暦 2391 年) ダークアオ村でのコーンチャム寺である。以降、1998 年 (仏暦 2541 年) までに累計 22 寺院が建立された。小寺は、最初のワットが建立された 58 年後の 1907 年 (仏暦 2450 年) に、最初の小寺が建立され、2007 年まで累計 22 寺院が建立された。止住域は、1955 年 (仏暦 2498 年) カンターキアン村で止住域カンターキウィンが建立され、2010 年まで 37 施設となる (Fig. 3-11 HuTime による結果参照)。

これらの寺院建立経緯から、ふたつの特徴がみえる。ひとつは、小寺が誕生した 1907 年から 1928 年頃の仏教に関する政策などに関係するとみられ、主な動きは、Fig. 3-11 の下段に示される。もう一点は、1980 年代から 10 数年間に至る期間である。直後には、ワットや小寺の新規建立数が減り、逆に登録義務のない止住域の新規建立数が増加する点である。この傾向は、次節で説明するタイ国における仏教徒社会

の変容と大きく関係していると筆者はよむ。

3. タイにおける仏教徒社会の変容

タイ全土における仏教徒社会がどのように変容しているか。これまでフィールド調査が行われた KC や MS の動態をタイ国全土の中で把握し、理解するためには、全国レベルでの人口推移や寺院数、僧侶の止住状況を統計情報から分析することも必要である。

国家仏教庁から公表された県別・宗派別僧侶数の統計値を GIS によりマッピングして、可視化すると時間推移と共にその変化が空間的によみとれる (Fig. 3-41, Fig. 3-42 参照)。寺院建立の時間経緯にもとづく動態は、HuTime と呼ばれる時間解析ソフトによって、年表と数値変化が同時に可視化されることで、その変化が容易に理解できる (Fig. 3-11 参照)。データが公開されている仏暦 2541 (1998) 年、2548 (2005) 年、2551 (2008) 年、2553 (2010) 年の宗派別僧侶数から、見習僧数や僧侶数の減少がみられる。特に赤丸で囲んだ県が顕著である。

また、主な県の僧侶数の増減を 1997 年から 2010 年までの 14 年間でみると、バンコクやチェンマイの大都市で 2007 年以降に僧侶数が急増する (Fig. 3-43 参照)。一方、アユタヤ、ナコーンラーチャシマー、ウボン県では、僧侶数が徐々にあるいは急に減少している。KC における止住域数が直線的に増加する傾向は、ウボン県全体での僧侶数の減少傾向に対比して、興味深い結果を示した。これについては、今後引き続き教育制度の変遷や社会的・文化的な生活環境の変容と併せて分析し、検討する必要がある。

4. ミャンマーにおける仏教徒社会

本プロジェクトのミャンマーにおける寺院マッピングは、土佐により文献資料⁶にもとづいて進められた [土佐 2011]。その分析にもちいられたデータは、1990 年代初めに新たに制定された称号を授与された僧侶 (「称号授与僧」、以下「高僧」とよぶ) の経歴から移動に関するデータ (Fig. 3-33 参照) が取り出されたものであり、僧侶数 752 名 (平均 61.2 歳)、見習僧数 632 名 (平均 12.2 歳) である (Fig. 3-34 参照)。対象者の出生地、見習僧出家地、僧侶得度地を GIS により可視化してみると、ヤンゴン、マンダレーを中心にして集中していることが判る。高僧は、出生から得度までほぼ同一地域で止住したことが判る。ところが、その後、止住を繰り返し、現在ではヤンゴン、

5 マッピングした寺院の施設総数は、2007 年調査にもとづく 79 寺院であり、ワット 21、小寺 21、止住域 37 である。

7 「宗教と地域の時空間マッピング」ニューズレター第 4 号 (pp.17-20) に資料リストとして示されている。

マンダレーを中心としながらも、すべての州に一樣に偏在している。それは何を意味するか、という新たな検討課題をもたらす。僧院の位置と僧侶数の関係でみる (Fig. 3-36 参照) とどのようになるか。円印の径の大きさは、当該僧院に止住した僧侶数の総計を示している。この図からも前述の傾向と同様にヤンゴン、マンダレーに相対的に集中していることが判る。

僧侶の移動はどうか。約7割の僧侶が出生地と得度地は同じ地域である⁷。ところが、その後の移動では、約8割を超える625名の僧侶が移動しており、移動は平均1.68回繰り返されている (Fig. 3-38 参照)。その移動を時間と空間で可視化してみた事例が、Fig. 3-39 である。前述の得度チャートに示す識別色と同じで、緑が出生、青が見習僧、橙色が僧侶の期間を示し、現在が黄色で示されている。

5. 地域情報学とマッピング・可視化の意義

寺院マッピングにおいて、地域情報学の研究手法から何が明らかになったか。地域情報学プロジェクトとして位置づけられた本プロジェクトの成果について、最も重要な視点のひとつである。ここでは、3つの成果について議論しておきたい。

(1) 各地域の上座仏教徒社会における実践の態様と特徴が、従来の記述的説明から定量的・定性的分析にもとづく説明に展開され、新たな議論の視座を提供している。僧侶の移動では、GISや情報理論の適用で調査地域の特性が定量的に理解でき、地域間の差異が明らかになった。僧侶の遍歴分析では、得度チャートの実現で、宗教実践と国家の政治体制や教育制度との関係を解明する動機を与える。プロジェクト内での雲南省DH、XBと文化大革命、カンボジアKT、KSのポルポト政権時代における“断絶”と“復興”議論[長谷川2013]、あるいは教育制度との関わり、宗教実践そのもののタイKCとそれ以外の地域との違い、DHとミャンマーとの関係などが挙げられる。調査地の地域を専門とする研究者には自明であるかも知れない実態が、上座仏教徒社会全体を通して全体像が浮かび上がり、“うち”と“そと”からの視座を与える。Google Earthによる可視化技術の援用は、全体像の把握をより推進させる。

(2) 上座仏教徒社会における実践は国境を越えて展開され、地域毎の特性がより明らかになった。

宗教実践や寺院施設の特徴把握から、ミャンマー

とDH、北タイとXB、メコン河流域のKCとラオスのCP、トレサップ湖と支流の周辺地域における僧侶のうごきの違いは明白で、“徳宏・ミャンマー文化圏”、“北タイ文化圏”、“メコン河流域文化圏”と名付けられるような特性や差異が明らかになりつつある。土佐が進めた「称号授与僧」とDHにおける僧侶の国境を越えたうごきの違いでは、双方の関係の有無やミャンマーの民主化にもとづく実践の変容をよむこと、などに対する新たな課題を提供した。林が説明した寺院施設における納骨機能の有無は、文化圏的な視座からの検討を補強するものと考えられる。

(3) 国家と国民生活の視点からみる仏教徒社会の変容について、国別の特徴が宗教実践のマッピングを介して明らかになった。タイの3つの寺院類型における止住域の特徴や特性は、国家仏教庁の統計年鑑では調査対象にはなっていない。KCの調査から、その実態が定量的な調査・分析で明らかになった。止住域の右肩上りの直線的増加は、何を意味するか。タイ国別の人口推移と僧侶数の増減から、「二極化」を示唆するような宗教実践の姿である。都市に集中化する僧侶と地方・過疎地での僧侶や見習僧の減少、一方で地方・過疎地での、統計年鑑には掲載されない止住域の増加現象は対照的である。止住域での僧侶は、主に瞑想を目的にすると想定すると、仏教徒社会での富裕層／貧困層、精神的な安定／不安定な住民生活、文化的／非文化的な生活環境など、というような対峙的な視点からの検討も求められるかもしれない。僧侶の移動は、宗教的関心のみならず生活環境や教育制度などの社会的背景にも大きく依存していると考えられる。

参考文献

- 林 行夫. 2011a. 「東南アジア仏教徒の世界」 奈良康明・下田正弘 (編集委員) / 林 行夫 (編集協力) 『新アジア仏教史 04・静と動の仏教—スリランカ・東南アジア』 佼成出版社、19-62 ページ。
- 林 行夫. 2011b. 科学研究費補助金基盤研究 (A) [海外学術] 課題番号 20251003 「大陸部東南アジア仏教徒社会の時空間マッピング—寺院類型・社会移動・ネットワーク—『マッピング・データ集成 I』」 報告書、京都大学地域研究統合情報センター。
- 長谷川清. 2013. 「上座仏教の断絶と復興をめぐる時空間マッピングの課題」 『宗教と地域の時空間マッピング』 ニューズレター第7号, 2013.11.
- 土佐桂子. 2011. 「ミャンマーにおける僧院と出家者の移動」 『宗教と地域の時空間マッピング』 ニューズレター第2号。
- 柴山 守. 2012. 『地域情報マッピングからよむ東南アジア—陸域・海海アジアを越えて地域全体像を解明する研究モデル—』 勉誠出版, 2012年3月刊行。

8 総数755名の僧侶に対して、出生地で得度した僧侶は550名、残り205名が出生地とは異なった地域の僧院で得度している。

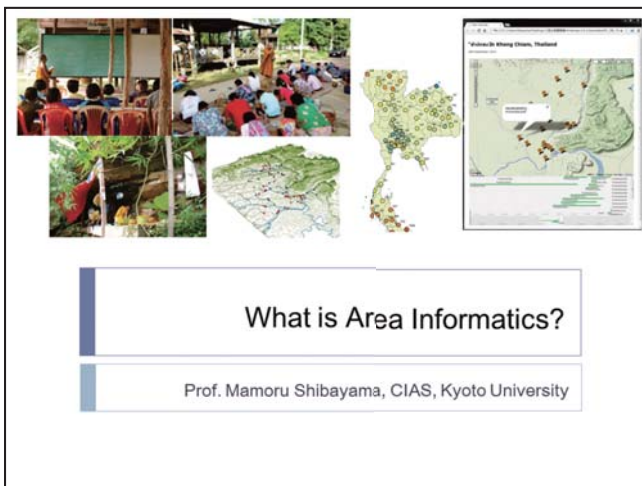


Fig. 3-1

The Dawn of New Paradigm in Area Informatics

- ▶ To understand and explain specific area – people, things, and money with behavior, move, trend, and so on for past, now, and future – in area studies.
- ▶ Before – Anthropology, History, Geography, Agriculture, Ecology, Environmental Studies, and etc. were introduced.
- ▶ After [ตั้งแต่ พ.ศ.2547] – Disciplines above + Informatics (Information technology, theory, methodology, way of considerations, and etc.)
- ▶ Target - To explore new paradigm with new findings, new consideration and verification compared with before.

Fig. 3-2

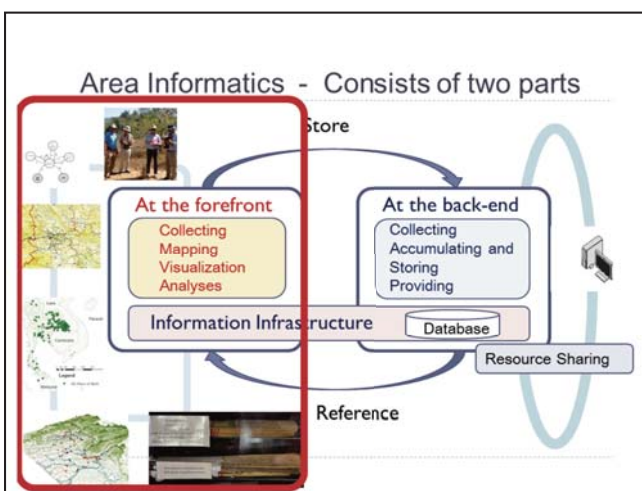


Fig. 3-3

In Search of Mapping Practices of Buddhism, To Measure a Change, Move, Trend, ...

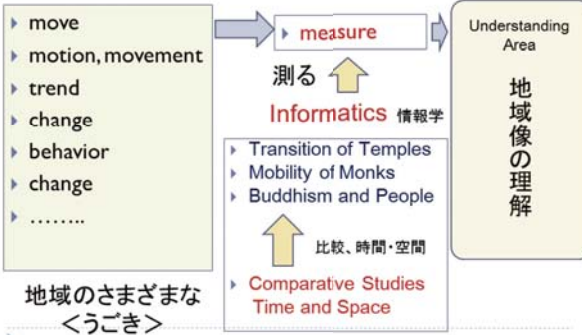


Fig. 3-4

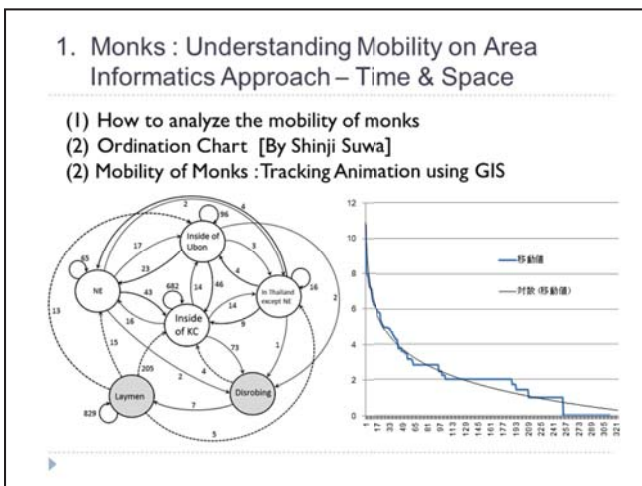


Fig. 3-5

Mobility of Monks : Using the Informatics Theory State Transition, Network Analysis

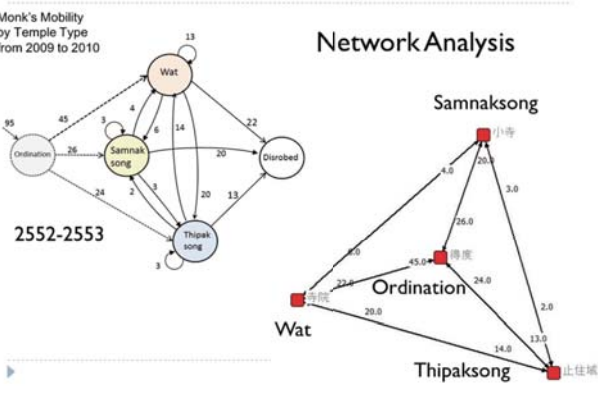


Fig. 3-6

Monks : Mobility on with Time and Space (cont.)

- (1) Monk's Ordination Chart [By Shinji Suwa]
- (2) Mobility of Monks : Tracking Animation using GIS

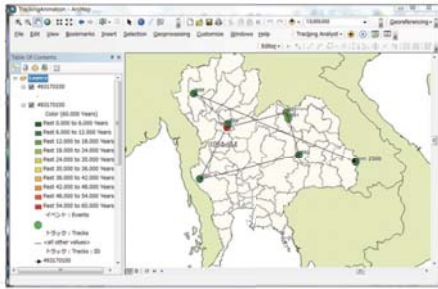


Fig. 3-7

To Measure Distance of Physical Movement based on Latitude and Longitude

Monk ID:5010206
 [1942 Birth]:North...N(18-21)...M(-)...L<[Loei]=[Maehongson]
 =[Chaiyaphum]=[Nakhonsithammarat]=[Tak]=[Surin]
 =[Khongchiam]> D:3315.465 Km

Monk ID: 5031404 [1975]:Isan...N(13-)...M(20-)...L<[Chachoengsao]=[Prathet Phama (Burma)]=[Prathet Phama (Burma)]
 =[Ubonratchathani]=[Chachoengsao]=[Nakhonratchasima]=[Naphokiang]> D:2505.168 Km

Monk ID:5021301
 [1958 Birth]:Isan...N(13-14)...M(24-)...L<[Khonkaen]
 =[Ubonratchathani]=[Chiangrai]=[Khongchiam]
 =[Mahasarakham]=[Khonkaen]=[Huaiphai]> D:2206.786 Km

Typical Moving Cases
 N:Novice, M:Ordination as Monk, ():Age, . :
 []:Place Name, = : Moving, D:Total Moving Distance

Fig. 3-8

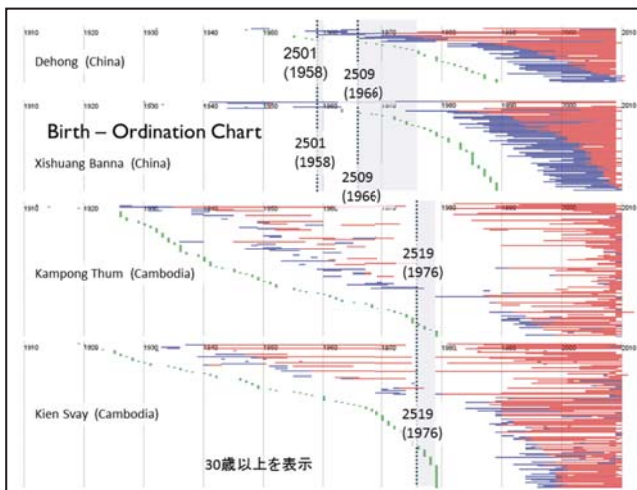
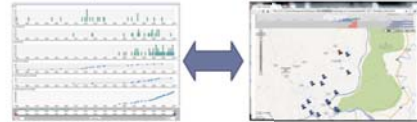


Fig. 3-9

2. Temples : Transition with Time and Space

- (1) To measure period from 'Establishment' to 'Receiving Sema'



- First Wat : วัดโพธาราม (A.D.1861 พ.ศ.2404- A.D.1878 พ.ศ.2421)
- First Establishment : วัดโฆงเงิน (A.D.1849 พ.ศ.2392 - พ.ศ.2518)

- (2) To visualize transition of 'Forest Temples'
 For NongPaPhong 2006

Fig. 3-10

Temple Chronology by Type in Khong Chiam

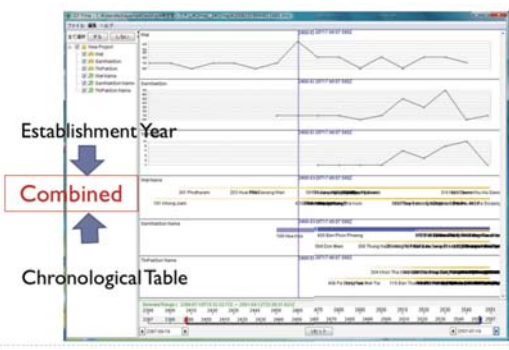


Fig. 3-11

3. Theravada Buddhism and People's Life

- (I) Comparative Mapping for Temples with 'Tomb'

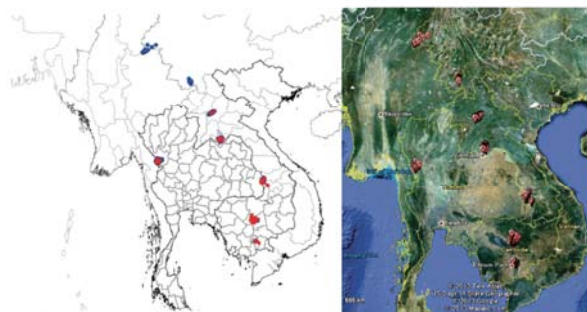


Fig. 3-12

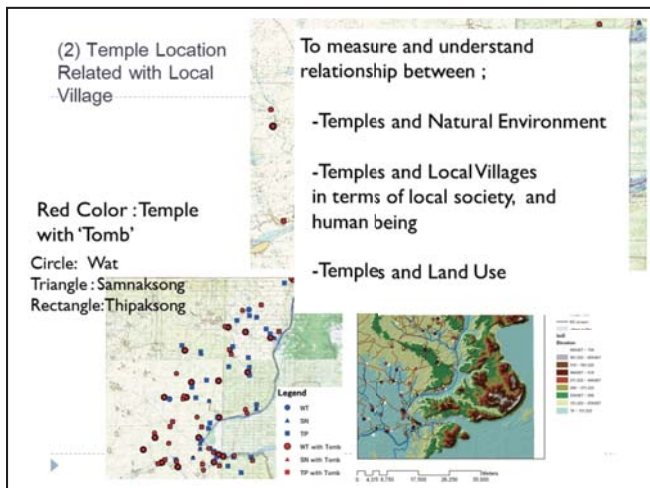


Fig. 3-13

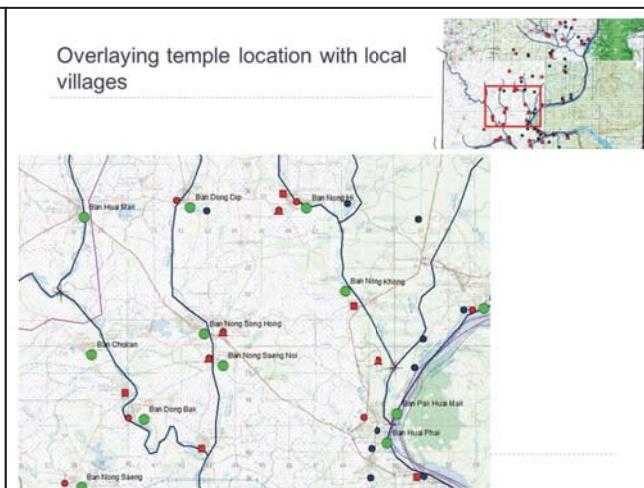


Fig. 3-14



Fig. 3-15



Fig. 3-16

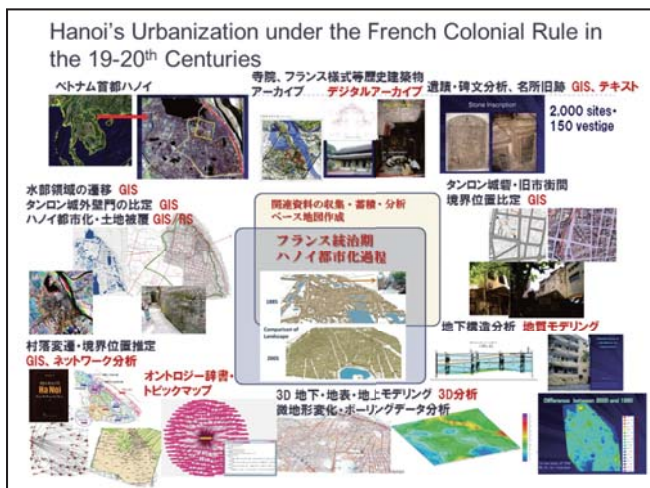


Fig. 3-17

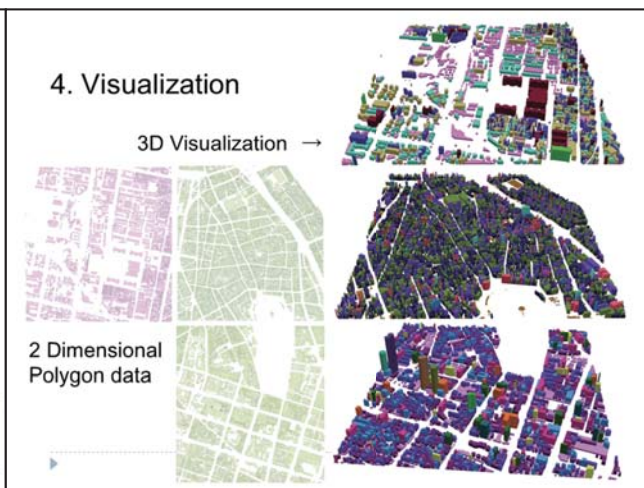


Fig. 3-18

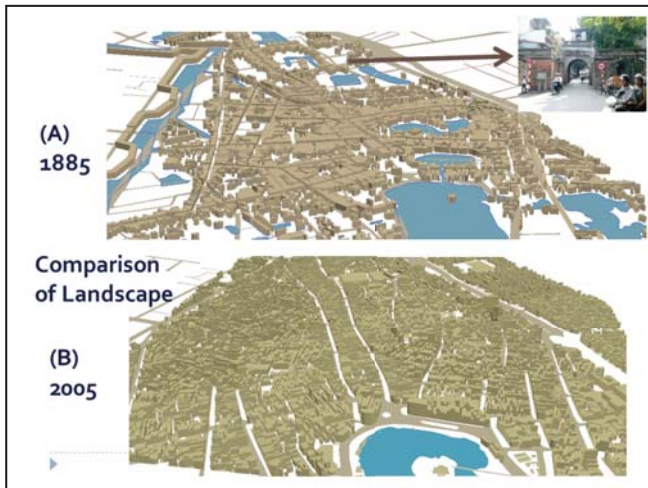


Fig. 3-19

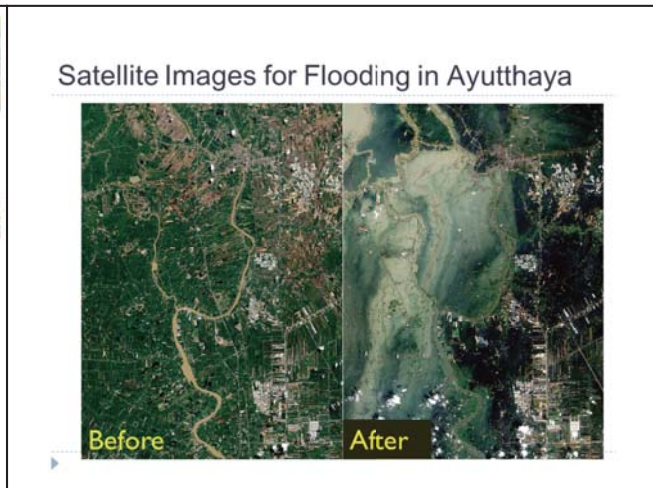


Fig. 3-20



Fig. 3-21

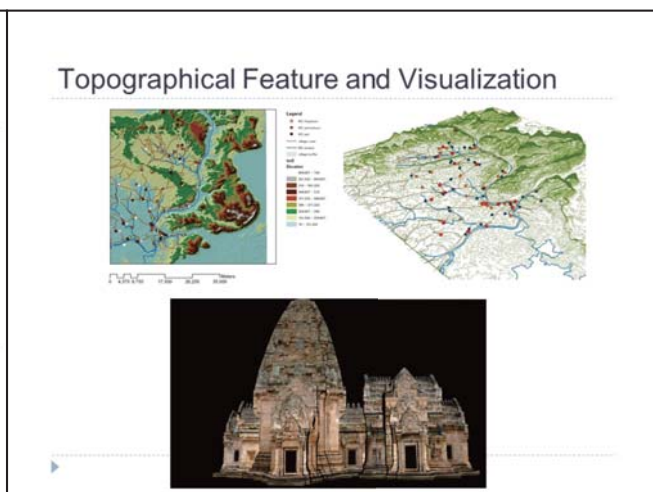


Fig. 3-22



Fig. 3-23

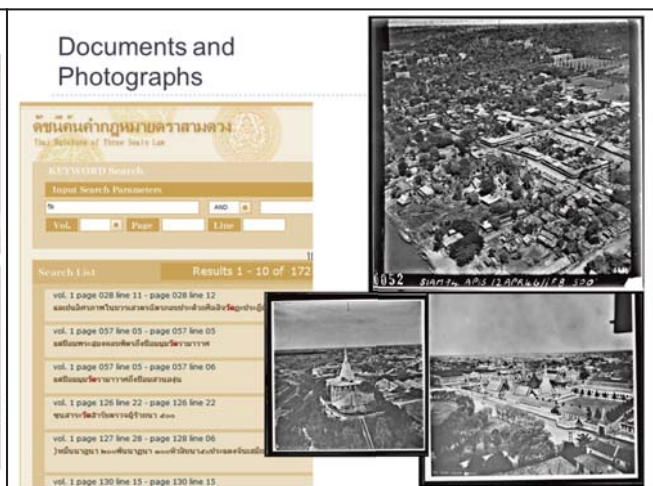


Fig. 3-24

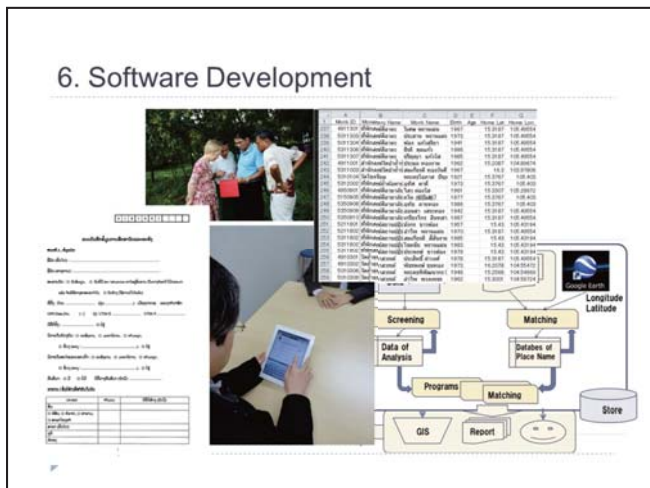


Fig. 3-25

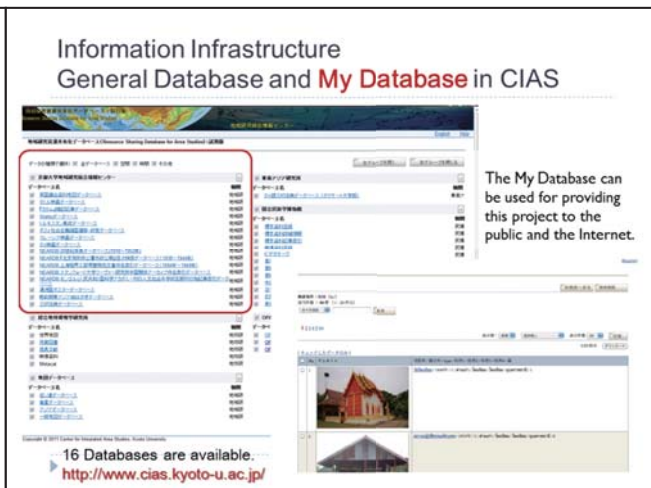


Fig. 3-26



Fig. 3-27



Fig. 3-28

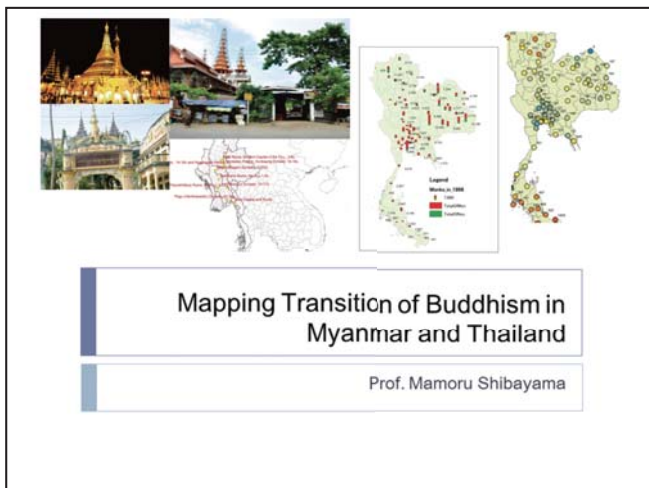


Fig. 3-29



Fig. 3-30



Fig. 3-31



Fig. 3-32

Monastery and Monk Data in Myanmar
Source : Prof. Keiko Tosa,
Tokyo University of Foreign Studies, Japan

This data based on documents and bibliographies
for monks with dignity.

The Name of the monastery he lives		Date and Place of Birth	
1	ရန်ကင်းမြို့နယ်၊ ရန်ကင်းမြို့၊ ရန်ကင်းမြို့နယ်၊ ရန်ကင်းမြို့၊ ရန်ကင်းမြို့	0112	1903.28.3
2	ရန်ကင်းမြို့နယ်၊ ရန်ကင်းမြို့၊ ရန်ကင်းမြို့နယ်၊ ရန်ကင်းမြို့၊ ရန်ကင်းမြို့	0112	1906.7.12
3	ရန်ကင်းမြို့နယ်၊ ရန်ကင်းမြို့၊ ရန်ကင်းမြို့နယ်၊ ရန်ကင်းမြို့၊ ရန်ကင်းမြို့	0204	1911.8.8
4	ရန်ကင်းမြို့နယ်၊ ရန်ကင်းမြို့၊ ရန်ကင်းမြို့နယ်၊ ရန်ကင်းမြို့၊ ရန်ကင်းမြို့	1413	1903.14.2

Fig. 3-33

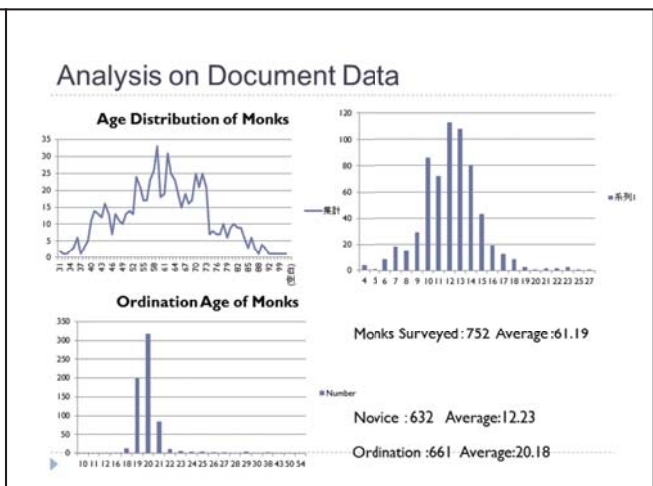


Fig. 3-34

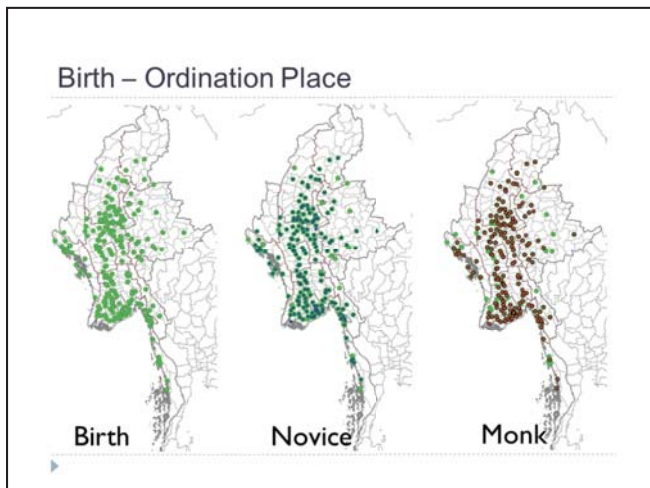


Fig. 3-35

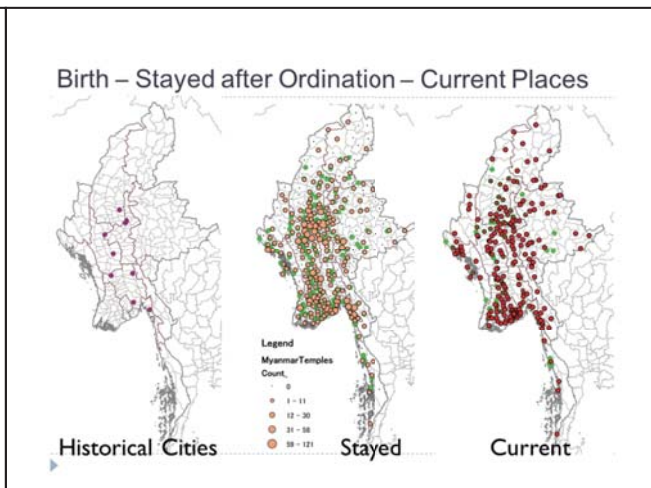


Fig. 3-36

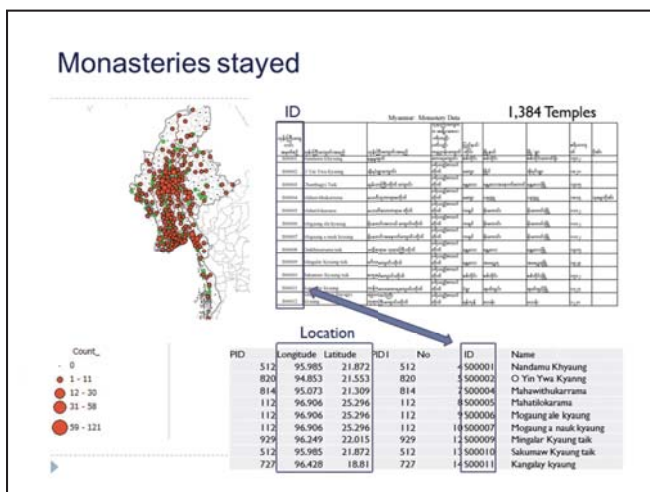


Fig. 3-37

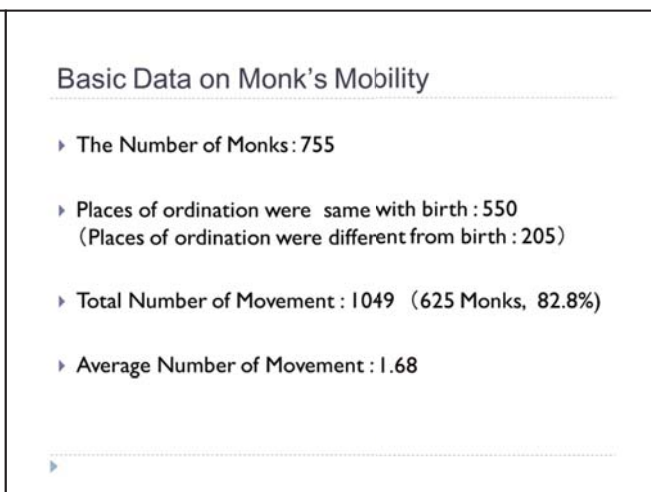


Fig. 3-38

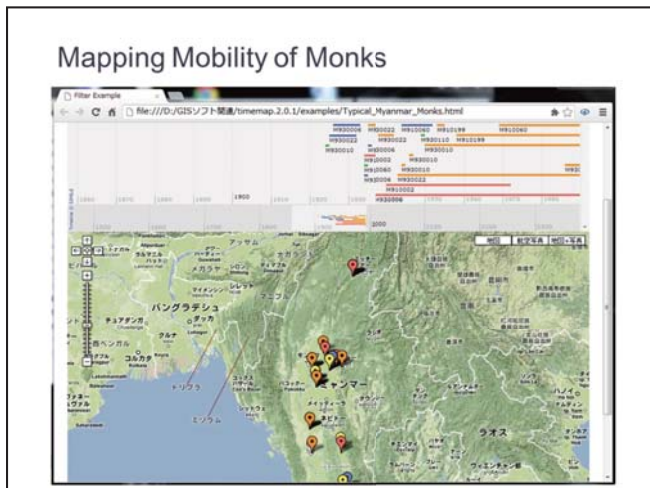


Fig. 3-39

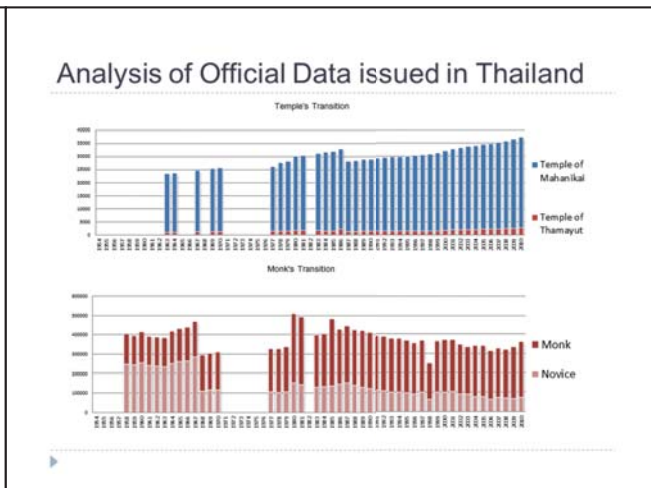


Fig. 3-40

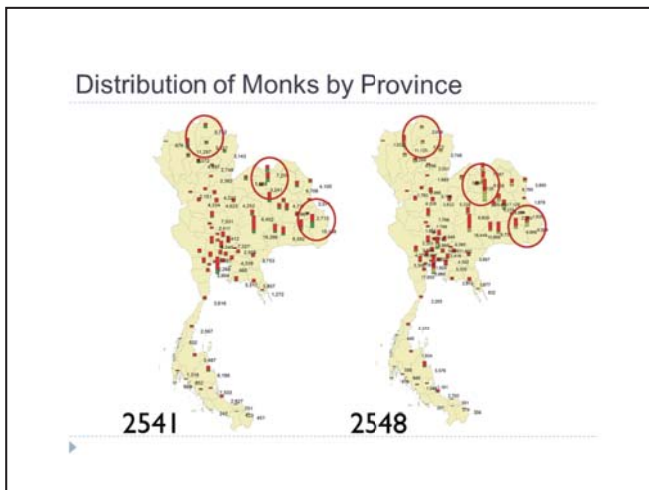


Fig. 3-41

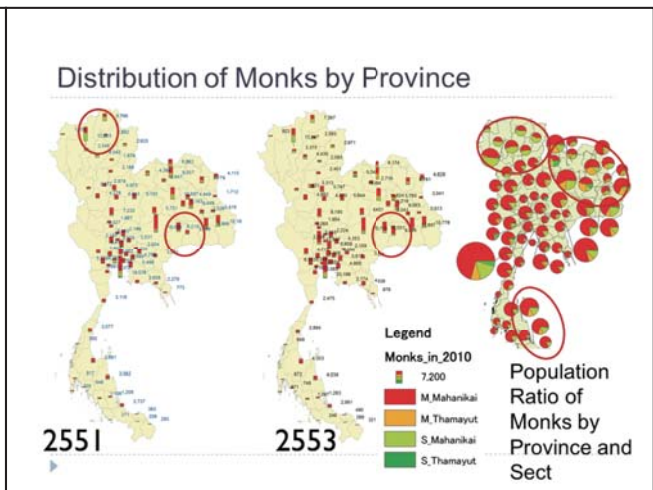


Fig. 3-42

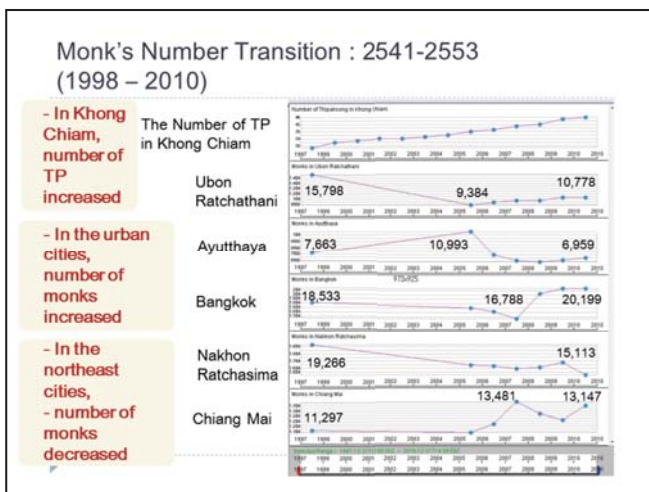


Fig. 3-43

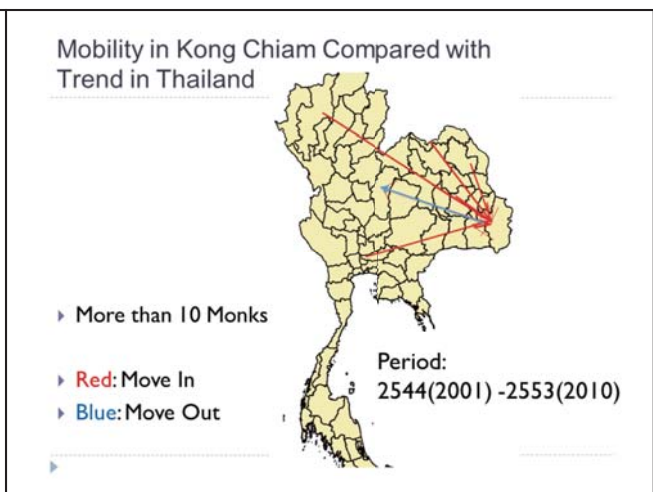


Fig. 3-44

What is emerging?

- ▶ **Trend on an analysis of statistics,**
 - ▶ In the urban cities, number of monks increased.
 - ▶ In the northeast cities, number of monks decreased.
 - ▶ Above can be seen on comparison between 2541 and 2553
- ▶ **Associated with social and economic transformation?**
 - ▶ Education system or change of life environment?
- ▶ **Emerging Theravadin practices in Khong Chiam**
 - ▶ Actual situation which differs from general understanding before can be seen through the field survey.
 - ▶ Actual situation as for the *thiphaksong* and related monks.
 - ▶ Meditation in Wat Pa or preparation for establishing Wat
 - ▶ Movement of monks likely coincides with above trend.

Fig. 3-45

Conclusion

- ▶ Monk's practices entirely differ from other research sites such as Yunnan, Laos, and Cambodia (under progress of research)
- ▶ Invisible aspect in Theravadian practices can be seen on the field survey and area informatics approach.
- ▶ In Khong Chiam, the behavior of monks which cannot be seen from the official data was newly emerged.

Fig. 3-46

Theravadins in Khong Chiam: Visualizations for Movement Tracking

京都大学地域研究統合情報センター

Julien Bourdon-Miyamoto

The Khong Chiam dataset contains information about 89 temples, including their types, location, the facilities they contain as well as pictures, and 621 monks, including information about their steps to monkhood and their location over a span of 10 years.

As introduced later in Chapter 11, this information has been transformed from paper surveys to structured data in spreadsheets. Still, when dealing with such an amount of data, humans usually find it easier to find patterns in data when it is visualized in compact form.

1. How to visualize geo-temporal data

Let us show how to extract geo-temporal features from structured data and show you some examples illustrating important points to consider when visualizing large amounts of geo-temporal data.

1-1 Flat data is just text. Think about a suitable data type. Consider composed data.

Data type allow information systems, such as database management systems to perform specific operations. For example, a temple establishment type should be a date and not a simple number. For example it allows for epoch conversions (e.g. Thai system to Western system). Conversely, locations can correspond to points (temples), lines (roads, rivers) or areas (administrative divisions). Registering them as such allow, for example, to know if a specific temple is close to a road.

Some data, which can be useful for visualization might not be present in the original set. For

example, the Khong Chiam data registers location of monks at different years. However, we are more interested by the movements in themselves. A movement can be defined as a triple of data, containing the start location, the end location as well as the time of the movement.

1-2 Beware of automatically generated visualizations. Look for the minimal visualization.

Nowadays, there exists a lot of tools that allow to go from flat data, such as the Khong Chiam dataset to maps and timelines. While it can give a first impression of what the data looks like, it will usually fail to convey interesting patterns.

The visualization should be as minimal as possible. While using a beautiful background for your map can leave the impression of a more aesthetically pleasant map, it takes the reader away from the main point. For example, do you really need a satellite image to show the density of temples in a specific area?

The second point is to choose between micro and macro visualization. While a visualization showing the movement of one monk over the years can give a representative example, the same visualization will not work when showing the 621 ones at the same point.

1-3 Exploration and Explanation: using small multiples for temporal visualization

The most common way to display evolution of data over time using software is to make an animation that will make the map evolve over time. However, by doing this, it becomes difficult to compare single points of data. While using a “time slider” for data exploration allows to isolate interesting patterns, when presented to the viewer, all the data should be available at a single glance.

1-4 Crossing with other sources: beware of the scale

Crossing the data with auxiliary sources, such as demographics data is a good way to highlight the causes of a specific pattern. However, it is important to present both the original and auxiliary data on the same scale as such a difference could leave the viewer with false information. For example, if using points to represent data about temples, it might not be a good idea to use choropleth density maps, as the larger an administrative division is, the more important the data will seem to be.

2. How to visualize geo-temporal data

What is a movement? As shown in Fig. 4-2, a movement is a piece of data combining space and time. A monk A will have moved from p_1 to p_2 if and only if he was at p_1 at a time t_1 and at p_2 at a time t_2 and t_1 is before t_2 .

This movement can then simply be represented by an arrow going from p_1 to p_2 , as depicted in Fig. 4-4. Doing so, one can see diverse patterns emerging from the data. Some monks will be very international and experience Buddhism all over the world (Fig. 4-4 and 4-7) while some other will stay in the area (Fig. 4-6). However, as depicted in Fig. 4-10, the same approach cannot be used anymore when dealing with a large number of monks. We thus needed to devise other approaches to aggregate movements.

Fig. 4-11 and 4-12 show the flux of monks using choropleth maps. It is very good when they are a lot of subdivisions since the resolution will be higher. However, Khong Chiam containing only 5 districts,

this was not the best approach. As explained in section I, it also introduces a surface bias, making Na Pho Klang looking far more important than Khong Chiam.

Fig. 4-14 to 4-17 show the use of bar charts to represent the number of monks coming into a district versus the number of monks coming out of the same district. Contrary to choropleth maps, it eliminates the area bias and it actually gives an idea of the total number of movements. However, for all these approaches, a map is not really needed, and can be represented as a graph, as depicted in Fig. 4-17

The next step was to use movement clustering. In other words, movements are not shown from point to point but from group of places to group of places. This clustering can be done on several levels, national (Fig. 4-19), provincial (Fig. 4-20) or to the district level (Fig. 4-21).

It is important to note that while the clustering on the national and provincial levels are done by using the center of each sub-division, the clustering for the district level has been done automatically by using the k-neighbors method.

Tracking the Movements of Theravadins in Khong Chiam

Julien Bourdon-Miyamoto
Center for Integrated Area Studies
Kyoto University

1

Fig. 4-1

What is a Movement?

- We have data about the locations of the monks in different years.
- If monk A is at place p_1 at time t_1 and at place p_2 at time t_2 , and $p_1 \neq p_2$, it means he moved from p_1 to p_2 between t_1 and t_2 .
 - If a monk was in Khong Chiam in 2003 and in Huai Yang in 2004, he moved somewhere in 2003.

2

Fig. 4-2

How to Represent Movement

- Representing movements of a single monks can be done with a series of arrows.

3

Fig. 4-3

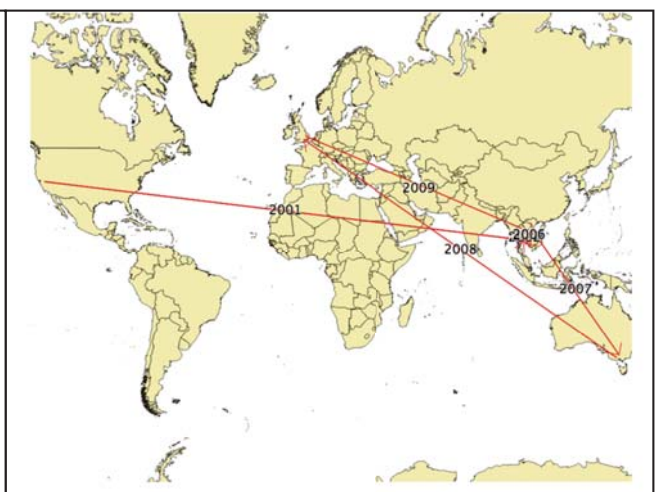


Fig. 4-4



Fig. 4-5



Fig. 4-6

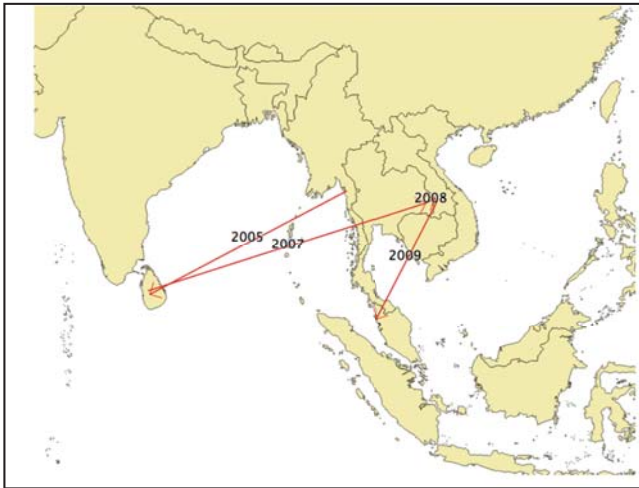


Fig. 4-7

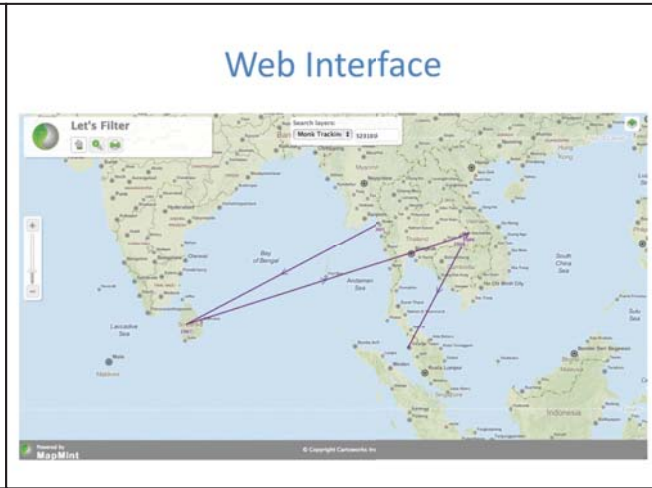


Fig. 4-8

Aggregating Movements

- Representing the movement of a single monk does not cause any major problem.
- How can we represent all the movements in the dataset?

Fig. 4-9



Fig. 4-10

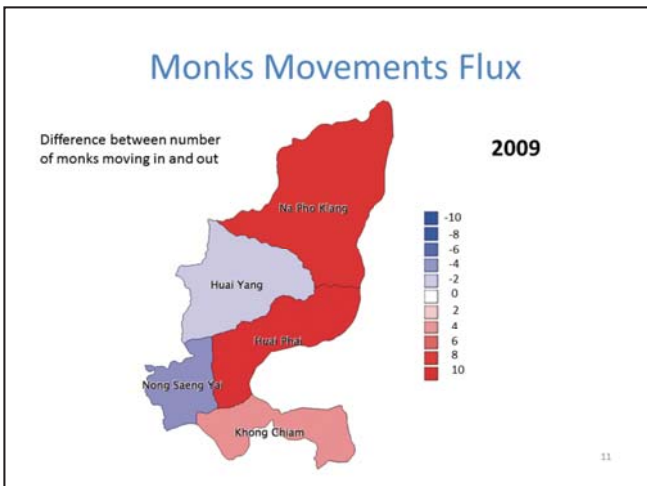


Fig. 4-11

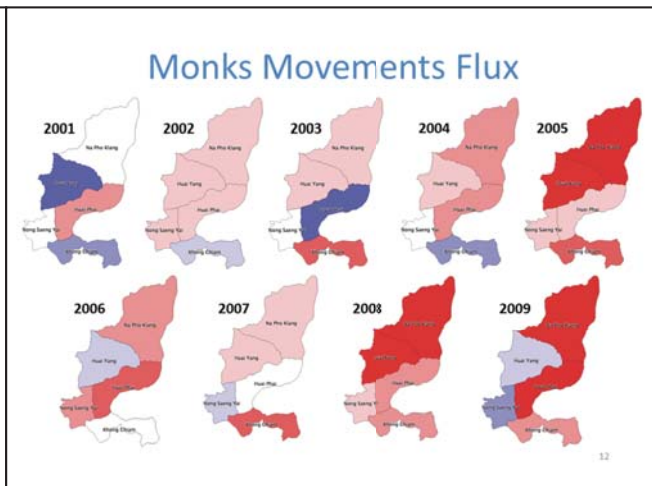


Fig. 4-12

Chloropleth Maps

- Good when there are many subdivisions
 - Not good for Khong Chiam
- Understand “hot” and “cold” spots at a glance
- Problem: area is not proportional to the dimension studied
 - Na Pho Klang seems far more important than Khong Chiam

13

In and Out Movements

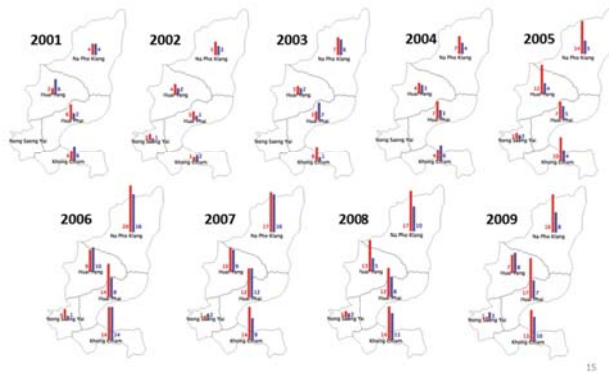


14

Fig. 4-13

Fig. 4-14

In and Out Movements



15

In and Out Movements

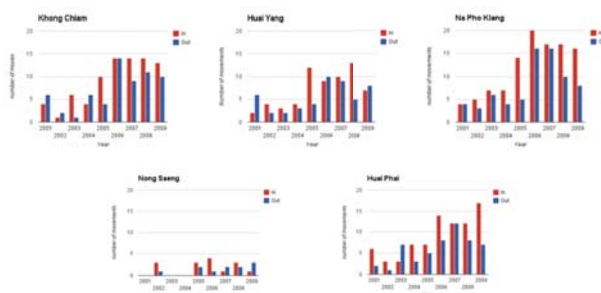
- Eliminate area size bias
- Can actually see the number of movements and not only the difference
- Do we really need a map?

16

Fig. 4-15

Fig. 4-16

In and Out Movements



17

Movement Clustering

- Do not represent the movement from point to point but from group of places to group of places
 - Reduce the number of arrows so the map is easier to understand.
 - Can use different groups for different levels.

18

Fig. 4-17

Fig. 4-18

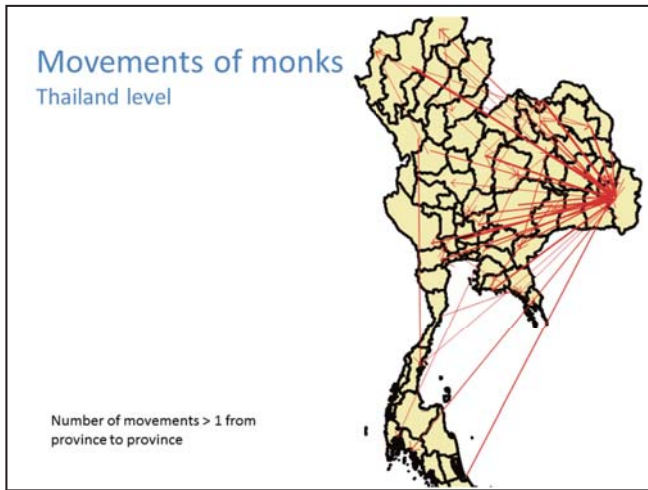


Fig. 4-19

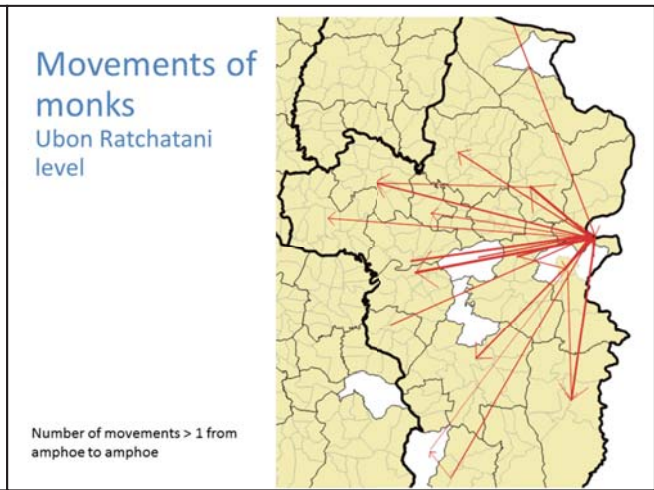


Fig. 4-20

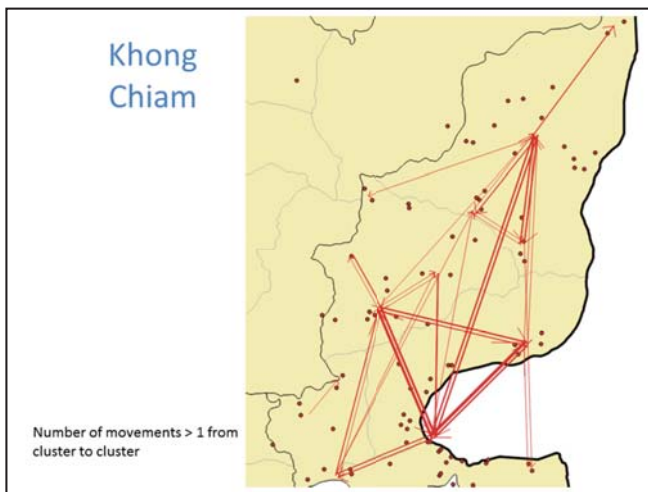


Fig. 4-21

From Digital Data to Geo-Temporal Pattern Visualization

Julien Bourdon-Miyamoto
Center for Integrated Area Studies
Kyoto University

1

We've got data, now what?

No.	วันที่	วัด	พระภิกษุ	เขต	UTM-E	UTM-N	เขต
1	277	วัดเจติยาคิรีนิคม	1	วัดเจติยาคิรีนิคม	550315	1693229	15 315004
2	278	วัดเจติยาคิรีนิคม	2	วัดเจติยาคิรีนิคม	553246	1693480	15 317371
3	279	วัดเจติยาคิรีนิคม	3	วัดเจติยาคิรีนิคม	551433	1694736	15 329972
4	280	วัดเจติยาคิรีนิคม	4	วัดเจติยาคิรีนิคม	548227	1699435	15 320791
5	281	วัดเจติยาคิรีนิคม	5	วัดเจติยาคิรีนิคม	545229	1691016	15 325157
6	282	วัดเจติยาคิรีนิคม	6	วัดเจติยาคิรีนิคม	545552	1690559	15 3291924
7	283	วัดเจติยาคิรีนิคม	7	วัดเจติยาคิรีนิคม	556482	1693376	15 3146271
8	284	วัดเจติยาคิรีนิคม	8	วัดเจติยาคิรีนิคม	558929	1693383	15 316257
9	285	วัดเจติยาคิรีนิคม	9	วัดเจติยาคิรีนิคม	545250	1691697	15 30314
10	286	วัดเจติยาคิรีนิคม	10	วัดเจติยาคิรีนิคม	553493	1691239	15 297015
11	287	วัดเจติยาคิรีนิคม	11	วัดเจติยาคิรีนิคม	550099	1691535	15 29976
12	288	วัดเจติยาคิรีนิคม	12	วัดเจติยาคิรีนิคม	544591	1692459	15 308207
13	289	วัดเจติยาคิรีนิคม	1	วัดเจติยาคิรีนิคม	546968	1705313	15 424383
14	290	วัดเจติยาคิรีนิคม	2	วัดเจติยาคิรีนิคม	546552	1705165	15 423049
15	291	วัดเจติยาคิรีนิคม	3	วัดเจติยาคิรีนิคม	547674	1708450	15 452724
16	292	วัดเจติยาคิรีนิคม	4	วัดเจติยาคิรีนิคม	544601	1710948	15 466003
17	293	วัดเจติยาคิรีนิคม	5	วัดเจติยาคิรีนิคม	542801	1705514	15 426269
18	294	วัดเจติยาคิรีนิคม	6	วัดเจติยาคิรีนิคม	546509	1715046	15 512381
19	295	วัดเจติยาคิรีนิคม	7	วัดเจติยาคิรีนิคม	553222	1708713	15 454996
20	296	วัดเจติยาคิรีนิคม	8	วัดเจติยาคิรีนิคม	546730	1705599	15 426977
21	297	วัดเจติยาคิรีนิคม	9	วัดเจติยาคิรีนิคม	547899	1707949	15 448193
22	298	วัดเจติยาคิรีนิคม	10	วัดเจติยาคิรีนิคม	549130	1715160	15 513419
23	299	วัดเจติยาคิรีนิคม	11	วัดเจติยาคิรีนิคม	548772	1705097	15 424302
24	300	วัดเจติยาคิรีนิคม	1	วัดเจติยาคิรีนิคม	500540	1716896	15 454596

Fig. 4-22

Fig. 4-23

We've got data, now what?

- Data about 89 temples and 621 monks has been entered in Excel files.
- Human eye cannot find **patterns** flat files.
- What is the best way to visualize temples and monks in time and space.
- What you should **NOT** do.

3

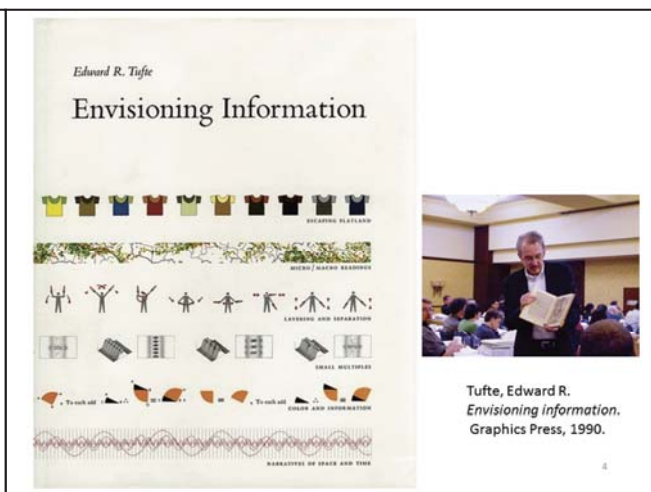


Fig. 4-24

Fig. 4-25

Data types

- For a computer, “Khong Chiam” or “1977” are just strings of characters.
 - Solution: use a database to add a type to the data
- Khong Chiam -> place with geographical coordinates and in a specific administrative unit.
- 1977: western year corresponding to 2520 in Thai calendar. Year of the educational reform

5

Minimal Visualization

- Beware of automatically generated visualizations
- Look for the minimal visualization
- Show only the data you need, not more.

6

Fig. 4-26

Fig. 4-27

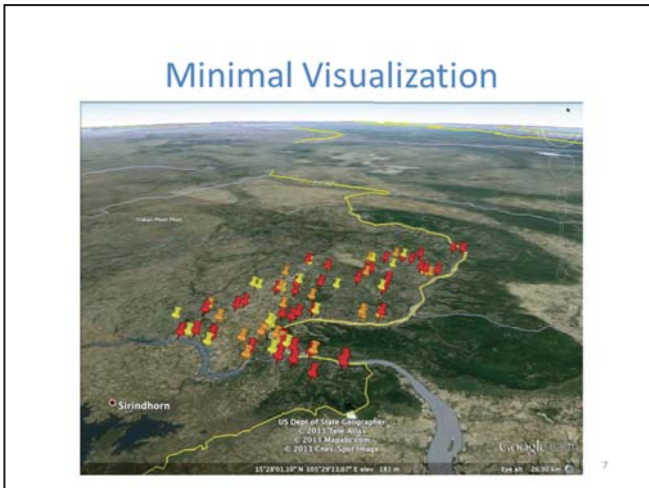


Fig. 4-28

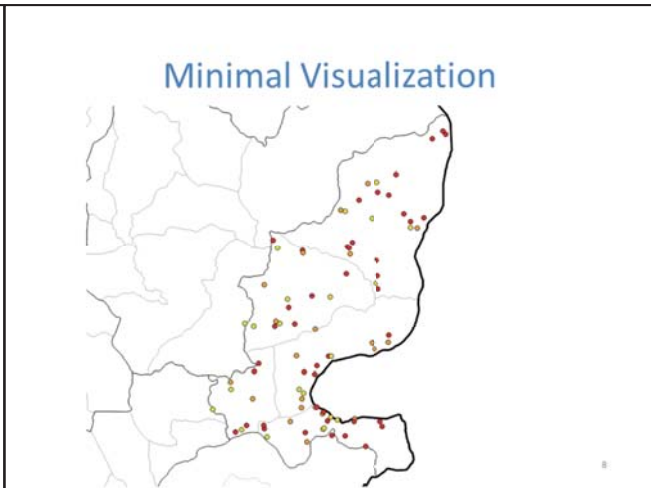


Fig. 4-29

Small Multiples

- How to represent evolution over time?
- Need to compare easily.
- Put everything on the same page so that the human eye can compare.

Fig. 4-30

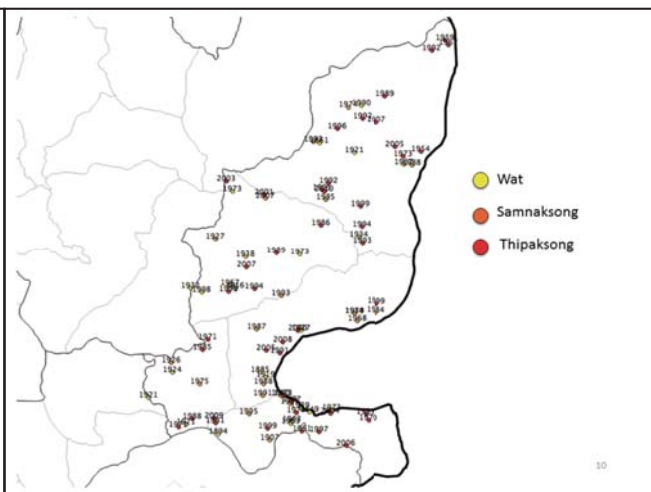


Fig. 4-31

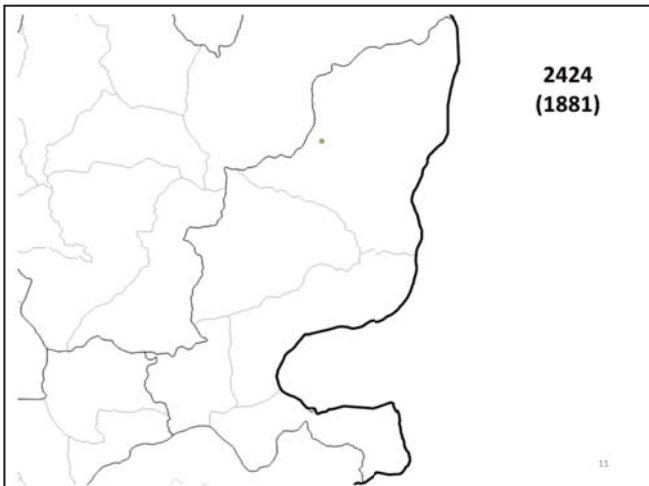


Fig. 4-32

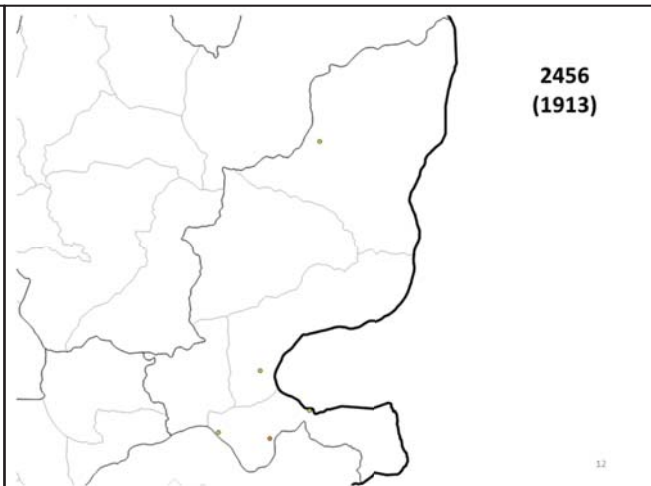


Fig. 4-33

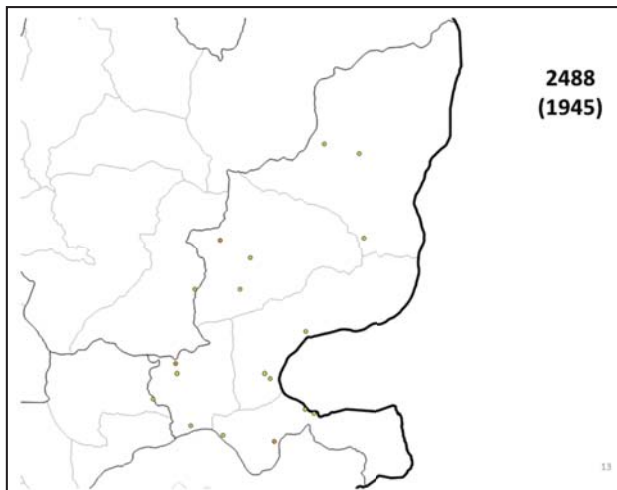


Fig. 4-34

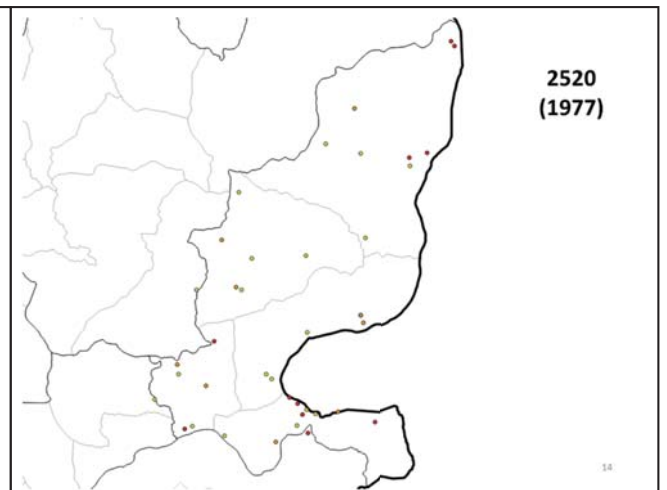


Fig. 4-35

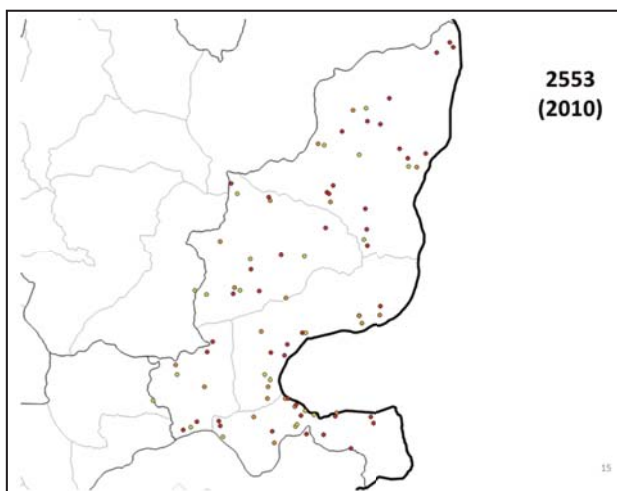


Fig. 4-36

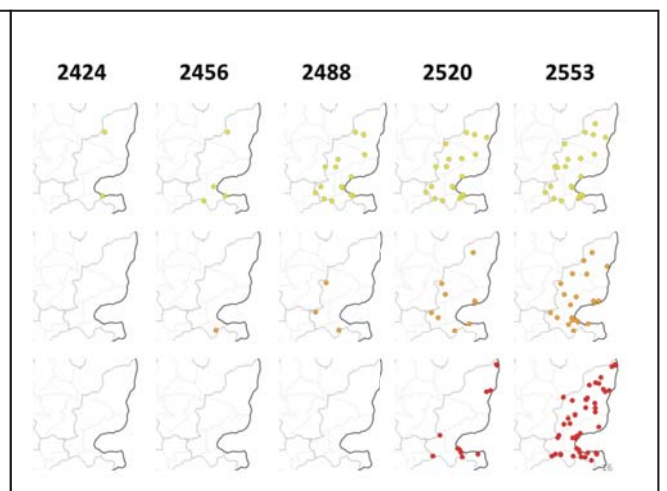


Fig. 4-37

Beware of the scale

- When crossing multiple data, a change in scale can give a false impression to the viewer.
- It is especially when mixing area and population data

Fig. 4-38

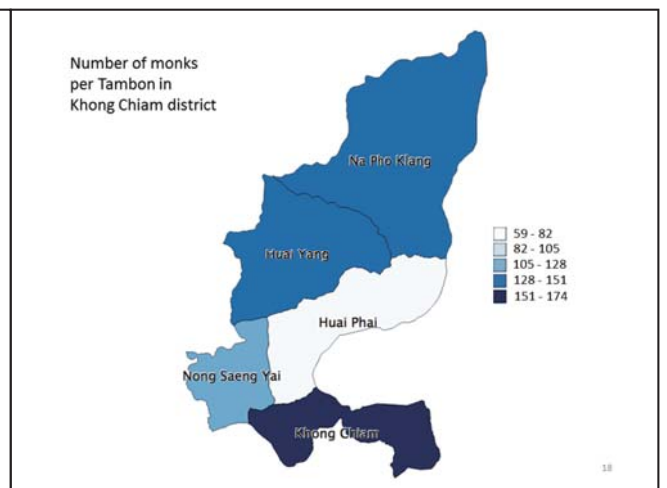


Fig. 4-39

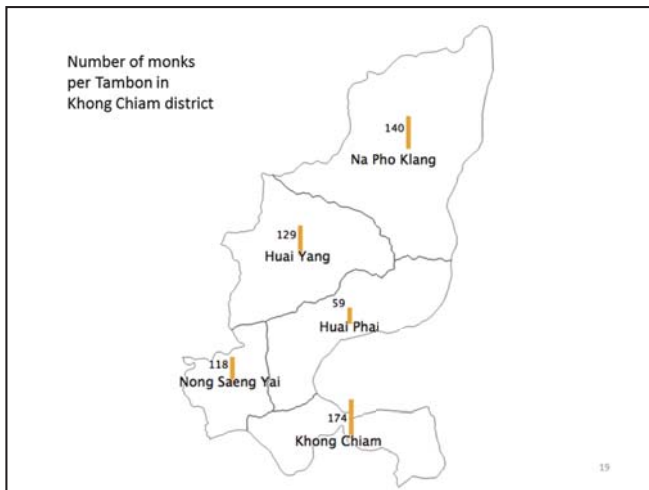


Fig. 4-40

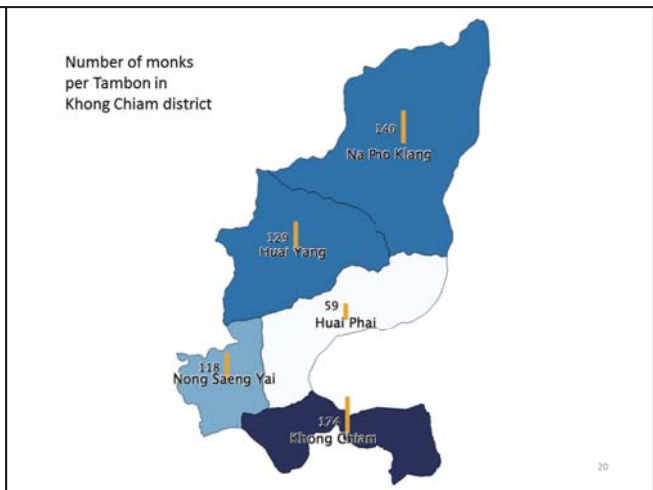


Fig. 4-41

Conclusion

- Assign a data type (space or time) to your flat data.
- Use a minimal visualization for maximal effectiveness.
- Use small multiples to represent evolution.
- Use an appropriate scale (one piece of data = one dimension)

Fig. 4-42

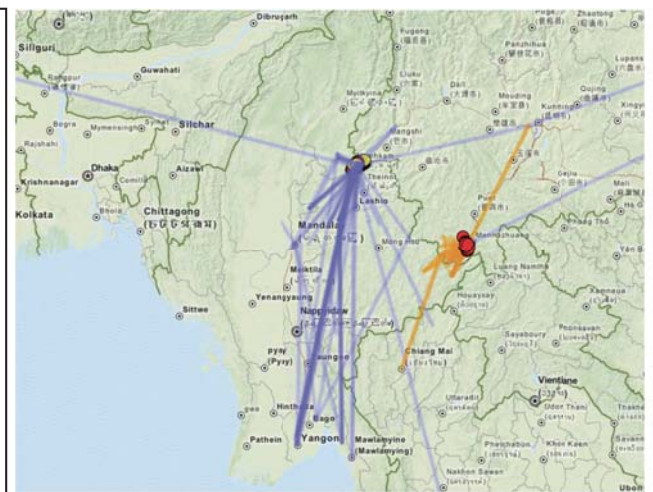


Fig. 4-43

上座仏教の断絶と復興

——中国雲南省・西双版纳における寺院と僧侶の時空間マッピング——

文教大学

長谷川 清

1. はじめに

本報告は、中国雲南省の西双版纳タイ族自治州（Sipsong Panna, Xishuangbanna Dai Autonomous Prefecture、西双版纳と略記）で実施した仏教寺院と出家者の移動に関する時空間マッピングの調査データに基づくものである。雲南省にある8つの民族自治州のうち、西双版纳は徳宏（Dehong）タイ族ジンポー族自治州とともに、上座仏教徒が集中する地域である。現地調査は2009年及び2010年の8月～9月に行ったが、筆者は1981年4月に初めて西双版纳を訪れた。以来、同地域の社会変動と文化変容に関する調査研究を継続してきた。

西双版纳では盆地政体＝ムアン（Muang、Meng、中国語表記：勐）のゆるやかな連携によるタイ系民族（自称：タイ・ルー Tai Lue）の仏教王権が早くに形成され、元朝以降における中華帝国の間接統治のもとで存続し、「車里」の名称で表わされてきた。中華民国期に直接支配への転換が試みられたが、中華人民共和国の成立（1949年）以後、タイ（傣、Dai）族を中核とする民族自治州が設置され、社会主義化が進展した。自治州の首府は景洪市に置かれている。タイ族の他に、ハニ（哈尼、Hani）族、ラフ（拉祜、Lahu）族、プーラン（布朗、Bulang）族、ジノー（基諾、Jinuo）族、漢（Han）族が居住している〔Fig. 5-1, 5-2, 5-3〕。

2. 調査地の概況

西双版纳には瀾滄江（Langcangjiang、メコン川上流部）水系に属する山間盆地が多数分布する。こうした山間盆地は水稻耕作の適地であり、タイ族の集落が多く立地する。王都が置かれてきたツェンフン（Jinghong、景洪）、ムンロン（Menglong、勐龍）、ムンハム（Menghan、勐罕）、ムンハイ（Menghai、勐海）、ムンツェー（Mengzhe、勐遮）、ムンラー

（Mengla、勐腊）などは西双版纳の代表的なムアンである。ツェンフン盆地の場合、長期にわたって王権所在地であった点において、他のムアンにはない属性を帯びている。

現地調査ではツェンフン盆地の嘎洒鎮（中国語ピンイン表記：Gasa Zhen、タイ・ルー語ではカート・サーイ Kat Sai）の67村落（バーン Ban、中国語表記：曼）を対象にしたが、タイ族以外にいくつかのクム人村落も含んでいる。これらの村落にはそれぞれ1つの寺院が建立されている。1村落＝1寺院という関係を便宜的に「1村1寺」（1 village 1 temple）と呼んでおく〔Fig. 5-4〕。

3. 西双版纳の上座仏教

雲南省の「宗教」は、仏教（チベット仏教、大乘仏教、上座仏教）、イスラーム、キリスト教（カトリック、プロテスタント）、道教からなるが、上座仏教は東南アジアとの国境地域に集中している。2002年度の統計資料によると、雲南省に居住する上座仏教徒数は約89万人で、タイ、プーラン、アチャン（阿昌、Achang）、ドアン（德昂、De'ang）などの諸民族が信仰している。地域別には、西双版纳29万人、徳宏（Dehong）32万人、思茅（Simao）11万人、臨滄（Lincang）13万人、という状況である。各宗教の聖職者人数を比較してみると、上座仏教では西双版纳が最も多い値となっている。この点は徳宏と対照的である〔Fig. 5-5〕。

西双版纳に伝播した上座仏教は東南アジア方面との往来を通じてスリランカ大寺派（Mahavihara）であり、ヨン派（Yuan Sect）の系統に属している。伝播の時期や経路に関しては史料が少なく、不明な点が多い。研究者の間でも意見が分かれており、14世紀から15世紀にかけてタイ北部（Tai Yuan）やケントゥン（Tai Khun）などを經由して伝播したという説が有力である。コン・ムアン（Khon Muang、Tai

Yuan) やケントゥンのタイ・クーン (Tai Khun) の仏教実践との共通部分も多く、ミャンマーのシャン仏教からの影響が顕著な徳宏地区の上座仏教とは多くの点で違いがある [Fig. 5-6]。

4. 上座仏教の断絶と復興

中華人民共和国の成立以降、西双版纳では他の少数民族地域と同様、社会主義的な集団化に向けた土地改革や民族・宗教政策が実施されたが、1950年代前半のそれは社会主義改造を志向していたとはいえ、比較的穏健な内容であった。その後、それらを否定する形で大躍進 (1958年)、文化大革命 (1966～76年) が進行した。特に文化大革命の期間にはすべての宗教実践は「封建迷信」として批判弾圧され、政治運動の攻撃対象になった。こうしたなかで、出家者は還俗や国外退去を余儀なくされ、寺院や仏塔 (That) が破壊された。1980年代以降、再び緩和された宗教政策と改革・開放政策のもとで復興したとはいえ、実践仏教は様々な面で断絶の事態を経験しており、その影響は今日なお色濃く残っている。

1950年代以降の西双版纳における上座仏教の変遷を確認していこう。50年代初期、西双版纳には19ムアンに574の村落があった。寺院を有する村落は452を数え、78%の村落が寺院を有していた値になる。止住者数は僧侶 (Tu) 930人、見習僧 (Pha) 5560人であった。1寺院あたりの出家者数を算出してみると、僧侶1.6人、見習僧9.6人である。大躍進の前年 (1957年) では寺院数594、僧侶数1034人、見習僧数6568人という状況である。1寺院あたりの数値は僧侶1.7人、見習僧11人となる。

1981年の数値をみてみよう。大躍進政策が開始される以前の数値 (1957年) と比較すると、寺院数145、僧侶数36人、見習僧数655人と大きく後退している点が指摘できる。36人の僧侶はみなミャンマー側から来た僧侶だったとの報告もある。1寺院あたりの数値は僧侶0.2人、見習僧4.5人となる。1950年初めの数値を基準とすれば、寺院25%、僧侶3.8%、見習僧11.6%の状態に落ち込んでいる。つまり75%の村落には寺院がなく、僧侶は皆無に近い状態だったのである。しかしその後、村落レベルの仏教復興が急ピッチで進み、寺院、僧侶、見習僧のいずれにおいても増加していく。3年後の1984年の時点において寺院数は405を数え、僧侶数338人、見習僧数6309人となった。寺院は1950年代初めを基準とすれば、その70%が復興したことになり、1寺院あたりの数値も僧侶0.8人、見習僧15.5人となっている [Fig. 5-7]。

以上を通じて、西双版纳の上座仏教は国家の宗教政策によって断絶した後、1980年代以降、急速に復興したことが明らかである。僧侶や見習僧が止住する、在家の人びとが布施や仏教儀礼を行うための寺院という空間を再び作るという行為は、タイ族の人びとにとって、自分たちの精神文化やアイデンティティを取り戻す実践でもあった。復興を進めようとする人びとは、村落コミュニティで保持されてきた国境を跨ぐ地縁的關係や親族のネットワーク、生業経済を通じての結びつきなどを通じて、寺院の再建やサンガの組織再生の課題に対処し、それを実現していった。国境を跨いでタイやミャンマー・シャン州に居住する人びととのつながりを介して復興と再生を遂げたのである [Fig. 5-8, 5-9]。

筆者は1986 (仏暦2529) 年10月に訪れたカート・サーイの曼貢寺院 (Vāt ban kum) 村の寺院を訪ねたことがある。当時、寺院には僧侶1人、見習僧21人が止住していた。見習僧としての出家慣行の復活は、学齢期にある男子児童が途中で義務教育を放棄し、退学する現象を引き起こした。寺院の再建が進み、住職が寺院に留まるようになると、タイ族村落では見習僧になる男子児童が急増し、問題となった。

5. 寺院のネットワークとサンガ

西双版纳において寺院は、ワットロン (Vāt Lon)、ワットラツァターン (Vāt Ratsathan)、中核的な布薩堂 (Kau Bosut) を備える中心寺院 (Vāt Kau)、一般村落の寺院 (Vāt) に区別されている。いずれのタイプの寺院も出家者の構成は同じである。すなわち、住職役のトゥロン (Tu Long、以下では住職と表記)、得度年数の短く経験の少ない僧侶 (Tu Noi)、見習僧 (Pha) によって構成されるのが一般的である。

1950年代に行われた実地調査によれば、景洪では69寺院がそれぞれ中心的な寺院を核に5つの区域にまとめ、緩やかなネットワークを作っていた。旧来のカート・サーイには約40ヶ村の寺院があったが、同区の村落寺院を束ねる中心的な寺院として、その役割を果たしていたのは曼洒寺院 (Vāt ban sai) である。この寺院は歴史が古く、ワットラツァターンの称号 (Vāt Ratsatan Sili Tsom Muang Ban Sai) を有し、この地区における中核的な寺院とみなされている。曼洒寺院についていえば、1987年では再建されてまもない状態であったが、複数の見習僧が止住していた [Fig. 5-10]。

当時、再建されたばかりのコンクリート製の真新しい寺院を多くの村落で見かけたが、なかには復興の初期を思わせる草葺きの寺院もあった。曼養広寺

院 (Vät ban jan kwan) がそれである。この寺院はその後、コンクリート製で立て直され、仏塔も建立された。2009年の現地調査の際、額縁に入った仏塔再建記念の写真を僧房の壁に見つけたが、それには僧侶1人と見習僧7人が写っていた。村人に確認したところ、前者はタイ国方面から招かれ、後者は全員が同村の出身者であった [Fig. 5-11]。

6. 僧侶の移動と出身地

1990年代になり、政府による宗教管理の体制は確立していく。国外からの入境者については村落寺院の住職を務める状況を放置できないという理由で、村落寺院に止住する中国籍でない僧侶を締め出すようになった。その多くはミャンマー側から越境してきた僧侶であった。これにより、村落の側ではシャン州出身のタイ族を住職として迎えることが困難になった。その結果、プーラン族の僧侶に対する需要が高まっていく。タイ族の村落では出家する男性の数が減少する一方、仏教儀礼の実施、寺院の管理運営などの理由から各村落では依然として僧侶が必要とされている。

調査データの整理と分析を通じて明らかになるのは、出家者の移動が西双版纳をまとまりとした地域で行われていることである。ムンヨンなどの西双版纳に隣接したミャンマー・シャン州の一部がその範囲に含まれるが、国境によって隔てられているとはいえ、ルーの居住地という点では同じである。曼洒寺院を中心とした寺院間のネットワークの現状について、次の3点を指摘しておきたい。

カート・サーイの場合、曼洒寺院を含めた4つの寺院に布薩堂がある。そのなかで曼洒寺院の布薩堂には同区に含まれる寺院の住職が定期的に集合する。そうしたなかで、24寺院 (58%に相当) では、住職1人もしくは住職を含めた2、3人だけの構成であり、見習僧は0人という状態である。また、1寺院の平均人数をみると、僧侶1.07人、見習僧1.07人という数値になるが、1980年代から90年初頭において大きく異なるのはこの点である。山地にあるクム人の村落寺院 (Vät ban bok näm kät、曼播南嘎) だけが16人の見習僧がいる点で突出している [Fig. 5-12]。

寺院に止住する僧侶の出身地については、何を基準とするかでいろいろな分類が可能になるが、行政区画でいえば、景洪 (市) 地区 (ツェンフン、ムンロン、ムンナム)、勐海 (県) 地区 (ムンハイ、ムンフン、ムンツェー、ツェンツウン、布朗山など)、ミャンマー・シャン州 (ムンヨン他) に分けられる [Fig. 5-13]。それをふまえた上で、ツェンフン盆地の

内/外で区分—盆地内村落の出身者 (type 1)、西双版纳の他地区 (ムアン) の出身者 (type 2)、布朗山布朗族郷その他の出身者 (type 3)、ミャンマー側の出身者 (type 4) —してみると、出家者の移動に関する地理空間の位相が明らかになる。また、タイプ3はタイ族の僧侶ではなくプーラン族であるという点で、他のタイプと異なっている [Fig. 5-13]。

出身地別にみると、ツェンフン盆地の嘎洒鎮の村落出身者が最も多いことから、ツェンフン盆地内の村落出身者によって寺院の止住者が占められてきたことが推測される。次いで、勐海県に属するムアン内の村落出身者があげられるが、国境の外側ではシャン州のムンヨン [Mong Yawng] が重要な拠点である。また特筆すべきは、布朗山布朗族郷出身者も一定数占めている点である。タイプ1からタイプ4までの住職の略歴を示しておこう。

曼嘎村寺院 (Vät ban ka) の住職 [Fig. 5-14, Photo18-19] はタイプ1である。1968年に曼嘎村に生まれた。8歳になった時、村内にある曼嘎村小学に通学したが、1年ほどで行かなくなった。その後、同村では寺院の再建が始まったので、1982年 (タイ暦4月) に見習僧として出家した。一緒に同村の15人が出家した。1988年 (タイ暦6月) に曼洒寺院の布薩堂で得度式を行った。曼嘎村の寺院の住職になる以前、2年間ほど曼養広寺院 (Vät ban jan kwan) で住職を務めたが、曼嘎村の住職の還俗にともない、自分の出身村に戻った。

曼賀納寺院 (Vät ban ho na) の住職 [Fig. 5-14, Photo20-21] はタイプ2である。1972年、勐海県景真曼恩村委會曼給村に生まれた。仏教が復興し始めた1982年、10歳で見習僧になった。その後、12歳から19歳までムンヨンの寺院 (Vät mai sili xam) に過ごした後、曼給村に戻り、20歳で得度した (タイ暦5月)。25歳まで同村で住職を務め、その後1年間、チェンマイ市内の寺院 (Wat pan ven、Tambon Phra Sing) で過ごした。タイ暦5月に曼給村の寺院に戻り、9年間止住し、2007年タイ暦1月15日に曼賀納寺院に来た。

曼丟寺院 (Vät ban tiu) の住職 [Fig. 5-15, Photo 22-23] はタイプ3である。1978年、勐海県の布朗山郷章家老寨に生まれた。プーラン族である。小学校には行っておらず、15歳の時、同寺院で見習僧になった。6人が一緒に出家した。同村には布薩堂を有する大きな寺院がある。20歳で得度した後、同寺院の住職を12年務めてから、曼丟寺院に来た。

タイプ4の住職 [Fig. 5-15, Photo24-25] としては、曼洒村の布薩堂に集まるグループの寺院ではないが曼令寺院 (Vät ban liq) の事例を挙げておこう。ム

ンヨーンのタイ・ルーの村落から来たが、カート・サーイの曼英村にいる姉を通じて、曼令の村人が住職を求めていることを知った。ミャンマー側の住職の招聘される場合、中国側に親族が存在するか否かが一つの重要な契機となっているようである [Fig. 5-14, 5-15]。

7. 今後の課題

西双版纳を含む、東南アジア大陸部の境域において保持されてきた僧侶のネットワークと村落寺院をめぐるローカルな社会的諸関係の実態を明らかにし、上座仏教徒社会の動態を周縁から検討していく作業は始まったばかりである。復興した上座仏教をめぐる、西双版纳の寺院と出家者の移動に関する時空間マッピングの課題は多いが、社会主義体制への移行後に進行した上座仏教の断絶と復興のダイナミクスについて、村落レベルのミクロなデータの蓄積から、その特徴を明らかにしていくことはきわめて大きな意義がある。ツェンファン盆地では“1村1寺1僧侶(住職)”の止住形態に推移しつつあることがもはや明らかである。他地域から僧侶を招くことで対応している村落の比率が大きく、その対象は山地に居住する上座仏教を信仰してきたプーラン族にまで及んでいる。これはタイ族の村落コミュニティとローカルな交流圏を単位とした人的なつながりや村落内の継承によって寺院の運営や仏教的知識の伝授を図るシステムが危機に直面しており、それに亀裂や断絶が生じていることを表わしている。こうした変化と社会主義成立以後の宗教政策、学校教育制度がどのような関係にあるのかの検討が今後必要である。また、国境を越えて広がるヨン派 (Yuan Sect) の宗教実践が重要な役割を果たしていることが確認された。この点の実態の解明も不可欠である [Fig. 5-16, 5-17]。

参考文献

長谷川清

- 2011「西南中国におけるパーリ仏教」『新アジア仏教史 04 スリランカ・東南アジア 静と動の仏教』、324 - 381 (小島敬裕と共同執筆、324 - 352 頁を担当) 頁、佼正出版社。
- 2011「西双版纳における上座仏教と僧侶の移動、ネットワーク - 1980年代以降の仏教復興現象と時空間マッピング -」http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/project/files/2011/06/Mapping_Practices_NL_2.pdf、京都大学地域研究統合情報センター。
- 2013「上座仏教の断絶と復興をめぐる時空間マッピングの課題 - 中国雲南省・西双版纳の寺院と止住者のデータ分析を中心に -」『宗教と地域の時空間マッピング・ニューズレター 第7号』http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/project/files/2013/12/Mapping_Practices_NL_7.pdf、京都大学地域研究統合情報センター。

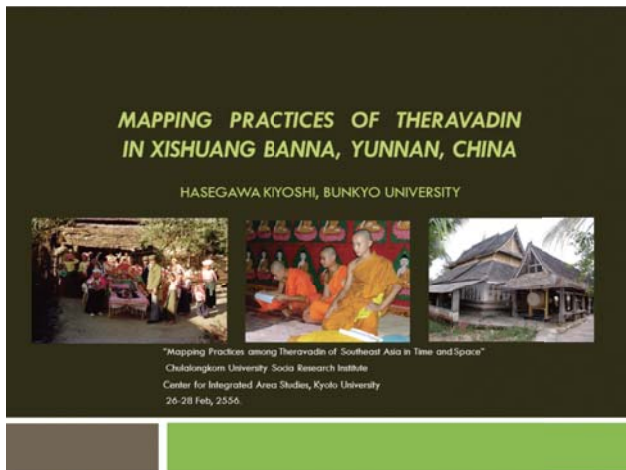


Fig. 5-1

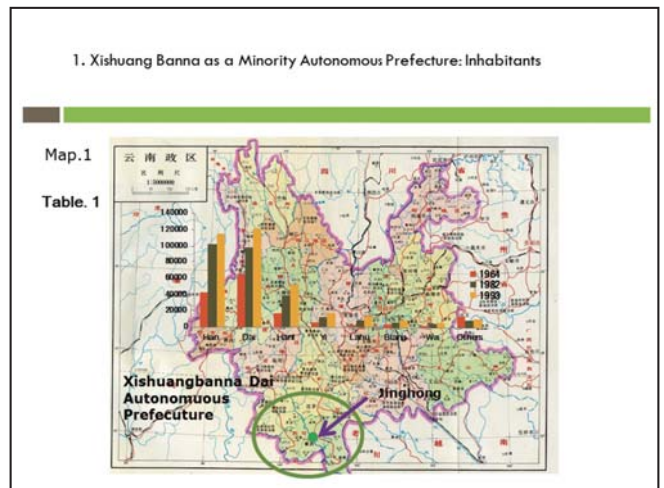


Fig. 5-2

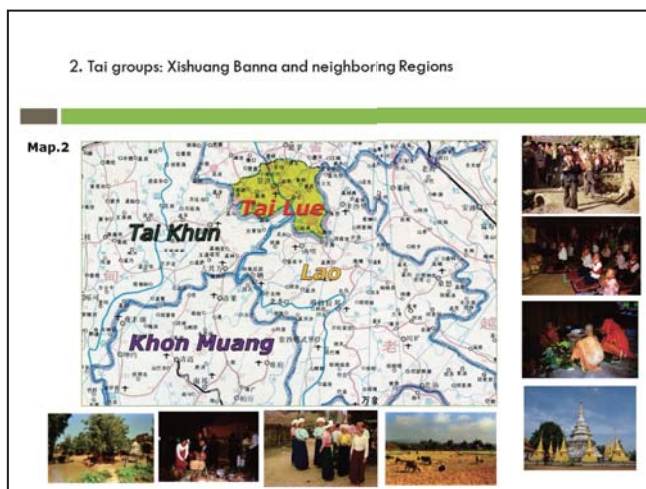


Fig. 5-3

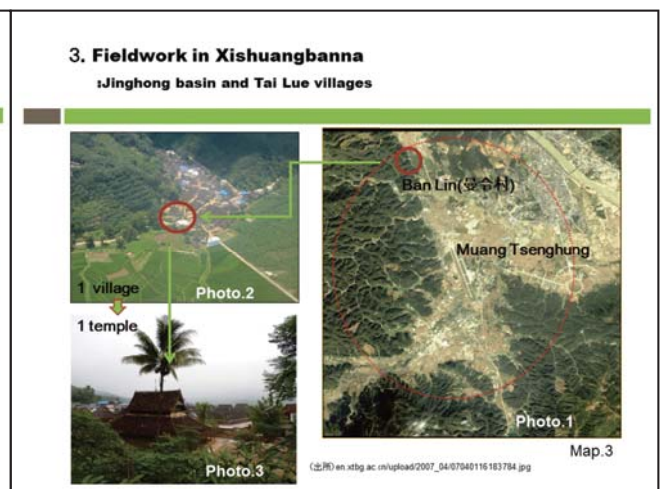


Fig. 5-4

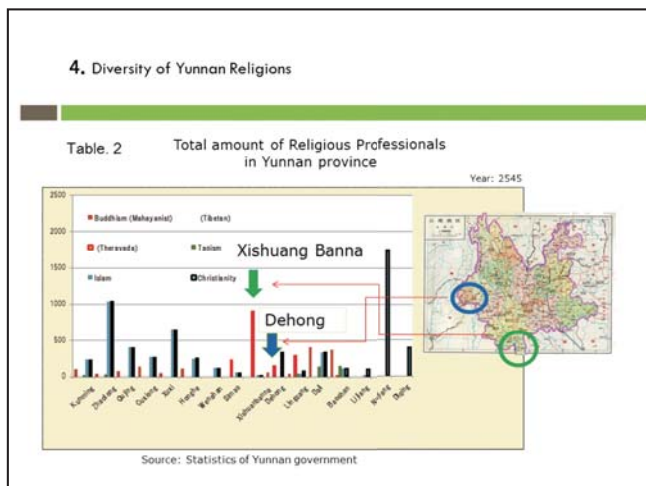


Fig. 5-5

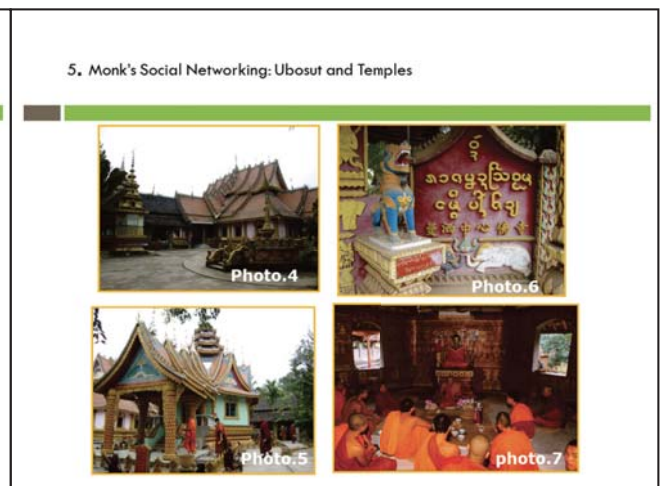


Fig. 5-6

6. Restoration of Theravada Buddhism: Temples, Monks and Novices

Table.3 Great Leap Forward (2501) Cultural Revolution (2509-2529)

B.E. Year	Temples	Total number of Monks	Number of Monks per one temple	Total number of Novices	Number of Novices per one temple
2493 (1950)	574	930	1.4	5560	9.6
2500 (1957)	594	1034	1.7	6568	11
2524 (1981)	145	36	0.2	655	4.5
2525 (1982)	n.d.	115	—	4365	—
2526 (1983)	n.d.	n.d.	—	n.d.	—
2527 (1984)	405	338	0.8	6309	15.5
2528 (1985)	415	426	1.05	5417	13.05
2529 (1986)	447	546	1.2	5507	12.3
2530 (1987)	485	670	1.3	5131	10.5
2531 (1988)	494	643	1.3	4337	8.7
2532 (1989)	503	664	1.3	5125	10.1
2533 (1990)	505	636	1.2	4926	9.7
2534 (1991)	526	646	1.2	6833	12.9

Sources: Several Chinese documents

Fig. 5-7

7-1. Temples in Xishung Banna by Year

Table.4

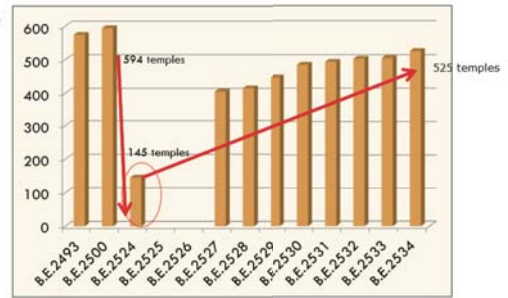


Fig. 5-8

7-2. Monks and Novices in Xishung Banna by Year

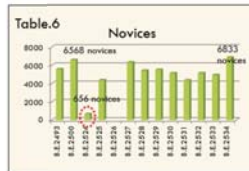


Fig. 5-9

Case.1 Ban Sai Temple (1561020111 曼酒村佛寺)



Fig. 5-10

Case.2 Ban Yang Kwang Temple (1561020503 曼养广村佛寺)

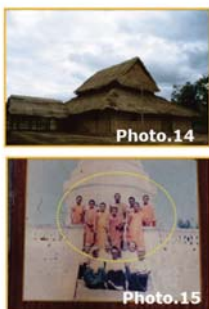


Fig. 5-11

8. Sangha and local dynamics

Table.7

Code	Temple	Uboud	Thal	Taling	Ta	Pha	Code	Temple	Uboud	Thal	Taling	Ta	Pha
1561020091	曼野村佛寺 Vāṭ ban som	0	0	0	0	0	1561020030	曼那村佛寺 Vāṭ ban tāu	0	0	0	0	0
1561020092	曼那村佛寺 Vāṭ ban tong gom	0	0	0	0	0	1561020035	曼那村佛寺 Vāṭ ban meca	1	0	0	0	0
1561020093	曼那村佛寺 Vāṭ ban wrog	0	0	0	0	0	1561020036	曼飞龙村佛寺 Vāṭ ban fai lung	0	0	0	0	0
1561020094	曼那村佛寺 Vāṭ ban tsang	0	0	0	0	0	1561020039	曼那村佛寺 Vāṭ ban ho hui	1	0	0	0	0
1561020095	曼那村佛寺 Vāṭ ban dnyang kung	0	0	0	0	0	1561020040	曼那村佛寺 Vāṭ ban hoan tra meu	1	0	0	0	0
1561020096	曼那村佛寺 Vāṭ ban weng	0	0	0	0	0	1561020038	曼那村佛寺 Vāṭ ban soe saung	1	0	0	0	0
1561020097	曼那村佛寺 Vāṭ ban zik	1	0	0	0	0	1561020050	曼那村佛寺 Vāṭ ban ho ma	1	0	0	0	0
1561020098	曼那村佛寺 Vāṭ ban tsang tsak	1	0	0	0	0	1561020062	曼那村佛寺 Vāṭ ban ho tsung	1	0	0	0	0
1561020099	曼那村佛寺 Vāṭ ban ka ko	0	0	0	0	0	1561020053	曼那村佛寺 Vāṭ ban jang kwang	1	0	0	0	0
1561020110	曼那村佛寺 Vāṭ ban tsu	0	0	0	0	0	1561020054	曼那村佛寺 Vāṭ ban jang kwang	0	0	0	0	0
1561020111	曼那村佛寺 Vāṭ ban sok	0	0	0	0	0	1561020056	曼那村佛寺 Vāṭ ban hong zay	0	0	0	0	0
1561020091	曼那村佛寺 Vāṭ ban kung vāt	0	0	0	0	0	1561020058	曼那村佛寺 Vāṭ ban tsang tsung	1	0	0	0	0
1561020092	曼那村佛寺 Vāṭ ban tsu	1	0	0	0	0	1561020057	曼那村佛寺 Vāṭ ban kum	1	0	0	0	0
1561020093	曼那村佛寺 Vāṭ ban tsak	0	0	0	0	0	1561020059	曼那村佛寺 Vāṭ ban jang	0	0	0	0	0
1561020094	曼那村佛寺 Vāṭ ban tsang	0	0	0	0	0	1561020058	曼那村佛寺 Vāṭ ban tsam he	1	0	0	0	0
1561020095	曼那村佛寺 Vāṭ ban kwang	1	0	0	0	0	1561020060	曼那村佛寺 Vāṭ ban jang	1	0	0	0	0
1561020096	曼那村佛寺 Vāṭ ban tsang weng	1	0	0	0	0	1561020061	曼那村佛寺 Vāṭ ban tsang tsam	1	0	0	0	0
1561020097	曼那村佛寺 Vāṭ ban ka ko	1	0	0	0	0	1561020062	曼那村佛寺 Vāṭ ban kwang	0	0	0	0	0
1561020098	曼那村佛寺 Vāṭ ban tsak tsam tsak	1	0	0	0	0	1561020063	曼那村佛寺 Vāṭ ban ka	1	0	0	0	0
1561020099	曼那村佛寺 Vāṭ ban tsu	1	0	0	0	0	1561020065	曼那村佛寺 Vāṭ ban tsam	0	0	0	0	0

(出所) 筆者の調査に基づく(2009年9月)

Fig. 5-12

9. Monk's Motility and Cross-border Ties

Map.4

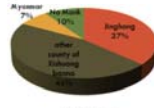
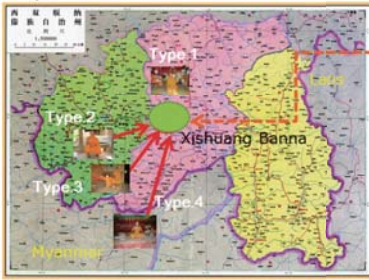


Fig. 5-13

10-1. Monk's Monastic Living

Type. 1



Type.2

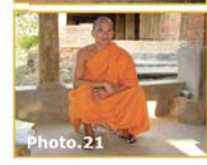


Fig. 5-14

10-2. Types of Monk's Monastic Living

Type.3



Type.4



Fig. 5-15

11. Concluding Remarks

1. Transformation into "1 village 1 temple 1 monk" Type ?
2. Various Impacts of National Education System
3. Control and Management of "Religion" under China's Minority Policy
4. Population Movement and Local Social Networks including the Flux of Theravadins
5. Mapping Practices and Inter-Regional Comparative Study of Buddhist Community Dynamics



Elementary School



Blang Monks and Novices stayed at Tai Village temple

Fig. 5-16

12. Ordination Chart and National-Regional Context in Xishuang Banna

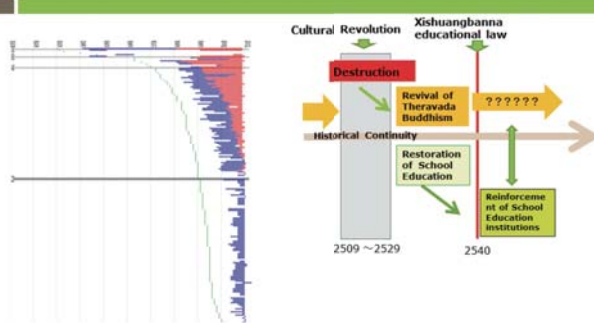


Fig. 5-17

中国雲南省徳宏州における仏教徒社会のマッピング

京都大学地域研究統合情報センター研究員

小島 敬裕

1. はじめに

本稿では、中国雲南省徳宏タイ族ジンポー族自治州瑞麗市の仏教関係施設や、出家者、在家の儀礼専門家ホールー (*ho lu*) の移動経路に関するマッピングで得られた成果の一部を紹介する。

瑞麗は、中国雲南省のミャンマー国境に面した盆地に位置し、その平地部には伝統的にタイ族が多く居住してきた。徳宏タイ語でこの盆地はムン・マーウ (*Məŋ Mau*) と呼ばれるが、1886年にミャンマーがイギリスによって植民地化された後、清朝とイギリス植民地政府は国境線の画定を開始し、その結果、ムン・マーウは中国、ミャンマー両国家に二分されたのである (Fig. 6-3)。

Fig. 6-2の写真は、中国雲南省徳宏州瑞麗市をミャンマー側から撮影したものである。特に近年、国境の瑞麗江 (徳宏タイ語ではラム・マーウ *Lăm Mau*) を挟んだ中国側では、急速な経済発展が続いていることがわかる。

瑞麗の人口の多数を占めるタイ族は、ビルマ語でシャン、タイ国語ではタイヤイと呼ばれる人々と同系統である。その大部分が盆地 (*məŋ*) に居住し、水田耕作に従事している。そして彼らの大部分が上座仏教徒である。

先行研究は、徳宏の上座仏教には4つの教派があるとす。これらの教派のうち、まずポイゾン (*Poi tson*) 派が11～17世紀にミャンマーより伝来し、次はヨン (*Yon*) 派が15世紀ごろ北タイのラーンナー王国から、さらにゾーティー (*Tso ti*) 派が15～18世紀にミャンマーから、最後にトーレー (*To le*) 派が18～19世紀にミャンマーから伝来したとされる [江 1983; 張編 1992; 長谷川 1996]。4教派中、3教派がミャンマーに起源を持つこともあり、徳宏の仏教は歴史的にミャンマー仏教の影響を強く受けてきた。そのため、タイとのつながりが強い西双版纳とは異

なり、徳宏の仏教実践にはシャンやビルマとの共通点が多い。

その一方で、上座仏教徒社会の他地域とは大きく異なる特徴が見られる。それは Fig. 6-7の表からもわかるように、徳宏の1寺院あたりの出家者数が、東南アジア大陸部の仏教徒諸国と比べてきわめて少ないことである。また出家者が止住しない「無住寺」が118寺院中99寺院 (84%) に及んでいる。この要因としてまず考えられるのは、大躍進 (1958～1960)、文化大革命 (1966～1976) 期における宗教実践の断絶の影響である。大躍進、文革期には多くの出家者が還俗するかミャンマー側へ逃亡し、中国国内のサンガは大きな影響を被った。だが徳宏と同様に仏教の断絶を経験した西双版纳において、文革後に出家者数が再び増加に転じたことと比較すると、徳宏のケースは対照的である。またボル・ポト時代の内戦による仏教実践の断絶と復興を経験したカンボジアと比較しても、徳宏の出家者数は非常に少ないことがわかる。

では大躍進前の状況は、上座仏教徒社会の他地域と同様だったのだろうか。この点について確認するために、徳宏における大躍進前から現在までの出家者数の推移を示した Fig. 6-8の表をご覧ください。統計資料からわかるのは、確かに大躍進・文革前の出家者数は現在より多かったのだが、僧侶、見習僧の人数は、それぞれ1寺院平均で1人に満たず、他地域に比べれば決して多いとは言えないことである。

タイを始めとする上座仏教徒社会の他地域では、「福田」としてのサンガは在家者の積徳行にとって不可欠な役割を果たすとされてきた。ではなぜ徳宏において僧侶が少数にとどまるのだろうか。またそうした状況において、徳宏の仏教徒はどのように功德を積んでいるのか。さらに大躍進・文革による仏教実践の断絶後、どのように復興を遂げてきたのか。これらの問題について検討するのが、本稿の目的であ

る。

筆者は、2006年から2007年にかけて、瑞麗のTL村において長期定着調査を行った。その後、本プロジェクトの一環として、2009年と2010年の雨安居期間中に、瑞麗市内の118の仏教関係施設（寺院112、仏塔3、仏足跡3）において、出家者、寺子、女性修行者に対する悉皆調査を実施するとともに、在家の儀礼専門家ホールーに対しても可能な限り調査を行った。本報告は、上記の調査で得られたデータを、情報処理の手法を援用しつつ分析した成果の一部である。

2. 徳宏の仏教実践の特徴

まず本節では、なぜ徳宏においてかくも出家者が少数にとどまるのか、という問題について検討しよう。その背景には、上述の大躍進・文革の影響のみならず様々な社会的要因が考えられるが、最も重要なのは出家慣行の相違である〔小島 2011, 2014〕。東南アジア大陸部や西双版納では、出家によって本人のみならず両親も功德を積むことができると考えられているため、男子の出家が人生儀礼のように習慣化されており、出家者が比較的多く見られる。これに対し徳宏では、仏教徒社会の他地域で一般的な男子の出家慣行が大躍進・文革以前から存在しなかった。「出家はしたい者がすればよく、強制するものではない。我々のやり方はデモクラシーである」とまで言う僧侶もいる。

では、出家者が少数にとどまる状況において、徳宏の仏教徒たちはどのように功德を積んでいるのだろうか。ここでは徳宏に特徴的な積徳の方法について紹介する。

まず各戸の室内の最も奥に設置されている仏典棚 (*sey ta la*, Fig. 6-14) への供物の奉納である。仏典棚の中に仏像ではなく仏典 (*ta la*) を置き、3本または5本の花を供える。そして各戸で個別に実施する儀礼は、仏典棚の前で行われる。

各村落での集合儀礼は、寺院 (*tsɔŋ*, Fig. 6-15) 内の仏像 (*pha la*) に対して行なわれる。寺院に僧侶が止住する場合、本堂の仏像後部の部屋または布薩堂 (*sim*) に止住する。また寺院境内には雨安居期間中に寺籠りする老人 (男性ヒン *xij*・女性ラーイ *lai*) 用の宿泊施設 (*ho sin*) が設置されている。ちなみに、墓は寺院境内になく、死者は村はずれに土葬されるのが普通である。

盆地全体の儀礼の際には、仏塔 (*kɔŋ mu*, Fig. 6-16) に対して供物を奉納する。瑞麗市内には、大規模な仏塔が3箇所あるが、これらの仏塔はミャンマー

と同様、村落寺院とは基本的に分離されている。仏塔はムン・マーウ盆地全体を守護する存在とみなされる。

さらに村人たちは、時に瑞麗市内に3箇所ある仏足跡 (*tsak to*, Fig. 6-17) を訪れる。これは仏が存命中に徳宏を訪れた際の足跡と言われる。寺院を持たない村落は、瑞麗市内に6村落のみだが、そのうち3か村のヒン・ラーイは、山中の仏足跡境内の宿泊施設へ雨安居期間中の布薩日 (*vän sin*) に集まり、八戒を守って寺籠りを実践している。

こうした実践において重要な役割を果たしているのが、各村落に必ず1名存在する在家男性のホールーである。ただし必ずしも自村出身者であるとは限らず、他村に居住し、儀礼の際のみ招かれるケースも多い。ホールーのホーは「頭」、ルーは「布施」を意味することからもわかるように、布施儀礼に不可欠な役割を果たす。また仏典朗誦の専門家でもあり、儀礼の際には寺院で誦経、説法する。村人はそれを聴くことによって仏教に関する知識を身につけ、功德を積む。

徳宏では寺院に出家者が止住するケースは少数派だが、瑞麗市内の19村落の寺院に出家者 (僧侶 *mon tsay/tsäu tsay*、見習僧 *tsäu say*) が止住している。住職が止住しない村落においても、村の除穢儀礼などの際に村人は他村から僧侶を招き、護呪経 (*pa lit*) や羯磨文 (*kām pa va*) の朗誦によって悪霊を祓う。特に羯磨文は本来、得度式の際に用いるものであり、ホールーが誦唱することはできないため、僧侶の存在が必要とされるのである。また大規模な儀礼を開催する際には、在家者の布施を受け取り、授戒、説法する。

それではここで、徳宏の仏教実践の特徴についてまとめておこう。東南アジア大陸部の上座仏教徒社会においては、男子が一生に一度は出家することが理想とされている。また出家者は聖職者として固定されているわけではなく、出家も還俗も比較的自由である。戒律によって労働を禁じられた出家者は、在家者からの寄進によって生活し、在家者は出家者への寄進によって功德を積む。功德を積むことによって現世または来世における「善果」が生じると考えられているためである。

これに対し、徳宏では男子の一生に一度は出家するという慣行が存在しない。そのため出家者は少数にとどまり、住職が止住しない無住寺が多数を占める。こうした村落では、出家者が介在せずとも、在家者と仏典、仏像、仏塔や仏足跡など仏にまつわる聖遺物との直接的なかわり、日常的な積徳行がなされる。その際、在家の儀礼専門家ホールーが媒

介者として重要な役割を果たしている。出家者は悪霊の除禳儀礼や大規模な仏教儀礼の際に必要とされるが、その場合には他寺院から一時的に招くことによって対処する。このように、徳宏と東南アジア大陸部では僧俗間の関係に相違が見られるのである。

以上の特徴をふまえつつ、次に大躍進・文革による断絶を経た徳宏の仏教実践が、どのように復興してきたのかという問題について検討しよう。

3. 仏教実践の断絶と復興

まず1958年に始まる大躍進の際には、多くの出家者がミャンマー側へ逃亡するか還俗する。大躍進後に一部は徳宏に戻るが、1966年に文化大革命が始まると、再びすべての出家者がミャンマー側へ逃亡、または還俗する。さらにホールーも活動を停止される。仏典は焼却、寺院、仏塔、ホーシンは紅衛兵が破壊し、徳宏の仏教実践は断絶する。文革後の1978年以降、宗教信仰の自由が認められ、1980年代から寺院、仏塔、ホーシンの再建、仏典の筆写、出家者のミャンマー側からの移住が開始される。その結果、徳宏の仏教実践は徐々に復興していく。

文革後の徳宏において、最初に仏教実践を再開したのは、日常的に5戒を守り、雨安居期間中の布薩日に寺へ籠って8戒を守る老人ヒン・ラーイである。彼らにとって、生前に功德 (*ku so*) を積み、来世では苦しみ (*tuk xa*) がないようにするための寺籠りは非常に重要な実践である。そのため、宗教信仰の自由が認められた直後にヒン・ラーイは仏塔の下から仏像を掘り起こして寺籠りを開始し、現在では老人の多くが参加するようになっている。

ヒン・ラーイの寺籠りの際には、仏像に対して寄進し、説法を聴くため、ホールーの存在が不可欠である (Fig. 6-25)。文革直後は、文革前の経験者らがホールーを務めていたが、彼らの高齢化によってミャンマー側からホールーが招かれるようになる。瑞麗市内112名のホールーの出身地を調査した結果、中国側出身者32名 (29%) に対してミャンマー側出身者80名 (71%) とやはりミャンマー側出身者が多数を占めていることがわかった。

一例として、ホールー T 氏の経歴について紹介しよう (Fig. 6-26)。T 氏はシャン州クッカイン (B: Kuthkaing) 郡 HP 村生まれで、14歳の時にカチン州モーフニン (B: Mohnyin、徳宏タイ語ではムン・ヤーン Møn̄ Yān) のゾーティー派寺院で出家する。故郷を遠く離れたモーフニンで出家したのは、彼の実家がゾーティー派に属していたからである。彼は16歳で還俗し、18歳で知人の紹介により瑞麗市 TL 村の

ホールーになった。

今回の悉皆調査で明らかになったのは、瑞麗では近年、T 氏のようにゾーティー派の寺院で出家した後にホールーになるケースが増加していることである。ゾーティー派はカチン州モーフニンにある寺院にのみ出家者が止住し、その他の寺院では日常的に、在家者のみで仏教実践を営んでいる。出家者は戒律を厳守し、仏典の朗誦法の教育を集中的に行うため、近年、ゾーティー派寺院で出家経験をもつホールーの評判が高まっているのである。特にゾーティー派出身のホールーが中心となり、1999年から毎年1回開催されている「仏法詩 (*lāy ka*)」講座にはムン・マーウ盆地全体の多くのホールーが参加する。

次に、出家者についてみてみよう。瑞麗市内で出家者の止住する寺院は118寺院中19寺院 (16%) と少数派にとどまるが、やはり住職を必要と考える村落もある。その場合、前述したように徳宏では文革前から男子が一生に一度は出家する慣行が存在しなかったため、住職の招請を希望する場合、ミャンマー側から招くのが一般的であった。

この傾向が、大躍進・文革による仏教実践の断絶を経て現在に到るまで変わっていないことは、Fig. 6-28からも読み取れる。徳宏と同様に社会主義の急進化による仏教実践の断絶を経験したのは、カンボジアと中国雲南省の西双版纳、徳宏の3地域である。このうちカンボジアを見ると、ポル・ポト時代に出家者が虐殺などによって完全に不在となる状態が生じている。西双版纳には1例、文革中にも出家者が存在しているが、これはタイへ逃亡したケースである。一方、徳宏に目を転じると、複数の出家者が見られる。しかし彼らは文革当時、中国国内に止住していたわけではなく、当時ミャンマー国内に止住していた僧侶が文革後に招請されたケースが多いため、このような相違となって現れるのである。

実際、出家者の内訳を調査すると、Fig. 6-29を見てもわかるように、中国出身者22%、ミャンマー出身者78%と、圧倒的にミャンマー側のシャン州出身者が多くなっている。Fig. 6-30に挙げたN師 (24歳) の例からもわかるように、彼らの多くは、シャン州の出身村の寺院で出家した後、先ほどのホールーとは異なり、ミャンマー中央部の教学寺院で教理学習を行う。その後、N師の場合は故郷のムセの寺院へ戻り、さらに中国側の同教派 (*kəŋ*) の寺院へと派遣された。中国側の寺院で住職を必要とした場合、基本的にはミャンマー側の同じ教派の寺院から招請しなければならない。その他、僧侶同士の関係あるいは在家者との関係で僧侶が中国側に招請される場合もあるが、原則としてはローカルな教派のネットワー

クが大きな意味を持っていることがわかる。

Fig. 6-31 は、瑞麗市内の寺院を主要教派ごとに色分けしたものである。しかし実際には、さらにいくつかのサブグループが存在し、それは国境を越えたネットワークで結ばれている。注目すべきは、これらの教派がすべてミャンマー政府によって1980年に公認された9教派に含まれないローカルな教派だということである。一方の中国側でも、公的には教派は統一されたと説明される。にもかかわらず、こうしたローカルな教派の存在は、徳宏の仏教実践において重要な役割を果たしているのである。

4. 結論

それでは最後に、今までの記述をまとめよう。徳宏の上座仏教においては、男子が一生に一度は出家する慣行がないことなどの要因により、出家者がきわめて少ないという特徴が見られる。そして在家者と仏にまつわる聖遺物との直接的な関係で日常的な仏教実践が成立している。その際、在家のホールーが媒介者として重要な役割を果たす。このように在家者が中心となって仏教実践が営まれているのである。文革後は、特にミャンマー側のシャン州出身者が徳宏における仏教実践の復興に貢献してきた。その際、ホールーの実践に関しては、地域に根ざすゾーティー派が大きな役割を果たしている。一方、出家者の大部分は、ミャンマー中央部で国家公認の教理解釈に則った教育を受ける。しかし中国側に住職として移動する際には、ミャンマーの公認9教派に含まれず、中国側でも公的には存在しないとされるローカルな教派のネットワークが重要な意味を持っているのである。

こうした徳宏の仏教実践の特徴は、出家者の存在を不可欠とする従来の上座仏教徒社会モデルとは異なる。また近代国家の成立以降、ローカルな教派がサンガ機構によって統合され、仏教実践の均質化が進行したとされる議論も単純には適用できない。では徳宏の実践形態は、きわめて例外的な事例なのだろうか。確かに、男子の出家慣行は他地域と異なっている。しかし在家者と仏にまつわる聖遺物の間で成立する実践は、上座仏教徒社会の他地域でも広く見られる。またローカルな教派が国境を越えたネットワークでつながれていることは、各国においてサンガ機構が成立した後も水面下では様々な教派のネットワークが存続していることを示唆する。つまり徳宏では、近代国家の表象する「正統」な上座仏教像とは異なる地域に根ざした仏教実践の特徴が、顕著な形で現れているとも考えられるのである。

引用文献

- 長谷川清. 1996. 「上座仏教圏における『地域』と『民族』の位相—雲南省、徳宏タイ族の事例から」林行夫編『東南アジア大陸部における民族間関係と「地域」の生成』総合的地域研究成果報告書シリーズ No.26. 文部省科学研究費補助金重点領域研究「総合的地域研究」総括班, 79-107.
- 江応樑. 1983. 『傣族史』成都：四川民族出版社.
- 小島敬裕. 2011. 『中国・ミャンマー国境地域の仏教実践—徳宏タイ族の上座仏教と地域社会』風響社.
- . 2014. 『国教と仏教実践—中国・ミャンマー境域における上座仏教徒社会の民族誌』京都大学学術出版会.
- 張建章編. 1992. 『徳宏宗教—徳宏傣族景頗族自治州宗教志』瀟西：徳宏民族出版社.

Mapping Practices of Theravadin in Dehong, Yunnan, China

KOJIMA, Takahiro
Researcher, CIAS, Kyoto University

1


Fig. 6-1

1. Introduction

China

border

Myanmar



Məṅ Mau seen from Myanmar side

2

Fig. 6-2

Məṅ Mau




3

Fig. 6-3

Tăi People

- ビルマ語でシャン、タイ国語でタイヤイと呼ばれる人々と同系統
- 盆地 (məṅ) に居住し、水田耕作に従事
- 大部分が上座仏教徒




4

Fig. 6-4

History of Main Sects (kaṅ) in Ruili

- ポイズン (Poi tsoṅ) 派
11~17世紀にミャンマーより伝来
- ヨン (Yon) 派
15世紀ごろ北タイのラーナー王国より伝来
- ゾーティー (Tso ti) 派
15~18世紀にミャンマーより伝来
- トーレー (To le) 派
18~19世紀にミャンマーより伝来




5


Fig. 6-5

Similarity with Shan and Burmese Practices

- 徳宏の仏教実践は、東南アジア大陸部における上座仏教徒社会の中でもシャンやビルマとの共通性が強い。



シャン文字で書かれた徳宏の仏典



パーリ語の部分はビルマ文字で筆記

6

Fig. 6-6

Difference with Other Buddhist Societies

- ・ その一方で、出家者がきわめて少なく、出家者が止住しない「無住寺」が多い(118寺院中99寺院、84%)という特徴が見られる。

	寺院	僧侶	1寺院あたり僧侶数	見習僧	1寺院あたり見習僧数	統計年
ミャンマー	5万6839	24万2891	4.3	30万5875	5.4	2550
タイ	3万5244	25万8163	7.3	7万0081	1.9	2550
ラオス	4140	8055	1.9	1万1740	2.8	2550
カンボジア	4237	2万4929	5.9	3万2421	7.7	2550
西双版纳	577	828	1.4	3998	6.9	2548
徳宏	602	90	0.1	101	0.2	2550

出典: ミャンマーは蔵本龍介氏、タイは林行夫氏、ラオスは吉田香世子氏、カンボジアは小林知氏のご教示による。西双版纳・徳宏は各州仏教協会への発表者の聴き取りによる。

Fig. 6-7

Historical Change of the Number of Monks and Novices in Dehong

- ・ もちろん大躍進・文革の影響は大きかった。
- ・ 確かに大躍進前の出家者数は現在より多かったが、僧侶、見習僧の人数は、それぞれ1寺院平均で1人に満たず、他地域に比べれば少ない。

	寺院	僧侶	1寺院あたり僧侶数	見習僧	1寺院あたり見習僧数
2499年(大躍進前)	632	236	0.4	139	0.2
2509年(文革前)	644	171	0.3	120	0.2
2528年(文革後)	445	42	0.1	44	0.1
2532年	551	54	0.1	143	0.3
2550年	602	90	0.1	101	0.2

出典: 2499~2532年の数値は張[1992:125-130]、2550年の数値は徳宏州仏教協会への発表者の聴き取りによる。

Fig. 6-8

Purpose of This Presentation

- ・ タイを始めとする上座仏教徒社会の他地域では、「福田」としてのサンガは積徳行にとって不可欠な役割を果たすとされてきた。
- なぜ徳宏では僧侶が少数にとどまるのか？またそうした状況において、徳宏の仏教徒はどのように功德を積んでいるのか？
- 大躍進・文革による実践の断絶後、仏教実践はどのように復興してきたのか？

9

Fig. 6-9

Research Methodology

- ・ 2552年、2553年の雨安居期間中に、瑞麗市内の118の仏教関係施設(寺院112、仏塔3、仏足跡3)において、出家者、女性修行者、在家の仏典朗誦専門家ホールーに対する調査を実施。
- ・ 上座仏教徒社会の他地域との比較研究が可能に。
- ・ 国境を越えるような実践者の動きを可視化。



調査を行った仏教関係施設

10

Fig. 6-10

2. Tāi Buddhist Practices in Dehong



TL村の仏塔に供物を奉納するヒン・ラーイ

11

Fig. 6-11

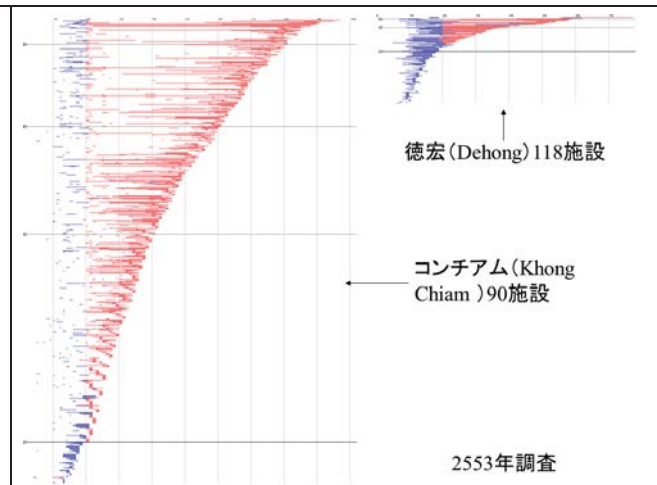


Fig. 6-12

Difference of the Habit of Ordination

<タイ>

- ・出家者が比較的多い。
- ・・・出家によって本人のみならず両親も功德を積むことができると考えられているため、男子の出家が人生儀礼のように習慣化されている。
- ・僧侶としての出家を重視。
- ・出家も還俗も比較的自由。

<徳宏>

- ・出家者はきわめて少ない。
- ・・・仏教徒社会の他地域で一般的な男子の出家慣行が大躍進・文革以前から存在せず。
- ・見習僧として出家した場合でも、20歳前後の年齢に達すると多くは還俗。
- ・一時出家の慣行なし。¹³

Fig. 6-13

Shelf of the Buddhist texts (*seŋ ta la*)

- ・各戸の最も奥に設置。
- ・中に仏像は置かずに、仏典 (*ta la*) と3本または5本の花を供える。
- ・各戸で個別に実施する儀礼は、仏典棚の前で行われる。



Fig. 6-14

Temple (*tsəŋ*)

- ・寺院に僧侶が止住する場合、本堂の仏像後部の部屋または布薩堂 (*sim*) に止住。
- ・寺院境内には雨安居期間中に寺籠りする老人 (男性 *hin xiq*・女性 *lai*) 用の建物 (*ho sin*) が設置。
- ・村落の集合儀礼は寺院で行われる。
- ・墓は寺院境内になく、村外に土葬される。



TL村の寺院(中央)と女性老人ライが寺籠りするホーシン(右)

15

Fig. 6-15

Stupa (*kəŋ mu*)

- ・瑞麗市内には、盆地全体の仏教徒の信奉を集める仏塔が3箇所ある。
- ・ミャンマーと同様、村落寺院とは基本的に分離。
- ・ムン・マーウ盆地全体を守護する存在とみなされる。



瑞麗最大のホーマーウ仏塔

Fig. 6-16

Footprint of the Buddha (*tsak to*)

- ・仏の存命中に徳宏を訪れた際の足跡と言われる。
- ・寺院を持たない村落は、瑞麗市内に6村落のみ。そのうち3か村の *hin・lai* は、山中の仏足跡境内の修行施設 (*ho sin*) へ雨安居期間中の布薩日に集まり、八戒を守って寺籠りを実践。



Fig. 6-17

Lay Specialists of Reciting the Buddhist Texts (*ho lu*)

- ・各村落に必ず1名が存在。
- ・ホー＝「頭」、ルー＝「布施」
- ・在家の仏典朗誦専門家で、布施儀礼に不可欠な役割を果たす男性。
- ・儀礼の際には、寺院で誦経、説法する。村人はそれを聴くことによって仏教に関する知識を身につけ、功德を積む。
- ・他村に居住し、儀礼の際のみ招かれるケースが多い。



hin・lai の寺籠りの際に説法するTL村のホールー

18

Fig. 6-18

Monks (*mon tsay/tsău tsay*) Novices (*tsău say*)

- ・ 19村落の寺院に出家者(僧侶、見習僧)が止住。
- ・ 村の除穢儀礼の際、護呪經(*pa lit*)などを誦えて悪霊を祓う。
- ・ 大規模な儀礼を開催する際には、在家信徒の布施を受け取り、授戒、説法。
- ・ 僧侶が止住しない村では必要時のみ他寺院から招くが、その回数は少ない。



TL村の公民館の新築儀礼で誦經するHS寺の僧侶たち

19

Way of Making Merit in Southeast Asia



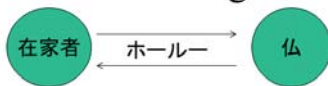
- ・ 戒律によって労働を禁じられた出家者は、在家者からの寄進によって生活し、在家者は出家者への寄進によって功德を積む。功德を積むことによって現世または来世における「善果」が生じる。

20

Fig. 6-19

Fig. 6-20

Way of Making Merit in Dehong



- ・ 出家者が介在せずとも、在家信徒と仏像、仏塔、仏足跡、仏典など仏(*pha la*)にまつわる聖遺物との直接的なかかわりで積徳行がなされることが多い。
 - ・ その際、在家の仏典朗誦専門家ホールーが媒介者として重要な役割を果たす。
- 東南アジア大陸部とは積徳の方法が異なる。

21

3. Process of Revival of the Buddhist Practices



徳宏の得度式

22

Fig. 6-21

Fig. 6-22

The Great Leap Forward and the Cultural Revolution

- ・ 大躍進(2501~2503)
多くの出家者がミャンマー側へ逃亡するか還俗。大躍進後に一部は徳宏に戻る。
- ・ 文化大革命(2509~2519)
すべての出家者がミャンマー側へ逃亡または還俗。ホールーは活動停止。仏典は焼却、寺院・仏塔・ホーシンは紅衛兵が破壊→**仏教実践の断絶**
- ・ 文革後(2521~)
ホーシン・寺院・仏塔の再建、仏典の筆写、出家者・ホールーのミャンマー側からの移住→**実践の復興**

23

Old Buddhist Practitioners who Keep Precepts (*xin lai*)

- ・ 日常的に5戒を守り、兩安居期間中の布薩日(*vän sin*)に寺へ籠って8戒を守る老人。
- ・ 生前に功德(*ku so*)を積み、来世では苦しみ(*tuk xa*)がないようにするため。
- ・ 文革直後から寺籠りを開始し、現在では老人の多くが参加。
- ・ 寺籠りの際には説法を聴くためホールーの存在が必要。



TL村の男性老人ヒン



TL村の女性老人ラーイ

Fig. 6-23

Fig. 6-24

Native Villages of *Holu*

- ・2552年度 中国出身者 ミャンマー出身者
112名 32名 (29%) 80名 (71%)



説法する
ホールー

25

Fig. 6-25

Route Taken by *Holu* Mr. T (18 years old)

- 2536年 シャン州クッカイン郡HP村(ゾーティー派)に生まれる。
- 2549年(13)カチン独立軍に徴兵され、脱走。
- 2550年(14)カチン州ムン・ヤーンのゾーティー寺で見習僧出家。
- 2552年(16)還俗。瑞麗市TK村の兄の家に寄宿。
- 2554年(18)TL村ホールーになる。



Fig. 6-26

Influence of Tsoti Sect in Məŋ Mau

- ・ゾーティー派はカチン州ムン・ヤーン(Məŋ Yan)にある寺院にのみ出家者が止住し、その他の寺院では在家信者が中心となって実践を営む。
- ・戒律を厳守し、仏典の朗誦法の教育を集中的に行うため、ゾーティー寺院で出家経験をもつホールーの評判が高まる。
- ・ゾーティー派出身のホールーが中心となり、2542年から毎年1回開催されている仏法詩(*lan ka*)講座にはムン・マウ盆地全体の多くのホールーが参加。
- ・ミャンマー政府の公認9教派には含まれないローカルな教派。

27

Fig. 6-27

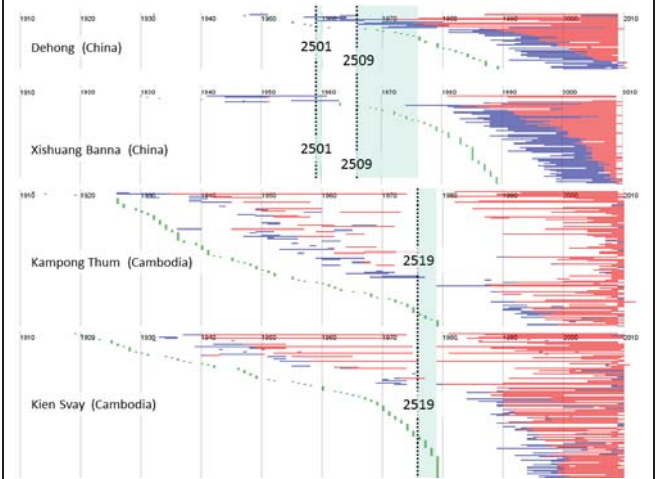


Fig. 6-28

Native Villages of Monks and Novices

	ミャンマー	中国	合計
僧侶	38 (76%)	12 (24%)	50
見習僧	82 (80%)	21 (20%)	103
合計	120 (78%)	33 (22%)	153

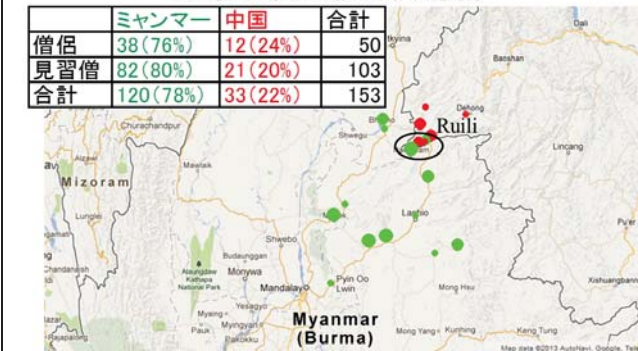


Fig. 6-29

Route Taken by a Monk Rev. N (24 years old)

- 2524年 シャン州ムセ郡に生まれる
- 2537年(13)出身村で見習僧出家
- 2537年(13)ヤンゴンの寺院へ移住
- 2539年(15)マンダレーの寺院へ移住
- 2541年(17)モーゴウツの寺院へ移住
- 2543年(19)ムセの寺院へ戻る
- 2543年(19)瑞麗市の出身寺院と同教派の寺院へ移住



Fig. 6-30

Temples of the Main Sects in Ruili



赤=ポイズン派、黄=ヨン派、緑=ゾーティー派、青=トーレー派、
灰色=仏塔、仏足跡

Fig. 6-31

4. Conclusion



カチン州ムン・ヤーンのゾーティー派寺院

32

Fig. 6-32

A Brief Summary

1. 男子の出家慣行がなく、出家者が少ない。
在家者と仏の聖遺物との直接的な関係で積徳行がなされる。その際、在家のホールーが媒介者として重要な役割を果たす。
...**在家者中心の仏教実践。**
2. 文革後は、ミャンマー側のシャン州出身者が徳宏における仏教実践の復興に貢献。
ホールーの実践に関する知識の習得には、地域に根ざすゾーティー派が大きな役割を果たす。
出家者が中国側の寺院に移動する際には、ローカルな教派のネットワークをたどるケースが多い。
...**ローカルな教派ネットワークの重要性。**

33

Fig. 6-33

Further Study

- ・徳宏の仏教実践の特徴は、近代以降のタイの事例に基づく上座仏教徒社会モデルとは異なる。
- ...近代国家による仏教実践の制度化が進行する以前は、むしろ徳宏のような地域に根ざす実践が他地域でも見られた可能性もある。
- 近代以降のタイにおける事例をもとに作られた従来の上座仏教徒社会モデルの相対化へ。

34

Fig. 6-34

カンボジア仏教の時空間分析 (2)¹

——出家者の経歴の検討——

京都大学東南アジア研究所

小林 知

愛国学院大学人間文化学部

高橋 美和

1. はじめに

本稿は、研究プロジェクト「大陸部東南アジア仏教徒社会の時空間マッピング—寺院類型・社会移動・ネットワーク—」を通じて、東南アジア大陸部インドシナ半島の南端に位置するカンボジアで集められたデータを用いて、カンボジア社会に生きる仏教徒の宗教活動の時空間分析に向けた試論を示す²。

同研究プロジェクトでは、3名の研究者がカンボジアで調査をおこなった。うち2名（小林知、高橋美和）は、現地語でヴォアット (*voat*) と呼ばれる仏教施設を訪問し、その施設の基礎情報を集めると同時に、その場所に居住した僧侶、見習僧、その他の俗人の経歴を悉皆調査した。他方、残りの1名（笹川秀夫）は、首都プノンペンの国立公文書館が所蔵する『官報』(Khmer: *Reach Kech, Roat Kech*; Official Journal の意) に注目し、そこに掲載された仏教関連記事を網羅的に収集した。『官報』は、歴代の政府が統治・行政に関わった様々な決定事項を記録として残すために作成した資料であり、そこに現れた仏教関連項目の記載情報を整理する作業からは、カンボジアの人びとの宗教活動の過去の状況を再構成すると同時に、各時代の世俗権力の宗教に対する眼差しを分析することが期待できる。

3名は現在、以上の形で2009～2010年を中心として実施した現地調査の成果を持ち寄り、総合的な視

点からのデータの統合と分析を進めることで、カンボジア仏教の現状と歴史的変化の全体像を解明することを目標としている。本稿は、その一端として、小林と高橋が各自の調査地で収集した僧侶と見習僧の経歴に関するデータの比較検討をおこなう。

2. 問題の背景

カンボジアは現在、1400万人ほどの人口をもつ。そのうち9割は上座仏教を信仰する仏教徒であるといわれる。立憲君主制の現在の国家体制下で、仏教は憲法で国教と定められている。同国の仏教サンガは、同国内の伝統的な実践を基本とするマハーニカイ派と、植民地時代に隣国タイから導入されたトアンマユット派の2つの宗派からなる。

カンボジア仏教の現状は、人びとの実践であれ国家が策定した制度であれ、その歴史的背景をよく踏まえて分析する必要がある。特に、1970年代のカンボジアは、内戦とボル・ポト政権（民主カンブチア）による全体主義的支配を経験した。1975～79年に権力を握ったボル・ポト政権は、人びとに宗教信仰の自由を与えず、あらゆる宗教活動を禁止すると同時に、ヴォアットなどの施設や仏像を破壊した。さらに、国内にいた全ての僧侶を還俗させ、11～13世紀頃にカンボジアに到達した仏教サンガの戒統を断絶させた。

以上の歴史的事実、カンボジア政府の宗教省が公開する統計資料からも読み取ることができる。カンボジアでは、植民地支配からの独立以降、仏教が国教とされ、政府の一組織である宗教省が仏教活動の管理と支援に関連した業務をおこなってきた。全国の寺院数と出家者数の統計資料の作成もそのひと

1 本稿は、カンボジア仏教の時空間分析を目的とした基礎的なデータ分析の第2弾である。仏教施設を取り上げた第1弾の論考は、『宗教と地域の時空間マッピングニューズレター 第3号』（2012年2月）に所収した後に、投稿論文として公表した（小林2013）。

2 2011年のコンボントム州における調査は、小林の個人科研（科学研究費補助金、若手研究（B）、課題番号21710259「カンボジア仏教の再生と変容に関する総合的研究：ヒト・モノ・カネの移動と制度の再編」）の資金を用いておこなった。

つである³。

1990年代末から毎年、筆者が宗教省を訪問して入手してきた国内のヴォアット数に関する統計情報によると、1969年つまり内戦が始まる直前のカンボジアには、3,369のヴォアットがあった。その後、内戦が始まった1970年から、ポル・ポト政権期を挟み、ポル・ポト政権崩壊後に成立した社会主義政権時代の最初期は資料が存在しない。その後、1982年には1,821、1988年は2,799と回復し、1997年には内戦以前のヴォアット数を超えた。その後も増加が続き、2004年には4,000を超えた。一方で、国内の出家者（僧侶+見習僧）数の統計資料からは、1969年に6万人を超えていた国内の出家者数が、ポル・ポト政権下でゼロに転じた事実が明らかである。その後、国内の出家者は1979年に復活したが⁴、1982年に2,311名、1989年に6,497名と増加のペースは遅かった。これは、ポル・ポト政権の後を継いだ社会主義政権が、出家行動に年齢制限を課したためである。しかし、その制限が1989年に撤廃されて出家が自由化されると、数は急増した。

ところが、2004年に、6万人という内戦前の水準を目前にして、カンボジア国内の出家者数は減少に転じた。グラフ1は、宗教省公表の統計にもとづき、2001～2009年の出家者数の推移を僧侶と見習僧を区別して示す。それによると、見習僧は2004年に、僧侶も2007年に減少し始めている。実は、僧侶・見習僧の減少は、近代化が進む上座仏教徒社会に共通してみられる現象であり、例えばタイではカンボジアに先んじて生じている。この意味で、カンボジアで近年始まった出家者減少の社会的背景の解明は、対象社会の個別状況の分析にとどまらない、大きな意義をもつ研究課題といえる。

ところが、カンボジアには、その分析に生かすことができる一次データが存在しなかった。宗教省の統計は、ヴォアットと出家者の数の単純な集計であり、国内の僧侶・見習僧の年齢構成や出家年数などの基礎的な側面については、未知のまま関心が向けられて来なかった。筆者らが2009年にカンボジアで始めた調査は、この空白を埋め、今日のカンボジアの出家者の経歴を初めて明らかにするものである。

3 毎年、安居期を迎えると、各州の宗教行政担当の役人が管轄区内のヴォアットを訪問し、施設内の僧侶・見習僧の数を調査する。その結果が各州でまとめられ、中央の宗教省に送られ、統計資料が作成される。

4 ポル・ポト時代以後の出家者の復活は、1979年9月19日に社会主義政権がベトナム領メコンデルタの上座仏教寺院から僧侶を招き、得度式を開催したことで実現したと今日のカンボジアでは公式に考えられている。



グラフ1 2001～2009年の出家者数の変化

3. 調査データの紹介と検討

2009～2011年にかけて、小林は、カンボジア中央部のトンレサープ湖東岸地域に位置するコンポントム州の4つの郡(ストゥントラエン、コンボンスヴァーイ、プラサートバラン、プラサートソンボー)で調査をおこなった。一方、高橋は、2009～2010年に首都プノンペンの近郊に位置するコンダール州キエンスヴァーイ郡において調査をおこなった。地図1が示すように、直線距離で200キロメートルほど離れた2つの調査地は、農村と都市近郊という対照的な立地環境にある。よって、この2カ所の調査で得たデータの比較検討は、農村と都市のあいだの空間的な動態を含め、現代カンボジアにおける仏教徒の活動の特徴を総合的に考察する道を開く。

以下では、調査で得たデータのうち、僧侶と見習僧の経歴に関する基礎情報を比較検討する。具体的に用いるのは、2009年の安居期間中に両地域のヴォアットで収集した僧侶と見習僧のデータである。同年、コンポントム州4郡では85の施設で計1,052名の僧侶・見習僧の情報を収集した。コンダール州キエンスヴァーイ郡においては、48の施設において計1,182名の僧侶・見習僧の情報を収集した。



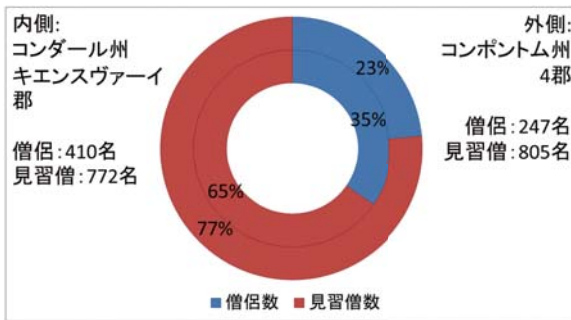
地図1 調査地域

3-1 僧侶と見習僧の割合

まず、グラフ2は、僧侶と見習僧の割合の比較である。グラフは、内側がコンダール州キエンスヴァーイ郡、外側がコンポントム4郡の状況を示す。つまり、内側が都市近郊、外側が農村地帯の状況である。

そこからは、両地域のヴォアットに止住した出家者は、共にその6～7割が見習僧であることが分かる。これは、現在の隣国タイのサンガの構成と比べてとき、大きな違いとして指摘できる。タイでは、僧侶の方が見習僧よりも数が多い。

見習僧の数が僧侶よりも多いという事実は、宗教省の公式統計からも明らかであり、今日のカンボジアの仏教サンガの特徴といえる。ただし、それが過去からの不変の特徴と考えることは早計であり、今後の検討が必要である⁵。

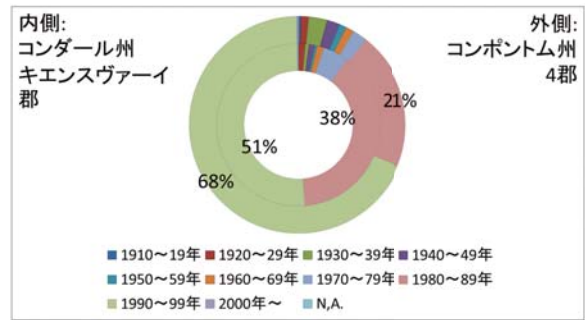


グラフ2 僧侶と見習僧の割合

3-2 出生年

グラフ3は、両地域の僧侶・見習僧の出生年の分布を示す。ここでは、両地域共に、1980年代から1990年代に生まれた年齢層が全体の89パーセントをしめている。ただし20歳以下の年齢は、キエンスヴァーイよりもコンポントムでより多い。キエンスヴァーイには、1980年代に生まれた、若干年長の僧侶・見習僧が多く止住している。

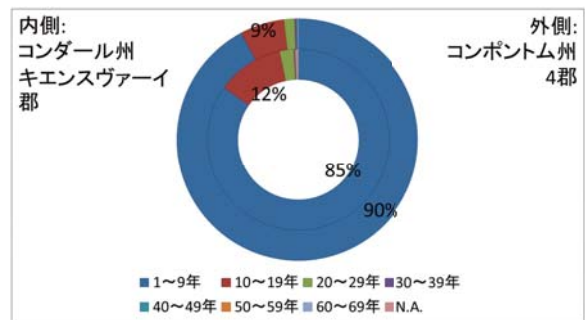
以上からは、現代のカンボジアの僧侶・見習僧のマジョリティーが10～20歳代の若年者であることが分かる。また、両地域の状況が示す若干の違いについては、農村で出家した男性が出家後に都市とその近郊へ移動するというトレンド（後述）を念頭に、改めて分析を深める必要がある。



グラフ3 出生年の分布

3-3 出家年数

グラフ4は、両地域の僧侶・見習僧の出家年数（安居数）の比較である⁶。どちらでも、10安居未満の、出家経験の浅い僧侶・見習僧が大多数を占める（80～90パーセント）。ただし、比較の上では、キエンスヴァーイの方に、20安居以上といったより出家経験の長い僧侶・見習僧が多いことも分かる。



グラフ4 出家年数（安居数）の分布

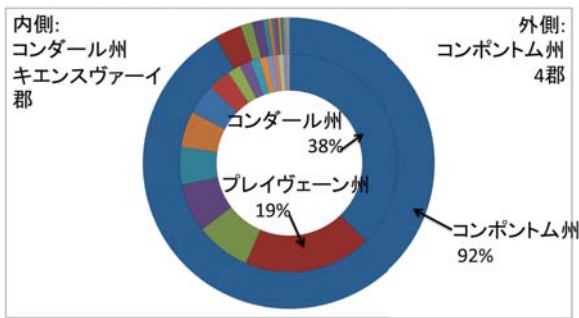
3-4 出身地

グラフ5は、両地域の僧侶・見習僧の出身地の分布である。ここでは、地元出身者の割合が明確に異なっている。キエンスヴァーイについては、コンダール州とその隣のプレイヴェーン州という地元の出身者が半数以上である。ただし、同時に、それ以外に多様な地域出身の者が集まっている。他方で、コンポントム州4郡については、コンポントム州の出身者が圧倒的多数である（92パーセント）。

このコントラストの背景には、僧侶・見習僧のモビリティがある。すなわち、現在のカンボジアでは、多くの農村地域出身の僧侶・見習僧が、地元で出家した後に、都市とその近郊区へ移動している。

5 例えば、笹川秀夫氏が国立公文書館で発見したコンポントム州を1925年に訪問したフランス人行政官の報告では、当時の同地域のヴォアットに止住した出家者について、僧侶の方が見習僧の3倍以上数が多かったと述べられている。今後の歴史文献の精査が待たれる。

6 ここでの出家年数（安居数）は、僧侶としてだけでなく、見習僧として安居期間を過ごした年数もカウントしている。また、老齢の僧侶・見習僧については、内戦前の若い時期に出家した年数も含めている。

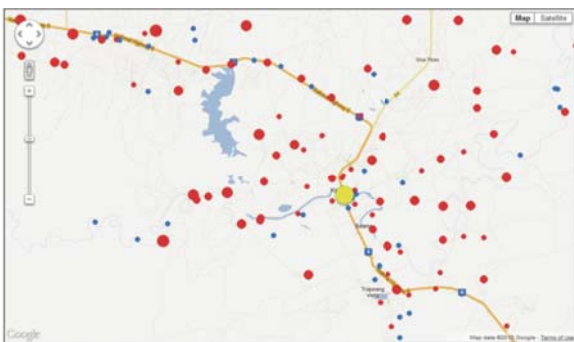


グラフ 5 出身地の分布

4. 今後の展望

筆者らが収集した資料は、以上に一端を示したように、今日のカンボジアの仏教サンガの特徴を具体的に示す。特に、コンダール州キエンスヴァーイ郡とコンポントム州4郡の比較は、国内の僧侶・見習僧の移動のトレンドとその要因の分析をさらに推し進めることを可能とする。具体的には、収集した僧侶・見習僧の出家前の経歴（出生家庭の状況、最終学歴など）と、出家後の行動（出家後の学習、移動経験など）に関する情報を、様々な角度から分析する必要がある。

同時に、収集したデータの可視化を多様な形で進めることも、大きな研究の可能性を秘める。例えば、地図2は、コンポントム州4郡で2009年に調査した僧侶・見習僧の出生村を地図上にマッピングしたものである。



地図2 僧侶・見習僧の出身村の分布
(2009年調査、コンポントム州の州都付近)

赤色の丸印は、僧侶・見習僧を輩出した村々の位置を、丸印の大きさは人数規模を示す。他方、青色の丸印は、僧侶・見習僧を輩出していない村々を示す。つまり、この図は、ひとつの地域のなかの、どのような村から多くの僧侶・見習僧がうみだされているのかを考える資料である。そしてそこからは、州都コンポントムの近くや国道沿いに位置している村々

よりも、それらの社会経済的な中心地から距離がある村々の方が、より多くの僧侶・見習僧を輩出しているという傾向がみとれる。

今後は、このようなデータ・マッピングを、ベースマップの更新と合わせて多方面で進める必要がある。例えば、住民の所得や世俗学校への就学率、幹線道路からの距離などの情報を村別に整理し、同一の地図上にマッピングすれば、どのような村が僧侶・見習僧を輩出しているのかという問題をより具体的に探求することが可能となる。その時、2004年に始まったカンボジア国内の僧侶・見習僧の減少という現象に、新たな視点からアプローチすることが期待できるだろう。

参考文献

- 小林知. 2012. 「カンボジア仏教の時空間分析 (1): 仏教施設の種類の形成過程」『宗教と地域の時空間マッピングニューズレター 第3号』京都大学地域研究統合情報センター林行夫研究室: 1 - 16.
- 小林知. 2013. 「カンボジア農村における仏教施設の種類の形成過程」『東南アジア研究』51 (1): 34 - 69.

Khmer Buddhists in Time and Space: Integration Field Research and Documentary Research

Kobayashi Satoru
(Kyoto University)

Fig. 7-1

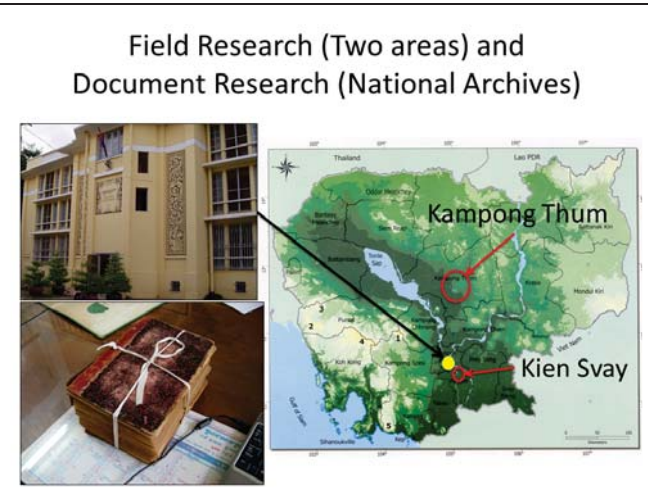


Fig. 7-2

- ### Cambodian Political Regimes
- Traditional Kingship
 - French protectorate (2406-2496)
→ Introduction of Thoammyut Nikay from Thailand
 - Kingdom of Cambodia (2496-2513)
 - Khmer Republic (2513-2518)
 - Democratic Kampuchea (2518-2522)
→ Discontinuity of Cambodian Buddhism
 - People's Republic of Kampuchea (2522-2532)
 - State of Cambodia (2532-2535)
 - UNTAC: United Nations Transitional Authority of Cambodia (2535-2536)
 - Kingdom of Cambodia (2536- present)

Fig. 7-3

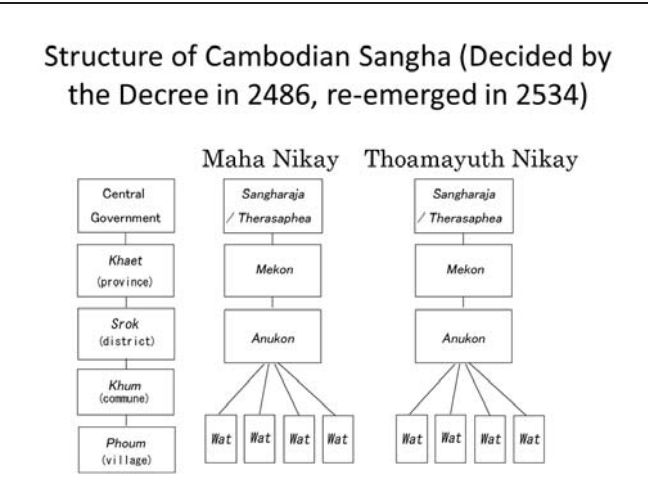


Fig. 7-4

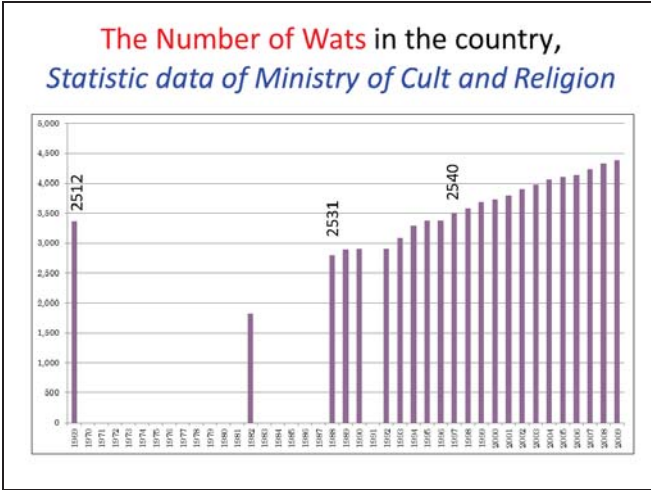


Fig. 7-5

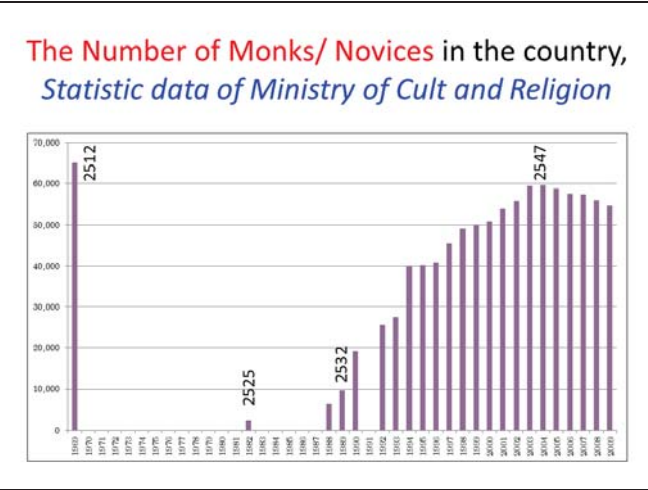


Fig. 7-6

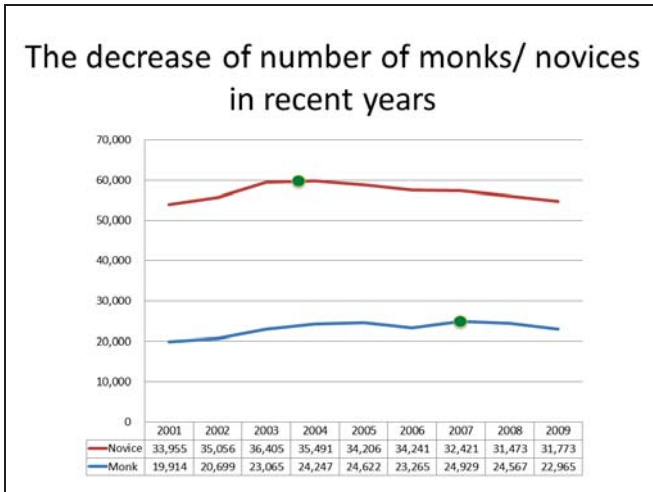


Fig. 7-7

Basic situation is not known!

- The official statistics only tells the number of monks/ novices in the country
 - Lack of the information on their profiles, such as the number of *vossas* of those monks/ novices and the number of monks/ novices who returned to secular life in each year
 - No statistical data of laypeople, such as *daun chi* and *ta chi*

Fig. 7-8



Fig. 7-9



Fig. 7-10



Fig. 7-11



Fig. 7-12

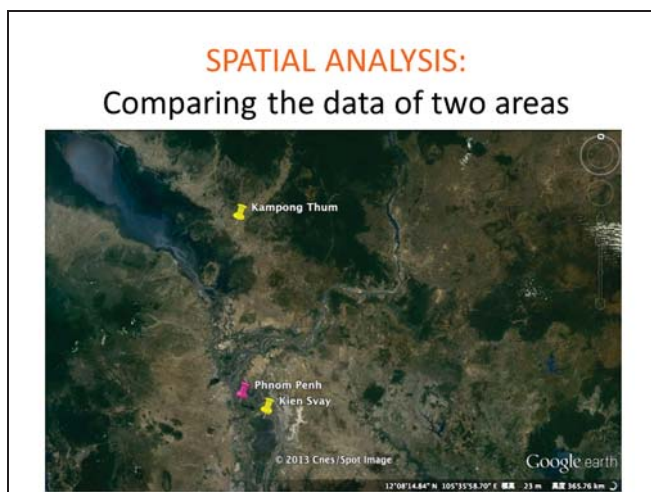


Fig. 7-13

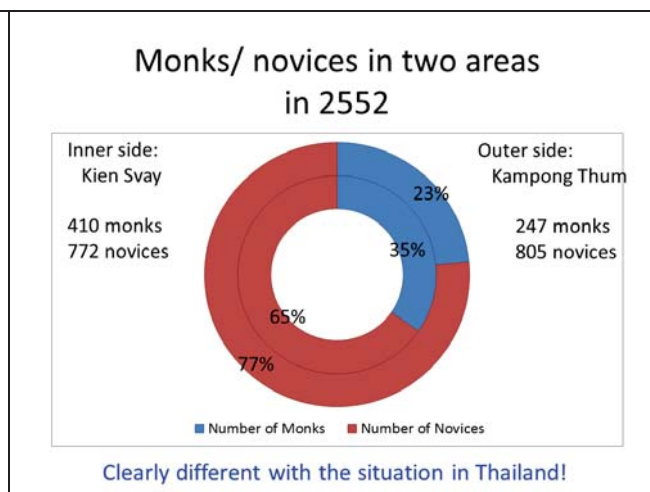


Fig. 7-14

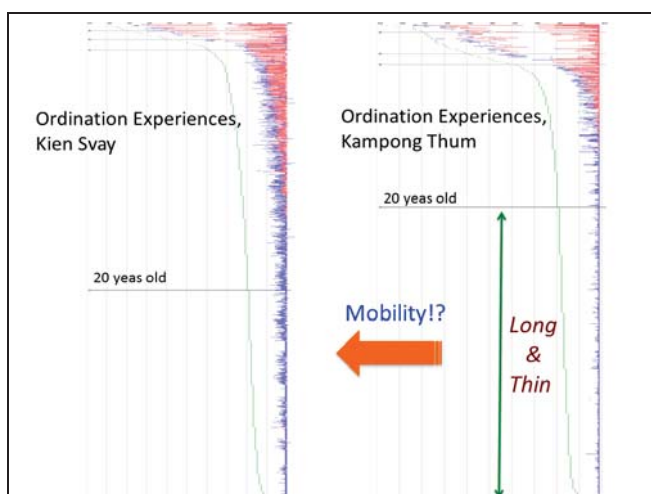


Fig. 7-15

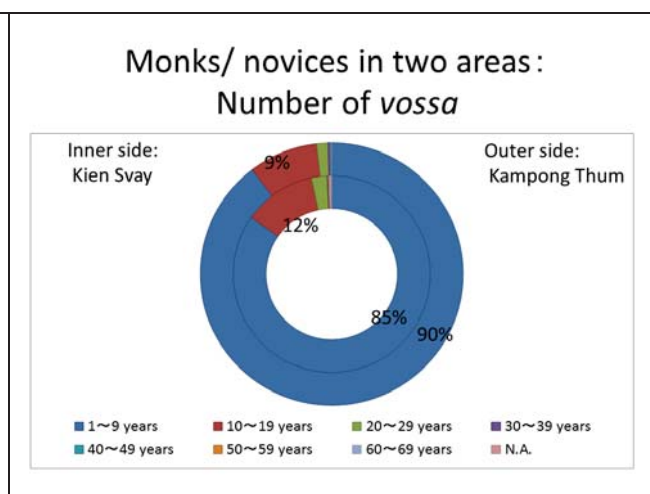


Fig. 7-16

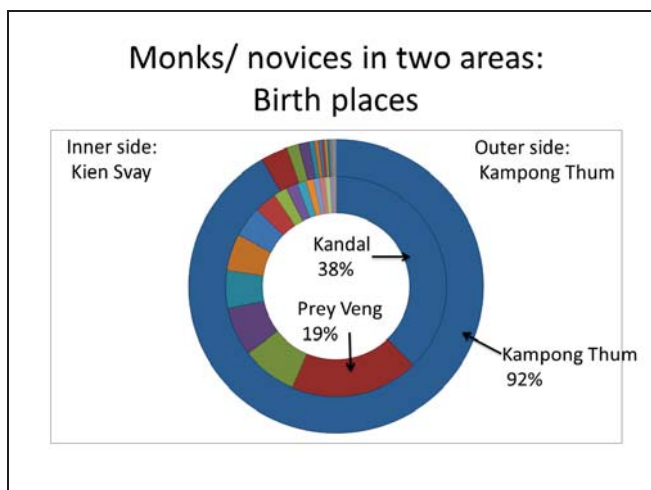


Fig. 7-17

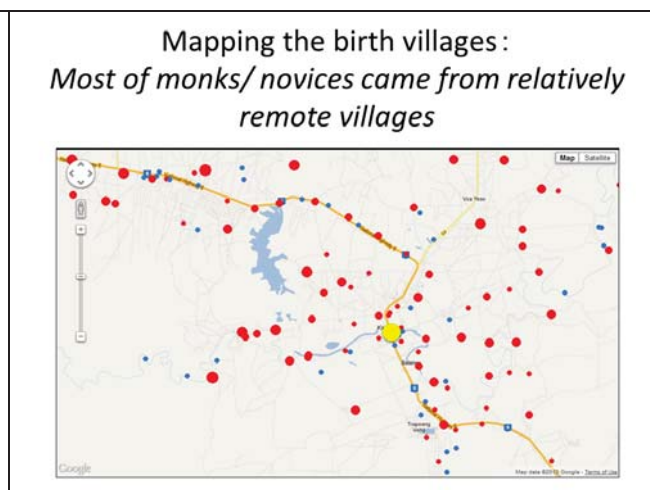




Fig. 7-18

TIME-SERIES ANALYSIS:
Rehabilitation after the Pol Pot period (2518-22)



A Photo taken at Wat Choam in Kampong Thum (August 2553)



Samdach Huot Tat, the sanghareach of Maha Nikay, was killed by Khmer Rouge in 2518

Fig. 7-19

“Official ordination ceremony”
 in Sep 19 2522

- The PRK government invited Theravada monks in Mekong delta region in southern Vietnam to Phnom Penh and organized the official ordination ceremony

Strong control
 by the socialist state (2522-32)

- The ordination had allowed only for the men who used to be a monk in a previous time and over 50 years old
- The re-ordinations by a number of ex-monks assisted the rehabilitation of Buddhist activities in the country at that time

Fig. 7-20

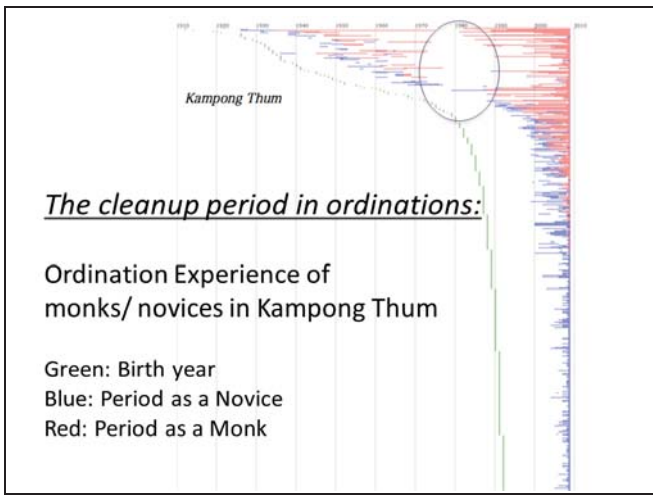


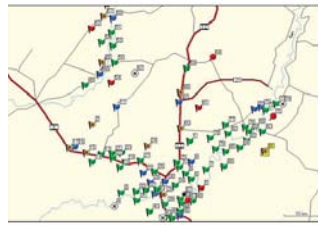
Fig. 7-21

Distribution of Age at Ordination (76 monks born before 2503)

Age	First ordination as a novice	Second ordination as a novice	First ordination as a monk	Second ordination as a monk
1~9	0	0	0	0
10~19	34	0	0	0
20~29	4	0	22	0
30~39	3	0	2	0
40~49	2	0	4	0
50~59	4	1	14	5
60~69	2	1	9	15
70~79	3	0	16	7
80~89	2	0	3	0
no data	1	1	1	1
Not correspond	21	73	5	49
total	76	76	76	76

Fig. 7-22

Studying development process of Wats (1):
Mapping the rehabilitation process after the Pol Pot period!




- There were 70 wats had existed since before 2518
- Asked the year that the wat firstly accepted monks after 2522
- Bad security condition continued until 2536

	2522~26	2527~31	2532~36	2537~41	2542~
Number of Wats	37	11	13	8	0


Fig. 7-23

Studying development process of Wats (2):
Integration with Document research

A Case of Wat Prasat Andaet, Kampong Svay, Kampong Thum



Right: The “kret” in 2486



Par Kret n° 65 du 16 Juillet 1946, rendu exécutoire le 29 du même mois.
 Sont autorisées sur la demande de l'achar Meas Kelling de la pagode de Prasat-Andaet, l'île de San-kot, srok de Kampong-Svay, khet de Kampong-Thom :
 1° — la reconstruction en bois de la pagode de Prasat-Andaet, sur son ancien emplacement.
 2° — la coupe gratuite dans la forêt de Sroeng, l'île de Sroeng, srok de Santul, (Kampong-Thom), de 60 pièces de bois destinées à la reconstruction de ladite pagode.

- Reviewing the articles of “Official Journal of Cambodia” allow us to study the connection of each wat and government authorities

Fig. 7-24

**“Khmer Buddhist in Time and Space”:
What remains to be done!**

- **Spatial analysis**
 - Entering/ Mapping much more data for making a multi-layered map
 - To analyze inter-relations of various types of information in an area
 - Compare findings of a number of areas
- **Time-series analysis**
 - Entering historical data such as locations of archeological sites and abandoned villages into a map
 - To integrate people’s narratives with historical records for presenting a comprehensive understanding of development process of areas/ places

Fig. 7-25

カンボジア寺院質問紙調査から見える俗人寺院止住者の実態 ——コンダール州とコンポントム州との比較——

愛国学園大学人間文化学部

高橋 美和

京都大学東南アジア研究所

小林 知

1. はじめに

本稿は、2009年と2010年にコンダール州とコンポントム州の同一地域で実施した、寺院（ヴォアット）および寺院止住者を対象とした質問紙調査の結果のうち、俗人に関する項目について報告するものである¹。

これまで、筆者のうち高橋は、上座仏教国であるタイおよびカンボジアにおける俗人修行者を含む俗人寺院止住者に関心を寄せて、多くの地域の寺院を訪問あるいは滞在してミクロな視点での調査を重ねてきた。1990年代に聞き取りを始めたカンボジアでは、内戦終結直後の時期だったことで、俗人女性で寺院に止住する人々の多くが、内戦で肉親喪失を経験した人々であった。しかし、2000年代に入り、必ずしもそうした肉親喪失者が寺院に身を寄せるといふケースばかりではないことが次第にわかってきた。また、タイと異なり、カンボジアには男性修行者の存在も多くの寺院に見出せるが、その実態の詳細は必ずしも明らかでない。

こうした興味関心から、この寺院および寺院止住者調査では、出家者に加えて俗人も質問紙調査の対象とした。この調査の目的は、第一に、これまで高橋が個人研究として行ってきた俗人寺院止住者の実態を数量的・空間的に捉えること、そして第二に、高橋・小林が同一の質問紙を用いることにより、カンボジア国内の複数の地域のデータを収集し比較考察することによって寺院止住行動の地域的相違とその

背景の一端を明らかにすること、であった。

第一の目的には、過去5年間の止住（移動）歴から、俗人止住者の移動パターンをデジタル・マップ上でトラッキングするという課題が含まれるが、地名のデータ化が終了していないため、現時点では報告できない。本稿では、質問項目のうち、俗人止住者の基本データおよび属性に関わる部分について、集計が終了している範囲で報告する。

2. カンボジア調査の概要

2-1 対象・分担

この調査の対象は、対象とする地域にあるほぼ全寺院のほぼ全止住者である²。高橋が担当したのはコンダール州キエンスヴァーイ郡の48寺院³、小林は、コンポントム州コンボンスヴァーイ群、ストゥンサエン郡、プラサートバラン郡、プラサートソンボー郡の4つの郡を担当した。2009年は85寺院が、2010年は87寺院が調査対象となった。以下、高橋の調査対象地域を「コンダール州1郡」、小林の調査対象地域を「コンポントム州4郡」と記述することとする。コンダール州1郡は国道1号線沿いの、首都プノンペン市隣接の都市近郊地域であるのに対し、コンポントム州はカンボジア中央部に位置し、プノンペン市から国道に沿って190キロメートルほどの距離がある。4郡のうち2郡は国道沿いで一部に商業地区を含むが、あと2郡は農村地域である。

1 コンダール州については一部報告した。高橋美和2012「俗人修行者への質問紙調査結果より—カンボジア、コンダール州キエンスヴァーイ郡—」『宗教と地域の時空間マッピングニューズレター』（京都大学地域研究統合情報センター・林行夫研究室）第5号、pp. 1-8。

2 調査時に不在で会えなかった出家者や俗人止住者、物理的にアクセスできなかった寺院（コンポントム州）があった。

3 2009年の調査後、州境界の変更に伴い、調査対象のうち4行政村が隣接のプノンペン市に編入されたが、データの連続性を確保するために2010年調査においても2009年と同じ48寺院を調査対象とした。

2-2 方法

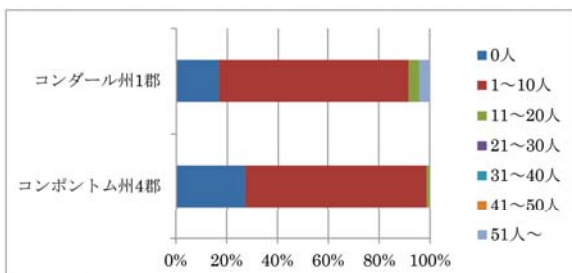
①寺院に関する質問紙、②出家者用の質問紙、③俗人止住者用の質問紙を作成。②と③は1対1の面談形式で行い、調査員が記入した。調査員は筆者らその他、王立プノンペン大学学生、高校教員等であった。2009年・2010年ともに、雨安居（出家者が所属寺院に留まって修行をする7月頃～9月頃の約3ヶ月間）の期間中に実施した。

3. 俗人止住者の概要

俗人寺院止住者は、修行者と非修行者とに分けられる。まず、非修行者とは、具体的には「飯炊き」や清掃人などで、ごく少数である。大部分は修行者である。

カンボジアには、中高年になり生産活動の第一線から退くと、在家戒を守る生活に入る慣習があり広く行われている。俗人修行者の多くは、こうした中高年男女のうち、住処を寺院に移し出家に準じた修行生活を送る人々である。一般在家信徒とは異なる寺院止住者となるが、仏教徒範疇としては俗人であり、在家戒を把持する。戒の数について尋ねると、5戒、8戒、10戒の3通りがある。修行者のカテゴリーには、女性であればドンチーとウバーシカー、男性であればターチーとウバーソックとがある。ドンチーとターチーは準出家者であり、剃髪・白衣・寺院永住者といった傾向が、ウバーシカーとウバーソックは篤信女性と篤信男性という意味であり、有髪で寺院止住期間も短いという傾向があるが、実際には自称・外見・寺院滞在期間・戒の数に何らかの一致があるわけではなく、あくまで傾向である。

寺院止住期間・パターンにも多様性があり、寺院に永住する人がある一方で、数年間のみ常住の人、一応常住だが自宅にしばしば戻る人、雨安居のみ寺院止住で雨安居が明けると帰宅する人、など様々な滞在形態があることが調査の過程で明らかとなった。



グラフ1 俗人止住者人数別寺院数

寺院は本来、出家者が止住することで成立する宗

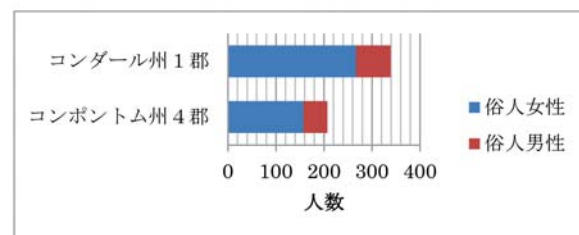
教施設であり、俗人止住者の存在は必要要件ではない。グラフ1（2009年データ）が示すように、俗人止住者は多くの寺院に見出せるが、俗人止住者がいない寺院もある。コンダール州1郡では寺院総数の約17%に、コンポントム州4郡では約27%に俗人止住者が不在である。2地域とも俗人止住者数10人以下の寺院が最も多く、これが共通点である。相違点としては、コンダール州の方に俗人止住者が50人を超える寺院が2寺院あることであろう。この2寺院（CK寺80人、NV寺121人）で俗人止住者総数の6割近くを占めている。ちなみに、この2寺院は出家者数も群を抜いて多い（CK寺283人、NV寺146人）。なお、俗人止住者数の多い上位4寺院は全て、2009年調査後にプノンペン市に編入された地域に位置している（脚注3）。都市部近郊という地理的な条件により、多くの寄付が集まりやすいことや、寺院の敷地が大きいことによるものと考えられる。コンポントム州の方は、最も俗人止住者数が多い寺院で15人であり、全体として極端な集住寺院は見当たらない。5人以下の寺院が53寺院にのぼり、全体の約62%を占めている。

4. 俗人寺院止住者の属性に関するコンダール州とコンポントム州との比較

以下、2009年データに基づいて記述する。

4-1 グラフ2 男女比

女性の俗人修行者が圧倒的に多いことが2地域で共通している。女性の方が多いという傾向は、これまでのカンボジアの他地域での調査対象寺院でも同様であった。

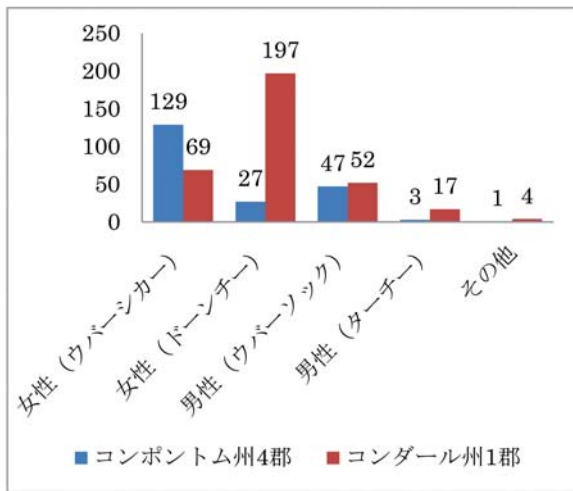


グラフ2 男女比

4-2 グラフ3 カテゴリー

この項目については、2地域間の相違が明瞭である。男性止住者についてはほぼ同じパターンである（ウバーソックの方がターチーより多い）が、女性の方は傾向が逆になっている。すなわち、コンダール州ではドンチーの方が多いのに対し、コンポントム州の方はウバーシカーの方が多い。これらは自称で

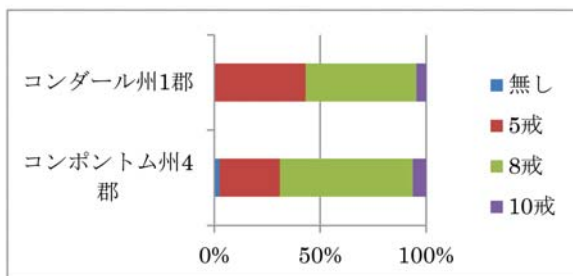
あり、何をもってそれぞれのカテゴリーを称するのかについては今後の聞き取り等が必要である。



グラフ 3 カテゴリー

4-3 グラフ 4 持戒数

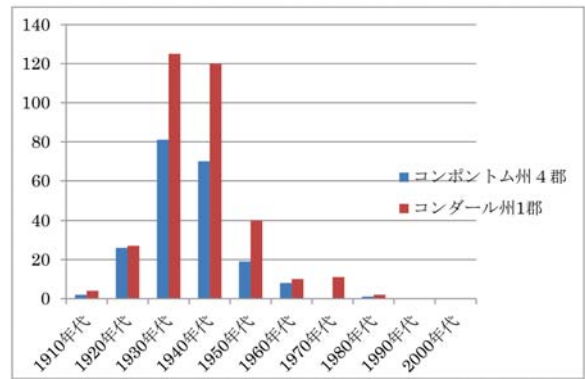
8戒把持者の割合が最も高いのは両地域に共通している。グラフ3と合わせて考えると、持戒数は同じでも、コンダール州はドーンチャー、コンボントム州はウバーシカーと自称する人が多いということになる。



グラフ 4 持戒数

4-4 グラフ 5 出生年

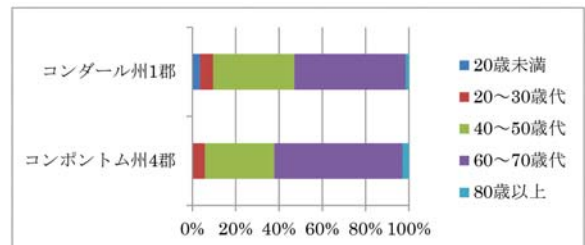
両地域とも、1930年代・1940年代生まれの人々（調査時60・70歳代の人々）が最も多いことがわかる。



グラフ 5 出生年

4-5 グラフ 6 寺院止住開始年齢

寺院止住開始年齢の傾向は両地域でほぼ同じだが、コンダール州の方が、40～50歳代での止住開始の割合が若干高い。

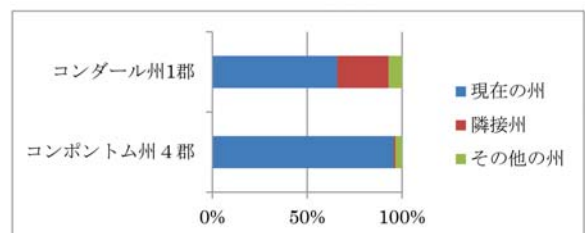


グラフ 6 寺院止住開始年齢

4-6 グラフ 7 出身地

地域差が著しい項目の一つである。コンボントム州の俗人止住者のほとんどが地元州出身者であることがわかる。

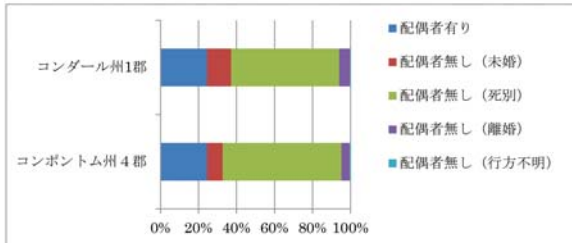
コンダール州の俗人止住者のモビリティが高いことが読み取れるが、その背景には、寺院止住前の移動経験の違いがあると考えられる。特に、ポル・ポト時代の強制移住の経験が両地域で異なることを反映している可能性が高い。さらに、寺院の選択の仕方が、両地域で異なる可能性もある。例えば、子の居住場所の近所の寺院を選択するという止住行動が一部に認められるが、その場合、子のモビリティに左右されることになる。



グラフ 7 出身地

4-7 グラフ 8 寺院止住開始時の配偶者の状況

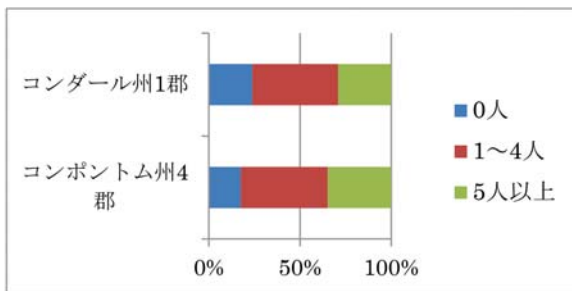
この項目については両地域に大きな差は無い。どちらも、既婚だが配偶者と死別している人が最も多い。なお、「配偶者有り」の内訳は、配偶者が家にいる、配偶者も寺院止住者、その他、となっている。



グラフ 8 寺院止住開始時の配偶者の状況

4-8 グラフ 9 生存子の数

コンポントム州の方が、子を持つ俗人止住者および子の人数が多い人の割合が高い。両地域ともに、「身寄りがないために寺院に身を寄せて」いるわけではないことがうかがえる。



グラフ 9 生存子の数

5. まとめ

以上の結果、まず、これまでの調査で経験的に得ていた「印象」が数量的に確認できた。男女比、寺院止住者の年齢層、寺院止住開始年齢、配偶者の状況等である。一方、2地域比較により、自称カテゴリー、持戒数、出身地に相違があることが発見できた。今後その背景要因についてさらに調査を行いたい。本稿では、紙数の関係で上記データの男女別分析が行えなかった。稿を改めたい。

カンボジア上座仏教寺院に関する歴史データ

立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部

笹川 秀夫

1. はじめに

カンボジアは20年以上にわたる内戦とポル・ポト政権による圧政を経験したものの、1990年代後半からはフィールド調査が可能な地域が拡大し、文献資料の公開も進んだ。なかでも仏教は、カンボジア社会を理解する鍵として注目度が高い。近年、英語圏および日本で研究の進展が見られ、いくつもの著作が発表されている。

筆者が専門とする植民地期以降のカンボジア仏教史については、ベニー・エドワーズの著書 [Edwards 2007] やアン・ハンセンの著書 [Hansen 2007] などが、主要な先行研究としてあげられる。しかし、前者はフランスの公文書館、とくにエクサン・プロヴァンスにある海外公文書館が所蔵する資料に依拠している。1997年末にプノンペンのカンボジア国立公文書館が研究者に初めて公開され、その後の調査・研究の進展から、フランスよりもカンボジアにこそ植民地史を解明する重要な資料が残されていることが明らかになってきた。そこで、アン・ハンセンは国立公文書館で文献資料収集を行なっているものの、調査期間の短さなどから、網羅的に資料を収集し、植民地期以降のカンボジア仏教の全体像を描き出せているとはいえない。

そのため筆者は、国立公文書館が所蔵するカンボジア仏教関係の資料を網羅的に収集することを試みてきた。とくに、この寺院マッピングのプロジェクトが進展するなかで、情報学の専門家を含む共同研究で求められるのは、定量的なデータであることが理解できるようになってきた。

そこで注目したのが、植民地期以降のカンボジアで刊行されてきた官報である。近代国家は、おしなべて官報を刊行し、法律・政令・人事の記録などを発表することを常としている。カンボジアでは、1863年の植民地化からはかなり遅れるものの、カンボジ

ア理事長官府 (Résidence Supérieure au Cambodge) が1902年にフランス語版の官報を刊行し始めた。本稿では、この官報からのデータ収集のあり方を紹介し、そうしたデータから何が論じられるのか、その可能性について考察したい。

2. カンボジアの官報

本節では、カンボジアの官報の刊行状況や、国立公文書館の所蔵状況について説明する。カンボジア国内に限定された官報の発刊に先立って、フランス領インドシナ全体を扱う官報 (*Journal Officiel de l'Indo-Chine*、のちに *Journal Officiel de l'Indochine*) が、インドシナ総督によって1889年から刊行されるようになった¹。使用言語は当然ながらフランス語であり、国立公文書館の所蔵巻から判断すると、1951年まで刊行がつづいた。

その後、1902年からカンボジア理事長官がフランス語版の官報 (*Bulletin Administratif du Cambodge*) を刊行するようになった。植民地期のカンボジアでは、王国、王権が維持され、国王が王令 (*ordonnance royale*) や勅令 (*édit royal*) を発布していたものの、そうした王令や勅令の施行を認めるカンボジア理事長官令 (*arrêté du Résident Supérieur au Cambodge*) が公布されて初めて法的な拘束力をもつ制度が創りあげられた。フランス語版の刊行から遅れて、1911年からクメール語版の官報 (*Reach Kech*) も刊行されるようになったが、当初はフランス語版の全訳ではなく、重要と認められた各種政令だけが掲載されるダイジェスト版となっている。

こうした2言語での官報刊行は、第二次世界大戦中の政治状況から影響を受け、1945年を境に変化が見られる。大戦中のフランス領インドシナは、ナチス・ドイツの影響下にあるヴィシー政府によって統治されていた。したがって、日本軍が直接支配を敷くこ

1 カンボジア国立公文書館は、1895年からの号を所蔵している。

とはなく、日本とフランスの二重支配を受けた。その後、1944年8月25日のパリ解放、ヴィシー政府の崩壊により、日本軍はインドシナの直接支配を決定する。1945年3月9日、日本軍が明号作戦によりインドシナ軍を武装解除し、同月12日、日本軍政下の名目的なものながら、ノロドム・シハヌック国王が「カンプチア王国」の独立を宣言した。

独立により、フランス語版の官報は *Journal Officiel du Cambodge* へとタイトルが変更され、王国政府が刊行母体となった。つづく日本の敗戦により、1945年12月14日には「カンプチア王国」の独立が取り消された。しかし1946年1月7日、フランス＝カンボジア暫定協定が調印され、フランス連合内での内政自治が承認された結果、王国政府によるフランス語版官報が継続して刊行されることになった。一方、フランス植民地政庁は理事長官府から高等弁務官府 (Haut Commissariat) へと名称を変え、王国政府とは別にフランス語版の官報 *Bulletin Administratif Français du Cambodge* を発刊した²。

1953年前半、フランスはカンボジアに軍事権、司法権、行政権、警察権を順次委譲し、11月9日には独立式典が挙行された。ただし独立後も、行政や司法の用語としてフランス語が残存し、王国政府による両言語の官報が、ともに刊行されつづけることになった。

1970年3月18日、シハヌックが国家元首の座から解任され、いわゆる「ロン・ノル政権」が成立した。その結果、ゲリラ活動を行っていた共産主義勢力 (いわゆる「クメール・ルージュ」) とシハヌックが共闘し、ロン・ノル政権を共通の打倒目標とするカンプチア民族統一戦線が結成され、カンボジアは内戦状態に入った。ロン・ノル政権は共和制への移行を宣言し、1970年10月8日、国名がクメール共和国に変更された。その結果、王政にまつわる用語が忌避され、クメール語版の官報も「国王」を意味する "Reach" という語が削除されて、直訳すれば「国家の仕事」となる *Roat Kech* へとタイトルを変更した。

1975年4月17日、クメール共和国を倒して成立したポル・ポト政権 (民主カンプチア) 下では、官報は刊行されていない。1979年1月7日、ベトナム軍に支援された勢力の侵攻を受けてポル・ポト政権が崩壊し、人民革命党による政権 (いわゆる「ヘン・サムリン政権」) が成立した。人民革命党政権はシハヌックが結成した FUNCINPEC やクメール・ルージュを含む3派連合との戦闘を余儀なくされるものの、80年代を通じて徐々に支配地域を広げ、社会主義国家

としての形態を整えていった。官報も1985年からクメール語のみで発刊され、やはり王政に関する用語が忌避されたことから、そのタイトルは *Roat Kech* となっている。

1991年10月23日、人民革命党政権と3派連合との間で統一政府の樹立に向けたパリ和平協定が調印され、20余年におよぶカンボジア内戦によりやく終止符が打たれることになった。UNTAC (国連カンボジア暫定統治機構) の管理下、1993年5月23日に制憲議会選挙が実施されて、同年9月21日にシハヌックを国王に戴くカンボジア王国が成立した。これをうけて、国旗や国歌が1953～1970年のものに復し、クメール語で刊行されていた官報も、1970年までの *Reach Kech* というタイトルに戻るようになった。

国立公文書館は、植民地時代とロン・ノル政権下のフランス語版に若干の欠号や欠葉があるものの³、上記の2言語による官報のほとんどを紙版で所蔵している。さらに、植民地時代のフランス語版の一部 (1904～1915年) と、王国政府によるフランス語版すべて、高等弁務官府刊のフランス語版 (1945～1949年) は、マイクロ・フィルムのマスタール・コピーを作成済みである。そこで、筆者が代表者となって「国家形成と地域社会：カンボジア官報を利用した総合的研究」と題する共同研究を組織し、2010～2011年度に京都大学東南アジア研究所の共同利用・共同研究拠点「東南アジア研究の国際共同研究拠点」資料共有型に採択されて、上記マイクロ・フィルムのコピーを同研究所の図書室に納入した。

3. 官報からのデータ収集

植民地期以降、寺院に関する情報が官報に掲載された理由として、新たな寺院の建立や、寺院内の各種建造物の建立にあたって、許可が必要になったことがある。1903年11月21日付の王令79号⁴によって、新規に寺院を建立するには国王の勅許が必要となった⁵。また、植民地期には寺院内の各種建立物が木造であったことから、木材を伐採するにも許可が必要だった。

つづいて、1929年8月6日付の王令65号は、1903年11月21日付の王令を補則し⁶、これ以降、寺院の新

3 1927年4月11日号の全文、1931年12月19日号の一部、1944年1月10日号の一部、1948年8月24日号の一部、1972年5～12月の号を欠く。

4 以下、各政令の内容は、拙稿 [笹川 2013] を参照。

5 ANC RSC 3488 (32188) Ordonnance royale [N° 79], 21 Novembre 1903.

6 1929年8月9日付、理事長官令2358号により発効。*Bulletin Administratif du Cambodge*, 28 (8), août 1929, p.1217.

2 国立公文書館には、高等弁務官府による官報が1949年分まで保存されている。

規建立は王令、寺院内の各種建造物の建立とそのための木材伐採許可は宗教大臣⁷ 令によって許可されるようになった。

その後、1940年代後半からの独立準備期間には、寺院建立に関する政令も植民地期に定められたものが改められ、1949年9月30日付で勅令 (Kret) 188号が公布された⁸。さらにカンボジアが独立を達成すると、1949年9月30日付の勅令 188号は、1953年12月28日付の勅令 641号によって補則された⁹。

このように、寺院そのもの、あるいは寺院内の建造物に関する政令が、植民地期から独立後を通じて公布された結果、寺院に関する情報が、ポル・ポト政権の成立直前までカンボジアの官報に掲載されることになった。1902年から1973年まで、フランス語版官報から宗教に関する情報を網羅的に集めた結果、計6,216件のデータが得られた。

4. 官報のデータから見えてくるもの

年ごとのデータ数の変動から理解できることとして、まず1920年代からデータの数が大きく増える点あげられる。1920年代のカンボジアでは、フランス植民地政庁の行政区分と王国政府の行政区分がようやく一致した。その結果、植民地支配が全国に貫徹され、データ数の増加につながったと考えられる。また、フランス本国は第一次世界大戦の影響で疲弊していたのに対し、インドシナは米やゴムの輸出に由来する好景気に沸いており、種々の政策を実施するための財政的な裏付けが得られた時期でもある。そのため1920年代からのデータ増加は、植民地政庁がカンボジア国内各地を把握できるようになった証左と分析できるのに加え、好景気が現地経済にも影響を与え、寺院を新規に建立したり、既存の建物を再建する経済的な余裕が人々の間に生まれた結果とも推測できる。

その後、第二次世界大戦中にデータ数が減少を見せる。ただし、カンボジアでもタイ＝仏印戦争による領土割譲や、都市部では連合軍による空爆の懸念などがあったものの、全国が激しい戦場となったわけではなく、人々の宗教実践は継続していた。一方で、王国政府にせよフランス植民地政庁にせよ、宗教活動に関する情報収集が戦時下で困難だったことが、データ数の減少の理由として考えられる。そのため、無許可で新規に建立した寺院が、戦後になって正式

に寺院として承認されるという記事が、1940年代後半に現われる。戦時下での宗教実践を示すデータとして、興味深い。

1940年代後半からの独立準備期間には、例年多くの情報が掲載されているが、1953年の独立後、1955年からデータ数が減少する。これは宗教実践の停滞を示すものではなく、寺院内の各種建造物に関する情報が載らなくなったことに由来する。独立後の王国政府（とくに宗教省）は、官報にどのような政令を掲載するか模索していたと思われ、1963年から布薩堂や寺院内の学校の建設や再建が、翌1964年からは僧房や講堂など、その他の建物の建設・再建に関する情報も再び記載されている。

1970年のロン・ノル政権成立により、カンボジアは内戦の時代に入る。そのため、多くの寺院が戦闘に巻き込まれて、破壊される運命をたどることになった。寺院の新規建立や各種建造物の建立・再建に関する情報も、激減している。ポル・ポト政権下での仏教の断絶を経て、1985年から人民革命党政権がクメール語のみで官報の刊行を再開するが、内戦前までのように寺院関係の政令が掲載されることはなくなった。

5. おわりに

以上で見てきたように、カンボジアの官報には、20世紀初頭からの寺院における様々な活動や仏教界の動向を知る貴重なデータが数多く掲載されていることがわかる。そこで本稿を閉じるにあたり、こうしたデータからどのような分析が可能か、考察してみたい。

第一に、寺院そのものの歴史、とくに新規建立の正確な年号が判明する点あげられる。カンボジアの寺院では、壁面や石碑に建立の年号が記されることは少なく、フィールド調査での聞き取りでも、僧侶や信者が正確な年号を記憶・伝承していることは、内戦前からつづく寺院の場合、稀である。

しかし、文献資料に記載されている新規建立の「正確」な年号は、その宗教施設が寺院として公認された期日であり、宗教実践はそれよりも先に始まっていたことが予想される。第二次世界大戦中に無許可で建てられた寺院を、戦後に追認している記事が、そうした宗教実践のあり方を示す傍証となる。

他方で、寺院の新規建立とは異なり、各種の学校開設の期日は、正確な年号を把握することが重要であると考えられる。植民地期からポル・ポト政権成立前までのカンボジアでは、寺院に併設された学校が、僧侶のためのパーリ語教育と、世俗の学童のた

7 植民地期には、大臣が5名しかおらず、内務大臣が宗教大臣としての職務を担当していた。

8 *Journal Officiel du Cambodge*, 5(40), 6 octobre 1949, p.1248.

9 *Journal Officiel du Cambodge*, 10 (1) , 7 janvier 1954, p.8.

めの初等教育という2つの役割を担っていた。拙稿[笹川 2009]では、パーリ語教育をめぐる中央での政策の展開についてまとめた。官報のデータを用いることで、こうした中央での政策変更——つまり、シヤムへの留学を途絶させ、国内でパーリ語教育を貫徹させるフランス植民地政庁の意図——が、いつ、どのように地方に波及したかが分析できると考えられる。

第三に、現代のカンボジア仏教の研究と、歴史研究との接合という論点が考えられる。カンボジアの仏教を考察するにあたり、ポル・ポト時代の断絶と、その後の復興をどのように把握するかが大きな課題であることは、論を俟たない。これまでの共同研究の成果などから、復興は無からの再出発ではなく、断絶以前のいずれかの時点で回帰することを人々が目指したと分析できる。では、断絶以前のカンボジア仏教は、どのようなものであったのか、歴史研究が貢献しうる余地は大きい。

以上、官報からのデータを用いて分析可能と思われる3点をあげた。これらの分析にあたっては、歴史データに見られる寺院が現代のどの寺院に相当するのか、その場所はどこなのか、寺院名や行政区分にどのような変遷が見られるかといった事項を把握する必要がある。現在、カンボジア宗教省から入手した国内全寺院のリストをデジタル化し、寺院の地理情報を入力する作業を進めている。こうした地理情報の処理や、歴史データと地理データとの照合作業については、稿を改めて論じたい。

参考文献

- Edwards, Penny. 2007. *Cambodge: The Cultivation of a Nation, 1860-1945*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Hansen, Anne Ruth. 2007. *How to Behave: Buddhism and Modernity in Colonial Cambodia, 1860-1930*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- 笹川秀夫. 2009. 「植民地期のカンボジアにおける対仏教政策と仏教界の反応」京都大学グローバル COE プログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」ワーキングペーパー、Area Studies No. 85、G-COE Series, No. 83.
- . 2013. 「カンボジア上座仏教寺院の史的変遷 (1) : 官報からの歴史データの分析に向けて」『宗教と地域の時空間マッピングニューズレター』6: 1-13.

International Workshop
“Mapping Practices among Theravadin of Southeast Asia in
Time and Space”
Feb. 27, 2013(BE2556) @Chulalongkorn University

“Digitalization of Historical and
Geographical Data on the Theravada
Buddhist Temples in Cambodia”

SASAGAWA Hideo
(Ritsumeikan Asia Pacific University)

Fig. 9-1

1. Collection of Historical Data

1.1 Historical Documents since the Colonial Period

- Colonization of Cambodia – BE2406
- Enrichment of documents – from BE2450s
- [The National Archives of Cambodia](#) – open to researchers from BE2540
- Colonial period – documents issued from the French authorities
- After independence (BE2496) – official publications
- This time – I collected data from the official gazette



Fig. 9-2



Fig. 9-3



Fig. 9-4

1.2 Official Gazettes in Cambodia

- Modern states has published official gazette monthly or weekly.
- It carries law, government ordinance, personnel affairs, etc.
- In Cambodia, [the French colonial authority began to publish it](#) from BE2445.
- French version – BE2445-2516
- Khmer version – BE2454-2516, 2528-present



Fig. 9-5



Fig. 9-6



Fig. 9-7

Cambodian Official Gazettes after independence



Fig. 9-8

1.3 Data Collection from the Official Gazettes

- This time, I used the French version.
- Its publication was earlier than the Khmer version
- Date processing of Roman alphabets are easier than the Khmer letters.

Fig. 9-9

1.3 Data Collection from the Official Gazettes (cont.)

- From the colonial period, construction of temples became required official permission.
- Before the civil war, wooden building had been popular, and it was necessary to obtain permission to cut trees in forest.
- These permissions were mentioned in the official gazette.

Fig. 9-10

1.4 Temple Data in the Official Gazettes

- For about 70 years (BE2445-2516) – over 6,000 items
- Date, address (province, district, commune, village), temple names
- Construction of a temple itself
- Construction of various buildings in temples
- Foundation of schools – Pali language education will be discussed later.

Fig. 9-11

Data collection from the French version of the official gazette

Fig. 9-12

1.5 Problems of Data Processing

- Administrative units and address have been changed drastically.
- Temple names, however, shows continuity between the pre-war and post-war periods in spite of extinction of Buddhism under the Pol Pot Regime.
- Therefore, Temple names can be a clue to identify historical data with the current temples.

Fig. 9-13

2. Processing of Geographical Data 2.1 Temple List of the Ministry of Religions

- A list of all the temples (around 4,380) in Cambodia
- In cooperation with Dr. KOBAYASHI Satoru, I obtained BE2552 version.
- A Cambodian student input its data into an Excel file.



Fig. 9-14

Temple list issued by the Ministry of Religions



Fig. 9-15

ព្រះរាជាណាចក្រកម្ពុជា
ជាតិ សាសនា ព្រះមហាក្សត្រ

ក្រសួងសាសនា
ព្រះបរមរាជវាំង

លេខៈ ០១
បញ្ជីបញ្ជីសាសនា

ល.រ	ស្រុក	ស្រុក	ស្រុក	ស្រុក	ស្រុក	ស្រុក	ស្រុក	ស្រុក	ស្រុក	ស្រុក
1	ស្រុក	1	100	100	100	100	100	100	100	100
2	ស្រុក	2	200	200	200	200	200	200	200	200
3	ស្រុក	3	300	300	300	300	300	300	300	300
4	ស្រុក	4	400	400	400	400	400	400	400	400
5	ស្រុក	5	500	500	500	500	500	500	500	500
6	ស្រុក	6	600	600	600	600	600	600	600	600
7	ស្រុក	7	700	700	700	700	700	700	700	700
8	ស្រុក	8	800	800	800	800	800	800	800	800
9	ស្រុក	9	900	900	900	900	900	900	900	900
10	ស្រុក	10	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000

លេខៈ ០១
បញ្ជីបញ្ជីសាសនា

Fig. 9-16

Number of temples, monks, novices, etc. in Phnom Penh

ព្រះរាជាណាចក្រកម្ពុជា
ជាតិ សាសនា ព្រះមហាក្សត្រ

ក្រសួងសាសនា
ព្រះបរមរាជវាំង

លេខៈ ០១
បញ្ជីបញ្ជីសាសនា

ល.រ	ស្រុក	ស្រុក	ស្រុក	ស្រុក	ស្រុក	ស្រុក	ស្រុក	ស្រុក	ស្រុក	ស្រុក
1	ស្រុក	1	100	100	100	100	100	100	100	100
2	ស្រុក	2	200	200	200	200	200	200	200	200
3	ស្រុក	3	300	300	300	300	300	300	300	300
4	ស្រុក	4	400	400	400	400	400	400	400	400
5	ស្រុក	5	500	500	500	500	500	500	500	500
6	ស្រុក	6	600	600	600	600	600	600	600	600
7	ស្រុក	7	700	700	700	700	700	700	700	700
8	ស្រុក	8	800	800	800	800	800	800	800	800
9	ស្រុក	9	900	900	900	900	900	900	900	900
10	ស្រុក	10	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000

Temple Data at Ponhea Leu District, Kandal Province

Fig. 9-17

2.1 Temple List of the Ministry of Religions (cont.)

- Mistakes made by the Ministry: spelling, address (esp. village names)
- Mistakes made by the Cambodian student
- It was indispensable to collect these mistakes for data processing.

Fig. 9-18

2.2 Input of Geographical Data

- Field research -> I can get GPS data.
- National Census in BE2550 and its CD-ROM
- Village names, these locations, village codes
- I added two-digit numbers to the codes and created temple codes.

Fig. 9-19

2.2 Input of Geographical Data (cont.)

- I bought paper maps of all the districts (193 sheets) at bookstores.
- In BE2544, the Ministry of Interior ordered all the commune chiefs to submit (handwritten) maps of their commune in preparation for a rural assembly election.
- Up to now, I have settled 98% of 4,380 temples' locations.

Fig. 9-20

Digitalized temple list with geographical data

Temple Code	Official Name	Other Name	Former Name	Sex	Place	New District	New Postcode	STAMP	STAMP	STAMP
1	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
771	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
772	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
773	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
774	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
775	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
776	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
777	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
778	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
779	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
780	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
781	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
782	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
783	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
784	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
785	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
786	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
787	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
788	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
789	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
790	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
791	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
792	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
793	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
794	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
795	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
796	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
797	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
798	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
799	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000
800	ស្រះ	ស្រះ	ស្រះ	M	ស្រះ	ស្រះ	12000	12000	12000	12000

Fig. 9-21

Theravadin temples in the List of the Ministry of Religions

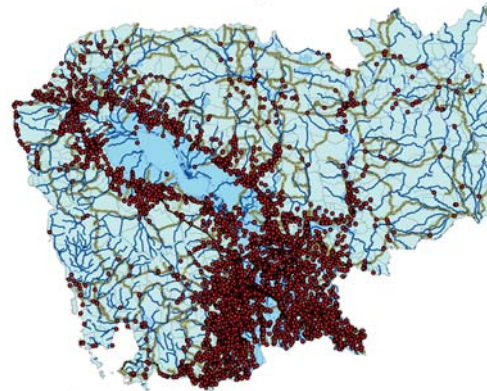


Fig. 9-22

Administrative units and Theravadin temples

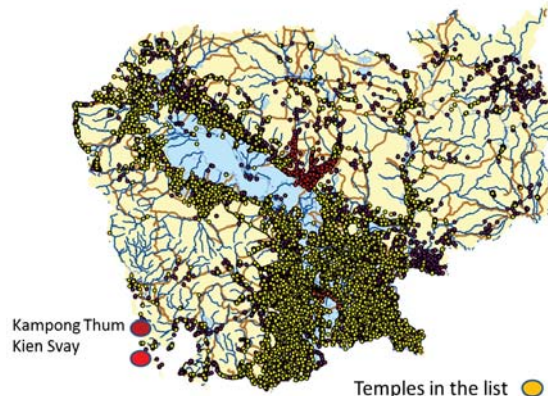


Fig. 9-23

3. Collation of Historical and Geographical Data

- Administrative units and address have been changed in many cases.
- Temple names are the most important clue to identify historical data with geographical ones.
- When Cambodian Buddhism revived in BE2522, people wanted to return a certain point in the past.
- We can discuss characteristics of historical experience of extinction and revival.
- At this moment, around 2,500 items in the historical data have been identified with the contemporary temples

Fig. 9-24

<p>4. What can be seen from these data</p> <p>4.1 History of the temples</p> <ul style="list-style-type: none"> • Construction of the temples themselves • Exact dates (during BE2445-2516) • Field research shows ambiguous memories of monks and lay people. • Even the Ministry of Religions does not grasp exact data of temple construction. • We can discuss how people understand the origins of the temples. 	<p>4.2 Diffusion of Pali Language Education</p> <ul style="list-style-type: none"> • From the BE2400s to the former half of the colonial period, Cambodian Buddhist monks came to Siam in order to study the Pali language and obtain the scripture. • From the 2460s, the French colonial authority tried to cut off such a flow.
---	--

Fig. 9-25

Fig. 9-26

<p>4.2 Diffusion of Pali Language Education (cont.)</p> <ul style="list-style-type: none"> • Pali elementary schools were founded at many temples, and these alumni began to enter the Pali superior school at Phnom Penh. • The official gazettes present foundation of temple schools. • We can discuss when and how such a policy formulated by the central authority diffused to the rural society. 	<p>4.3 Connection with the Studies on Contemporary Cambodian Buddhism</p> <ul style="list-style-type: none"> • Dr. KOBAYASHI and Dr. TAKAHASHI Miwa exerted field research on the movement of Cambodian Buddhist monks. • Based on my database, they will be able to grasp the exact location of the temples from and to which these monks moved. • This project will provide base map and basic database not only for historical study but also contemporary one on Cambodian Buddhism.
--	---

Fig. 9-27

Fig. 9-28

時空間マッピングの成果と今後の課題

——ミャンマー称号授与僧の分析から——

東京外国語大学大学院総合国際学研究院

土佐 桂子

1. はじめに

ミャンマーでは2007年の僧侶デモをはじめ僧侶が中心となる社会運動が盛んに見られるようになった。僧侶デモの研究はさまざまな角度からなされるが、本研究に関連させると、デモが短い時間で全国多数に広がった理由に教学僧院ネットワークに着目する必要性が示されたといえる（土佐2012参照）。さらに、現政権下では僧侶を中心とする署名運動など極めて迅速で広範囲に広がる傾向にあり、その解明のためにも、出家者の移動とネットワークの結節点を見る研究は極めて現代的意義を持つといえる。

ただし、デモ鎮圧後数年は多くの僧院が政府当局の監視下におかれ、出家の移動に関する現地調査や調査許可は厳しい状況に置かれた。本研究は、平成20年度から3年間続いた科研（「大陸部東南アジア仏教徒社会の時空間マッピング—寺院類型・社会移動・ネットワーク」(代表：京都大学・林行夫)の成果を主とする。また、発足時の事情もあり、文献資料を基に始めた¹。具体的には1990年代初期に新たに制定された称号を授与された僧侶（以下では「称号授与僧」と記す）の経歴から移動に関するデータを取り出した。本稿では、称号授与僧の経歴を基にしたエクセル表のデータから得られた知見を簡単に記し、今後の課題を考えたい。

2. 称号授与の背景と資料の特徴

データは国家法秩序回復評議会（State Law and Order Restoration Council: SLORC、後に国家SPDC 平和発展評議会と改名、双方を軍事政権と呼ぶ）政権初期にサンガの中核を占めた僧侶の移動状況である。この政権時代の宗教政策は、基本的にネーウイ

ン政権時代の継承とみてよく、1980年の全宗派合同会議で成立した統一サンガとその全国的組織化を基盤としている。ただ、1988年の民主化運動の際に、多数の若手僧侶がデモに参加し、90年にはデモ参加僧処分への不服から、マンダレーを中心に僧侶の軍隊関係者に対する不受布施運動が広がった。そのため、政権側は僧侶の管理を強化しつつ懐柔政策も取り、新称号創設はそのひとつと考えられる。英領時代の一時期アビダザ・マハー・ラッタグルとエッガ・マハー・バンディタという2称号が授与されていたが、ネーウィン政権は全宗派合同会議に先立って79年にその2称号を復活させた。軍事政権はそれに加えて、91年46号布告、92年2号布告に基づき新称号を二十種設け、92年3月に授与式を行った（表1参照）。本科研ではこの初回時と93年の授与者の経歴を主要なデータとしている。

授与には位階に従い法ろうや資格が細かく定められている。表に落としたデータは僧侶（比丘）675名、尼僧48名、在家信者48名で、僧侶の生年は1890年から1961年に及ぶ。名前を記した僧院は計1430、資料に基づく種類分けは教学僧院1297、森林僧院28、瞑想僧院84、種類の言及がないものが9である²。称号は前述の通り、経典学習や説法、瞑想実践、仏教布教の評価が含まれており、その意味では称号授与僧は多方面の評価に基づく。この資料は90年代サンガ組織の中核となった僧侶、ないし政権が当時評価した僧侶の経歴集と言い変えられる。

3. 称号授与僧と分布について

称号授与僧の地域分布と、その比較に、1995年の

2 尼僧僧院24を含む。「教学僧院」とは教学教育に特化し、見習僧、僧侶が多数集まる特化した僧院を指すことが多い。しかし名称として比較的軽く使う場合もあり、資料では出身村の僧院がほとんど「教学僧院」となっているが、現在では50名以上の僧侶沙弥の所属を求められるため、恐らく厳密には使われていないと考えられる。

1 使用した文献の書誌情報は『宗教と地域の時空間マッピング』ニューズレター第4号（pp.17-20）を参照。

表1 称号名称と出家の授与者数

種類	称号名称	92年授与 (人数)	93年授与 (人数)	計 (人数)
	アビダザ・マハー・ラッタグル	3	1	4
	エッガ・マハー・パンディタ	70	58	128
仏教布教 4位階	アビダザ・エッガ・マハー・タッダンマ・ゾーティカ	8	2	10
	エッガ・マハー・タッダンマ・ゾーティカ・ダザ	14	18	32
	マハー・タッダンマ・ゾーティカ・ダザ	15	11	26
	タッダンマ・ゾーティカ・ダザ	16	19	35
瞑想師 3位階	エッガ・マハー・カマターナー・サリヤ	11	3	14
	マハー・カマターナー・サリヤ	12	14	26
	スーラ・カマターナー・サリヤ	6	8	14
仏教講師 3位階	エッガ・マハー・ガンダワーサカ・パンディタ	78	33	111
	マハー・ガンダワーサカ・パンディタ	86	93	179
	スーラ・ガンダワーサカ・パンディタ	31	50	81
説法師 2位階	マハー・ダンマカティカ・パフザナヒタ・ダラ	4	1	5
	ダンマカティカ・パフザナヒタ・ダラ	2	8	10
	合計	356	319	675

表2 称号授与僧の分布

コード 番号	州管区	人口 (単位千人)	僧侶 (人数)	見習僧 (人数)	合計 (人数)	サンガ 国内分布 (%)	サンガ 人口 (千人当)	授与僧 出身 (人数)	授与僧出 身地分布 (%)	授与僧現 居住地 (人数)	授与僧現 居住分布 (%)
01	カチン州	1157	2228	2633	4861	1.2	4.2	6	0.9	19	2.8
02	カヤー州	234	407	769	1176	0.3	5.03	1	0.1	12	1.8
03	カレン州	1349	4766	7371	12137	3.1	9	15	2.2	15	2.2
04	チン州	444	154	47	201	0.1	0.45	1	0.1	7	1.0
05	ザガイン管区	4985	18267	29193	47460	12.0	9.52	136	20.1	69	10.3
06	タニンダーイー管区	1214	3564	3780	7344	1.9	6.05	10	1.5	11	1.6
07	バゴ管区	4687	19019	18256	37275	9.4	7.95	59	8.7	67	10.0
08	マグエ管区	4145	11683	18135	29818	7.5	7.19	110	16.3	45	6.7
09	マンダレー管区	5944	30736	46728	77464	19.5	13.03	111	16.4	194	29.0
10d	モン州	2233	12770	12737	25507	6.4	11.42	39	5.8	33	4.9
11	ヤカイン州	2524	4525	6562	11087	2.8	4.39	43	6.4	20	3.0
12	ヤンゴン管区	5126	25202	18530	43732	11.0	8.53	31	4.6	107	16.0
13	シャン州	4486	12219	52909	65128	16.4	14.52	40	5.9	57	8.5
14	エーヤーワディ管区	6216	16558	16854	33412	8.4	5.38	73	10.8	14	2.1
	合計	44744	162098	234504	396602	100.0	8.86	675	100.0	670	100.0

(出典)「基本規則」付録(TUH[1996])と科研データより筆者作成

州管区別のサンガ人口数を用い、出身別と現在居住僧院の数値と割合を入れたのが表2である。

まず、授与僧侶の現在居住僧院の分布である。称号は試験結果に加えて法ろう、住職となる僧院の規模、サンガ組織でのキャリアなどが核となる。ただ

仏教布教称号は仏教社会における「辺境地域」での活動が評価されることが多く、辺境地で称号を得ることが多い。さらに教学僧院等では全国的なバランスや政治的な思惑も入っている。たとえばチン、カヤー、カチン州は、仏教徒が他と比してきわめて少

なく、サンガ人口も少数だが、サンガ人口割合より称号授与僧侶割合が若干高い。この地域の僧侶の得た称号はほぼ仏教布教系でほとんど州外出身者である。一方、サンガ人口分布割合に比して称号授与僧侶の割合が突出して多いのが、マンダレーとヤンゴンの二管区である。この地域は著名教学僧院が多く、大規模僧院も多いため、称号の条件に合致する僧侶の割合が高いことが容易に推察できる。ただマンダレーのデモの影響も称号授与の背景にあるとされ、マンダレーの僧侶の懐柔が意図された可能性もある。これらの点は、今後93年以降の称号授与僧侶を丹念に追っていけば、ある程度解明できるだろう。

次に出身地別の特徴を見ると、ザガイン管区、マダゲ管区が突出し、ヤカイン州がそれに次いでいる。ザガイン管区のザガイン丘やマダゲ管区のパコックには全国でも著名な教学僧院が集中し、教学に関心の高い僧侶が集まっているのは周知の事実である。しかし、この地の僧侶人口が直接出身者とは結びつくわけではない。例えば、ヤンゴン管区やマンダレー管区も大規模教学僧院が多く、いわば僧侶の「教育地」としても有名だが、この地域出身者の称号授与僧の割合は低い。むしろ、ヤンゴン管区出身者で称号授与僧となったものの割合は著しく低い。つまり、ザガイン管区やマダゲ管区出身者は称号授与率が高く、「エリート僧侶」の産出地といえるが、ヤンゴンは教育地ではあっても産出地とは違う。もちろん、単純に州や管区で区切ることを意味をそもそも考えるべきだが、表に明らかな差異が存在するならば、その点を調査で明らかにしていくことには意味がある。

4. 僧侶について

僧侶675名について、見習僧として得度した平均年齢は12歳である。得度年は1900年から1960年に及ぶが、得度する年齢に大きな変化はとくに見られない。もちろん、これは前述のようにエリートのリストで、教学試験は若いころからの訓練、暗記が重要であるため、全体の平均より得度年が低い可能性はある。ただ、現在の調査を通じても12、13歳での得度は最も一般的と認識されている。

また、称号授与僧の経歴から、僧院移動は頻繁に行われていることが読み取れる。経歴には移動の年月日は書かれないことも多く、今回の表ではあまり効果的に示せなかった。しかし、経歴の書き方の基本として、見習僧、僧侶として初めて得度した年月日と僧院名、場所は必ず記される。生地、見習僧得度、僧侶得度という関箇所移動状況を調べると（表は省略）、675名の僧侶のうち①すべて移動しなかった

僧は217名(32%)、②生地と見習僧の得度が同じ場所、僧侶の得度で移動したのが276名(41%)で最も多い。③生地から移動して見習僧と僧侶得度を同じ場所で行ったのは126名(19%)、④すべて移動したものは56名(9%)である。若干説明を加えれば、三か所同じ(①の場合)でも、単に全く移動しないという意味ではない。個別の事例は省くが外部の僧院で教学を学んでいても、一度帰って親や親族のいる生まれ故郷で得度することも多い。僧侶得度で移動(②)というのは、生まれた村の僧院に戒壇がないとか、その当時学んでいた教学僧院で得度するといった事例である。一方、見習僧の段階で生地から移動するケースは、③と④を足して27%となる。ただし、これも郡のレベルでみると多くは移動していないことも興味深い。すべて移動したケース(④)はそもそも生まれた地域に僧院がないということもあるが、最も近い僧院がたまたま行政的な所在地が生まれた村落とは異なるというケースも少なくない。ちなみに、現在の人口における僧院比をみると、おおよそ人口千人に1僧院で、仏教徒が多い地域では、だいたい村落毎に僧院がある。

5. 僧院について

データによれば、僧侶が一度は居住したことのある僧院は全部で1430あった。上述のように僧侶は僧院移動をかなり行う。しかし、称号授与僧がよく居住する僧院というものが存在する。一度でも居住したことがあると書かれた僧院は、エクセルの表に順次加えてある。このうち、僧侶の居住が最も多い順から並べてみた。上位20僧院の地域的な内訳をみると、マンダレー管区9、マダゲ管区3(パコック2イエナンジャウン1)、バゴ管区3、ヤンゴン管区3、ザガイン1、エーヤーワディ管区1となる。

僧院別に言えば、最も多くの僧侶が居住したのは、マンダレーのウイトゥダヨン僧院で、称号授与僧のうち39名が居住経験を持ち、当時居住中が10名で、これも最多である。つまりこの僧院は、同時代で最も多くの称号授与僧を輩出したと言えよう。以下、居住経験者の多い順に僧院名と人数を挙げれば、マンダレー管区マンダレー市のマソーイエイン僧院35、同市デッキナラーマ僧院28、マダゲ管区パコック郡のマハーウイトゥカラマ僧院25、エーヤーワディ管区のピッツータヨン・パーリ大学僧院19、マンダレー管区アマラープラ市のマハーガンダヨン僧院18、バゴ管区バゴ市のチャイカッワイン僧院18、マダゲ管区パコック郡のマハーウィザヤラーマ東僧院17、ザガイン管区モンユワ郡マハーレーディ僧院17、

ヤンゴン管区マヤンゴン区の国家仏教大学16となる。すなわち10位の国家仏教大学以外はすべて一般の大規模教学僧院である。

現在、サンガ内事業として「経典パーリ語ミャンマー大辞典」の辞書編纂が進行中で、4つの大規模僧院群が担当している。すなわち、ザンブディパ、マソーイエイン、ウイトウダーヨン、パコック、パヤージーだが、この二つ、マソーイエインとウイトウダーヨンが、称号授与僧が一度は居住した僧院の第一位と第二位を占めている。たとえば、「マソーイエイン僧院」は僧院敷地内にいくつも僧院が増設されて、現在では第一僧院、第二僧院、第三僧院、旧僧院などが存在する。2010年の調査では、ざっと僧侶1500人、見習僧2000人近くを受け入れる大規模な複合僧院といえ、全国に支部といえる同名の僧院もある。もちろん、90年代に称号授与僧を多数輩出したことが辞典編纂担当につながった可能性も多少あるかもしれないが、現実に教育の質量ともに極めて高度なことで知られる名門僧院である。

6. 研究の方向性と今後の課題

その後、筆者は僧侶の移動と現在の活動を調べるという点で共通性を持つ研究を科研基盤研究C(「ミャンマーにおける仏教布教の政治・社会的展開：市民活動」代表者土佐桂子)で継続している。この研究では辺境地域に派遣された僧侶を中心に、可能な限り地元の僧院での調査も補充しているが、こうした研究を進めるうえでも、時空間マッピングでの成果、意義、さらには、今後の更なる必要性を強く認識した。時空間マッピングにおける授賞僧侶の経歴を集めた成果をここではいくつか挙げたい。第一に経験的に、またある種常識として把握していることを、明確な数値として把握する価値である。たとえば、教学僧院として名高いマソーイエイン僧院、ウイトウダヨン僧院などは称号授与僧との客観的数値に基づく関係が指摘できたといえよう。これは、サンガ組織の中枢にいる教学系僧侶の傾向というわけではない。辺境地域に派遣された僧侶の多くが学んだことのある僧院としてよく挙げている。もちろん、辺境派遣僧侶の多くは仏教大学の学僧、あるいは卒業生が多いが、弟子や関係者を再度自分が学んだ僧院に派遣することで新たな見解が成り立つ。このように、称号授与僧と著名僧院の客観的数値に基づく関係が指摘できたことは重要である。さらに、上位にランクインした僧院について、今後僧院史や現況などを丹念に調べていくこともミャンマーのサンガの在り様を理解するうえで必須の作業となるだろう。第二に、見習

僧となる年齢や得度場所、僧侶となる場所、そのパターンや移動の特徴を知り、他の仏教社会との比較という観点を通じて、改めてそれぞれの地域実践の多様さを理解できる点である。ここで記した移動パターンなどは確かに経験的に調査を通じて見聞きしていたことを大きく裏切っているわけではないが、90年代初頭の著名僧侶に対して一定のパターンが把握できたことは意義がある。第三に全国的、網羅的なデータを得たことにより新たな知見も多々得られた。一例だけあげれば、称号授与者の出身分布としてはザガイン管区、マゲ管区が突出していること、さらに、ヤンゴン管区はサンガ人口比は高いものが出身者が称号授与者に占める割合は少ないといった点である。また、上述個人科研を通じて改めて地域の実践の差異を感じ、今後広い視点に立ち、ミャンマー仏教、さらには個別地域実践を丹念に調査することが望まれる。

【文献】

土佐桂子 2012

「ミャンマー軍政下の宗教—サンガ政策と新しい仏教の動き」
『ミャンマー政治の実像-軍政23年の功罪と新政権のゆくえ』(工藤年博編)アジア経済研究所, pp. 201-233.

TUH (Thathanaye Usi Htana) 1996

Thanga Ahpweasi Ahkyehkan Simyin hnin Lokhton Lokni mya, Pyinhsin Hpyeswethkyet (「基本規則」と「手続き」第二版)

フィールド調査からデジタルデータへ

京都大学地域研究統合情報センター

須羽 新二

1. はじめに

ここでは、寺院や僧侶の時間空間マップを作成する手順と、そこで生じる問題点について論じる。この報告は、ブルドンの報告 [Bourdon 2014] と対になるものであり、データ処理の前半部分、つまり、調査データを数値化する過程をこの報告が、そして、数値データを地図化する過程をブルドン報告が受け持つことになる。この論の主眼は、『寺院での聞き取りを数値化する過程でどのような問題が発生するか』であるが、問題をわかりやすくするため、僧侶の移動に関する調査に限定して論じることとする。

僧侶の移動に関して聞き取った項目のうち、この論では一部のデータにだけ言及する。僧侶ひとりひとりの、出生年、出生地、出家年、出家地、止住歴である。これらは、僧侶移動マップ作成に必要な最低限の情報である。どれも単なる客観的事実であり、容易に数値化できるように思えるが、そこにも数多くの問題を抱えている。

聞き取り結果を数値化する手順は大きく4つに分かれる。(1) 移動状況を調査票に記入、(2) 調査票をコンピュータ入力、(3) 住所をコード化、(4) 住所コードを位置情報に変換、である。その手順をたどりながら、それぞれの過程に潜む問題点を明らかにしていきたい。

2. 聞き取り時の問題点

質問票は図 (Fig. 11-3) に示される。ウボン県コンナム郡のある僧侶の、過去10年間の止住寺院を書き取ったものである。調査データをコンピュータ入力したのが次の図 (Fig. 11-4) となる。住所を行政区分で分けて単純に文字入力しているだけである。

聞き取り時の問題として、まず考えられるのが被調査者の記憶違いである。年代の記憶違いは年配の

僧侶に多くみられる。例えば、本人の言うままに記録すると、「10歳で比丘として得度した」ことになってしまったりする場合だ。これは、インタビュー時点で、当時の年齢確認を徹底することによって、ある程度防止可能である。

場所の情報についても、記憶をもとにするので、不正確なことがよくある。寺院名は覚えていても住所がいいかげんであるとかである。地名一覧表などを用意して、番号で調査票に記入するという方法は确实だが、インタビューに時間がかかるという欠点がある。地名や寺院名の正式名称と通称という問題も手伝って、現実問題として、被調査者の言う通りに記入するという手法を取らざるを得ない。

3. データ入力時の問題点

コンピュータ入力時には、まず、文字か数字かという問題がある。時間については、西暦か仏暦かという問題はあるにせよ、数字で入力できる。場所、つまり住所については、先ほど述べた理由で、調査票には文字で記述するにしても、コンピュータ入力の段階で、地名表に照らし合わせて、地名コードで入力するという手が考えられる。しかしこの作業、地名表と照合してのコード化は、思うほど単純な作業ではない。時間もかかるし、複数の人間で分担すると効率が悪くなる。人を雇ったりして入力する場合、住所をそのまま文字で入力するほうが、結果的に作業量が少なくなる。

住所のコード化が単純ではない理由は、住所の記述方法がひとつではないからである。地名には、正式名と通称があったりするし、綴り方が複数あったりもする。綴り方の違いという問題は、ローマ字表記するとより大きくなるので、データ入力も現地語表記が良いと考えられる。そうするとデータ処理の人員が現地語を読める人に限定されてしまうが、その欠点は受け入れざるを得ない。

コンピュータでの扱いは特に注意が必要となる。コンピュータならではの問題があるからだ。欧米言語に比べると日本語のコンピュータ処理にも問題が多いが、大陸部東南アジアの言語にも、独特の問題がある。特殊な例だが、こんなものを紹介しよう (Fig. 11-6)。クデイドーンと読むこのクメール語地名は、見た目は全く同じだが、コンピュータ的には異なる。3文字目は、上は“T”で下は“D”と異なるものだが、このように組み合わせると同一の形になる。要するに、人間には同一の物と認識されても、コンピュータは違う物と判断するわけである。

結論として、文字入力された住所を地名表と照合してコード化するという作業は、機械だけでは不可能である。残りの部分は人の手で補う必要がある。そこには現地語の読める作業員が必要になってくる。

4. 地名のコード化

地名をコード化する場合、統一コードがあれば、それを使うほうが良いのは当然である。世界の国名と、国の下の行政区分、つまり県や州については、ISO (International Standard Organization、国際標準化機構) で決められている。ISO 3166 というものである。

ISO3166 の国コードは、アルファベット2文字のコードと数字3桁のコードの両方が用意されている。タイの場合、アルファベットは TH、数字なら 764 となる。県や州は、国によってアルファベットの場合と数字の場合があり、桁数もまちまちである。タイの場合、ほぼ数字で表現されているが、パタヤだけは S というアルファベットになっている。

ISO3166 は、国コードは統一と言えるが、県や州のコードは、各国コードの寄せ集めなので、桁数の統一もない。世界標準コードといっても実質的には極めて使い勝手が悪い。

郡レベル以下の地名コードは ISO では定義されていない。整備の状況は国によってまちまちである。国が標準コードを作成して、しかも無料で公開しているというケースは、むしろ少数派である。郵便番号のデータは無料で公開されていることが多いが、行政区分とは食い違いがあり、そのままでは利用できない。

タイの場合、国勢調査データが Web で公開されている。ここでは県名と郡名はわかるが、肝心の番号が書いていない。また、OTOP センター (タイの一村一品運動のセンター) の Web ページで、タンボン (行政村) の名前と番号を手に入れることができる。今回のデータ処理では、最終的に、内務省地方行政局

(DOPA) の Web サイトに置かれた Excel データを利用した。これは、村落 (ムバーン、タンボンの下位単位、自然村) の位置情報を調べて記入するための村落リストである。リストは全県 (調査年の 2010 年時点で 76 県) 網羅しているが、位置情報が記入されているのは現時点で 41 県しかない。

5. 入手した位置情報のチェック

DOPA (内務省地方行政局) の Web サイトにある位置情報をチェックのために地図上にプロットしてみた。調査対象であるウボン県コンチャム郡の村落は図 (Fig. 11-11、Fig. 11-12) のようになっている。これは補正をした後である。もともとの位置情報をプロットすると、東端の村はメコン川の中に位置してしまう。北西方向に約 500m ほどずらすと、航空写真でぴったり重なる (Fig. 11-13)。

このようにずれるのは、測地系 (datum) の違いだと思われる。測地系とは、座標の原点を決める方法のことである。DOPA で使用された測地系と GoogleMaps の測地系 (WGS84) が異なっていることがわかる。位置情報を入手する場合、どの測地系を使っているのかに注意をしなければならない。DOPA データの場合、どの測地系を使ったのか明記されていないが、WGS84 とのずれから判断すると、ウボン県コンチャム郡においては "Indian 1975" という測地系を使っていると推測される。

われわれの調査では、寺院の位置を直接 GPS 装置で計測している。計測した寺院の位置と、DOPA から入手した村の位置を重ね合わせたのが次の図 (Fig. 11-14) である。赤い点で調査寺院の位置、緑の点で村 (DOPA) の位置を示している。DOPA のデータには、村のどこで位置を計測したかが書いてあるが (たとえば『村の集会所』だとか『小学校』とか)、赤と緑が近いところが、寺にて位置計測をした村だとわかる。ズームアップしてもほぼ一致している (Fig. 11-15、Fig. 11-16)。このように、異なった方法で入手したデータによって、クロスチェックすることが可能となる。

6. 位置情報の入手方法いろいろ

位置情報を入手する方法はいくつかある。まずは、直接計測する方法である。もちろん最も確実だが手間もかかる。次に、公開された位置情報を使う方法。情報の信頼性や入手コストが問題となる (信頼性とコストは両立しない)。そして、住所データを位置情報に変換するという方法もある。この方法は

Geocoding (ジオコーディング) と呼ばれている。

タイにおいては、前述のように、政府機関である DOPA が位置情報を提供しているが、現状では全県を網羅していない。位置情報についてはタイの周辺国のほうが充実している。カンボジアでは、国勢調査データの DVD に位置情報も記載されている。ミャンマーでは、「ミャンマー情報管理ユニット」という国連の関連組織が、Web で村落レベルの位置情報を公開している。これらの国は、政治状況が不安定なために諸外国や国連の支援を受け、そのおかげで位置情報の質が向上したと考えられる。なんとも皮肉なことである。

本プロジェクトのタイのコンチアム調査では、3つの方法を併用した。コンチアム郡内は、GPS 装置で直接計測した寺院の位置情報を使った。同じ県 (ウボン県) の他郡は、DOPA の村位置情報を使用した。そして、県外は、Google の Geocoding サービスを利用した。

7. Geocoding サービス

地名データを位置情報に変換するサービスがあり、Geocoding と呼ばれている。Google Maps などの地図サービスがこれを提供している。

Geocoding は、Javascript などのプログラミング言語で利用するように作られているので、一般人には少し敷居が高いと思われる。その場合は、Geocoding システムを呼び出すように作られた Web サイトを利用できる。

そのひとつを紹介しよう (Fig. 11-19)。上側の窓に住所データを貼り付けると、下の窓に、緯度経度を追加して表示してくれる。この例はある日本の大学の研究室が提供する日本語のサイトだが¹、「geocoding」というキーワードで Web 検索すれば、同様のサイトは他にも見つかるだろう。

タイの住所情報の場合、Google の Geocoding を使くと、タンボン (行政村) レベルまではほぼ正確に変換できる。これは、タイ文字で表記した場合であって、ローマ字で表記すると、不正確になる。ウボン県のタンボンを地図上にプロットすると図 (Fig. 11-20) のようになる。ズームアップしてみると (Fig. 11-21)、ほぼ正確であることがわかる。

1 谷謙二研究室 (埼玉大学教育学部人文地理学)、『Google Maps APIv3 を使ったジオコーディングと地図化』
<http://ktgis.net/gcode/>

8. まとめ

僧侶の移動に関する聞き取り結果を数値化する過程において、問題点とその対策は以下のようにまとめられよう。

調査票への記入段階での問題は、客観的事実だけ尋ねる際にも、被調査者などの主観が介入するということである。これは、聞き取りという手法を採る限り避けられない問題であるが、確認しながら聞き取ることによって、データの客観性を高めることはできる。少なくとも、主観の介入を常に意識することが大切である。

コンピュータ入力段階では、地名というものが機械だけでは完全にコード化できないことに注意を払う必要がある。調査経験を積み重ね、ノウハウを蓄積することによって、聞き取り時間やデータ入力時間を短くすることができるだろう。

住所のコード化の段階では、地名コードの不統一が問題点として挙げられる。これは、自力で解決できる問題ではないので、しばらくは、分析者が独自コードを作成して対応するしかない。ユニークなコード (どんなデータも 1 対 1 の対応をしているという意味) を保つ限り、コード変換は機械的にできるのだから。

地名コードの位置情報への変換 (または位置情報の入手) 段階では、直接計測、公開位置情報の利用、地名位置変換サービスの利用といった手法のいずれを使うかが問題となる。先に述べたように、どれも一長一短であるので、われわれが行ったように、適宜組み合わせるのが現状での妥当な対応である。ただ、位置情報サービスの量も質も、どんどん高まっているので、数年待てば、今の苦勞も解消するかもしれない。

9. 地図作成の現状と展望

本論では、位置情報の取得までの段階に論を限定したが、発展課題として、データの地図化についても少しだけ触れておきたい。

以前は、コンピュータを利用して位置情報を地図上にプロットするには、専用の GIS ソフト (地理情報システムソフト) を使う必要があった。その作業は、一部の専門家が行うものであったので、ソフトも法外に高価であった。無料で使えるソフトも存在したが、機能はかなり限定されていた。そして、どんなソフトも、お世辞にも使いやすとは言えなかった。

しかし、Google などの Web ビジネス大手が地図

サービスに参入してきた2005年ごろから、状況が変わってきた。Web地図には誰もが当然のようにアクセスし、企業や商店も、自社サイトに地図サービスを使ったアクセスマップを掲載するようになった。スマートフォンが普及して以降は、Webサービスの中での地図の重要性が日々増大している。

GoogleやYahooなどの地図サービスは、Web上でユーザー地図を描画するためのプログラム言語(APIと呼ばれる)を提供している。大量アクセスが見込まれるケース以外は、ほぼ無料で利用が可能である。多少のプログラミング知識は要求されるが、地図上にマーカーを置くという基本的なものであれば、見よう見まねでも作成できる(簡単な作成方法は[須羽 2012]に述べた)。実際、本論で言及した地図もすべて、GoogleマップのAPI(Google Maps Java Script API v3)を使用して作成している。

プログラミングの知識が全くなくても、APIの利用はできる。Geocodingサービスとして紹介したサイト(Fig. 11-19)では、Geocodingで住所を位置情報に変換すると同時に、GoogleマップAPIを使って、地図をプロットしてくれる。自分でプログラムするほど自由には描けないが、データチェックには十分である。今後はこういったサイトが増えると考えられる。

今後、Web地図サービスの利用がますます伸びていくのは間違いない。携帯電話やスマートフォンにはすべてGPS機能が付くようになっているので、一般ユーザーが自前の地図を作ることも普通になり、地図作成のハードルもどんどん低くなるだろう。そうなった時、研究として求められるのは、地図作成の技術ではなく、取得したデータを表現するのにどういふ地図がふさわしいかを考えることである(ブルドンの報告[Bourdon 2014]では、その点に少し踏み込んでいる)。マッピング分析においては、分析結果を求めるのと同時に、データ提示の工夫も研究を進めていく必要がある。

参考文献

- Bourdon-Miyamoto, Julien. 2014. Theravadins in Khong Chiam: Visualizations for Movement Tracking. 『宗教実践を可視化する—大陸部東南アジア上座仏教徒の寺院と移動—』京都大学地域研究統合情報センター
- 須羽新二. 2012. 「寺院マッピングを取り巻く情報技術」『宗教と地域の時空間マッピングニューズレター』6: 10-16.

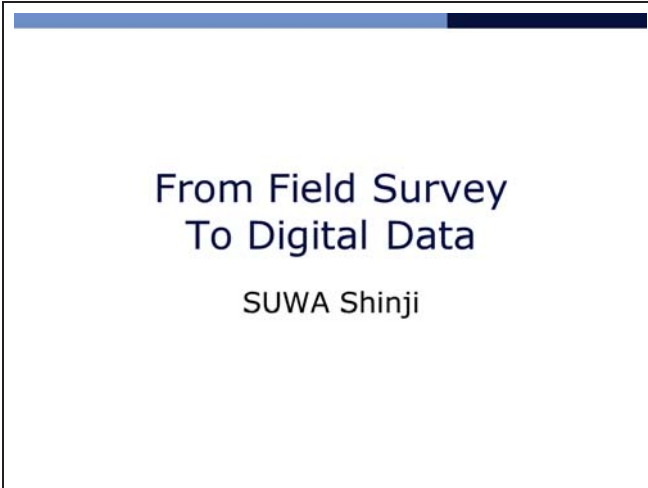


Fig. 11-1

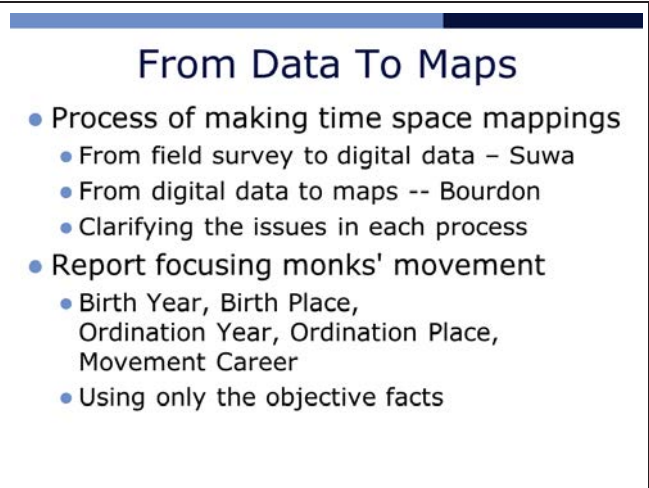


Fig. 11-2

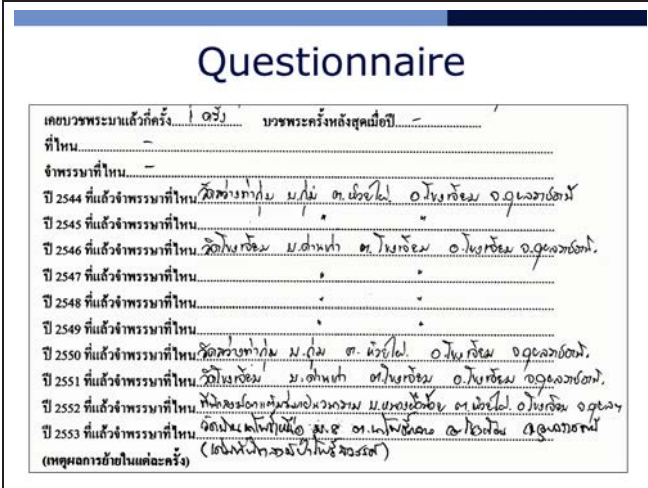


Fig. 11-3

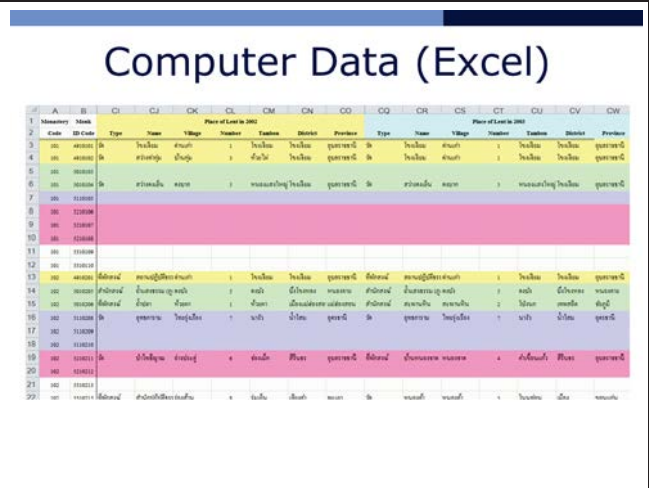


Fig. 11-4

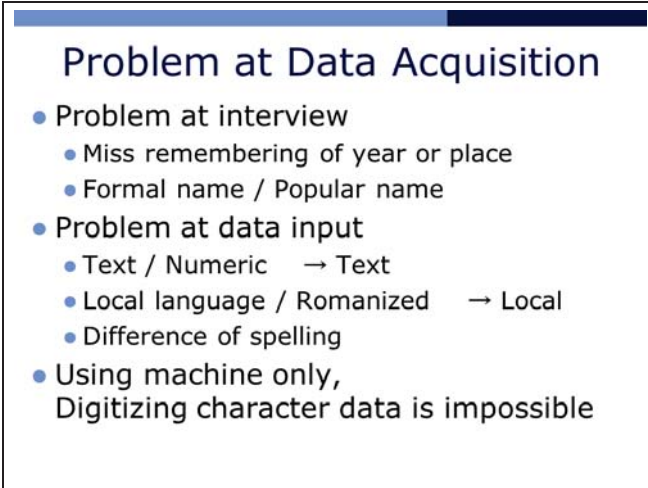


Fig. 11-5



Fig. 11-6

Encoding of Place Names

- "ISO 3166" is available for country code and province code
 - Country code : Internationally unified
 - Province code : Difference between countries
 - District, Village : Not defined in ISO
- Case of Thailand
 - OTOP(thaitambon.com) has Tambon list
 - Department of Provincial Administration (dopa.go.th) has village location data
- Location data by DOPA is not complete
 - Village code : 77 provinces
 - Village location : 41 provinces

Fig. 11-7

Department of Provincial Administration (DOPA)



Fig. 11-8

Village Code (DOPA)

ลำดับที่	อำเภอ	ตำบล	รหัสหมู่บ้าน	ชื่อหมู่บ้าน	หมู่ที่	สถานที่ตั้งบ้านพักอาศัย
277	โพธาราม	โพธาราม	34030101	บ้านท่า	01	
278	โพธาราม	โพธาราม	34030102	บ้านใหม่	02	
279	โพธาราม	โพธาราม	34030103	บ้านสะพาน	03	
280	โพธาราม	โพธาราม	34030104	บ้านหัว	04	
281	โพธาราม	โพธาราม	34030105	บ้านสูง	05	
282	โพธาราม	โพธาราม	34030106	บ้านหัวถนน	06	
283	โพธาราม	โพธาราม	34030107	บ้านท่าลาดใต้	07	
284	โพธาราม	โพธาราม	34030108	บ้านดัก	08	
285	โพธาราม	โพธาราม	34030109	บ้านทรายรี	09	
286	โพธาราม	โพธาราม	34030110	บ้านท่า	10	
287	โพธาราม	โพธาราม	34030111	บ้านหัวหินตา	11	
288	โพธาราม	โพธาราม	34030112	บ้านท่าลาดเหนือ	12	
289	โพธาราม	โพธาราม	34030201	บ้านท่า	01	
290	โพธาราม	โพธาราม	34030202	บ้านท่า	02	

Fig. 11-9

Village Location (DOPA)

ลำดับที่	อำเภอ	ตำบล	รหัสหมู่บ้าน	ชื่อหมู่บ้าน	หมู่ที่	สถานที่ตั้งบ้านพักอาศัย	ละติจูด (N)	ลองจิจูด (E)
277	โพธาราม	โพธาราม	34030101	บ้านท่า	01	บ้านท่า	13.51615	100.9229
278	โพธาราม	โพธาราม	34030102	บ้านใหม่	02	บ้านใหม่	13.52346	100.9490
279	โพธาราม	โพธาราม	34030103	บ้านสะพาน	03	บ้านสะพาน	13.51433	100.9478
280	โพธาราม	โพธาราม	34030104	บ้านหัว	04	บ้านหัว	13.49227	100.9455
281	โพธาราม	โพธาราม	34030105	บ้านสูง	05	บ้านสูง	13.47229	100.9508
282	โพธาราม	โพธาราม	34030106	บ้านหัวถนน	06	บ้านหัวถนน	13.45152	100.9619
283	โพธาราม	โพธาราม	34030107	บ้านท่าลาดใต้	07	บ้านท่าลาดใต้	13.44623	100.9576
284	โพธาราม	โพธาราม	34030108	บ้านดัก	08	บ้านดัก	13.49929	100.9353
285	โพธาราม	โพธาราม	34030109	บ้านทรายรี	09	บ้านทรายรี	13.47220	100.9487
286	โพธาราม	โพธาราม	34030110	บ้านท่า	10	บ้านท่า	13.51483	100.9239
287	โพธาราม	โพธาราม	34030111	บ้านหัวหินตา	11	บ้านหัวหินตา	13.50086	100.9355
288	โพธาราม	โพธาราม	34030112	บ้านท่าลาดเหนือ	12	บ้านท่าลาดเหนือ	13.48991	100.9459
289	โพธาราม	โพธาราม	34030201	บ้านท่า	01	บ้านท่า	13.48682	100.9533
290	โพธาราม	โพธาราม	34030202	บ้านท่า	02	บ้านท่า	13.48612	100.9543
291	โพธาราม	โพธาราม	34030203	บ้านท่า	03	บ้านท่า	13.47874	100.9460
292	โพธาราม	โพธาราม	34030204	บ้านท่า	04	บ้านท่า	13.48223	100.9542
293	โพธาราม	โพธาราม	34030205	บ้านท่า	05	บ้านท่า	13.49261	100.9554

Fig. 11-10

Villages in A.KhongChiam

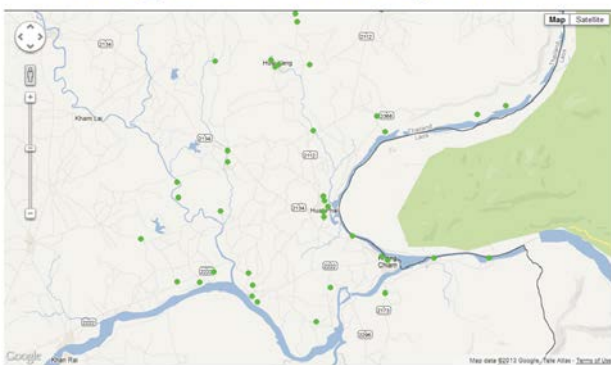


Fig. 11-11

Villages in A.KhongChiam

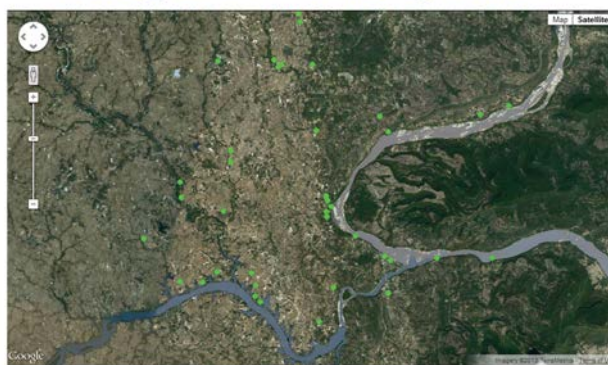


Fig. 11-12

Correction of the Position



Fig. 11-13

Villages and Temples

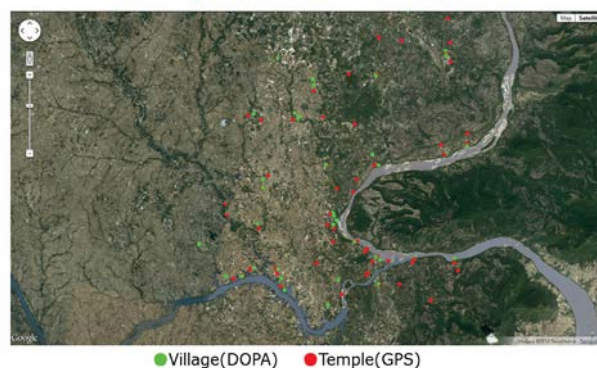


Fig. 11-14

Villages and Temples

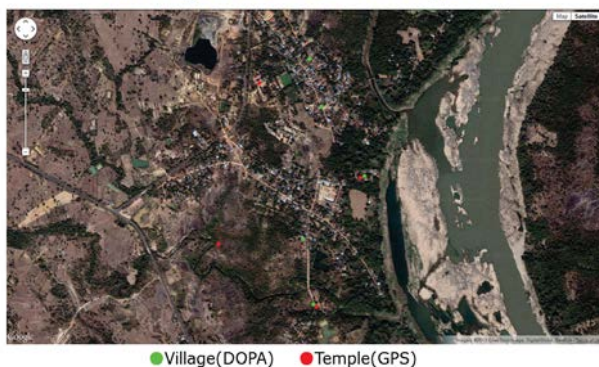


Fig. 11-15

Villages and Temples



Fig. 11-16

How to Get Location Data

- Three methods
 - Measuring by using GPS instruments
 - Getting published location data
 - Convert from place name to location (Geocoding)
- We use combined methods in Thailand
 - Inside District (GPS)
 - Inside Province (location data by DOPA)
 - Other Province (Geocoding)

Fig. 11-17

Data Conversion Service

- Geocoding
 - Convert from place name to location data
 - Provided by map service (e.g. Google)
- Using geocoding
 - Call by Javascript program
 - Batch geocoding website
- Geocoding of Thai place name
 - Thai script : Correct in Tambon level
 - Romanized : Low accuracy

Fig. 11-18

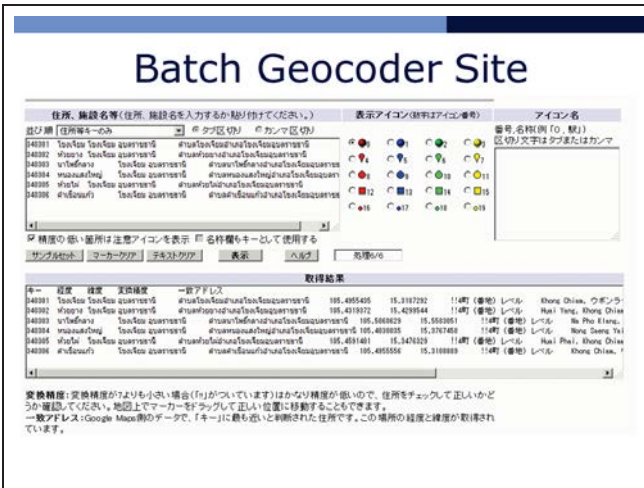


Fig. 11-19

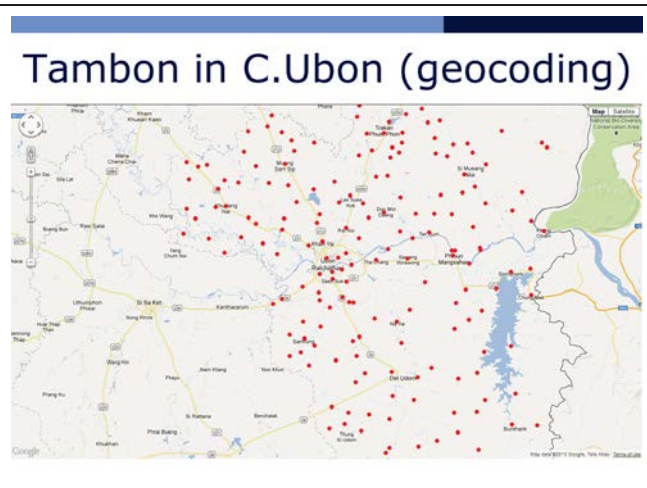


Fig. 11-20

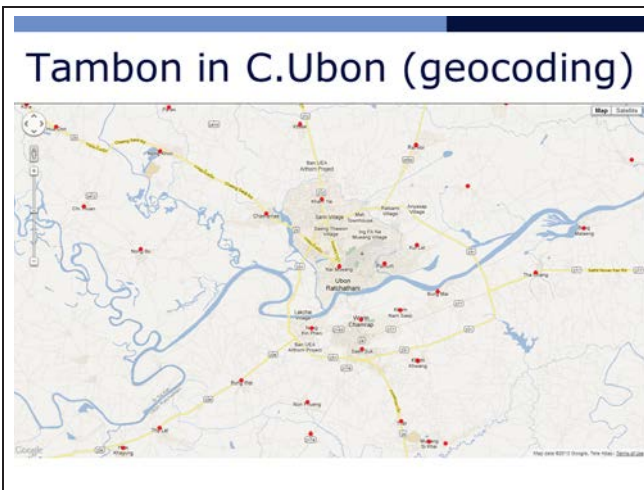


Fig. 11-21

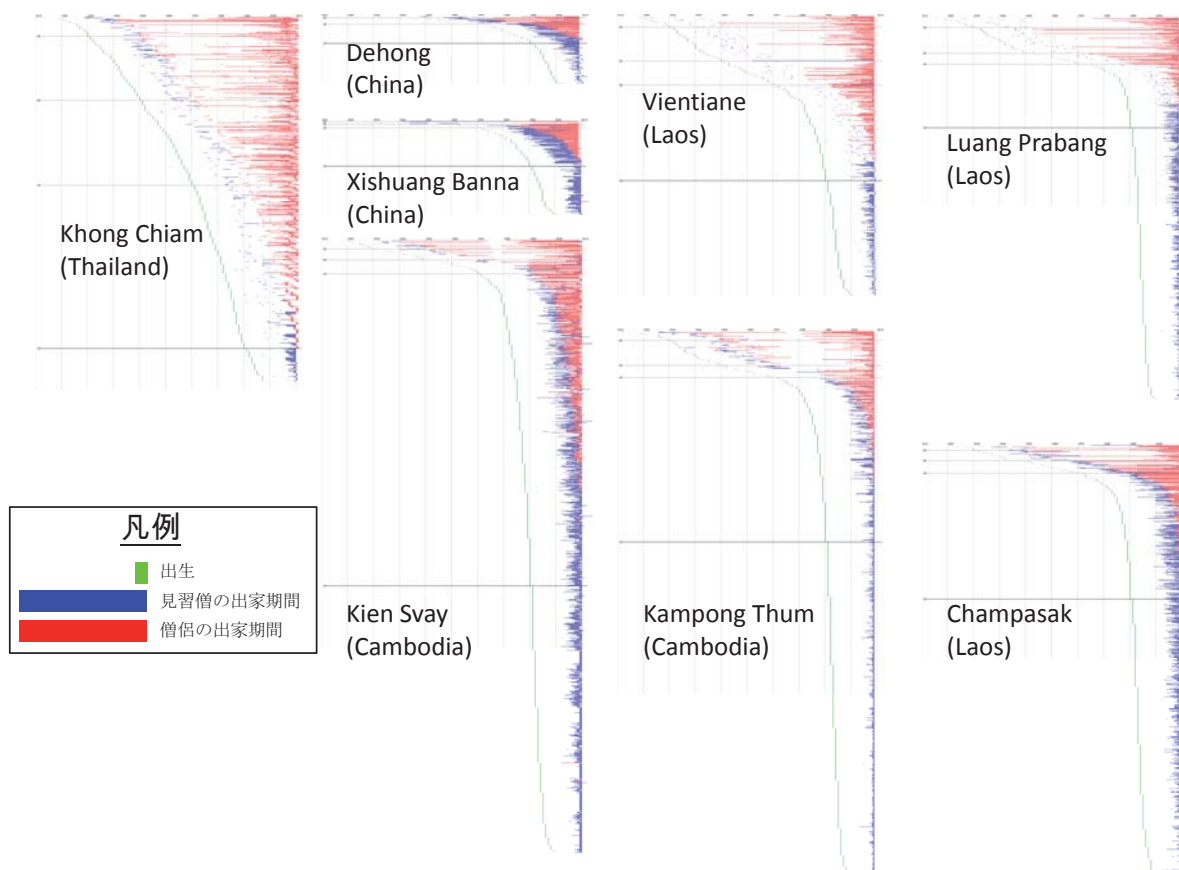
Conclusion

1. Subjectivity intervenes even when trying to gather objective facts.
2. Place name cannot be encoded completely by machines.
3. Place code is not yet internationally unified.
4. It is necessary to cross-check information with an alternative route, even when the position information has been obtained.
5. Service that will convert the place name into location data is available free of charge.
6. Location information will enhance over time, because it is very useful.

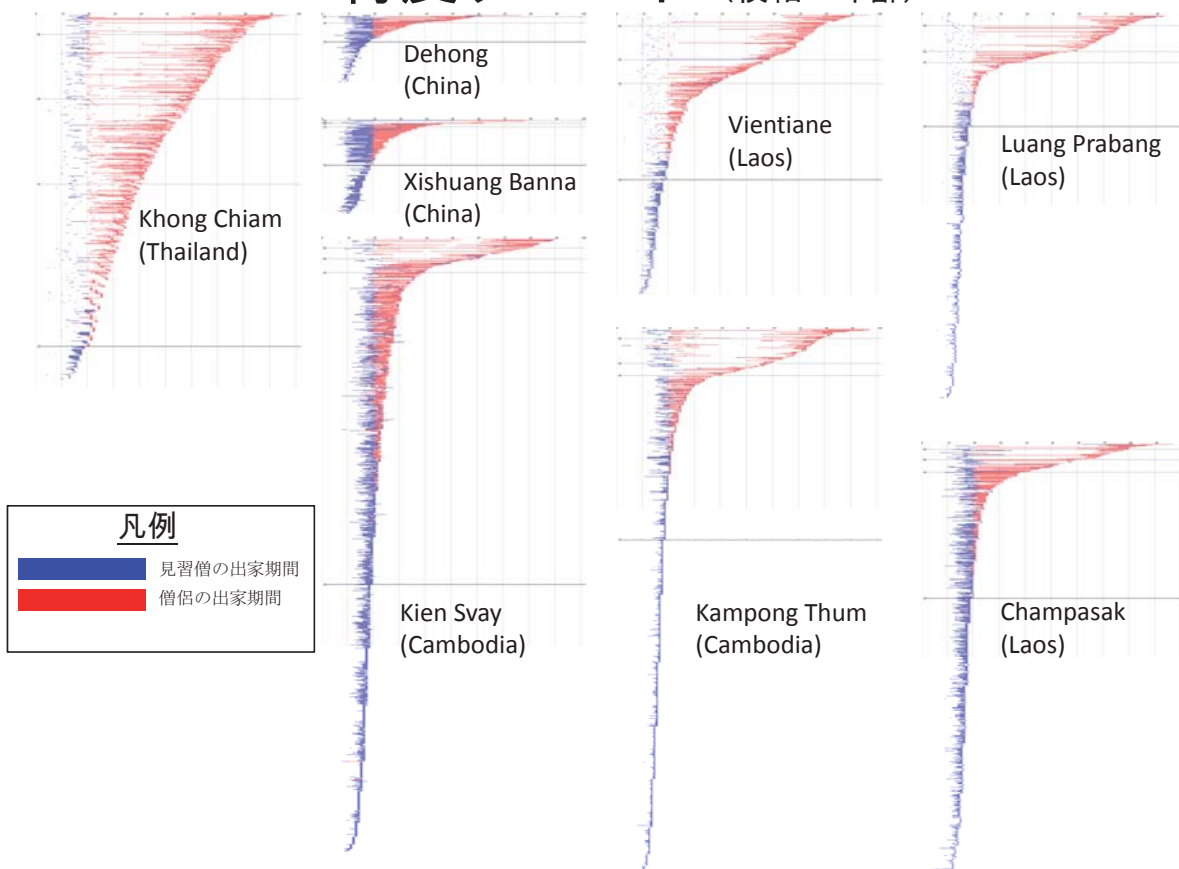
Fig. 11-22

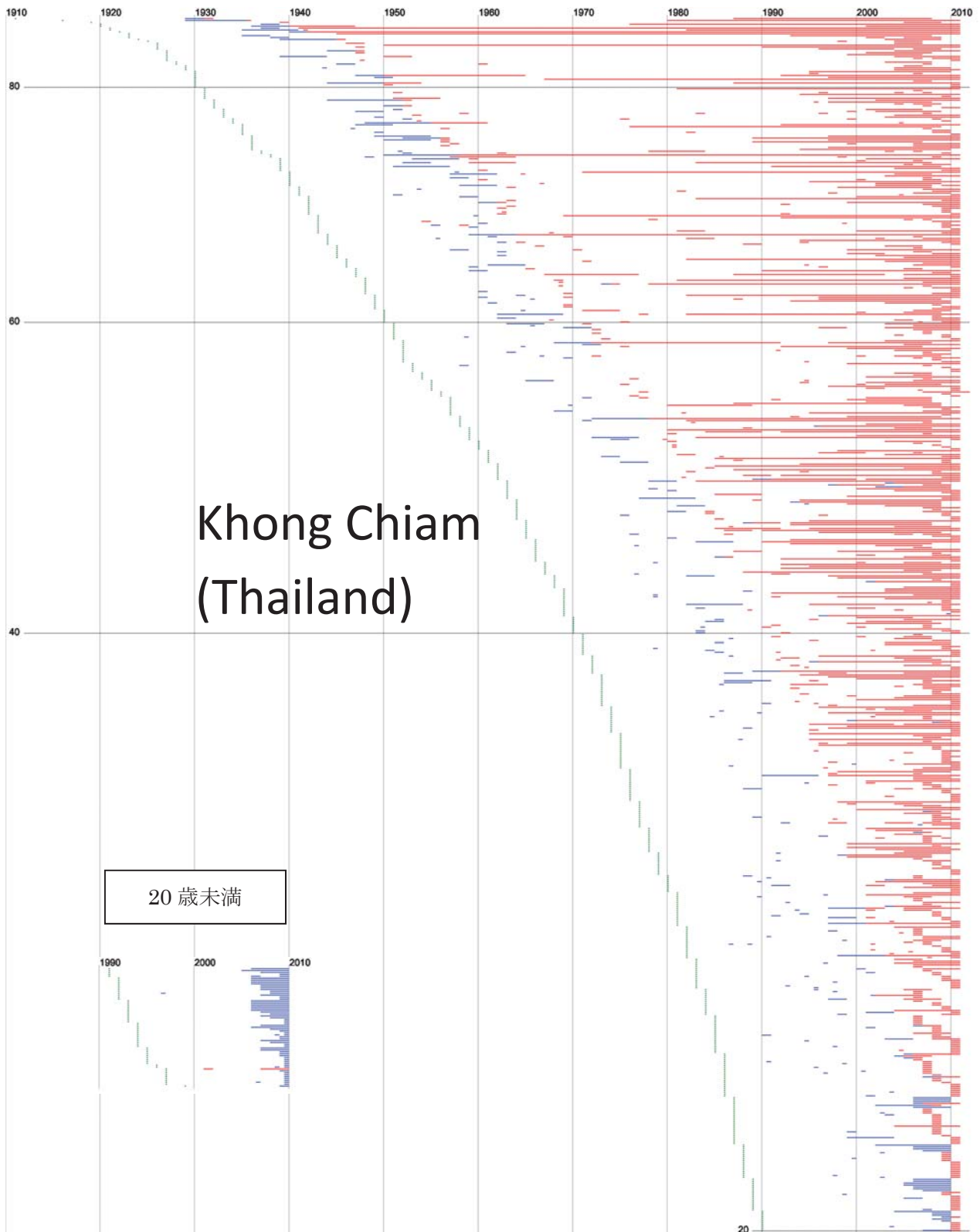
関連資料

得度チャート (横軸：西暦)

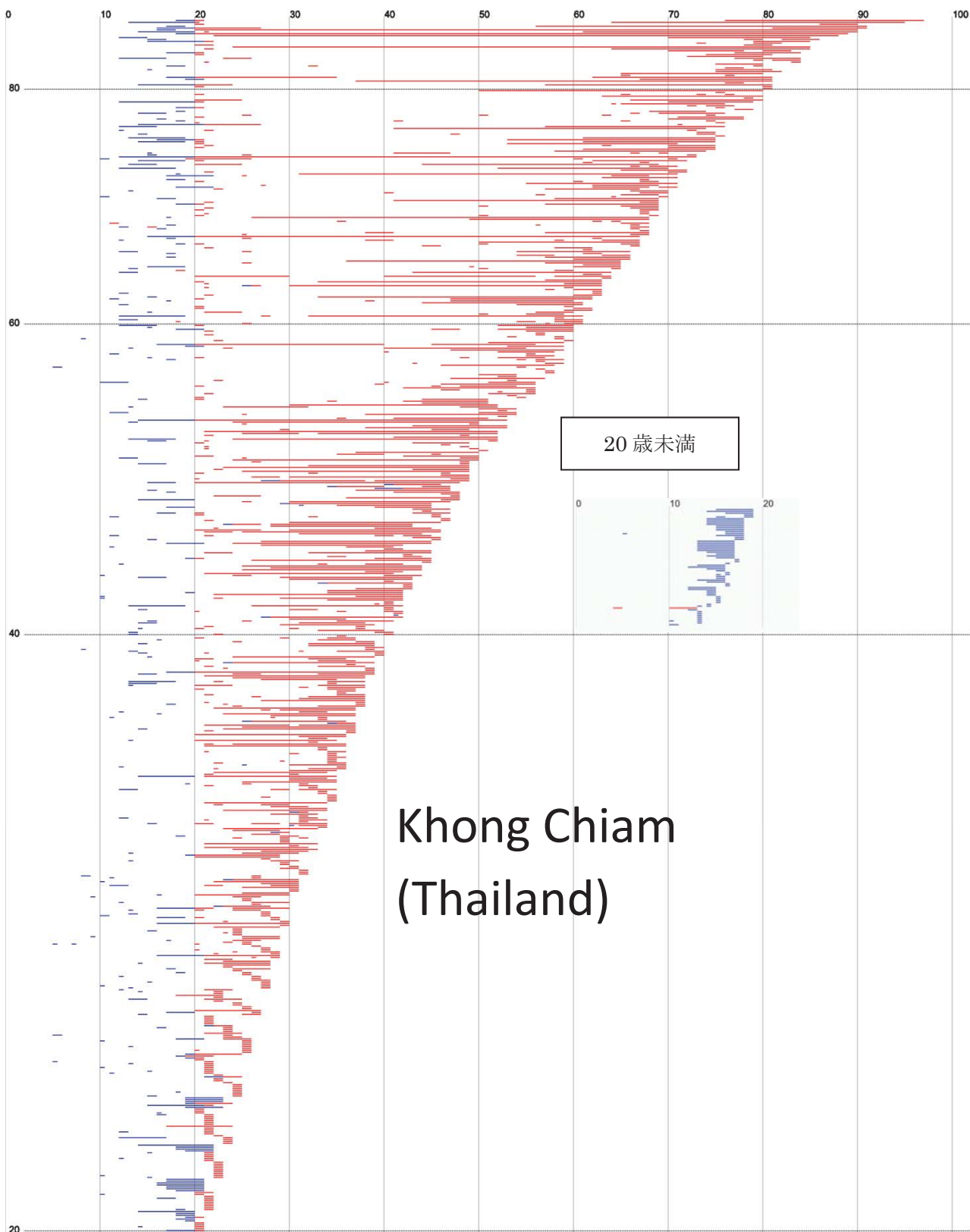


得度チャート (横軸：年齢)



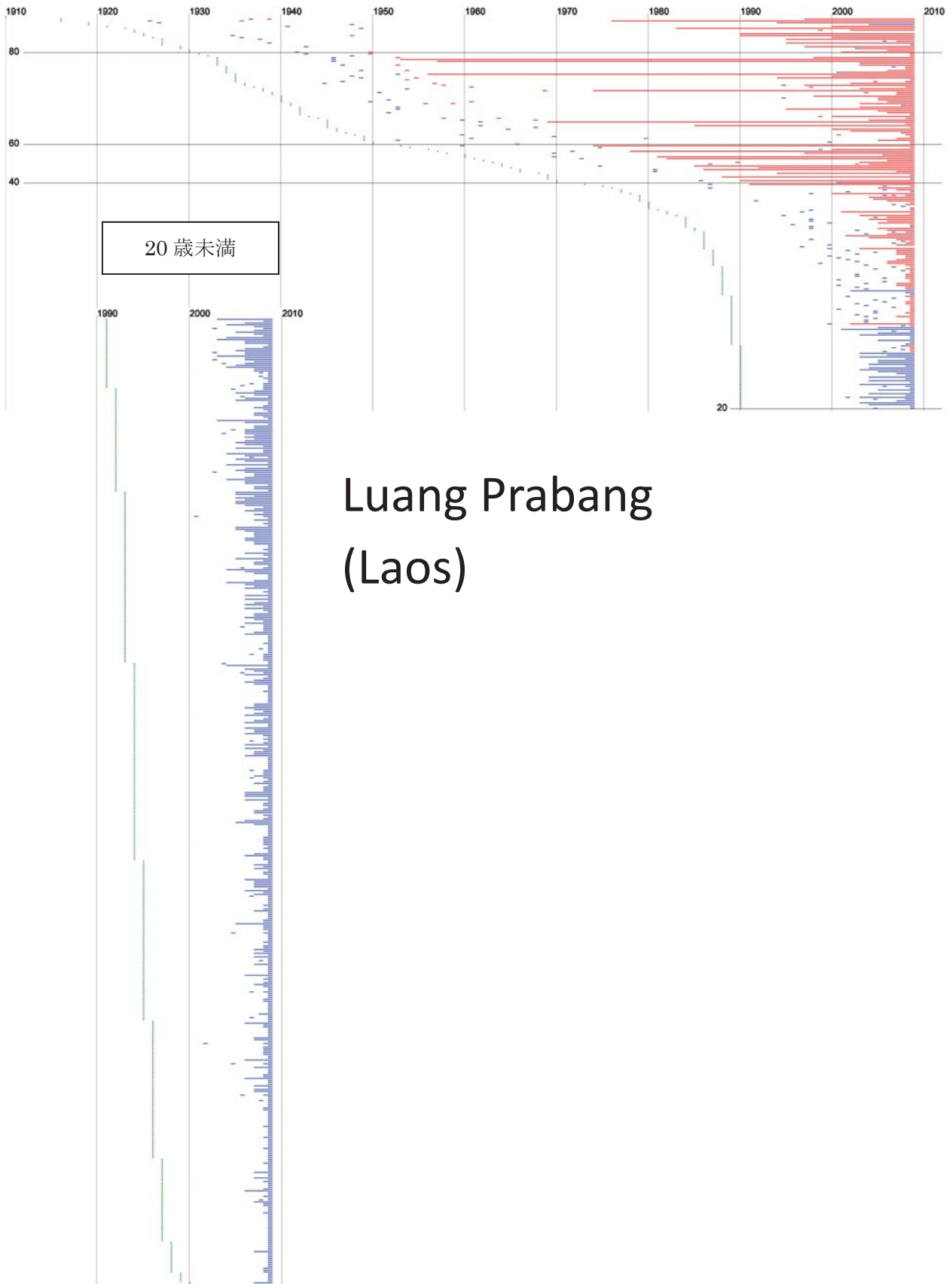


横軸：西曆



Khong Chiam (Thailand)

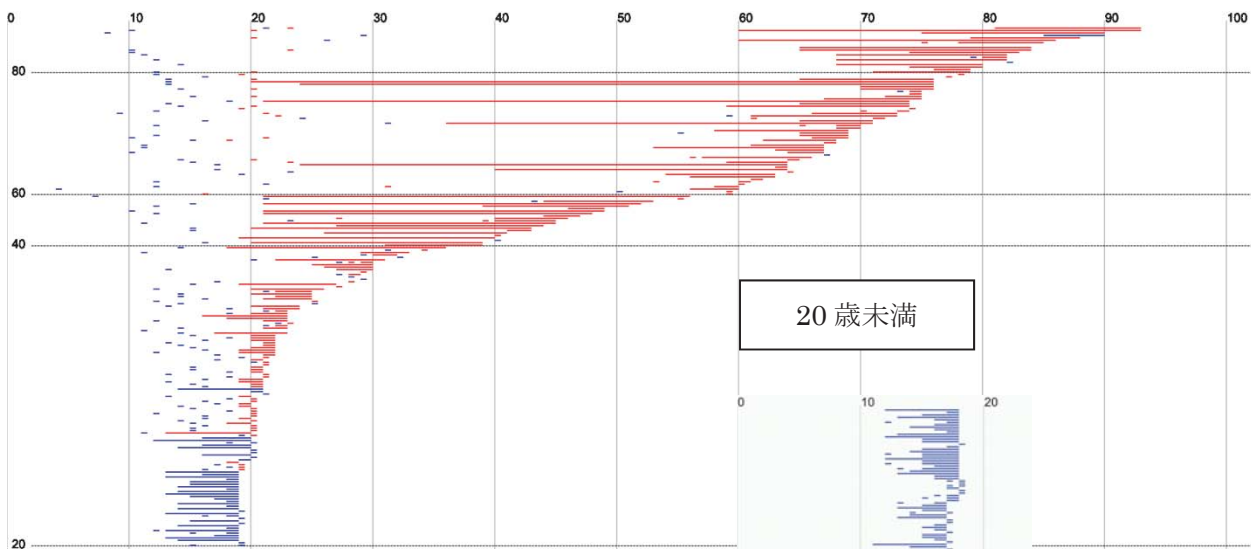
横軸：年齢



Luang Prabang (Laos)

(注) 出家の終了時期が質問項目にないことから、
現在に至る出家期間を除いては、便宜上、短い
線（半年分）で示されている。

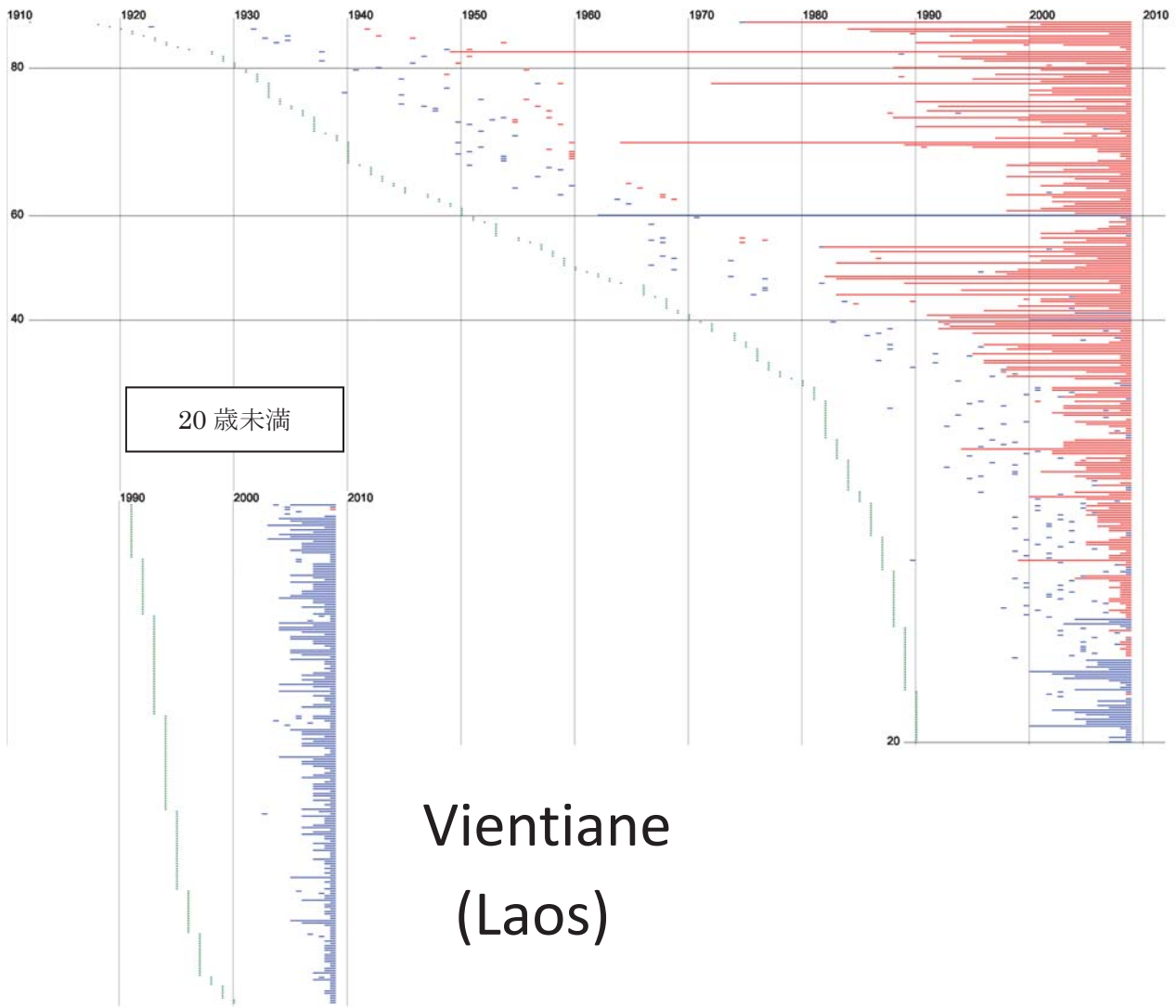
横軸：西暦



Luang Prabang (Laos)

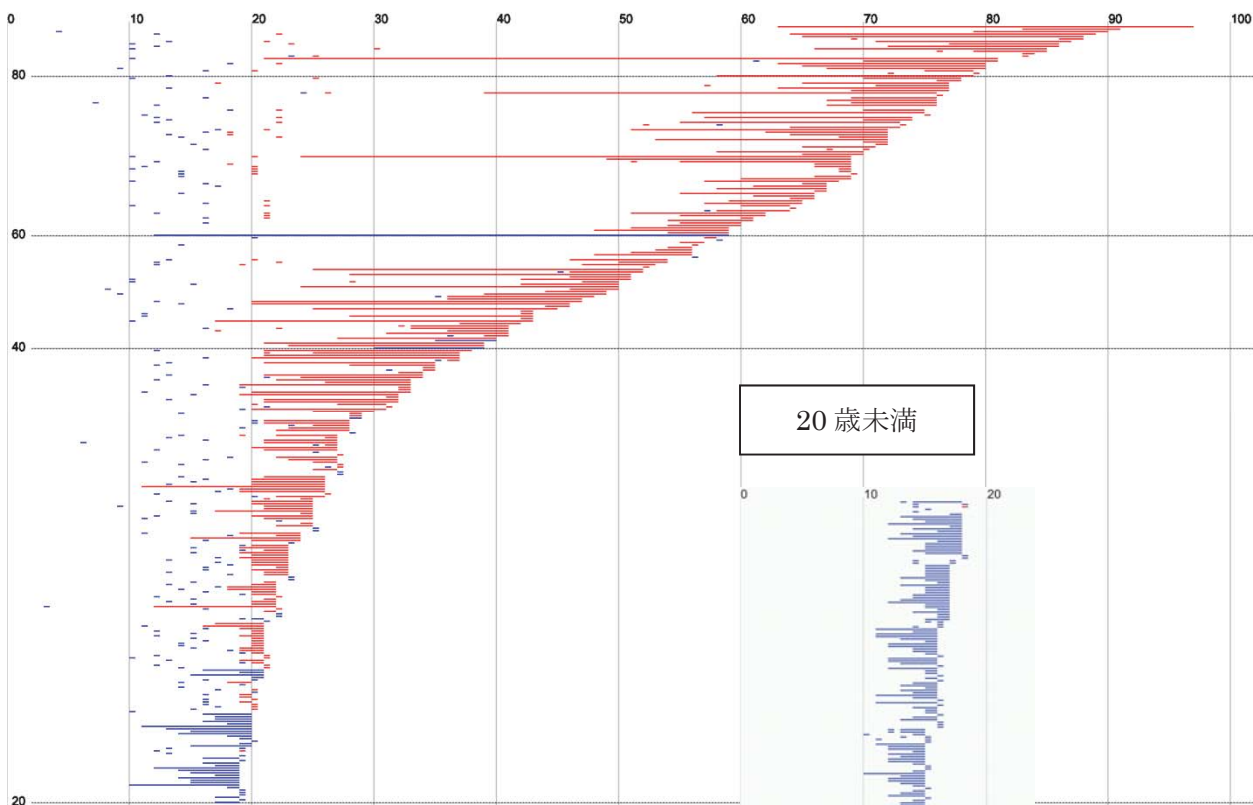
(注) 出家の終了時期が質問項目にないことから、
現在に至る出家期間を除いては、便宜上、短い
線（半年分）で示されている。

横軸：年齢



(注) 出家の終了時期が質問項目にないことから、
現在に至る出家期間を除いては、便宜上、短い
線（半年分）で示されている。

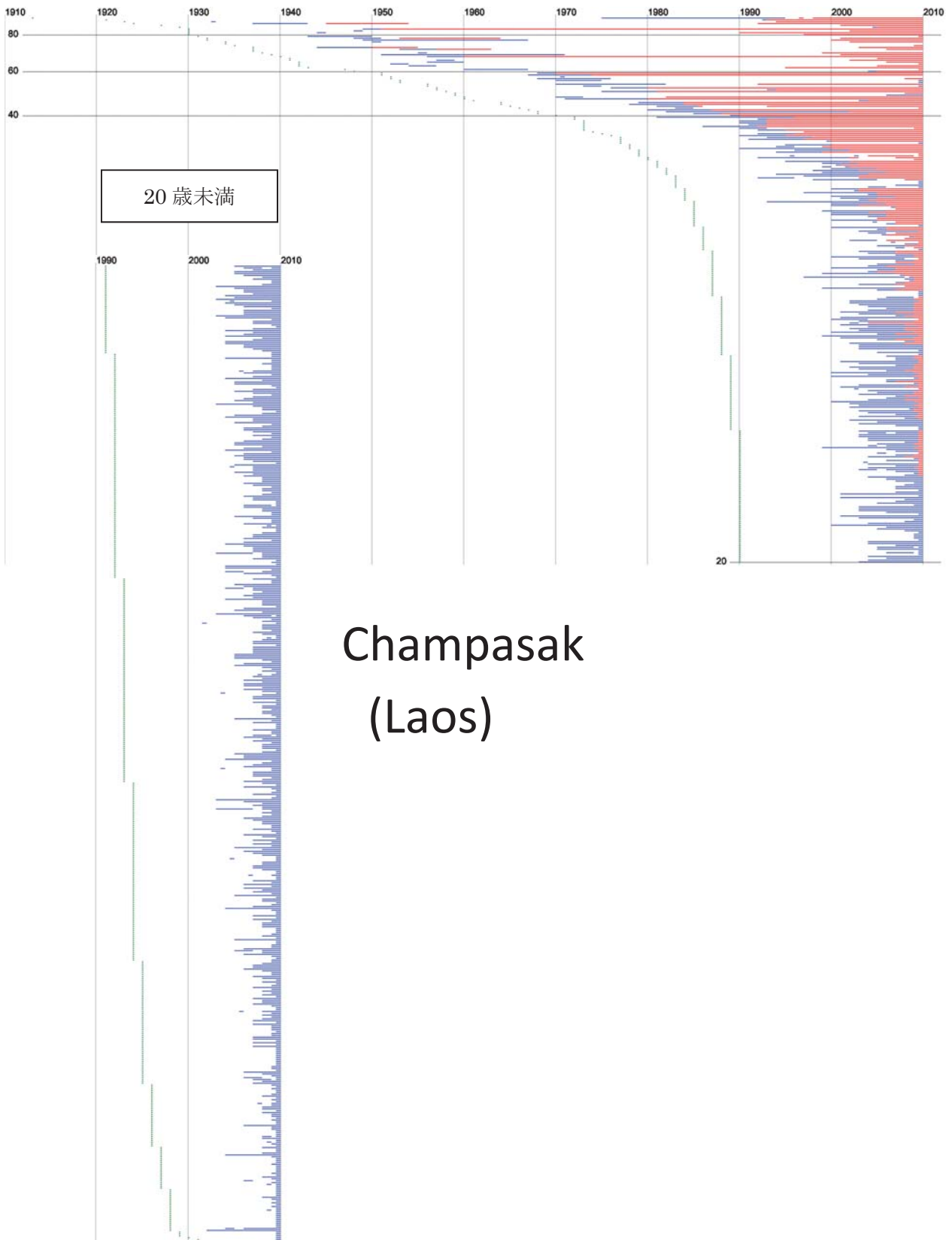
横軸：西暦



Vientiane (Laos)

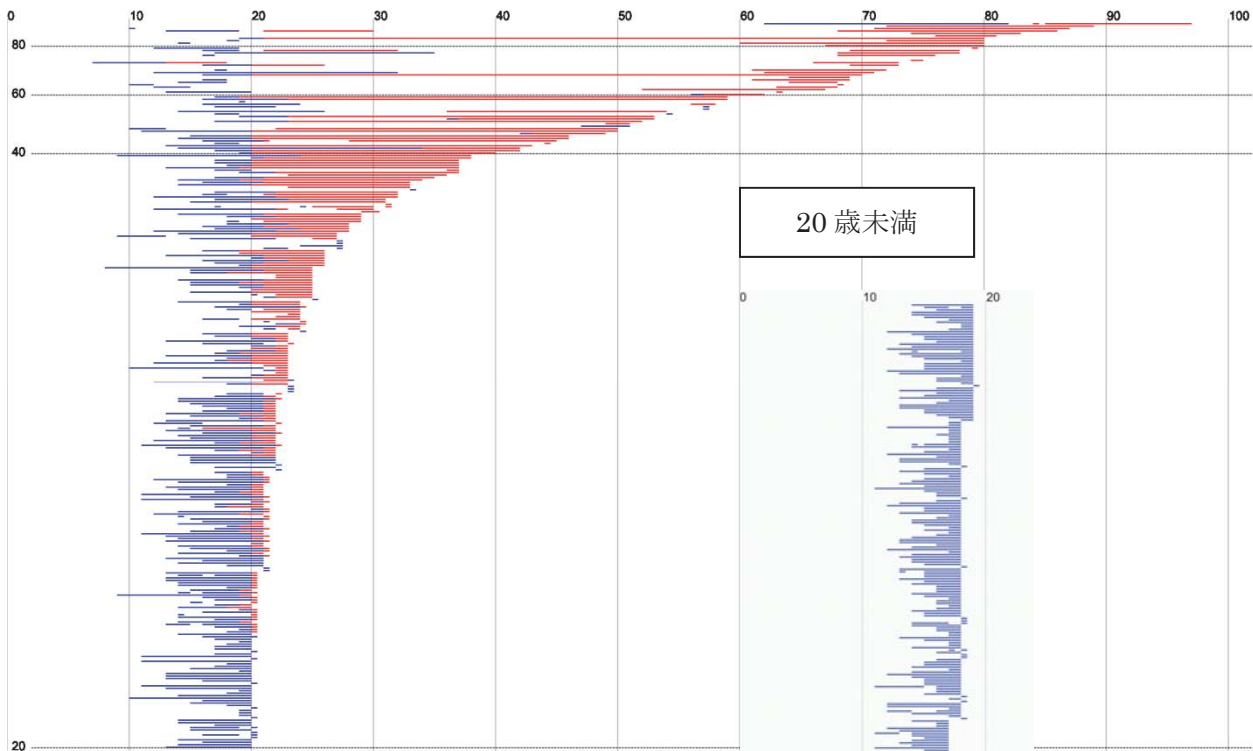
(注) 出家の終了時期が質問項目にないことから、
現在に至る出家期間を除いては、便宜上、短い
線（半年分）で示されている。

横軸：年齢



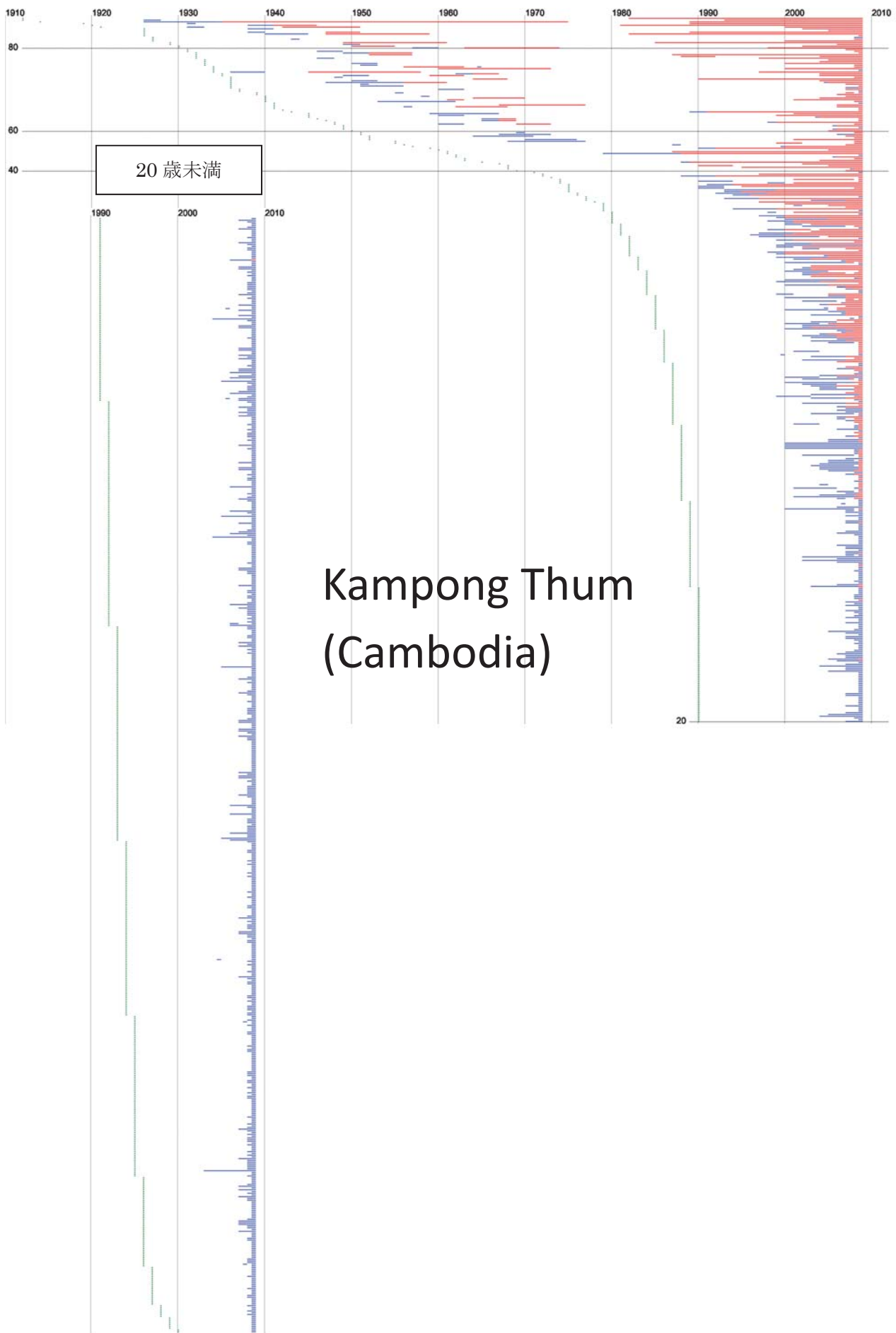
Champasak (Laos)

横軸：西曆

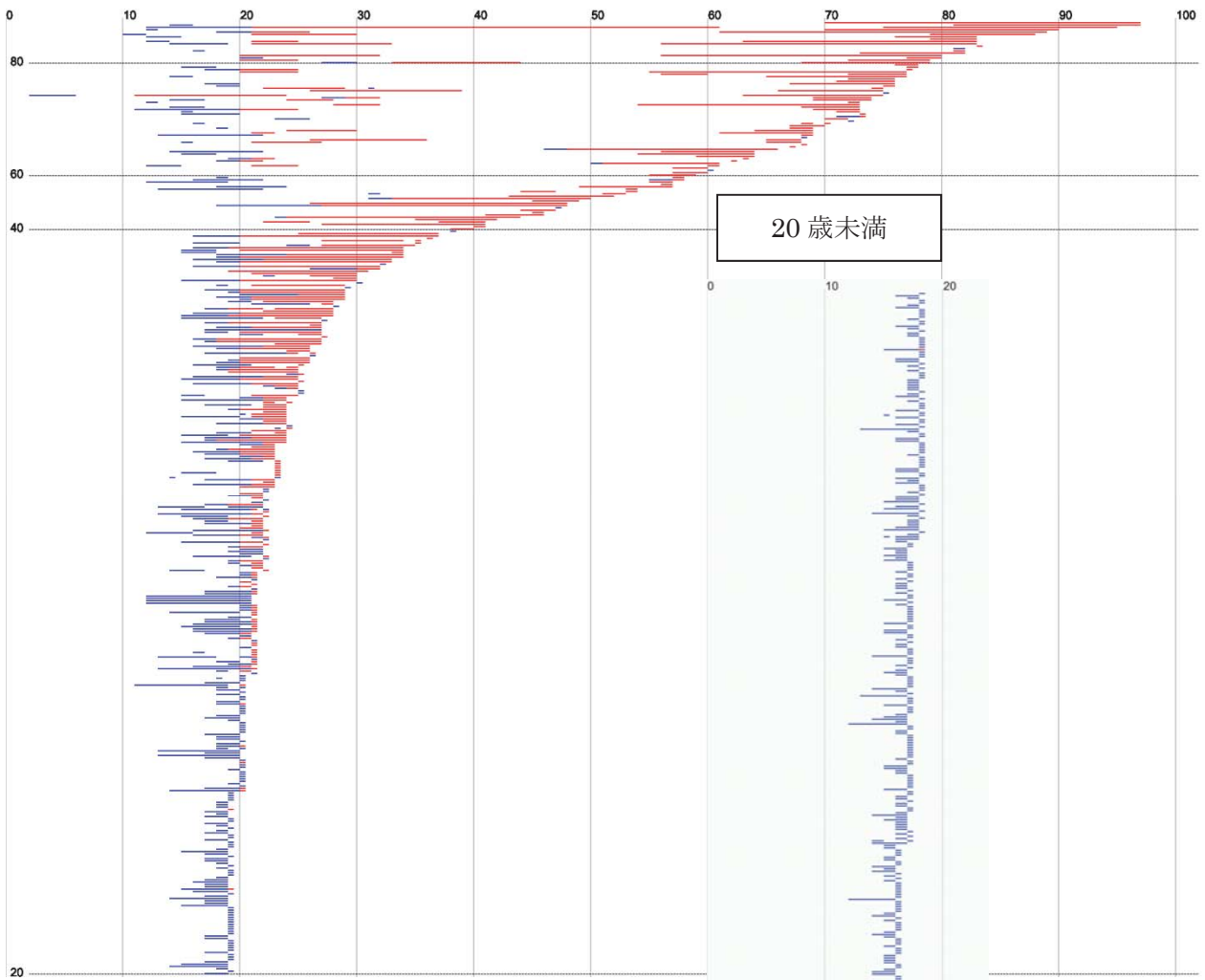


Champasak (Laos)

横軸：年齢

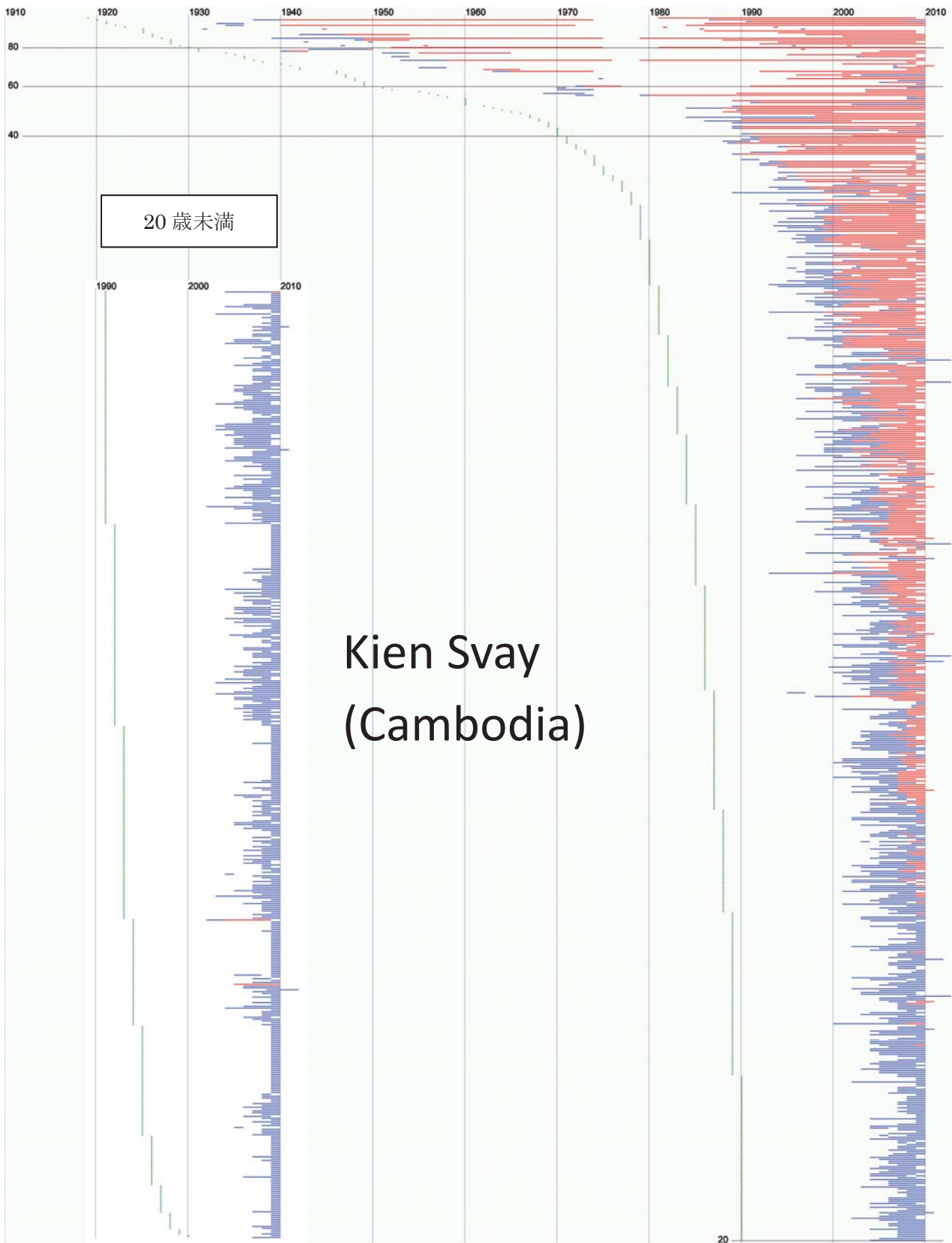


横軸：西曆

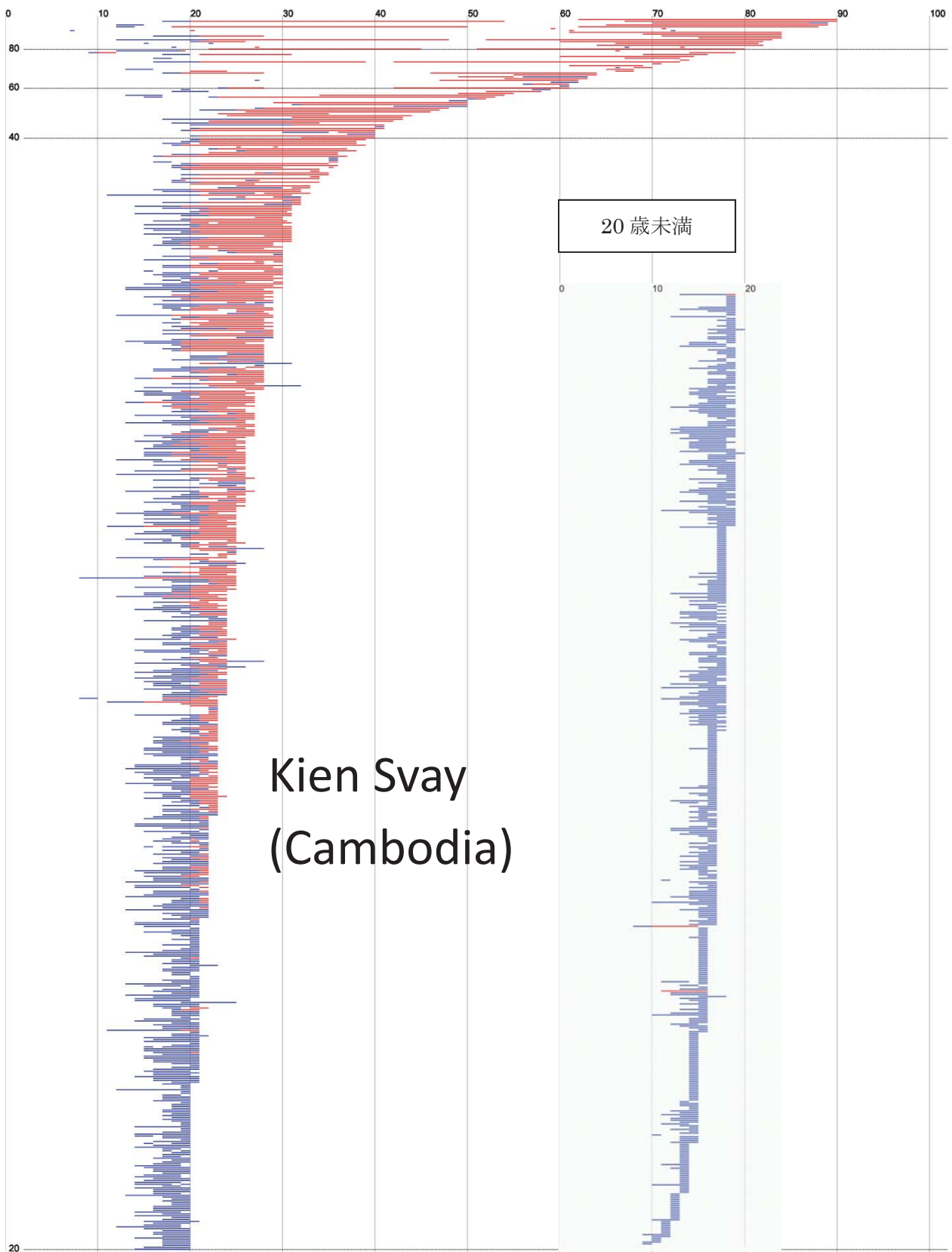


Kampong Thum (Cambodia)

横軸：年齢

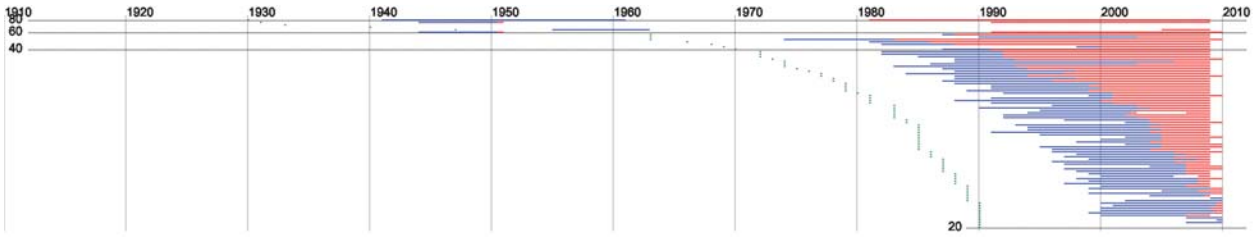


横軸：西曆



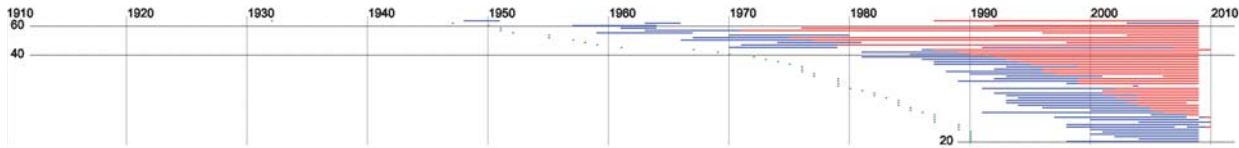
Kien Svay
(Cambodia)

横軸：年齢



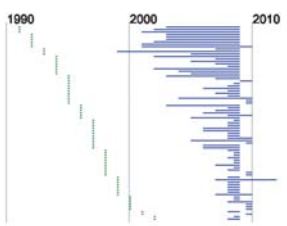
20 歳未満

Xishuang Banna (China)

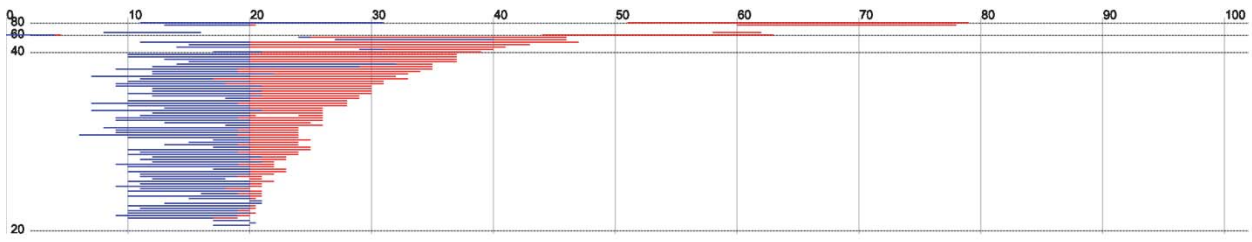


20 歳未満

Dehong (China)

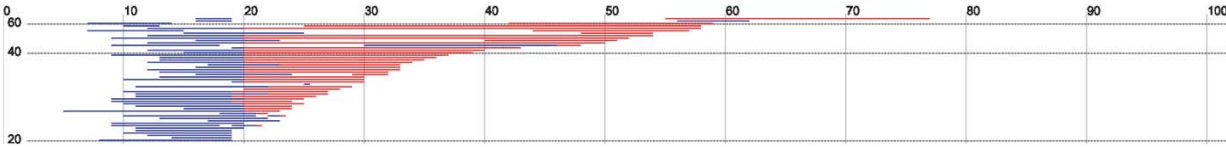
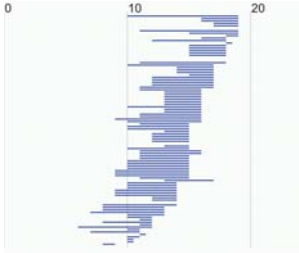


横軸：西曆



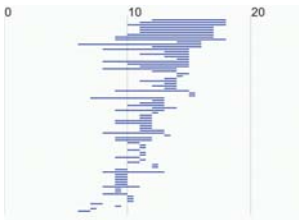
20歳未満

Xishuang Banna (China)



20歳未満

Dehong (China)



横軸：年齢

Why Theravada Buddhism is a Living Religion: Some Observations from Mapping the Practices of Theravadins of Southeast Asia [*]

Project Leader: Prof. HAYASHI, Yukio

Center for Integrated Area Studies, Kyoto University, Japan

Our research project, "The spatio-temporal mapping of practices of Theravadins of Mainland Southeast Asia", is an attempt to build the basis for the comparative inter-regional studies of Theravada Buddhist cultures, focusing on practices, namely, the construction of "temples" (including monasteries and hermitages) and patterns of ordination and wandering, which are closely related to the notion of merit-making among Theravadins in the area [Fig. 1].

We conducted the initial field surveys in 2006 and 2007 in the district of Khong Chiam, Ubon Ratchathani Province in Northeast Thailand. From

2008 to 2011, I expanded our study area from Thailand to include Cambodia, Laos, Myanmar and the China (Xishuang Banna and Dehong in Yunnan Province). Eight Japanese researchers, mostly majoring in anthropology and area studies with long-term field work experience in these countries, visited the temples located at each research site, in collaboration with institutions and native researchers to interview monks (males who observe 227 precepts and are usually over 20 years old) and novices (males who observe ten precepts and are aged up to 19). We have surveyed nine locations in five countries [Fig. 2], and collected data on 10,706 monks and



Fig. 1 Theravadins in Mainland Southeast Asia

Mapping Practices of Theravadins:
9 locations, 2884 temples, 10706 monks, 10 tracking years

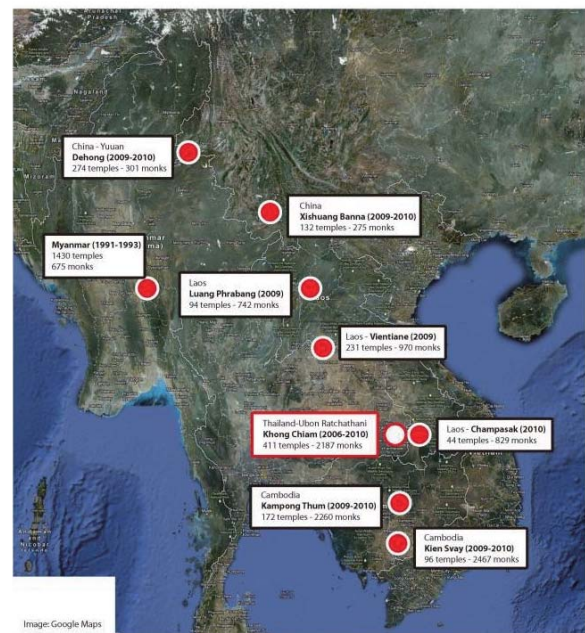


Fig. 2 Surveyed Area

novices belonging to 2,884 temples.

The salient feature of the project could be summarized as follows; All of the researchers conducted field surveys in the same period for years on much the same topics in a number of countries, and collated and analyzed the collected data in cooperation with information science experts. By the early 2012, we finally got an integrated view of the locations of all surveyed temples and of the locations and movements of monks and novices. Owing to the immense volume of data collected, we have not yet finished collating and analyzing all of it. This paper collection introduces only a small part of our findings.

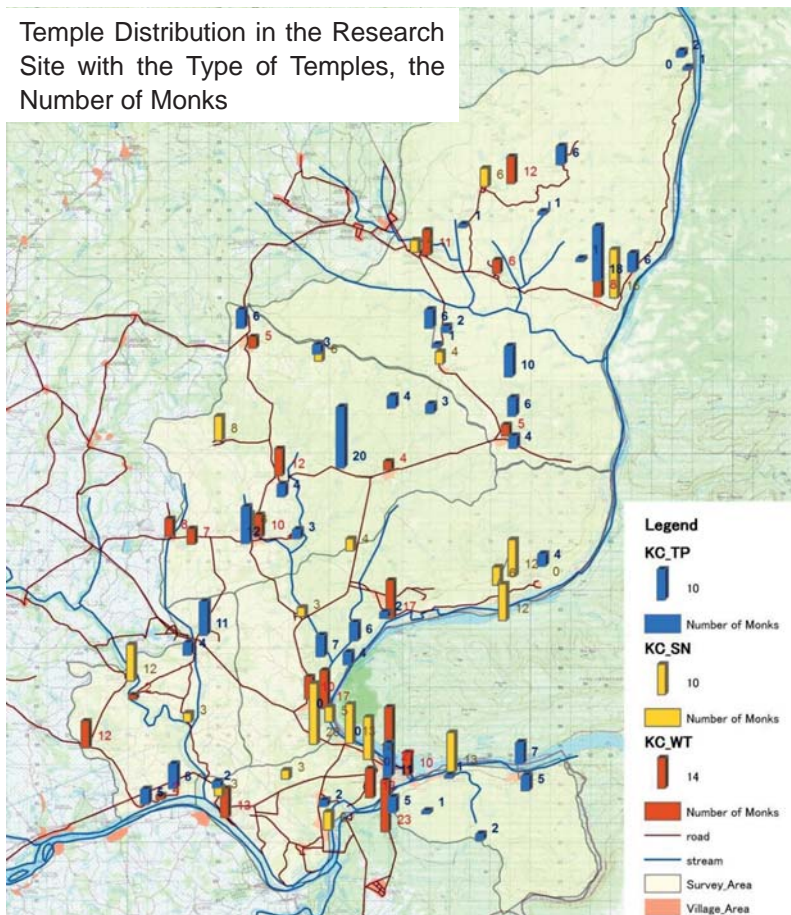


International Workshop on
"Mapping Practices among Theravadin of Southeast Asia in Time and Space"
"ระบบข้อมูลภูมิสารสนเทศ วิถีปฏิบัติพุทธศาสนาเถรวาทในเอเชียตะวันออกเฉียงใต้ใน
26th-27th, February 2013, Chulalongkorn University, Thailand

Field Survey on Mapping Practice of Monks in Khong Chiam, Ubon Ratchathani, Thailand

2006-2010

Temple Distribution in the Research Site with the Type of Temples, the Number of Monks



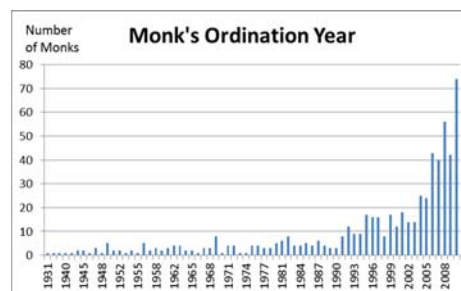
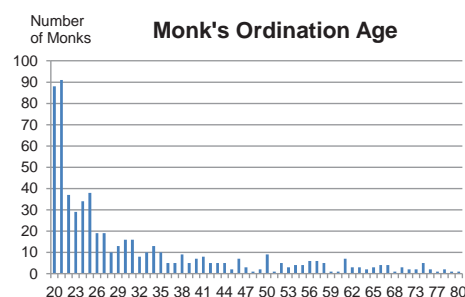
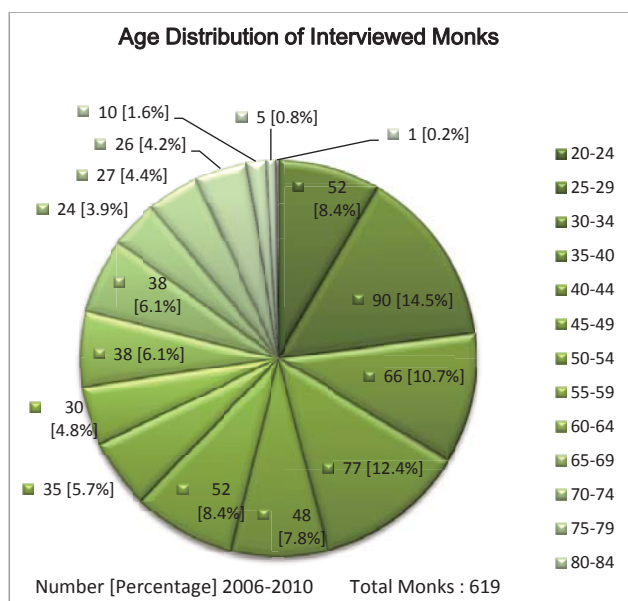
Surveyed Type of Temples	Number of Temples
Wat	22
Samnaksong	22
Thipaksong	45
Number of Monks Surveyed	
620	



Surveyed Period

- (1) 22nd July – 29th July 2006
- (2) 30th September – 5th October 2006
- (3) 11th September – 23th September 2007
- (4) 9th December – 19th December 2008
- (5) 9th August – 19th August 2009
- (6) 27th February – 4th March 2010
- (7) 20th September – 26th September 2010

Project Leader Dr. Pinit Lappathananon, สถาบันวิจัยสังคม จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย
 Prof. Hayashi, Yukio. Center for Integrated Area Studies, Kyoto University, Japan



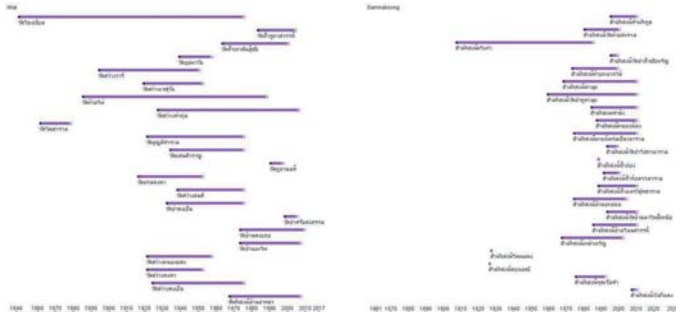
Geo-temporal Visualization of Temples, Khong Chiam

Temple Establishment by Year



Wat –
Length from establishment
to receiving sema

Samnaksong –
Length from
establishment to
registration



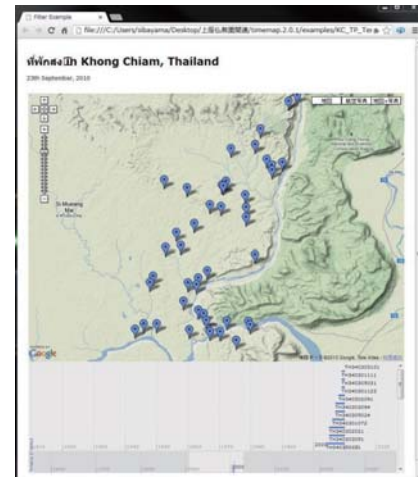
Web-based Geo-temporal Visualization



Green: Establishment
Blue: Registration – Receiving Sema
Red: Wat



Green: Establishment – Registration
Orange: Samnaksong



Blue: Establishment - Current

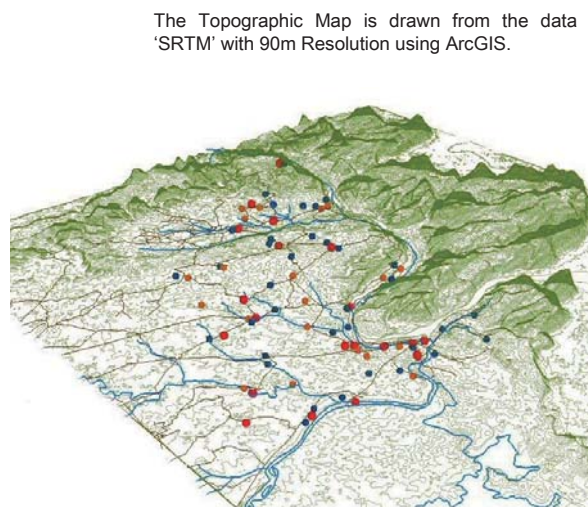
2D Model with the Elevation Data



0 4,375 8,750 17,500 26,250 35,000 Meters

Topographic Map on GIS Analysis for Survey Area

3D Model with the Elevation Data

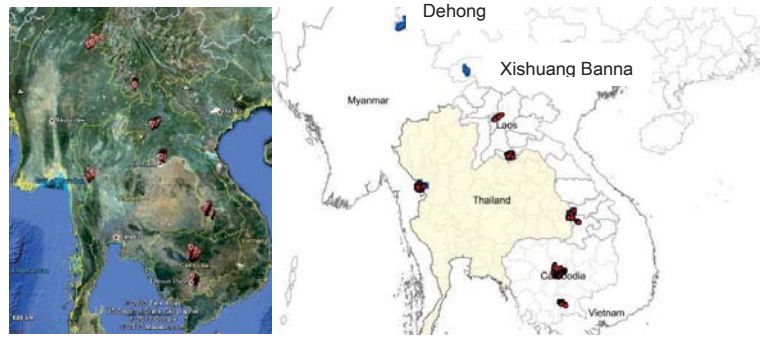


The Topographic Map is drawn from the data 'SRTM' with 90m Resolution using ArcGIS.

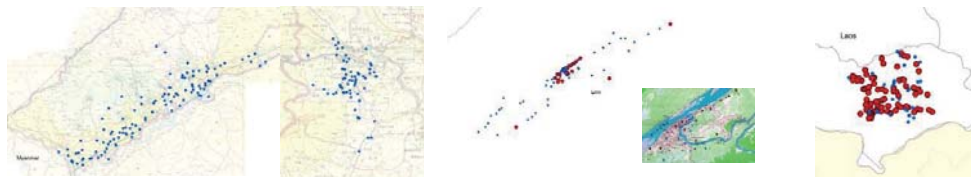
The SRTM is an abbreviation of 'Shuttle Radar Topography Mission' by the Space Shuttle of NASA, USA and obtained elevation data on a near-global scale to generate the most complete high-resolution digital topographic database of Earth.

Distribution of Temples with 'Tomb' In Research Sites in Thailand, China (Yunnan), Laos, and Cambodia

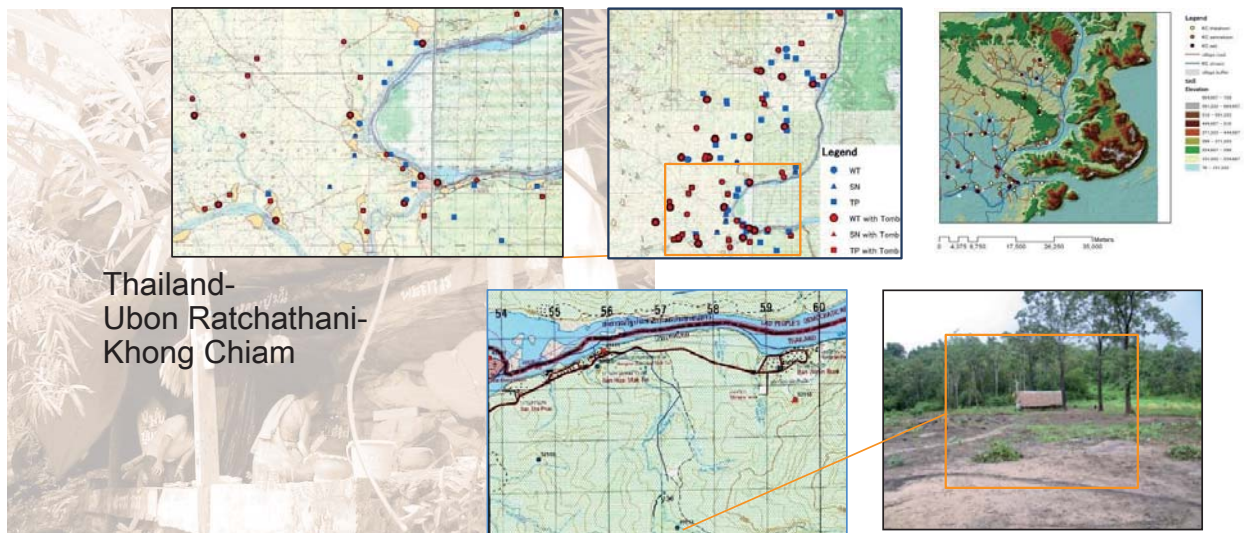
Two figures at the right side show temples with the 'tomb' in research sites. The blue/red mark indicates the temple without/with 'tomb' respectively.



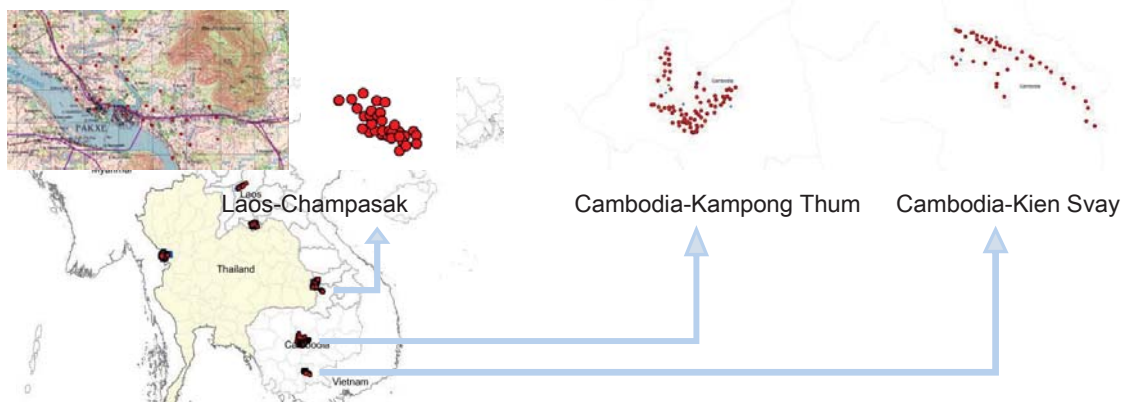
The temple with the 'tomb' gradually increases from north to south direction.



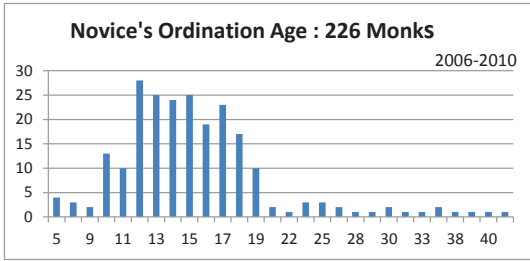
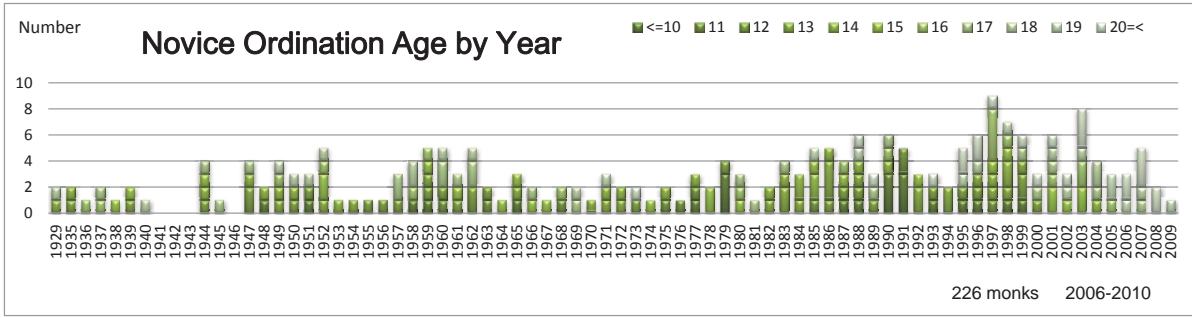
China - Dehong China - Xishuang Banna Laos - Luang Phrabang Laos - Vientiane



Thailand-
Ubun Ratchathani-
Khong Chiam

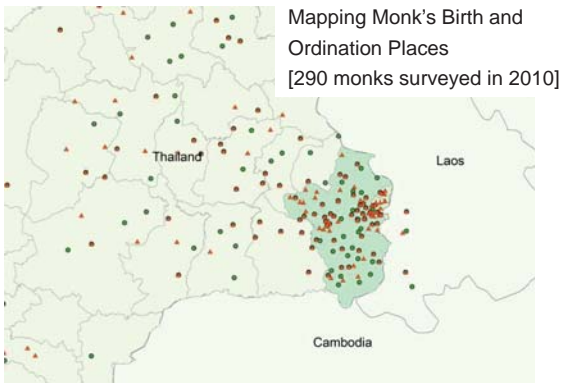


Distribution of Ordination and Birth Places

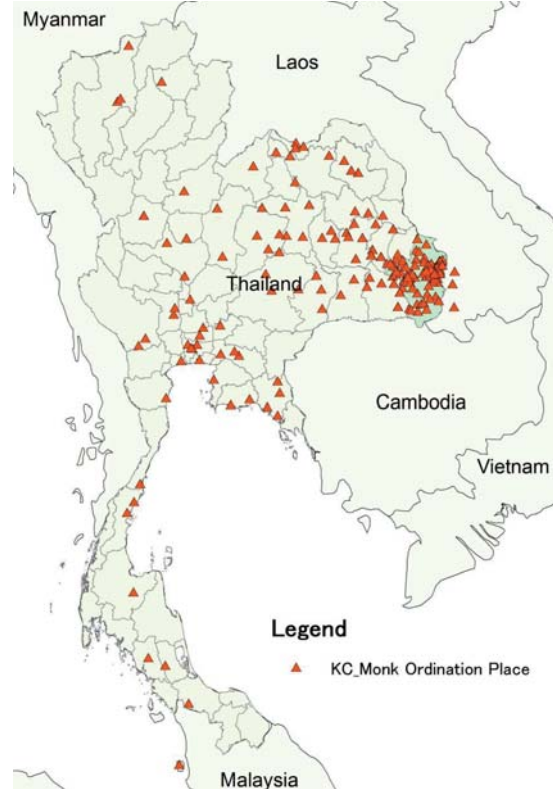


Monk's Birth Places by Age [surveyed in 2006-2010]

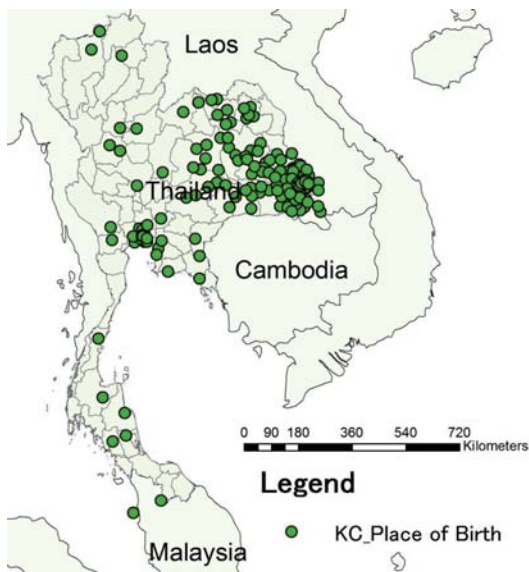
Place of Birth	Total	Ratio	20-29 Age	30-39 Age	40-49 Age	50-59 Age	60-69 Age	70-79 Age	80-89 Age	90-99 Age
Khong Chiam	346	55.8	125	56	32	34	41	30	23	5
Ubun Rachathani	91	14.7	12	21	18	11	12	11	6	0
Laos	5	0.8	2	1	0	1	0	1	0	0
Myanmar	1	0.2	0	0	1	0	0	0	0	0
Sri lanka	1	0.2	0	0	1	0	0	0	0	0
EU, US, AU, and Others	16	2.6	2	7	6	0	1	0	0	0
Thailand	160	25.8	19	51	38	21	18	10	3	0
Central Total	19	11.9	4	4	6	4	1	0	0	0
East Total	6	3.8	4	1	0	0	1	0	0	0
North Total	11	6.9	0	2	5	2	2	0	0	0
Northeast Total	118	73.8	11	41	24	15	14	10	3	0
South Total	6	0.6	0	3	3	0	0	0	0	0
Total	620									



Ordination Places [290 monks surveyed in 2010]



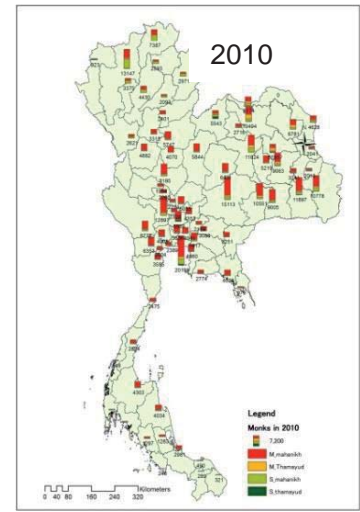
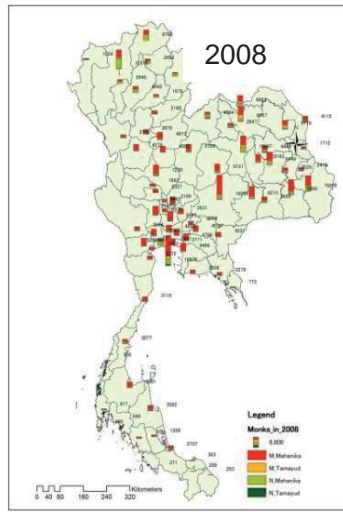
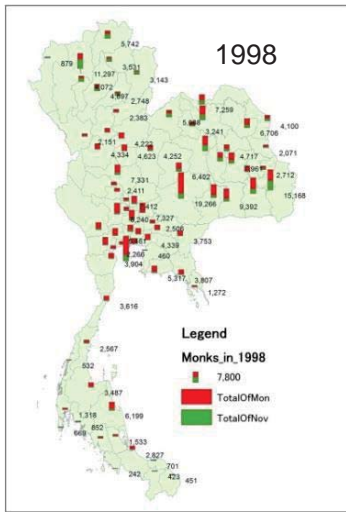
Birth Places [290 monks surveyed in 2010]



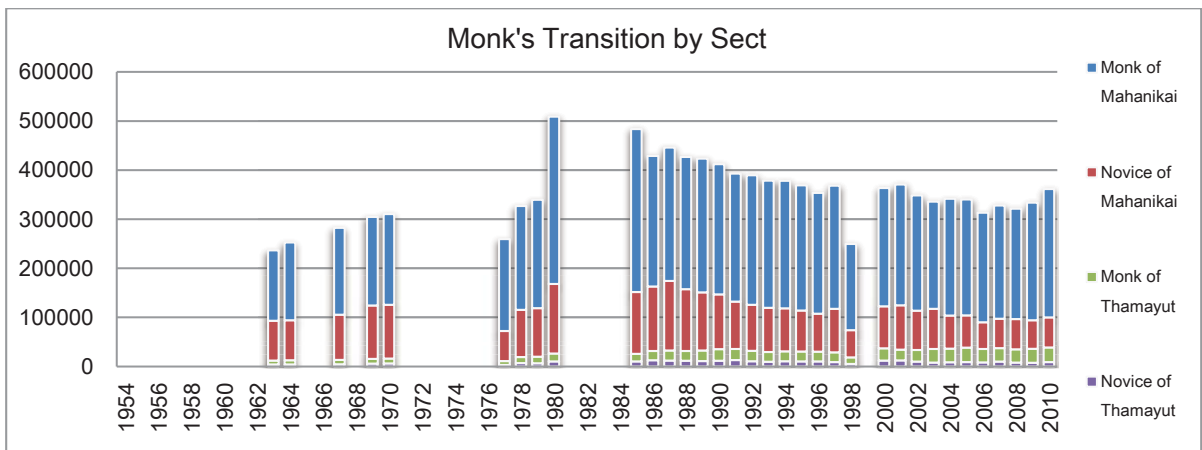
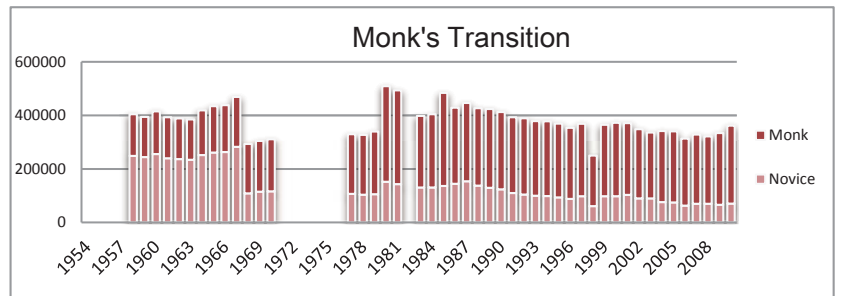
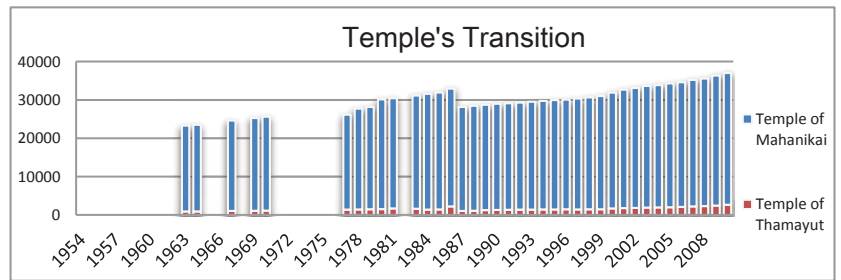
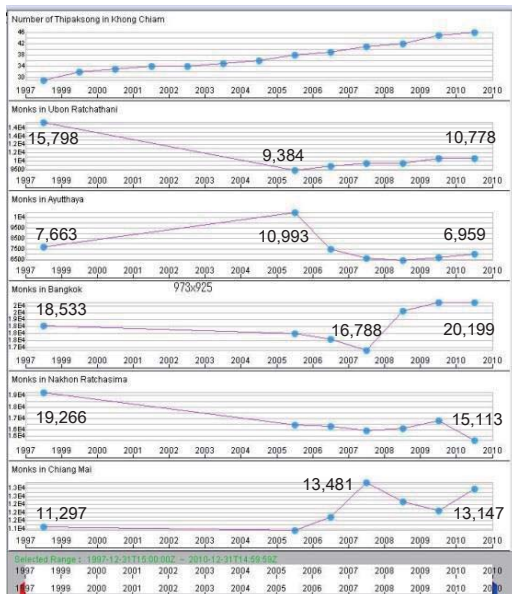
Mapping Data of Statistics of Buddhism in Thailand

Source : National Office of Buddhism, Thailand

Monk's Transition by Province

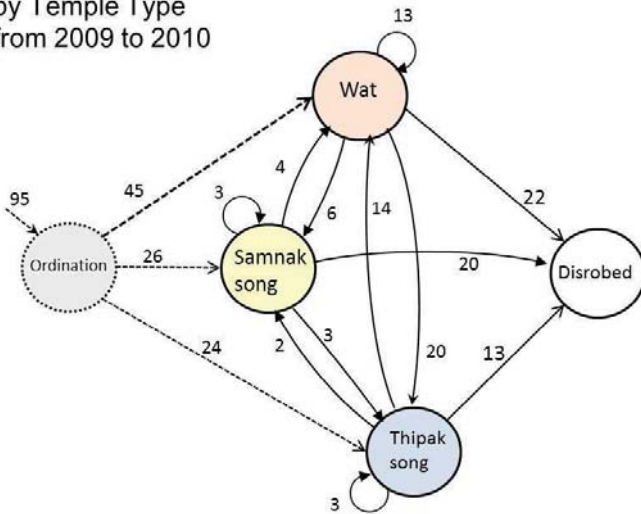


Trend of the number of monks by Province



Mobility of Monks, Khong Chiam

Monk's Mobility by Temple Type from 2009 to 2010



Typical Moving Cases

N:Novice, M:Ordination as Monk, (:):Age, ,
[:]:Place Name , =: Moving, D:Total Moving Distance

Monk ID:5010206
[1942 Birth]:North...N(18-21)...M(-)...L<[Loei]=[Maehongson]
=[Chaiyaphum]=[Nakhonsithammarat]=[Tak]=[Surin]
=[Khongchiam]> D:3315.465 Km

Monk ID: 5031404
[1975]:Isan...N(13-)...M(20-)...L<[Chachoengsao]=[Prathet Phama (Burma)]=[Prathet Phama (Burma)]
=[Ubonratchathani]=[Chachoengsao]=[Nakhonratchasima]=[Naphoklang]> D:2505.168 Km

Monk ID:5021301
[1958 Birth]:Isan...N(13-14)...M(24-)...L<[Khonkaen]
=[Ubonratchathani]=[Chiangrai]=[Khongchiam]
=[Maharakham]=[Khonkaen]=[Huaiphai]> D:2206.786 Km

Reasons for Moving surveyed in 2007

Movement of Monks by Age

		Move In				Move Out					
						20-29					
		6 7 7 7 7 7				30-39				1 1 1 2 5 5 7 a b	
1	5 5 5	7 7 7 7 7	d d	40-49				1 1 2 6 7 a a			
	5	7 7 7 7 7 7 9	c d	50-59				1 1 5 5 7 7 7 c			
1	1	7 7 7 7 7 7 8	a a c d	60-69				1 1 5 7 a a b			
		1 5 7 8 8 8		70-79				1 a a a			
		8 8 8 9 a a		80-89				1 2 a b e			
		8 8 8 9 9 a		90-99				7 8			

Table of Reasons

Reasons for Moving from /to Somewhere		
No.	Reason-in	Reason-out
1	Return to home village	Return to home village
2	For taking care old teachers	For taking care old teachers
3	People require to come for the Lent	People require to come for the Lent
4	Sent by the Sangha	Sent by the Sangha
5	Wondering for meditation practicing	Wondering for meditation practicing
6	For educational purposes	For educational purposes
7	For practicing as a forest monk	For practicing as a forest monk
8	For health care or old	For health care or old
9	Want to live near family or relatives	Want to live near family or relatives
a	Finding peaceful place for religious practices	Finding peaceful place for religious practices
b	Having some problems at previous place	Having some problems at previous place
c	Local traditional beliefs	Local traditional beliefs
d	Persuaded by local monks	Persuaded by local monks
e	To help building religious places	Move to monasteries in the same networks

In both 'Movement of Monks by Age' above and 'Movement of Monks by Temple Type' below, the number in a rectangle on the left-side or the right-side indicates a reason 'No.' which corresponds the 'Reason-in' or 'Reason-out' respectively in the 'Table of Reasons' on the right-side.

Movement of Monks by Temple Type

		Move In				Move Out					
		1 1 1 1 7 7 7 8 8 8 8 8 8 9				WT				1 1 1 1 2 2 7 7 7 7 a a a a a b b e	
		5 5 7 7 7 7 7 7 8 9				SN				1 1 1 1 2 5 6 a	
5 5 5 6	7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 8 8 8 8 9 9	TP				1 1 1 1 5 5 5 5 7 7 8		a a a b c			

Other Statistics

Moving Distance of Monks
From 2001 to 2007. Total 313 Monks.
Total Moving Distance : 118,418.9 Km
Average Moving Distance : 379.5 Km / Monk

Visualizing Tracking Data

From Flat Data to Geo Temporal Database

Status	Monastery Code	Monk ID	Home Village	Novice Year	Monk[1] Year	Monk[1] Place	Monk[2] Year	Monk[2] Place	2005	2006	2007	2008	2009
Monk	103	5110314	TH340304020	1947	1953	TH340304021	2004	TH350800000	TH350800000	TH350800000	TH350800000	TH340301021	TH340301021

Geographical Information: latitude, longitude, administrative division
 Ex: TH340304020. Lat: 15.3056519975473. Long: 105.387233098489.
 Administrative Division: Wangsabaengtai/Nong Saeng Yai/Khong Chiam/Ubon Ratchathani/Thailand

Temporal Information: Absolute Time, Relationships to other events.
 Ex: 1947. Thai 2490. 30 years before transition from 4-3-3-2 to 6-3-3 education system

Geo-Temporal Information: Combination of space and time information
 Ex: In 2007, located in TH350800000. In 2008, located in TH340301021
 Ex: Moved from TH350800000 to TH340301021

Visualization of geo-temporal data.

Using a spatial database such as PostGIS allows to directly represent geo-temporal data, such as the movements of monks, on a map. More over, it allows for complex requests used in analysis.



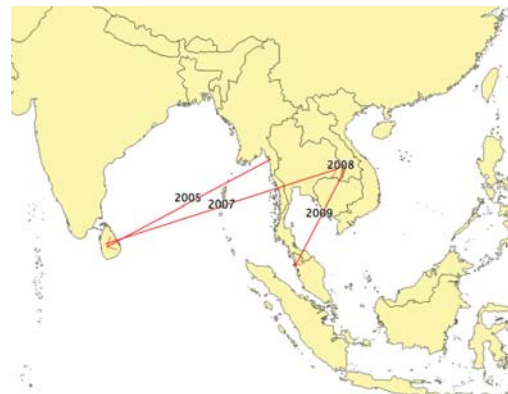
Longest accumulated distance



Moving only between Bangkok and Khong Chiam



Moving only in Khong Chiam



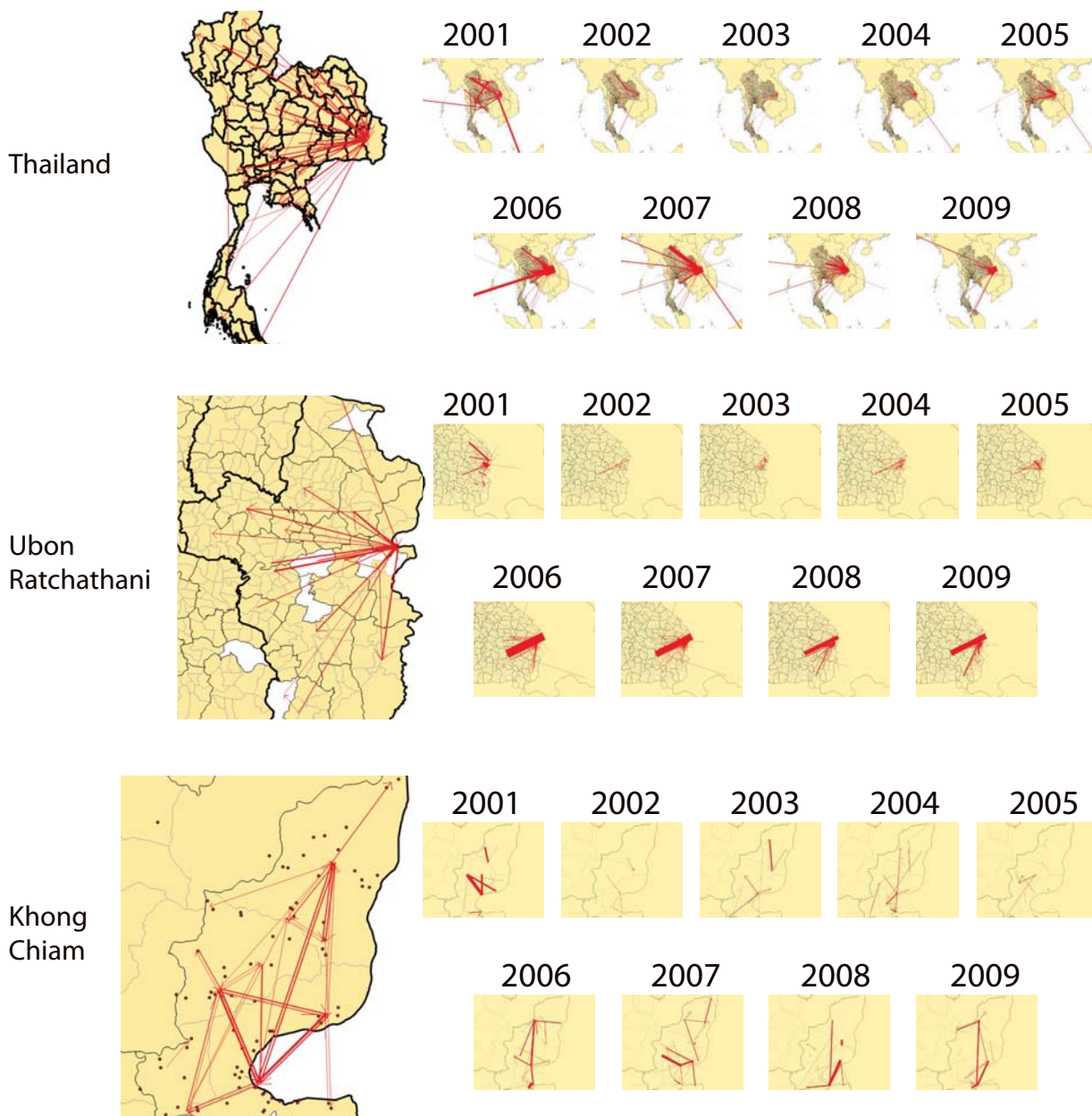
Moved from Sri Lanka to Khong Chiam and went abroad

Aggregating Tracking Data

Get a global image of Theravadin movements through the years



Going from showing the tracking data of one monk to showing ALL the movements call for other approaches grouped under the name of **aggregation** that use techniques such as **clustering**.



Theravada Networks in Southeast Asia: a Bipartite Graph Approach

Julien Bourdon – Takahiro Kojima

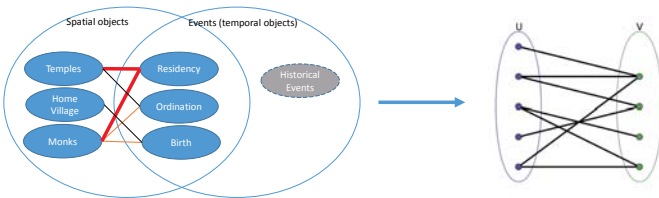
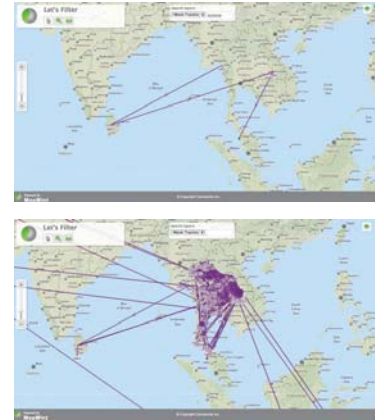
Center for Integrated Area Studies – Kyoto University {julien,kojima}@cias.kyoto-u.ac.jp

Visual Analytics for Monk Movement Patterns

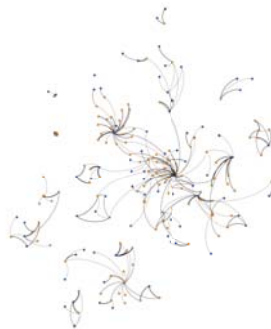
One of the objectives of the Theravadin Practices Mapping Project is to extract common movement patterns. For this purpose the whereabouts of the monks during the Lent (*Vassa*) season were recorded from 2001 to 2010.

The intuitive way to represent movements in space is to use arrows on a map. However, while suitable for one monk, it clutters the map when the number of monks is high.

This project involves both area and informatics experts. Visualizations are built iteratively to provide facts supporting the intuition of the area expert. During one of these iterations, it became clear that temples usually belonged implicitly to a specific network, built from monk movements and best visualized with a graph

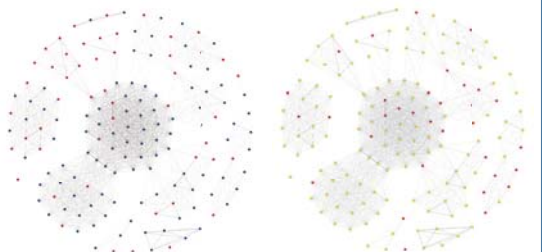


Temples and monks are linked through residencies events. We can thus build a graph $G(U \cup V, E)$, where U is the set of temples, V the set of monks, $\forall \{u,v\} \in E, u \in U, v \in V$ and $\exists \{u,v\}$ iff v has spent one lent season in u . G is a bipartite graph.



{monk, temple} X {temple,monk} projection

Monk Network



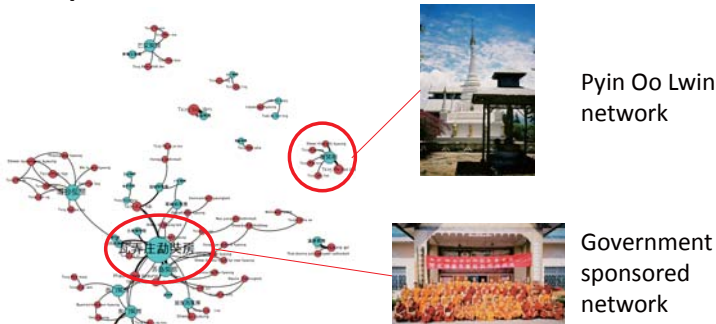
Fruchterman Reingold layout to highlight monks serving as bridges between communities.

The left hand-side show monks according to their status (red: monk, blue: novice). The right-hand side show monks according to their origin (red: China, yellow: Myanmar)

{temple, monk} X {monk, temple} projection

By abstracting movement from its geographical reality, it becomes easier to see how communities drive the movements of Theravadin through Southeast Asia

Temple Network



The graph model can then be combined with geographical information. Here temples location are shown along with the geographical dispersion of the home village of their monks through the years.

Appealing to the general audience through a stimulating interface

—Visualizing temples and monk movements through Google Earth.—

<http://gaia.net.cias.kyoto-u.ac.jp/gearth-mapping/>

京都大学地域研究統合情報センター

Julien Bourdon-Miyamoto

While, as specified in From Flat Data to Geo-Temporal Pattern Visualization paper, applications for movement analysis should be driven by simplicity and not feature useless information. However, in order to get public interest in the Theravadin mapping practices, in collaboration with the Tokyo Metropolitan University, we decided to design and develop an application based on Google Earth.

As can be seen in the Fig. above. The interface is composed of 2 parts. The main part, on the right, shows a full 3D satellite view of the study area. Temples are shown as little round pictures while the movements of the monks are shown as white lines.

The left-hand part is composed of three parts. The top part shows a sample of three monks with interesting movement patterns. It allows the user to get a glimpse of the data without having to dig through the list of monks. The middle part shows more detail about a selected object, monk or temple. Finally, the bottom part shows the map on a macro level by using Google Maps.

The advantage of such an interface is that it is easier to imagine where the temples are located through precise satellite imaging and through the presence of relief.

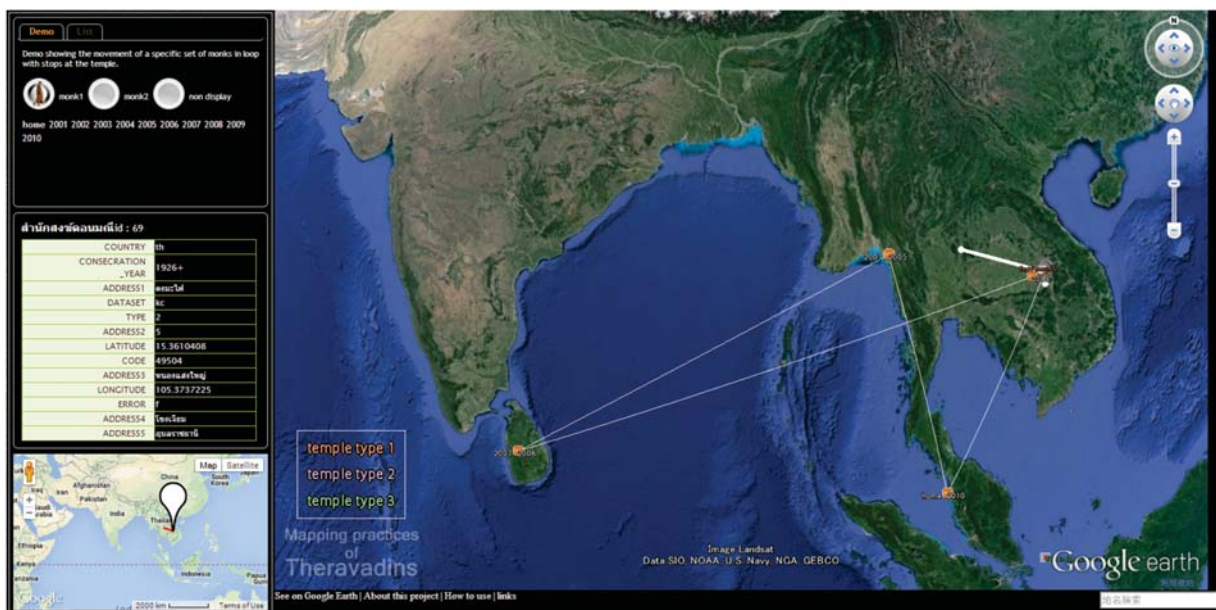


Fig. 14-1 Layout of the Google Earth Application showing the movements of a particular monk

Demo | List

Demo showing the movement of a specific set of monks in loop with stops at the temple.

monk1

monk2

non display

情報ウインドウ

template type 1

template type 2

template type 3

俯瞰図

操作メニュー

Image © 2014 DigitalGlobe
Image Landsat
Data SIO, NOAA, U.S. Navy, NGA, GEBCO

地名検索

See on Google Earth | About this project | How to use | links

Fig. 14-2 : KC: 僧侶の移動を Google Earth で可視化した結果

(開発：首都大学東京大学院システムデザイン研究科渡邊英徳研究室・原田真喜子)

Theravada temple networks in Southeast Asia

—A graph-based visualization—

京都大学地域研究統合情報センター

Julien Bourdon-Miyamoto

People connect to other people when they interact repeatedly. They can connect if they work in the same place, go in the same schools or frequent the same social circles. While they move, the network grows more and more connections. Conversely, while connections between people are created, networks of locations grow.

This is especially true in Theravada temples networks where communities are shaped by the movements of monks between temples. As explained in “Tracking the Movements of Theravadins in Khong Chiam“, the straightforward way to show movements is to use arrows. However, in order to visualize communities, we might want to step away from the geographical view and use a graph visualization.

The temple network is defined as follows.

Let $G(T, E)$ be the network where T is the set of temples in a dataset and E the set of edges so that $\exists e(t_1, t_2) \in E$ if only if a monk has moved from t_1 to t_2 or from t_2 to t_1 during the studies period.

In other words, there will be a line between two

circles representing temples if a monk stayed in both temples consecutively. The bigger the node is, the higher the number of monks staying in it at the time of study is. Such a representation shows the formation of communities of different shapes as depicted in Fig. 15-1 to 15-5.

In Fig. 15-1, we can see that the network is centered on the province and that there is no central temple. In other words, the temple network in Khong Chiam just forms one big community. In Fig. 15-2, we can see that while monks move a lot between Vientiane and Champasack while Luang Prabang forms a more closed community centered on the temples of Phabath (ອັດພະບາດ) and Luoang (ອັດຫວຽງ). In Fig 15-3, we find a pattern similar to Khong Chiam, except that the communities are divided in two: Kampong Thom and Kien Svay. In Fig. 15-4, we can see that while the areas features many small communities in Dehong, the temple of Vāt loṅ t̄s̄om m̄əṅ (瓦弄庄勐), being sponsored by the local government attracts a lot of monks from the temples around. Finally, in Fig. 15-5, we can observe a more traditional pattern in Xishuangbanna, where many small communities are formed.

KC

- Ubon Ratchathani
- Others

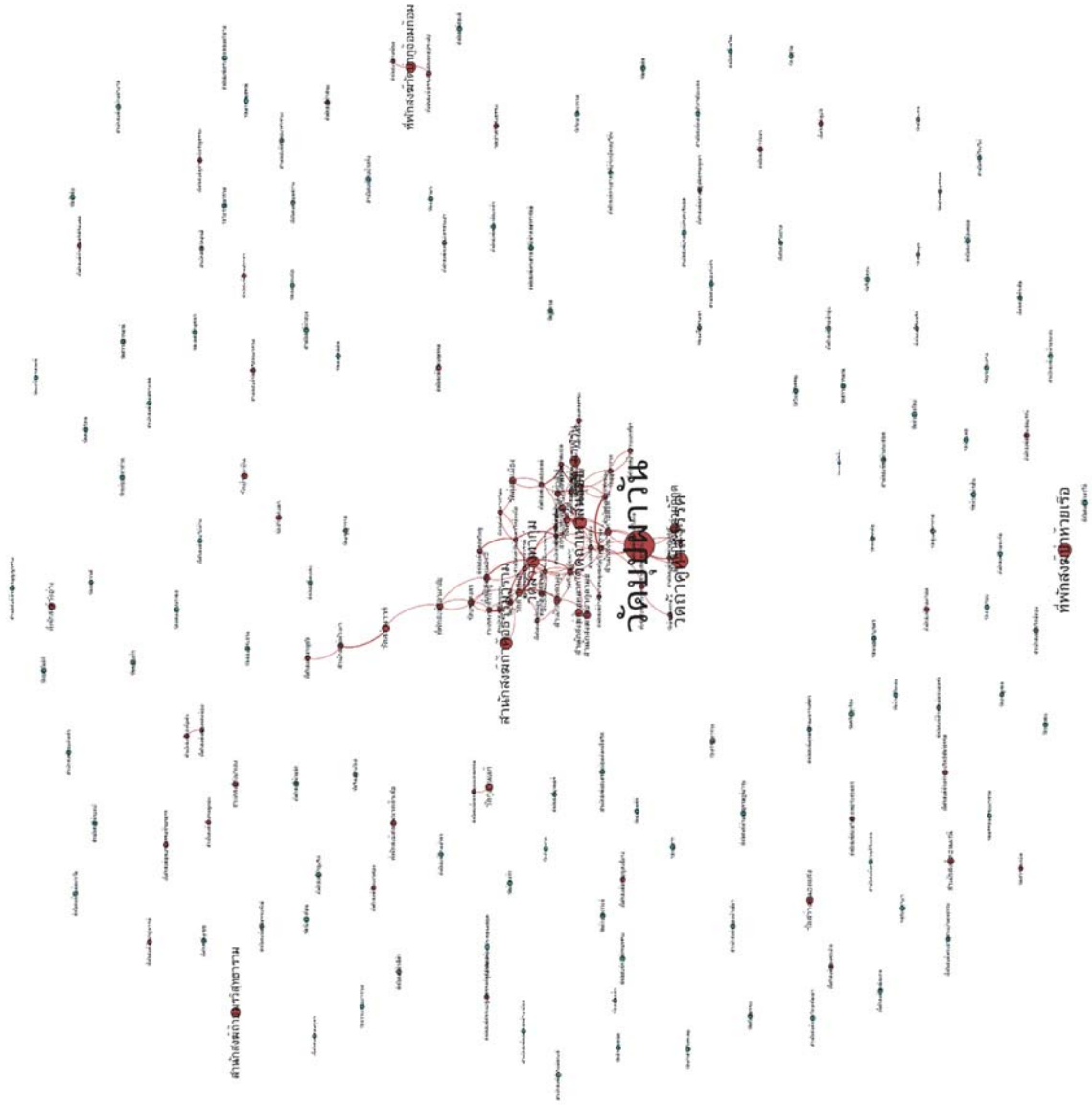


Fig. 15-1: temple network in Khong Chiam

LP VT CP

- Vientiane
- Luang Prabang
- Champasack

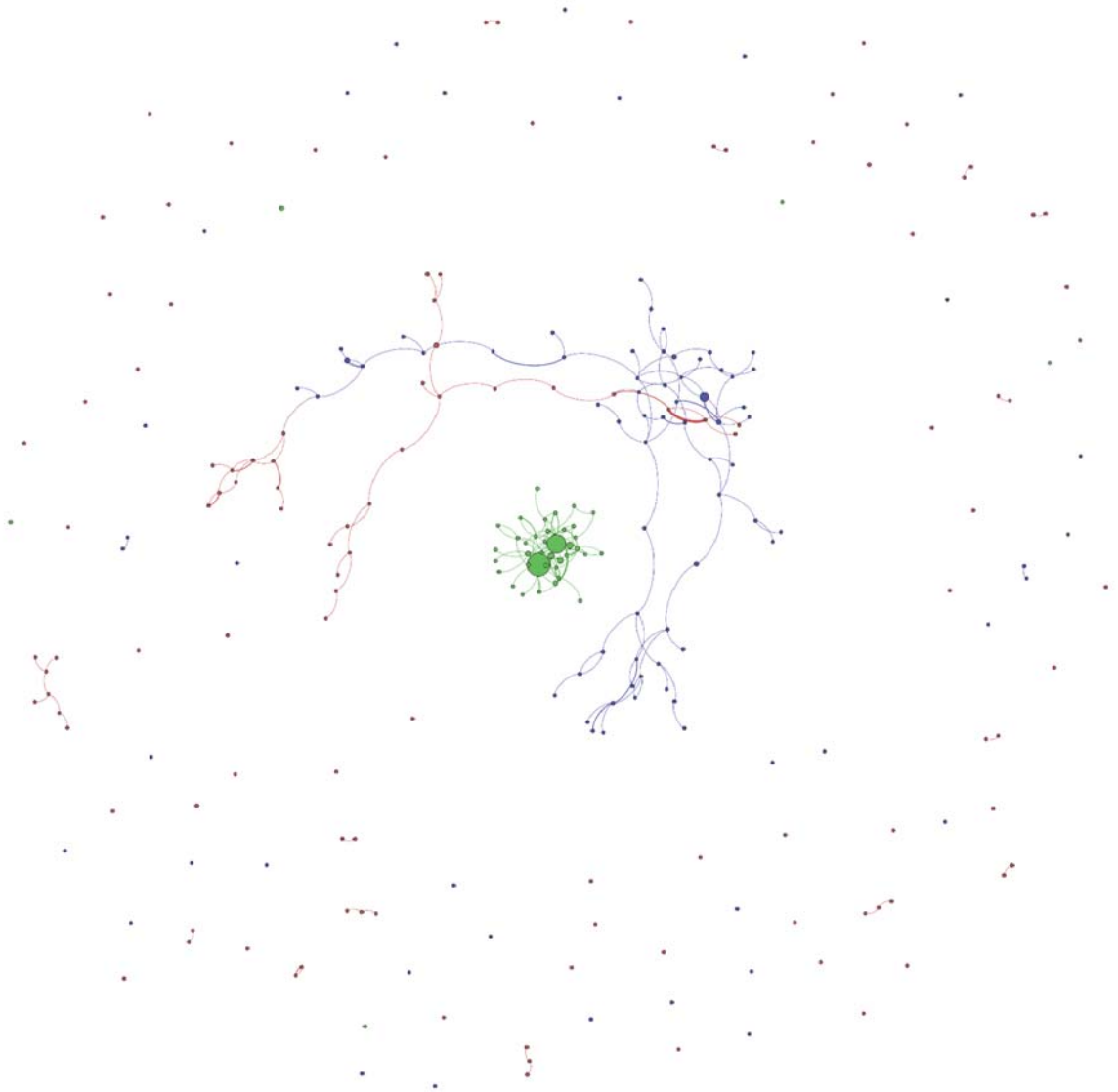
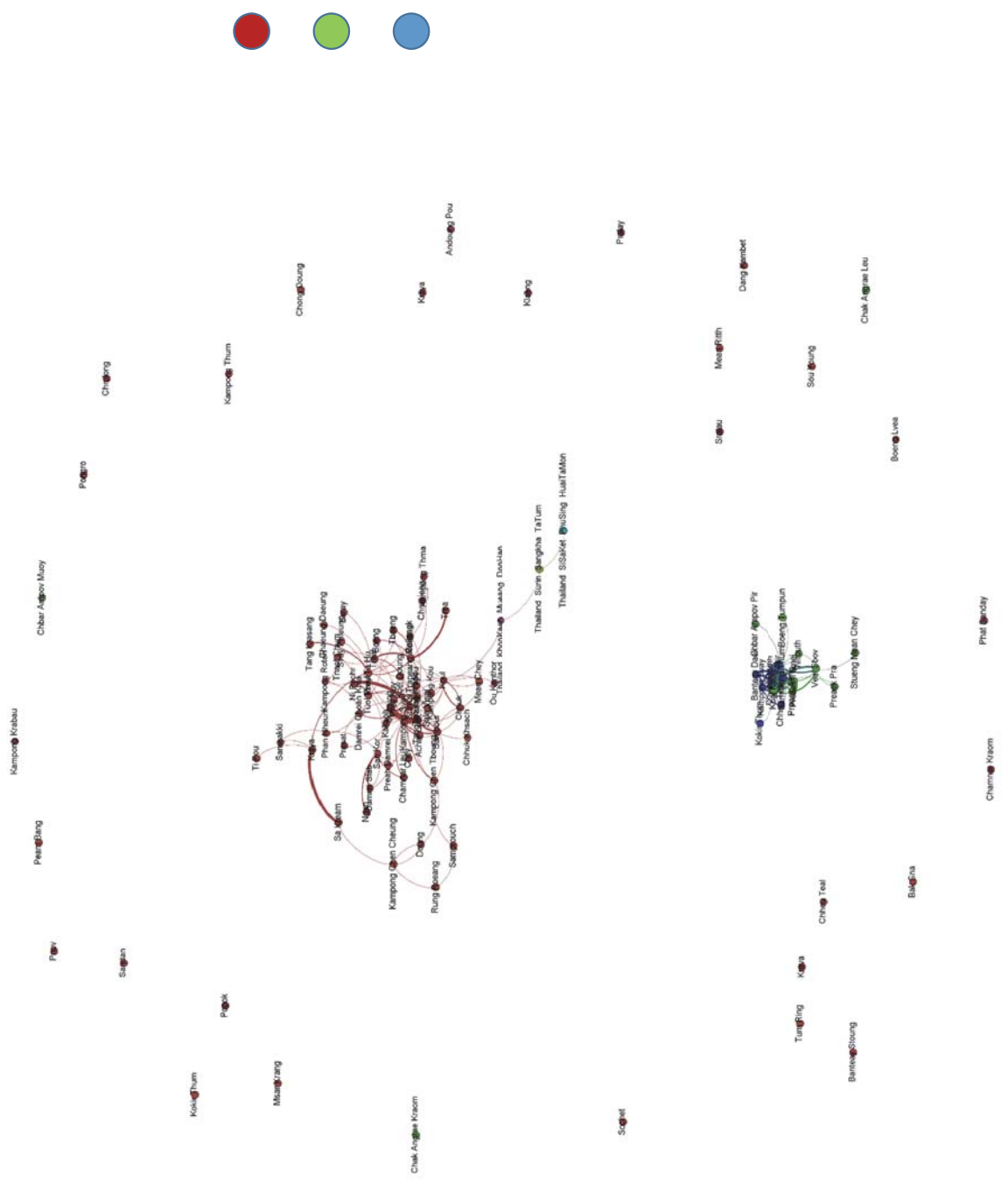


Fig. 15-2: temple network in Laos
(Vientiane, Luang Prabang, Champasack)

KT KS



- Kampong Thom
- Phnom Penh
- Kandal

Fig. 15-3: temple network in Cambodia (Kampong Thom, Kien Svay)

DH

● China

● Myanmar

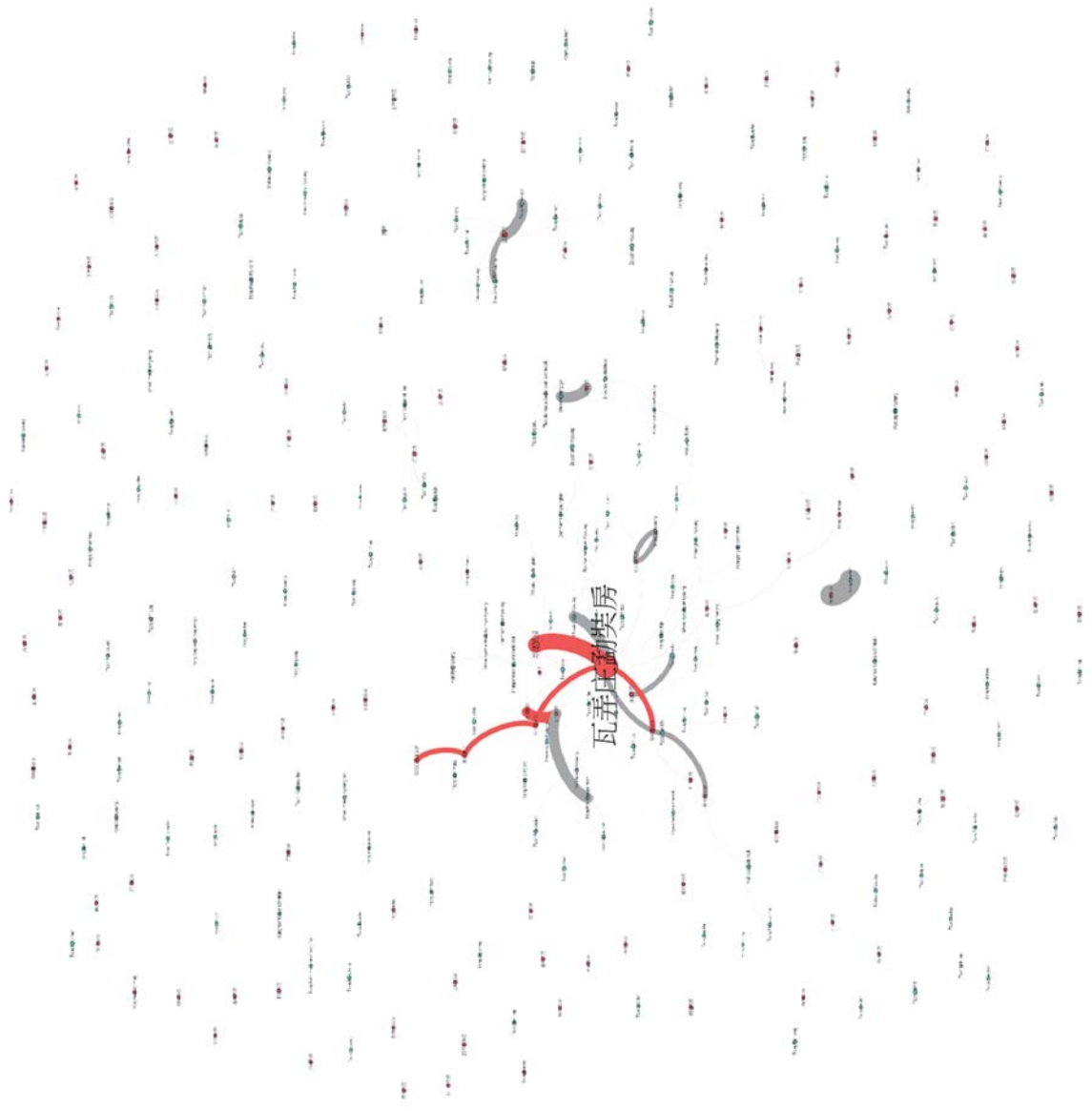


Fig. 15-4: temple network in Dehong

XB

- China
- Myanmar
- Thailand

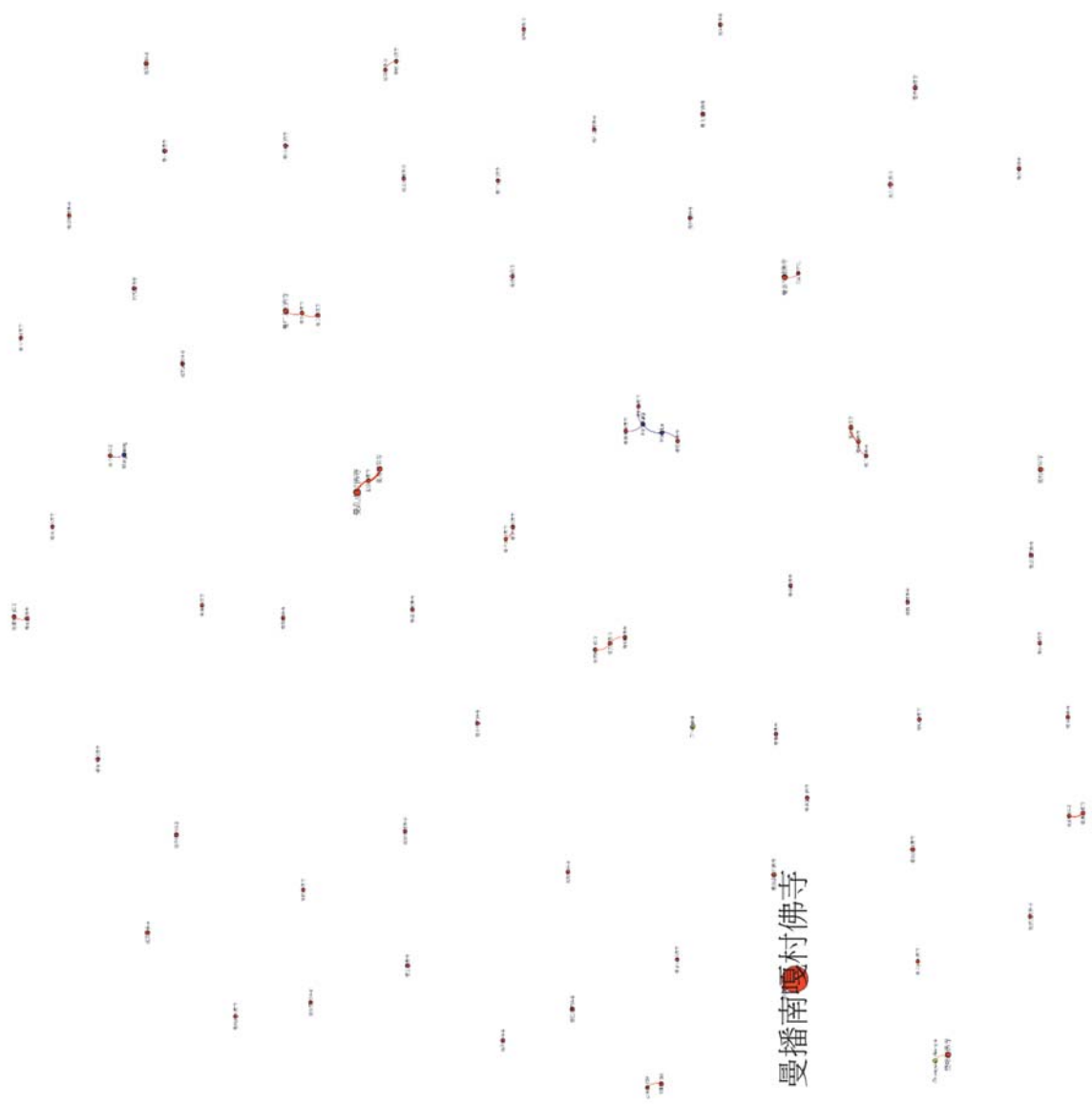


Fig. 15-5: temple network in Xishuangbanna

あとがき

——今後の課題にむけて——

京都大学地域研究統合情報センター
林 行夫

京都大学地域研究統合情報センターが推進してきた「地域情報学プロジェクト」は、まもなく4年が経過する。すでに国内外に報じられる成果も生まれた。「寺院マッピング」と通称される本研究は、臨地調査で得たデータをいかに統合して保蔵するかという「基礎工事」から、データをいかに可視化するか、可視化されたものから何がみえるか、という段階にきた。なかでも、得度の時期と移動をふくめた広義の出家行動は、明瞭な地域差をみせた。同時に、複数の地域に通底する要素もみえはじめている。また、場所と人を繋ぐ出家者の移動経路を示すデバイスの開発を進め、さらに一見脈絡がないようにみえる他のデータとの照合を進めた。データを集積し可視化することで生じた本プロジェクト内での発見は、日本の巡礼行動や中東の墓廟都市の展開など、他地域での研究に応用されはじめた。世界の宗教施設は特定の地域の空間に生じ、そこに関わる人々の営みを刻んでいる。地理情報を与える宗教施設は、その地域に関わる人々の実践の集積体でもある。施設は単体では空間指標にすぎないが、複数並ぶと時間指標になる。出家行動も個人単位では時間指標だが、複数束ねると空間指標となる。この両者の情報を繋げるといったぐあいである。

以下は、本プロジェクトのこれからの課題群である。

① 各調査地の寺院施設と移動遍歴を含む出家者の行動を中心とした時空間情報を地域社会の推移を示すデータと関連させてその経年変化の様態をパターン化すること。出生から得度前後の時間を示す地域毎の「得度チャート」は、過去1世紀ほどの地域社会の推移を約90年の深度をもつ個人史と対応させて分析するスケールとなる。同時に、地域と宗教の社会的ネットワークに着眼した法制度・社会経済変化等のインパクト要因を抽出する。

② 寺院施設の地域を越えた繋がりや出家者の師弟関係のネットワークに焦点をあてて、出家や葬制パ

ターンごとのゾーンでの宗教・教育に関する法制度の変遷、地域社会に影響を与えたと推察される政変、生業・経済変化をパラメータ化して、双方の関わりを解析し、得度する年代や移動の範囲の変化、寺院施設が増加する時間経緯を比較すること。

③ デジタル化されたデータをそれぞれの地域社会に関わる法制度や文献資料と関連させて分析し可視化する。つまり、これまで築いたデータを礎に、センサス、宗教や教育政策、地域史、生業経済の情報を統合する「宗教＝社会複合マッピング」の構築である。そして、臨地調査で得た一次資料と二次資料を統合して可視化される宗教実践の動態と、それらを他地域での同様のデータ群と関連させて浮上する地域社会の変容過程を連動させて、宗教と社会の動態を捉える「宗教＝社会＝文化変容モデル」へとむかう。

汗水を流して得た一次資料は、膨大な時間をかけてデータベース化されて今日に至った。本プロジェクトのメンバーはこの大変な作業に関わった。関わることで、自らの資料をデータとする過程でさまざまなことを考え分析を重ねることになった。人文社会科学の方法としては相当な回り道かもしれない。しかし、これはフィールドワークと同じ過程であることにも思い至る。臨地調査は「急がば回れ」を基本とする。プロジェクトメンバーのみなさんは、遠回りすることで、より多くの事実を経験して分析のための素材としている。「戦友」であるメンバーのスピリッツを誇らしく思う。本書では比較参照でのみ言及しえなかったが、ラオスでの調査とデータベース化、ニューズレターの編集刊行に尽力された増原善之氏（現ラオス・ビエンチャン在住）にも、心からお礼申し上げる。

CIAS Discussion Paper No.42

宗教実践を可視化する

——大陸部東南アジア上座仏教徒の寺院と移動——

林 行夫・柴山 守・Julien Bourdon-Miyamoto・長谷川清・
小島敬裕・小林 知・高橋美和・笹川秀夫・土佐桂子・須羽新二著

発行 2014年3月20日

発行者 京都大学地域研究統合情報センター

〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46

電話: 075-753-9603

FAX: 075-753-9602

E-mail: ciasjimu@cias.kyoto-u.ac.jp

<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/>

